

二百二十五段

八月晦日つごもりがたに、太秦ウツマにまうづとて見れば、穂に出でたる田に、人多くてさわぐ。稲刈るなりけり。「早苗さなへとりしかいつの間に」とはまこと。げにさいつ頃、賀茂に詣づとて見しが、あはれにもなりにけるかな。これは女もまじらず、男の片手に、いと赤き稲の、もとは青きをもたりて、刀か何にかあらむ、もとを切るさまのやすげに、めでたき事に、いとせまほしく見ゆるや。いかでさすらむ、穂をうへにして並みを見る、いとをかしう見ゆ。庵いばりのさまことなり。

(考異) ○もたりて 原本かりもちとあり。古本による。

○晦日つごもりがた 下旬。○太秦 ウヅマサ。山城葛野郡太秦の蜂岡にある廣隆寺をいふ。拾芥抄に「廣隆寺、東寺末太秦、又號ニ蜂岡寺、秦河勝建立、藥師、云々」。○穂に出でたる 穂の出でたるをいふ。○早苗とりしか云々 古今集秋上、詠者未詳「昨日こそ早苗取りしかいつの間に稻葉をよぎて秋風ぞ吹く」。○まこと 信なるよの略。○見しが 田を見しがの略。○あはれにも云々 あはれにも刈るやうになりける哉の意。○刀か 鎌なるべし。○もとを 稲のなり。○やすげに 安けにてと也。○めでたき事に云々 めでたき事の例の一つに、最も舉げたく思はる、よと也。○いかでさすらむ この句、上に續けても、下へ續けても可なれど、尙下へ續くる方勝るべし。○穂をうへにて 刈穂のたばねたるを、穂先を上にして立置くをいふ。古本には「穂をうちしきて」とあり。○なみを見る をのこ共が並び居ると也。この語、或は並みおくの誤寫か。さらば穂をうへにして並べ置くと解くべし。○庵 田守の假家なり。

も、普通のとは違つてゐる。

評 八月下旬での稲刈は、随分早い。太秦附近は早稲田であつたと見える。五月時分の賀茂詣に田植を見て、八月下旬に太秦の刈入を見る。烏兎匆々の感じは、一層はけしいものがある。清少は瘦せても枯れても、受領のお姫様である。米のなる木に馴染の少い方である。だから我々なら、日常茶飯で看過することをも、一々鋭い驚異の眼を見張つてゐる。昔から田植は女、刈入は男の仕事であつた。とにかく先頃とは違つた光景が、興味をひく。すかりすかりと刈る、いかにも氣持がい、めでたきもの、例にしたいと、興に入る。刀か何かは、鎌といふ物を御存知ないと見えた。庵は秋實つてから置く、田中の番小屋である。ほんの丸屋で、普通の住居にする庵とは様子が違ふ。それも亦珍しい。

二百二十六段

いみじくきたなきもの 蛞蝓なめくぢ。えせ板敷の箒はら。殿上てんじやうのがふし。

釋 ○なめくぢ 蛞蝓。嘗扶なめくぢの義。○えせ板敷のは、き つまらぬ板の間をはく箒。○がふし 合子。和名抄に「合子、唐式云、尙食漆器三年一換、供ニ毎節料、朱合等五年一換、今案朱合俗所謂朱漆合子也」とあるを、箋釋に「按合子有蓋、故名合、猶謂ニ香奩、爲ニ香合也」。

評 蛞蝓は婦人連に殊に嫌はれる。殻一つ負へば、とんだ風流な奴になるが。結構な板敷は、木賊をかけての掠の葉磨きで、光つてゐるから、箒も随つてよごれないが、えせ板敷とくると、さうは往かない。殿上の間に備付の合子、これは殿上人が臺盤で食事をするに使ふ、蓋付の

朱塗椽である。何分永年の使ひふるして、所剥がしたり、誰彼なしに使ふのだから、實に汚い。假令黒塗より一段結構と思はれた朱塗にせよ、尻の低い底の淺い都合子みやこがしにせよ。やはり汚い。だから後には、殿上ではあまり飲食せぬやうになつた。
箒の末と四條本にあるが、いづれでもよい。堺本には、合子の次に、蚯蚓とある。

二百二十七段

せめておそろしきもの 夜なる神。近きとなり盗人の入りたる。わが住む所に入りたるは、只物もおぼえねば、何とも知らず。近き火、またおそろし。

〔考異〕 ○又おそろし 原本になし。抄本、古本による。

〔釋〕 ○せめて ひどくといふが加し。迫めての義。○入りたるは 盗人の入りたるはと也。○たゞ ひたすらに同じ。○よる鳴る神。入りたる の下、各、せめて恐ろしきものなりを略けり。

〔評〕 夜と雷と結び付いては溜らない。近鄰の盗人は、いま現に強盜の押込んでる際の事である。竊盜ではない。だから鄰では、その騒ぎが知れてこはるのである。自宅に這入つたのは、驚いて喪心してしまふから何ともないといふ。實は何ともあり過ぎる結果で、騒がしきもの、段の「されど燃えはつかざりける」と表裏した、一寸面白い筆法である。近き火をまた舉げたが、これは感想が異なつてゐるのだから、重複ではない。この時代、火事が多くて、宮中は弘徽殿にまで放火があつた。

二百二十八段

たのもしきもの 心ちあしき頃、僧あまたして修法したる。思ふ人の心ちあしきころ、まことに頼もしき人のいひ慰めたのめたる。物おそろしき折の、親どものかたはら。

〔釋〕 ○たのため 頼ますること。力づくること。○修法したる。たのめたる。かたはら の下、各、頼もしきものなりを略けり。

〔評〕 あらゆる凶事は修法に依つて解決されると信じ、病氣に祈禱は、常習的に行はれた時代である。されば、坊さんを澤山集めた盛大な御祈禱は、病人に力強い慰安を與へた。醫者などはまさかの時は、天から問題にしてはゐなかつた。

「戀人だけに自分の病氣よりも心配になるので、親友などが氣休めにいふ慰めの詞も、眞剣に頼もしくなる。」

清少は廿歳を越すまで親がかりだつたから、親の戀しさは、十分に味つたらしい。

二百二十九段

いみじうしたてて壻取りたるに、いと程なく住まぬ壻の さるべき所などにて鼻に逢ひたる、いとほしと思ふらむ。ある人の いみじう時にあひたる人の壻になりて、一月もはかなくしうも來てやみにしかば、すべていみじういひ騒ぎ、乳母などやうの者は、まがしき事どもいふもあるに、そのかへる年の正月に、藏人にな

〔口譯〕 ひどく恐ろしいもの 夜の雷鳴、近隣に盗人の入つたのだとである。自分の住處には入つたのは、驚きのあまり、一向正氣がないから、何とも感じない。近火がまた恐ろしい。

〔口譯〕 頼もしきもの 氣分のわるい時分、大勢の僧で修法をしたの思ふ人の病氣の時分本當に力になる人が慰めて力づけたの、物恐ろしい時の親達のそば、など頼もしいものである。

〔口譯〕 大層に仕度して壻を取つたのに、ひどく間もなく通はなくなつた壻が、然るべき場所などで鼻に逢つたのは、いくら薄情でも、氣の毒と思ふ

だらうか。或人が大層世に勢望のある人の婿になつて、一月もろくく來ないでしまつたので、その家の人は總べてひどく喧ましくいひたて女の乳母などのやうな者は、婿を阻つて不吉らしい事などいふもあるのに、その翌年の正月に、その婿は藏人になつた。

「意外にも、こんな間柄なのに、どうして昇進したか」と、人は思つてゐるやうである。など噂しあふのは、その婿も聞くだらうさ。六月に或方が法華八講をなされた所に、人々が集つて聴聞するに、この藏人になつた婿が綾の表袴、蘇枋の下襲、黒半臂など、大層目立つて美しくて丁度來合はせた。以前見棄てた女の車の

りぬ。「あさましうかゝるなからひに、いかで」とこそ、人は思ひためれ」などいひあつかふは聞くらむかし。六月に、人の八講し給ひし所に、人々集まりて聞くにこの藏人になれる婿の、れうのうへの袴、蘇枋がさね、黒半臂など、いみじうあざやかにて、忘れにし人の車のとみの尾に半臂の緒ひきかけつばかりにて居たりしをいかに見るらむと、車の人々も、知りたる限はいとほしがりを、こと人どもも、つれなく居たりしものかな」など、後にもいひき。なほ男は物のいとほしさ、人の思はむことは知らぬなめり。

○住まぬ婿 住着かぬ婿なり。婿の來通はずなるをいふ。○いとほしとや思ふらむの上、いかに薄情なればとてを補ひて聞くべし。○いみじういひ騒ぎ 舅の家の人がなり。○乳母など 娘のなり。○まがくしき事いふ 婿を阻ひて、その身の上に不吉あらん事を祈ること。「まがくし」は禍々しき意。○藏人になりぬ その婿がなり。○かゝるなからひに かゝる勢力ある舅とは不仲の間柄なるに也。○いかで の下、かゝるなり昇りぬるを略けり。○人は 世の人とは也。○いひあつかふは聞くらむ人の噂するは、その婿もうすく聞くらんと也。○れうのうへの袴 綾の表袴。「れう」は綾を音讀したる也。○蘇枋がさね 二百四十四段を見よ。○黒半臂 桃華葉に「夏は生の穀(文三重だすき)冬は綾、黒色はふし金にて染む。何れも襦、忘緒はうす物也、云々」半臂及び半臂の緒を見よ。○忘れにし人 見棄てたりし女なり。○とみの尾 鴟尾。車の轆の車臺の後に出来る部分の稱。和名抄に「俗在(前謂之)轆、在(後謂之)鴟尾、或謂之小轆」。○いかに見る 女がなり。○車の人々 車の供の人々なり。○こと人ども

鴟尾に、半臂の緒を引掛ける位に近く居たのを、女はどう思ふだらうと、他の車の人達も、氣の付いた限は氣の毒がったに、外の人達も、あの婿はよく平氣で居たものであるよ、などと、後々までもいつた。やはり男は、物の氣の毒さや、人の思はくは構はないやうである。

他の人々なり。供以外の傍觀者をいふ。○つれなく居たりし その婿はなり。「つれなく」は平氣なを意。○後にも その時は勿論後にもと也。○知らぬ 構はぬの意に見る方、こゝには當るべし。

評 冒頭まづ、人情忍びがたい事だから、いかに、薄情でも氣の毒には思ふだらうかと、一不審を提けて置いて、さて叙事に入つた。

一月も満足に來ないで、すべてを犠牲にして、忽に夜離をしたのは、よくよく女が氣に入らなかつたのだらう。乳母は大抵の場合、その養君の結婚問題には立入るから、一面には責任を感じて、殊にまがまがしくも咀ふのである。

結縁の八講には、誰彼なしに聴聞に出掛る習慣であつた。棄てられた女は前の側、棄てた男は次の側に車を立てた。「鴟の尾に半臂の緒引掛けつばかり」は、その極めて接近してゐることを、具象的にいつたので、かう目と鼻の間では、前の車は自分の棄てた女のであることは、すぐわかる。それに氣の毒がつて外さうともせず、束帯姿で平氣で居光つてゐる。その衣裳の鮮やかなのは、後見する女のある事を語つてゐる。

その頃は娘に婿を取ると、その婿殿の沓を、兩親が抱いて寝たものである。それは何でもなし。婿の足が留まるやうにとの禁厭である。その親心のあはれさも思はず、又人々の後指さすのも構はず、女の思はくをも察せぬ、この男の振舞は随分である。

以上の實例は、冒頭の不審を全く裏切つてしまつた、そして却て更に一步を進めて、一般的に男は不人情な、思ひやりのないものといふ、酷な結論を下してしまつた。一度かゝり合つた女は、末の末まで面倒を見とほした源氏の君などは、當時の婦人の理想に過ぎない。

かたはらいたきもの(八十二段)の「いと、う住まぬ婿の、さるべき所にて舅に逢ひたる」は、この冒

頭と同じだ。

二百三十段

世の中になほいと心憂きものは、人に憎まれむことこそあるべけれ。誰てふ物ぐ
るひか、われ人にさ思はれむとは思はむ。されどしぜんに、宮仕所にも、親はらか
らの中にも、思はるゝ思はれぬがあるぞ、いとわびしきや。よき人の御事は更なり
下衆などの程も、親などのかなしうする子は、目だち見たてられて、いたはしうこ
そ覺ゆれ。見るかひあるはことわり、いかゞ思はざらむと覺ゆ。ことなる事なき
は、又これをかなしと思ふらむは、親なればぞかすとあはれなり。親にも君にも、
すべてうちかたらふ人にも、人に思はれむばかり、めでたき事はあらず。

(考異) ○中にも 原本中にもとあり。塚本による。

○憎まれむことこそ 憎まれむことこそその意。○誰てふ物ぐるひか いかなる氣違ひかと也。○さ
思はれむ 「さ」は憎まるゝをさす。○しぜん 自然の字音。ジネンと訓みしにはあらず。○宮仕所に
も 宮仕所の朋輩にもと也。○めだち見たてられて 人の目に立ち人に介錯されてと也。○見るかひあ
るは 見るかひある子はと也。○ことわり 親のかなしうするはことわりにての略。○ことなる事なき
は 格別よきこともなき子はと也。

評 婦人の生命は愛の結晶である。婦人はこの點には、深い理解をもつて生れてゐる。だから憎まれる程

(口説) 世の中でやはりひとく心愛いものは、人に憎まれる事であらう。誰といふ氣狂かおれは人に憎く思はれようとは思はう。けれど自然に、奉公先の朋輩でも、親兄弟の中でも、思はれるのと思はれないのとがあるのか、甚だ面白くないよ。身分のよい方の御事は勿論、下衆などの分際でも、親達がかはゆる子は、人の目に立ちチャホヤされて大事に思はれる。目鼻立がすぐれて見立のある子は、親の心はゆるがる。尤も、どうして愛しないであらうかと思はれる。格別な事もない。

つらい事はないと思つてゐる。けれども氣の合ふ合はぬは、朋輩同士や親兄弟の關係を超越してゐるか
ら、仕方がない。

親の愛子は、自然他人も追従するので、立派にもなる。

親など立添ひてもてあがめて、生先籠れる窓の内なる程は——見る人おくれたる方をばいひ隠し、さてありぬ
べき方をば繕ひまれば出だすに、それしかあらじと 空にはいひは推量りくたさむ。(源氏帚木の巻)

といつた調子である。子故にまよふ親心の闇は、描き得て委しい。

「親にも君にも云々」は、起句に應じた結末の句である。「思ふべしや否や」(八十二段)「我をば思ふや」
(百五十九段)「我をば思さず」(二百八十四段)など、かうした問題が、常に身邊に纏綿してゐたことは、
滴少の人間觀に、多少深酷味を帯びさせた所以だらう。

二百三十一段

男こそなほいとありがたく、あやしき心ちしたるものはあれ。いと清げなる人を
棄てて、にくげなる人をもたるもあやしかし。おほやけ所に入りたちする男、家の
子などは、あるが中によからむをこそは、えりて思ひ給はめ。及ぶまじからむきは
をだに、めでたしと思はむを、死ぬばかりも思ひかゝれかし。人のむすめ、まだ見
ぬ人などを、よしと聞くをこそは、いかでとも思ふなれ。それに女の目にもわろ
しと思ふを思ふは、いかなる事にかあらむ。かたちいとよく、心もをかしき人の、手

二百三十段 二百三十一段

諸らぬ子は、又これ
をかはゆいと思ふの
は、親だからこそよ
と思はれて、あはれ
である。親にでも主
君にでも、すべて親
しく話しあふ人にで
も、人に思はれる位
結構な事はあるま
い。

(口説) 男といふものは、や
はり餘り類なく、不
思議な心持を持つた
ものではある。大層
綺麗な女を見棄て、
醜げな女を妻に持つ
てゐるのも、不思議
な事さ。禁中に出這
入する男、その子弟
などは、よいのがあ
る中にも殊によい女

もよう書き、歌をもあはれに詠みておこせなどするを、返事はさかしらにうちするものから、寄りつかず、らうたげにうち泣きて居たるを、見棄てていきなどするは、あさましうおほやけばら立ちて、眷屬の心ちも心憂く見ゆべけれど、身のうへにては、つゆ心ぐるしきを思ひ知らぬよ。

(考異) ○思ひ給はめ、この語以下、堺本には「思ふべきを人もえいひかゝるまじき際にてもめてたしと見えむぞ死ねばかりと思ひかむかし」とあり。○それに、原本が「つ」とあり。堺本による。

○思はむを、思はむ女をと也。○人のむすめの上、通例にてはを補ひて聞くべし。○いかでともい

か得むともと也。○わろしと思ふを、悪しと思ふ女をと也。○さかしらに、賢しけに、小ざかしくなど

の意。○らうたげに云々、その女がなり。○おほやけ腹、公腹。わか身にあづからぬ事に立腹するをい

ふ。公憤といふに當る。○眷屬、ケンゾク。女の身内なり。○身のうへにては、男自身のうへにてはと也。

評 男女間のいきさつは、とても表面ばかりでは、解決はつかぬ。「縁は異なるもの」といふ俚言の真味は、

清少の知らぬ所だらう。否その位の消息は、先刻御承知だらうが、もとが男攻撃の文だから、情狀の酌

量なしに、横を向いてしまつたのである。源氏の雨夜の品定は、男の立場から見た女の批評だから、これを對照すると、當時の男女間の關係に

就いて、發明する所が多からう。一寸失戀したからとて、ボコノ、自殺する現代のやうな、人氣の荒んだ世ではない。極めて平和な時

代だ。成程戀に身を盡すと歌には詠むが、自殺するのではない。「死ぬばかりも焦れ死をいふのである。

清少は頗に熱烈な愛を激勵してゐるが、この道には親子なきものなり。(空穂、忠こそ巻)の一語で見れば、當時に萬更、高潮な愛のないでもなかつた。

二百三十二段

よろづの事よりも、情あるこそ、男はさらなり、女もめてたく覺ゆれ。なげの詞なれど、げにくきはくちをしき事なり。せちに心にふかく入らねど、いとほしき事を、「いとほし」とも、哀なるをば、「げにいかに思ふらむ」などいひけるを傳へて聞きたるは、さし向ひていふよりも嬉し。いかでこの人に、思ひ知りけりとも見えにしがななど、常にこそ覺ゆれ。必ず思ふべき人訪ふべき人は、さるべきことなれば、取りわかれしもせず。さもあるまじき人の、さしいらへをも心易くしたるは、嬉しきわざなり。いと易き事なれど、更にえあらぬ事ぞかし。大かた心よき人の、まことにかどあるは、男も女もありがたき事なめり。又、さる人も多かるべし。

(考異) ○げにくきはくちをしき事なり、原本になし。堺本による。

○なげの詞、何ともなき詞、なげやりの詞などの意。「なげ」は無氣の義。廣道いふ、有氣にもなき意と。源氏に、なげの哀をもかくる、なげの筆づかひなど見ゆ。○げにくき、氣憎きなり。○いひけるを、或人がなり。○いかでこの人に云々、何とぞしてこの情らしくいふ人に、自分はその志を思ひ知りた

なこそ選擇して、思ひなざるがよい。と高貴の身分の女でも、優れてよいと思ふのを、死ぬ程にも思ひ懸けなさいよ。通例は人の娘まだ見ない女などを、よいと聞く者をば、どうぞして妻にとも思ふのである。それなのに、女の目でも醜いと思ふ女を思ふのは、どういふ事だらうか。器量も大層よく、氣立もよい、女の、手迹もよく書き、歌をも上手に詠んでよこしなどするを、返事だけは小さくしくするもの、自身は寄付かず、又はゆげに泣いて居る女を見棄てて、餘所の女の所へゆきなどするのは、呆れる程人の事でも腹が立つて、女の眷屬の心中でも

面白からず思ふてあらうが、男の身では少しも氣の毒さを感じないよ。

(口譯)

あらゆる事よりも、人は情のあるのが、男は勿論、女も結構なことと思はれる。いひ捨ての詞でも、憎らしいのは残念なことである。切に心に深くは思はないが、氣の毒な事を、氣の毒なことも、哀なことをば「本にどう思ふだらう」などいつたのを、餘所ながら人傳に聞いたのは、さし向つて目の前ではいられるよりも嬉しい。どうぞしてその人に、その親切を思ひ知つてゐるとも、見知つて貰ひたいことよなど、常に思は

れる。必ず思ふべき人、見舞ふべき人は、そんな事位いつてくれたとて、當り前の事だから、格別に嬉しくもない。然あるべき筋合のあるまいと思ふ人が、挨拶をも心安くしたのは、嬉しい事である。何の造作ない事だけれど、全くあり得ない事である。大體氣立のよい人で、本當に氣の利いてゐるのは、男でも女でも、稀な事である。といつて又さうした人も多からう。

(口譯) 人のうへを噂するを聞いて、立腹する當人こそ、甚だ無理である。どうして噂しないであらうか。自分の身の缺點

りと知らせたしと也。○取りわかれしもせず 取分けて嬉しとも思はずと也。○さもあるまじき人 さやうに打解くまじき人なり。○いと易き事なれど 心安くさしいらへする事は、甚だたやすき事なれどと也。

評 才色の勝れたのがめでたい事はいふまでもないが、情しき振舞は、殊に當時の人の理想であつた。だから、つい心に染まぬ縁でも、切な戀には耳を傾け、四方八方い、人とならうとするから、關り合が澤山になる。

お義理一遍の同情の語でも、人傳に聞くと、有難味が違ふ。感謝の意が表したくなる。この心理は、今日でも同様である。「必ず思ふべき人訪ふべき人」は、親同胞や夫妻などだらうから、成程問題外である。造作ない事のやうで、いかな人をも反らさぬ挨拶は、親切氣がなくては出来ぬ藝である。

心よき人は、こゝでは情ある人だらう。さういふ人に氣の利いたのは少いといひながら、「又さる人も多かるべし」は矛盾だが、かう一寸思ひ返した瞬間の心狀に、頗る面白味がある。實際世間は廣い。「あり難きこと」など、斷言は出来ない。

二百三十三段

人のうへいふを腹立つ人こそ、いとわりなけれ。いかてかはあらむ。わが身をさし置きて、さばかりもどかしく、いはまほしきものやはある。されど、けしからぬやうにもあり。又、おのづから聞きつけて恨みもぞする。あいなし。又、思ひはな

つまじきあたりは、いとほしなど思ひ解けば、念じていはぬをや。さだになくはうち出て笑ひもしつべし。

釋 ○いかてかはあらむ いかてかはいはであらむと也。○わが身をさし置きて云々 缺點多きわが身をさし置きて、さほどに人の事を非難がましくいひたきものあらんやと也。この句の下に「然るになほそれをいふは、いはではおかれぬ事情あれば也」の語を補ひて聞くべし。○されど の下、人の非難はを補ひて聞くべし。○聞きつけて 非難せられたる人がなり。○思ひはなつまじきあたりは 思ひ棄てがたき關係あるあたりはと也。○いとほし 非難することは傷はしと也。○思ひ解けば 勘忍する、用捨するなどの意。○さだになくば さる關係なくばと也。

評 座興に人のあらを拾ふ。人情さうしたものだと揚げて置いて、怒る者は無理解だといひ、さて入らぬ恨を買ふので、「あいなし」と、又抑へてゐる。清少はまことに、譯のわかつた女である。餘儀ない關係者などは、全然口を喋むは、すこし不公平のやうだが、これも人情さ。

二百三十四段

人の顔にとりわきてよしと見ゆる所は、度ごとに見れども、あなをかし珍しとこそ覺ゆれ。繪などは、數多たび見れば、目もたゞずかし。近う立てる屏風の繪などは、いとめてたけれども見もやらず。人のかたちはをかしうこそあれ。にくげなる調度の中にも、一つよき所のまもらるゝよ。みにくきも、さこそはあらめ、と思ふこ

をさし置いて、さほど非難がましく、人の事をいひたい者があらうか。詰りいふだけの筋があるからだ。けれど人の噂は怪しからぬやうでもあり、又自然聞付けて恨むかも知れない。愛敬なしの事である。又思ひ棄てがたい關係のあるあたりは、氣の毒ななど斟酌するので、我慢して噂はしないものをよ。さうした關係でもないなら、誰の事でも言出して、笑ひもされよう。

(口譯) 人の顔に取分けてよしと見える所は、度見ても、まあ美しい珍しいと思はれる。繪などは何遍も見ると、目にもとまらぬ。近う立てる屏風の繪な

そわびしけれ。

○まもらる、目守らる、と也。見詰めらる、をいふ。○みにくきも 醜き顔もと也。

評 美しい顔に美しい繪を、醜い顔に醜い調度を對照して、引立役に使つた。「醜きもさこそ」は考へたものだ。が醜い顔では、一箇所も取得がない。調度にも劣るから情ない。

二百三十五段

うれしきもの まだ見ぬ物語の多かる。又一つを見て、いみじうゆかしう覺ゆる物語の、二つ見つけたる。心おとりするやうもありかし。人のやり棄てたる文を見るに、同じつゞきあまた見つけたる。いかならむと思ふ夢を見て、おそろしと胸つぶるゝに、ことにもあらず合はせなどしたる、いとうれし。よき人の御前に、人数多さぶらふ折に、昔ありける事にもあれ、今聞しめし、世にいひける事にもあれ、語らせ給ふを、我に御覽じ合はせての給はせ、いひ聞かせ給へる、いとうれし。遠き所は更なり、おなじ都の内ながら、身にやむごとなく思ふ人の惱むを聞きて、いかにくとおぼつかなく歎くに、おこたりたる消息得たるもうれし。思ふ人の、人にも譽められ、やむごとなき人などの、くち惜しからぬものに思しの給ふ。物の折、もしは人といひかはしたる歌の聞えてほめられ、打聞などに書き入れらるる。

どは、大層見事だけれどし、見向きもされぬ。人の顔形は面白ものである。醜げな道具の中でも一箇所よい所があつて、見詰められるよ。醜い顔も、さうだらうと思ふのが面白くない。

(口譯) 嬉しいもの、まだ見ない物語が澤山ある又一巻を見て、大層あつて見たいと思はれる物語の、二巻を見つけたのは嬉しい。然し二巻目が詰らなくて、思ひおとされるやうな事もあるよ。人が破り棄てた手紙を拾つて見るに、その綴きを澤山見つけたのは嬉しい。どうか知らんと思ふわろい夢を見て恐ろしいと膽が潰れるに、夢合せの者が。

る。みづからのうへには、まだ知らぬ事なれど、なほ思ひやらるゝよ。

○一つ 一巻又は一冊。○二つ 二巻目又は二冊目。○心おとり云々の上、然しの接続詞を入れて見るこし。○いかならむと思ふ、いかにと心配に思ふと也。○事にもあらず合はせ、何でもなく夢判斷したるをいふ。この句の上に、夢解の者がを補ひて聞くべし。○今聞しめし、今聞しめす事にもあれといふべきを、次句に譲りて、中止法にいへるものか。或は「めし」はめすの誤寫か。○語らせ給ふを、よき人がなり。○我に御覽じあはせて、自分にお目を見合はせて也。○身にやむごとなく云々、身に取つて大切に思ふ人なり。○おこたり 平癒。○聞えて、世間になり。○打聞 ウチギキ。一寸聞くといふ意より一轉して、それを書付くる手控をいふこと、なれり。覺帳、隨筆、聞書。○みづからのうへには云々、自分の身にては、まだ經驗せぬ事なれどと也。○なほ思ひやらるゝ、の上に、嬉しからむとを略けり。○物語の多かる。二つ見つけたる。あまた見つけたる。思し宣ふ。書き入れらるゝ、の下、各、うれしを略けり。

いたううち解けたらぬ人のいひたるふるきことの知らぬを、聞き出でたるもうれし。後に物の中などにて見つけたるはをかしう、只これにこそありけれど、かのいひたりし人ぞをかしき。みちのくに紙、白き色紙、たゞのも、白う清きは、得たるもうれし。はづかしき人の歌の本末問ひたるに、ふと覺えたる、我ながらうれし。常にはおぼゆる事も、また人の問ふには、きよく忘れてやみぬる折ぞ多かる。とみに物もとむるに見出でたる。只今見るべき文などをもとめ失ひて、よろづの物をか

何でも無い事に判断したの、甚だ嬉しい。高貴の人の御前に、人達が、大勢待つてゐる折に、昔あつた事でもあれ、今お聞きになつた事でもあれ、そのお方がお話しなさるのを、自分にお目を見合はせて仰せになり、お聞かせになるのが、甚だ嬉しい。遠い所は勿論、同じ都の内が、自らも、自身に大切に思ふ人の、頬ぶのを聞いて、どうかどうかと心元なく歎く折に、平癒したといふ便りを得たのも嬉しい。自分の思ふ人が、他人にも譽められ、高貴の人などが、さう悪くはない者に思召して仰しやるの、嬉しい。何かの折又は人と贈答した歌が、世間に聞え

て讀められ、手帳などに書入れられるのが嬉しい。之は私自身の上ではまだ経験しない事だけれど、やはり嬉しいからうと想像される事よ。

(口譯)

大して懸念でない人のいつた古言の解らないのを、人から聞出したのも嬉しい。後で書物の中などで見つけたのは面白くあの古言は只これであつたわと、その話した人を面白く思ふ。陸奥紙、白い色紙は勿論、普通の白く綺麗なのは、手に入れたのも嬉しい。遠慮される程の立派な人が、歌の上の句や下の句を尋ねた時に、丁度覚えてゐたのは、我ながら嬉しい。平生は覺えてゐる事も、生憎また人の尋ねる時には

綺麗に忘れてしまふ折が、澤山ある。急に物を捜すに見付出したのは嬉しい。たつた今見なければならぬ書物などを捜しなくして、いろいろ物を打返し見つけた時に、捜し出したのは甚だ嬉しい。物合せや、何やいやと競争する事に勝つたのは、何で嬉しいか。い事があらうかい。又ひどく自分は高慢に、えらいと思つて得意顔な人を、だまし得たのは嬉しい。それも女同志よりも、男をだまし得たのは一層嬉しい。この返報は必ずしよとするとするだらうと思はれて、平生注意されるのも面白いのに、その男が至極平氣で、何とも思つてゐる様子で、油断させて時を送るのも面白

へすく見たるに、捜し出でたる、いとうれし。(物あはせ、何くれといどむ事に勝ちたる、いかでか嬉しからざらむ。又、いみじう我はと思ひて、したり顔なる人ばかり得たる。女どちよりも、男はまさりてうれし。これがたふは必ずせむずらむと、常に心づかひせらるゝもをかしきに、いとつれなく、何とも思ひたらぬさまにて、たゆめすぐすもをかし。にくき者のあしきめ見るも、罪は得らむと思ひながらうれし。刺櫛さしぢすらせたるにをかしげなるも、またうれし。思ふ人のうへは、わが身よりも勝りてうれし。御前に人々所もなく居たるに、今のぼりたれば、すこし遠き柱のもとなどに居たるを御覽じつけて、寫まこちと仰せられたれば、道あけて、近く召し入れたるこそ嬉しけれ。

(考異) ○すらせたるに 原本むすばせてとあり。○思ふ人のうへは 原本思ふ人はとあり。以上古本による。

○ふるきこと 古言。古歌古事などをいふ。○聞き出でたる 他人よりその準據など聞出でたる也。○物の中 書物の中。○只これにこそありけれ かの古ごとはなり。○たゞのも 普通の紙もと也。○物合 モノアハセ。様々の物を左右に番へて勝負を争ふ遊戯。繪合、貝合、扇合、前裁合等おほし。○歌合もその一。○はかり得たる たばかり得たる也。○たふ 答の字音。返報、意趣がへしなどの意。○いとつれなく云々 そののはかられたる人がなり。………
○たゆめすぐす 油断させて時日を経過せさすと也。○刺櫛すらせ 櫛は挽きて製る物なれど、仕上には木賊や何やにて摺磨く故に、櫛を製るを摺るといふ。なほ糞を造るを摺るといふが如し。○思

ふ人のうへは云々 通釋に、これも刺櫛の事といへるは非。○道あけて近く云々 既に居たる人達が通り路をあけて、主人の御前近くへ呼込みたるが嬉しと也。○見出でたる ○はかり得たる の下、各うれしを略けり。

評 大事な人の病氣全快の通知に接したのも、勝負事に勝つたのも、嬉しさは當然である。

戀人の評判が上下に通つてい、のは、陰にゐる女の身として、いかにも嬉しからう。探し物を見付けた時のや、刺櫛がよく出来たのを嬉しがるのも、女の事である。憎い奴の不幸な目に遇つた時、い、氣味ではあるもの、又罪や得らむと反省する。優しい女氣質がそこにほのめく。未見の小説の多いのを喜ぶのも、女らしい。書物を見つけ得たのや、上等の紙や白紙を買つたのが嬉しいのは、文筆の人としての清少の人格が見える。

名歌で喝采を博するのは、清少の身分としては、殊に希望する所だつたらう。自分はまた経験せぬ事だといふが、「夜をこめて」の逢坂の關の歌は、當時既に有名だつたではないか。想ふに謙遜の話か。或はこの文が、あの歌よりも以前の作で、もあらう。

人が折角古歌の句などで洒落れても、生憎こちらが、その歌を知らない。さう心易くない人では、まさか聞返す譯には往かず、返事には困る。かういふ事は宮仕生活には、常にあり勝な事だつた。「下ゆく水の」と、童に教つた例(百廿四段)もそれだ。されば後に書物の中で見當つた折も、これだなど感服する。随つて人の質問にうまく答へ得ることも、一つの誇であらねばならぬ。人の文は宮仕所での朋輩のだらう。その破棄した反故を繼合はせて讀む。そこに好奇の興味を發見する。

得意顔の人や威張つた者ほど、反感も手傳つて、一杯はめてやると、氣持がい、のである。相手が男だとなほ嬉しいのは、心から男が憎いのではない。異性間に何かしら波瀾の起るのが面白いのである。

返報がへしの睨み合ひも、一寸をかしい。三段の粥の木の氣分もこれである。宮仕所は實に陽氣だ。御主人がお話の相手に自分を目ざされたの、特におそば近く召寄せられたのは、數多伺候の人をさし置いての事だから、宮仕人に取つては、無上の面目なのである。

夢は昔から吉凶の應兆あるものと信ぜられ、猥りな者には夢話をしてはならぬ、非常な、夢も、合はせ様でわるくなると思つてゐた。曆には夢語らぬ日さへある。

(右大臣師輔) いまが若くおはします時、夢に朱雀門の前に、左右の足を西東の大宮にさしやりて、北向にて内裏を抱きて立てりとなむ見えつる」と仰せられけるを、御前に生さかしき女房の候ひけるが、いかに御股痛うおはしつらむ」と申したりけるに、御夢たがひて、かく子孫は榮えさせ給へど、攝政關白えしおはしますずなりにし。(大鏡)

宇治拾遺にある伴大納言の夢話も、これに似てゐる。これとは反對で、兼家が逢坂の關で雪に降られた夢を見た時、關の雪なら關白だと合はせたので、果して關白になつた話もある。こんな心配な夢も、よくしたもので、夢合を職業にする、夢解の女といふ者があつた。これに話して、い、やうに合はせて貰へば、吉凶ともに安全だ。こんな風だから、坊主などの中には、その檀那に關した、めでたさうな夢話を製造して、何分かの御布施に預からうとする、怪しからぬ奴のあつた事も、蜻蛉日記に出てゐる。

二百三十六段

御前に人々あまた、物仰せらるゝついでなどにも、世の中の腹だたしうむつかしう、片時あるべし心ちもせて、いづちもくいき失せなばやと思ふに、たゞの紙の

情らしい者がひとい目に逢ふのも、善くない事て罪は得るだらうと思ひながら、嬉しい。挿柳を作らせた時に、面白く出来たのも、亦嬉しい。思ふ人のうへの事は、自分の身の事よりも勝つて嬉しい。御前に人達が隙間もなく居た時に、今局からのぼつたので、少し離れた柱の際などに居たのを、中宮のお見つけになつて、「こちらへ来い」と仰になつたので、人達が通り路をあけて、御前近く呼込まれたのは嬉しい。

(口譯) 中宮の御前に、女房達が大勢侍つて、物を仰になる序などにも、私か、世の中が腹立たしく、うるさく、

片時あるべき心持もしないで、何地でもく往隠れてしまひたいと思ふ時に、普通の紙の大層白く綺麗なのや、よい筆又は白い色紙陸奥紙など手に入れると、心が慰んで、かうしたまゝでも暫く、この世の中におられさうであると思はれまゝす。又高麗縁の疊の筵が青く細かに、緑の紋が鮮やかに、黒く白く際立って見えたのを、引展げて見ると、何ですや、やはりどうしても、この世は見限られまいと思はれて、命さへ惜しくなりませうと申上げると、中宮が「大層一寸した事にも慰むのであるな。さう容易く慰められるなら姥捨山の月はどうした人が見るのか」とお笑ひなさる。お前に侍ふ女房達も「大層手輕な息災の御祈禱」といふ。そして後暫

いと白う清らかなる、よき筆、しろき色紙、みちのく紙など得つれば、かくてもしほしありぬべかりけりとなむ覺え侍る。又、高麗縁の疊の筵青うこまかに、縁の紋あざやかに、黒う白う見えたる、引きひろげて見れば、何かなほ更に、この世はえ思ひはなつまじと、命さへ惜しくなむなる」と申せば、いみじくはかなき事にも慰むるかな。姥捨山の月は、いかなる人の見るにか」と笑はせ給ふ。さぶらふ人も、「いみじくやすき息災のいのちかな」といふ。さて後にほど經て、すぐろなる事を思ひて、里にゐる頃、めでたき紙を、二十づつみに裹みて賜はせたり。仰言には、いとく參れ」などの給はせて、これらは聞しめし置きたる事ありしかばなむ。わるかめれば、壽命經も得書くまじげにこそ」と仰せられたる、いとをかし。むげに思ひ忘れたりつることを、思しおかせ給へりけるは、なほたゞ人にてだにをかし。ましておろかならぬ事にぞあるや。心も亂れて、啓すべき方もなければ、たゞ、

浦「かけまくもかしこきかみのしるしには鶴のよはひになりぬべきかな。あまりにやと啓させ給へ」とて、參らせつ。臺盤所の雜仕ぞ、御使にはきたる。青き單衣など取らせて。まことにこの紙を、草子に作りてもてさわぐに、むつかしき事も紛るゝ心ちして、をかしう心のうちも覺ゆ。

く經つて、詰らぬ事をクヨク思つて、里に下りてゐる時分結構な紙を二十包に包んで、中宮から下された。その仰言には「疾く參れ」など仰しやつて、「この紙は、かれてお聞置きになつた事であつたから下さるのだ。實が悪足に書けさうもないやうである」と仰せられたのが、甚だ面白。丸きり當人さへ忘れてゐた事を、記憶してお出なされたのは、常人ですらも、やはり面白。まして中宮様では、その面白さは、一通りならぬ事である。嬉しさに心も亂れて申上げやうもないから、只、

「おけまくも畏きかみのしるしには、鶴のよはひになりぬべきかな（申すも恐多い神の御利益には、鶴のやうに千年の齡をも保つて、詰らぬ事をクヨク思つて、里に下りてゐる時分結構な紙を二十包に包んで、中宮から下された。その仰言には「疾く參れ」など仰しやつて、「この紙は、かれてお聞置きになつた事であつたから下さるのだ。實が悪足に書けさうもないやうである」と仰せられたのが、甚だ面白。丸きり當人さへ忘れてゐた事を、記憶してお出なされたのは、常人ですらも、やはり面白。まして中宮様では、その面白さは、一通りならぬ事である。嬉しさに心も亂れて申上げやうもないから、只、

枕草子評釋

（考異）〇事にも 原本事もとあり。活本による。

〇御前に 中宮のなり。〇人々あまたの下、候ひてを略けり。〇いつちもく云々 いつちにもく往隠れたしと也。〇ありぬべかりけり この世になり。〇高麗縁 カウライベリ。疊の縁の切地にて、白地の綾に黒く、雲形又は菊花などの紋様を織出せるもの。染出すは後世のこと也。〇青うこまかに疊表の新しくて青く、織目の細かにと也。〇黒う白う 縁の模様が黒く、地が白くと也。〇何か 何かは往失すべきの意には當れど、今少し軽く用ゐたる語なり。この用例、上文にも屢見えたり。〇姥捨山の月は云々 さほどに容易き事に慰むならば「わが心慰めかねつ」といへる姥捨山の月は、いかなる人が見るにかあらんと也。〇何も信濃の山奥までも往隠る、にも及ぶまじの餘意あり。古今集雜上、詠者不詳「わが心慰めかねつ更科やをばすて山に照る月を見て。〇息災の祈 災厄を息むる祈禱。〇すゝろなる事を思ひて 詰らぬ事を心配してと也。〇二十づつみ 春註には、二十帖にやといへり。〇賜はせたり中宮より也。〇聞しめし置きたる事 「只の紙のいと白う云々」と清少のいへるをさす。〇ありしかばなむ の下、賜はするなりこの紙はを略けり。〇壽命經 壽命陀羅尼經の略。具さには一切如來金剛壽命陀羅尼經といふ。唐の不空三藏の譯にて一卷あり。この經を受持するは長壽を祈るため也。〇書くまじけにこそ の下、あれを略けり。〇なほた人 「なほは」をかしに係る副詞。〇ましておろかならぬ事、まして宮の御上なれば疎かならぬ事となり。この意は、わが詞を忘れ給はざるを喜べる也。諸註、物賜へるを喜べるやうに解けるは非。〇かけまくもの歌 言葉にかけていはんも畏き神の靈驗には、鶴の如く千年の齡をも保ちさうなる事よと也。神に紙をかけて、賜はれる紙の恵に長命になるの意を寓せたり。〇あまりにや 鶴の齡は餘り長命過ぐるならんと也。句の下、あらむを略けり。〇啓せさせ給へ お側なる女房にまで申す故に、かくいへり。〇雜仕 ザフシ。雜役驅使の官女。旁註に「諸大夫侍の

ちさうな事よ。全く頂いた紙のお陸で命が延びます）鶴の齡になつては餘りてせうか」と申上げて、御返事を差上げて、臺盤所の雜仕が御使には来たのであ。青い單衣などを被げ物にして歸した。この紙を草子に作つて立懸ぐに、まことに氣持わるさも紛れる心持がして、心の中も面白く思はれる。

（口譯）二日ほど經つて、赤衣着た男が、疊を持って這入つて来て「これを差上げます」といふ。下女が出て「あれは誰です。不遠慮など、取つきわ打置いて、その男は立去つた。私が「何處からか」と尋ねさせると下女が「もう往つてしまひました」といつて疊を取入れ

女、これに任ず、女孀ノ類なり」とあり。〇取らせて 祿に取らせて返しつ。の略。〇まことに「紛る、心地」にかゝる副詞。

二日ばかりありて、赤衣着たる男の、疊をもて来て、「これ」といふ。下女「あれは誰ぞ。あらはなり」など、物はしたなういへば、さし置きていぬ。遣いづこよりぞ」と問はすれば、下女「まかりにけり」と取り入れたれば、こと更に御座といふ疊のさまにて、高麗など、いと清らなり。心の中には、さにやあらむと思へど、なほおぼつかなきに、人ども出だしもとめさすれど失せにけり。怪しがりいへど、使のなければいふかひなし。所たがへなどならば、おのづからもまたいひに來なむ。宮のほとりに案内しに參らせまほしけれど、なほたれすゝろにさる業はせむ、仰ごとなめりと、いみじうをかし。二日ばかり音もせねば、疑ひもなくて、左京の君の許に、通かゝる事なむある。さる事やけしき見給ひし。忍びて有様の給へ。さる事見えずは、かく申したりとも、なもらし給ひそ」といひ遣りたるに、左京いみじう隠させ給ひし事なり。ゆめノ、まろが聞えたるとなく、後にも」とあれば、さればよと、思ひしもしるくをかしくて、文かきて、又みそかに御前の勾欄におかせしものは、惑ひけるほどに、やがてかきおとして、御階のもとに落ちにけり。

（考異）〇いへど 原本笑へとあり。古本による。〇疑ひもなくて 原本疑ひもなくとあり。〇の給へ 原本の給ひ

てとあり。以上抄本による。○惑ひける 原本惑ひしとあり。古本による。

○赤衣 退紅色の衣。赤き衣を見よ。○これ これ獻らむの略。○御座といふ疊 貴人の敷く上等の疊なり。○高麗など 高麗縁など。○さによ 中宮より賜へるをさす。○もとめさすれど その使をなり。○宮のほとりに云々 或は中宮奉仕の女房達の所爲とも思はる、故、その邊に問合はせに、人を遣りたれどと也。○なほ云々 「なほ」は「仰言なめり」にかゝる。○疑ひもなく 仰言なること疑ひなくと也。○左京の君 中宮の女房。○さるけしきや「さる」は中宮の疊を自分に遣はされたるをさす。○かく申したりとも 私がかくく申したりとも、人にいひ觸れ給ふなと也。○のちにも の下、物し給へを略けり。後日になりても、私がお洩しせぬ事にして下されと也。「後にも」は「ゆめくまるが云々」の上に顛置して心得べし。○さればよと さればかくくなるよと也。○思ひしもしるく 想像したるも明らかにと也。○惑ひけるほどに 使があわてたるうちにと也。○かき落して 文をなり。○前段の「陸奥紙、白き色紙、たゞのも白う清きは得たるも嬉し」とあるを、一層敷演し、誇張したもので、入らない命も惜しくなるとは、面白い言方である。中宮の「姥捨山の月は云々」の御批評は、相變らずの才氣煥發であらせられる。

息災の祈は、本式にすれば大變だ。物は違ふが、

今日修善結願、僧都被物袷一重、袴、絹五疋、麻細十五疋、牛一頭、伴僧米布等也。(小右記)

小野宮家は富貴だから、御布施は並より多いには違ひないが、この半分としても、物入は多分だ。それが紙筆や高麗縁の御座位では、いくら上等にした所が、多寡が知れてゐる。

抑も尊貴の、しかも御主人のお前で、世の中が腹が立つの、厭になるのとは、少し不穩當な會話であるが、こんな打明話の出来るほどにまで、中宮の寛容な、また氣作な御氣質であらせられた事が想像され

たがら、見るとわざわざ御座といふ疊のさまに作つて、高麗縁などが、大層綺麗である。心の中では、中宮様だらうかと思ふが、やはり不慥なので、人など出して、その使の者を捜さしたけれど、見えなくなつてしまつた。不思議がり彼はいふが、使の者が居ないのだから、いふ證もない。若し所違へなどなら自然まあそれを断りに来るだらう。或は中宮の女房達の所爲かも知れぬので、その邊に問合はせに、使を上げたけれど誰か妄にさうした事をしようぞ、やはり中宮の仰言であるらしいと思はれて、大層面白。二日ばかり音沙汰ないから、中宮のなされた事は疑もなく、左京の君の許に「かういふ事があります。そんな風の様子を御覽なされたか。内々様子

を仰しやつて下さいそんな事をお認めにならないなら、かう私が申したとも、御洩し下さるな」といつて遣つたのに、その返事に「その事は中宮様の大層お隠しなされた事です。後日にも決して私に申上げたとなき、隠して置いて下さい」とあるので、それその事よと、嘗て自分の想像した事も明らかで面白くて、文を書いて、又密に中宮御殿の勾欄に置かせたものは、使の者があわてたうちに、すぐに落ちて、御階の下に落散つてしまつた。

る。「すいゝなる事を思ひて」は、「世の中腹立たしう云々」と、脈絡が通じてゐるらしい。

の道長方の人だと譏言された折の事で、もあらう。(故殿などおはしまさでの百廿四段参照)

相應に紙の貴重だつた時代に、二十包もよい紙を下されて、悪いから壽命經も、よう書けまいと、遣ひ物を卑下なされた。これは今日の贈遺上の習慣と同じだ。壽命經は息災延命を祈る經だから、片時あるべき心地もせで、「息災の祈かな」などの語を承けて仰せられたの見える。尤も壽命經を書くことは、自分の身祝に誰も彼もしたことで、たつた一巻の手輕な物だから、寫經にも始末がよい。

永延二年三月十六日、今日攝政家政所於法性寺書寫壽命經六十卷、請六十口僧、賀六旬算。(小右記)

上にも齊信を、「過ぎたる事なれど、心得ていふはをかしき中にも」(百四十三段)「過ぎたる事忘れぬ人は、いとをかし」(百四十四段)と稱譽した口だから、それが中宮様とあつては、尙更感歎されずには居ない。思召の有難さが、骨身に沁みる。草子に作つても騒ぐのも、その嬉しさの餘である。中宮も亦お氣に入りの清少の事だから、特にお心に懸けて居られたのだらう。

高麗縁の疊は、清少の妙な物好である。否疊の新しいのは、一般に人の喜ぶ所だ。疊には二種ある。一つは置疊で床が厚い。一つは今の薄縁と同じである。こののは薄縁疊であるといふのは、「引展けて見れば」の語で、さう推定される。且御座の語も、今に薄縁物を稱して、厚疊をいはない。

「あらはなり」と咎めたので見ると、案内なしに、庭先から簀子邊まで、疊を持込んだものと思はれる。これも中宮様からかと、暗には推し得たが、わざと隠してなされた事だから、こちらもそつと、手紙を御前の勾欄に置かせたのである。定めて面白い口狀もあつたらうに、使が間拔で紛失して、御手許に届なかつたのは、聊か尻拔の形で、本人の清少ばかりか、千載の後の我々まで、甚だ不本意に感ずるのも、やはり清少の筆の力に魅せられてゐるからだらう。

二百三十七段

關白殿、二月二十日のほどに、法興院の積善寺といふ御堂にて、一切經供養せさせ給ふ。女院宮の御前もおはしますべければ、二月朔日のほどに、二條の宮へ入らせ給ふ。夜更けてねぶたくなりしかば、何事も見入れず、つとめて、日のうららかにさし出でたるほどに起きたれば、いと白うをかしげに造りたるに、御簾より始めて、昨日懸けたるなめり、御しつらひ、獅子、狛犬など、いつのほどにか入り居けむとぞをかしき。櫻の一丈ばかりにて、いみじう咲きたるやうにて、御階のもとにあれば、いととう咲きたるかな、梅こそ只今盛なめれと見ゆるは、造りたるなめり、すべて花のほひなど、咲きたるに劣らず、いかにうるさかりけむ。雨降らばしほみなむかしと見るぞくち惜しき。小家などいふ物の多かりける所を、今つくらせ給へれば、木立などの見所あるは、いまだなし。たゞ宮のさまぞ、けむかくをかしげなる。

(考異) ○二十日 原本十日とあり。日本紀略、本朝世紀、扶桑略記等に、二月二十日壬寅とあるによりて改む。○にが 原本にやとあり。古本による。

○關白殿 道隆公。○二月二十日 正曆五年のなり。○法興院 ホコヤン。もと攝政藤原兼家の邸に

(口譯) 關白殿が二月廿日の頃に、法興院の積善寺といふ御堂で、一切經の供養をなさる。女院や中宮も行啓なさる筈なので、二月朔日の頃に、中宮は二條の宮へお出ましになる。夜が更けて眠たくなつてしまつたから、何にも構はず寢て、翌朝日がうららかに昇つた時分に起きたれば、見ると大層新しく趣ありげに造つた御殿で、御簾を始として、昨日懸けたのたらう。御部屋の裝飾が立派に出来、獅子狛犬なども、何時のまに入込んだのだらうと思はれて面白い。

櫻が一丈ばかりで、見事に咲いたやうで御階の際にあるから「大層早く咲いた事よ。梅こそ今が盛な筈だ」と見えるのは造つた花であるやうだ。全く花の色つやなど、實際咲いたのに劣らない。どんなに巧者に造つたのだらう。雨が降るならば羨んでしまふだらうよと思ふと残念である。小家などいふ物が多かつた處を取拂つて、今度お造りなされたので、木立などの趣のあるのは、またない。只宮の様が人氣近く趣がある。

(口譯) 關白殿がお出になつた。鼠色の固紋の御指貫、櫻の直衣に、

て、二條院といひしを、正曆元年寺に改造したる也。○積善寺 また釋泉寺とも書く。通用なり。法興院中に建てたる御堂なり。榮華物語、見はてぬ夢に「攝政殿の法興院の内に、別に御堂をたてさせ給ひて、積善寺と名づけさせ給ひて」とあり。○一切經供養 新に一切經を書寫して、これを寺院に寄附したる時に行ふ法會。一切經は大藏經ともいふ。主として釋迦所説の經典を編輯したるものなれども、後人の註疏も少からず。もと五千四十八卷ありしもの、増して八千五百三十四卷となれり。經供養を見よ。○女院 詮子を見よ。○二條の宮 中宮の新宮なり。小二條を見よ。○いらせ給ふ 中宮がなり。○見入れず の下、寢てを補ひて聞くべし。○起きたれば この句應ずる所なし。下の「造りたるに」を見よ。○いと白う 新しきをいふ。○造りたるに 造りたる殿にてと解す。上なる「起きたれば」を承けむ爲なり。○御しつらひ の下、脱字あらん。假にめでたく、或はになくしてなどいふ語を補ふ。○咲きたるやうにて 造花なればかくいへり。○咲きたるに まことに咲きたるにと也。○うるさかりけむ 功者に造りたりしならんと也。「うるさかり」は、青表紙本の源氏帚木の卷に「その方も具してうるさくなむ侍りし」とあるに同じ。然るに空穂物語初秋上に「あるじのおと、仁壽殿はうるせき人にこそありけれ」また河内本の帚木の卷に「うるせくなむ」とあるによりて、石川雅望は、うるさくを誤と定めたり。空穂のうるせくを初見とせば、うるさくは後出の轉語なるべく、されど誤にはあらじ。音轉なるべし。もと麗しの義より出でて、巧緻、功者などの意に轉れる也。○小家など―所を の下、取拂ひてを略せり。○今つくらせ 「今」はこの度の意。

殿渡らせ給へり。青鈍の固紋の御指貫、櫻の直衣に、紅の御衣三つばかり、たゞ直衣にかさねてぞ奉りたる。御前より始めて、紅梅の濃きうすき織物、固紋、りうも

紅の下着三領ばかりを、すぐ直衣に重ねて召して、お出なさる。中宮様から始めて女房達は、紅梅の濃い又はうすい色の織物、固文綾文など、世にあるだけの立派なのを着たから、只一面に光渡つて、唐衣には萌黄、柳、紅梅などもある。關白殿は中宮の御前にお坐りなされて、お話など申上げられて、中宮の御返辭振の思ふやうなのを、里人に一寸でも覗かせたいと思つて、お見上げ申す。關白殿は女房達を御見渡しになつて、宮には何事な苦になさうぞ澤山立派な女房達を並べて、御覽なさるの、甚だ羨しい。一人として悪い人がないよ。これ皆立派な家々の娘達です。よ。あ、何事な、よく目をかけて奉公おさせなさるがよからう。一體この宮の御

んなど、あるかぎり着たれば、口ひかり満ちて、唐衣は萌黄、柳、紅梅などもあり。御前に居させ給ひて、物など聞えさせ給ふ。御いらへのあらまほしさを、里人にわづかにのぞかせばやと見奉る。女房どもを御覽じ渡して、關白宮に何事を思しめすらむ。こゝらめてたき人々をなべ居ゑて御覽するこそ、いと羨ましけれ。一人わろき人なしや。これ家々の女ぞかし。あはれなり。よく顧みてこそさぶらはせ給はめ。さてもこの宮の御心をば、いかに知り奉りて集まり給へるぞ。いかにいやしく物吝みせさせ給ふ宮とて、我は生まれさせ給ひしより、いみじう仕うまつれど、まだおろしの御衣一つ賜はらず。何かしりう言には聞えむなどの給ふがをかしきに、皆人々笑ひぬ。關白まことぞ。をこなりとて、かく笑ひいまするがはづかし」などの給はするほどに、うちより御使にて、式部の丞某まわれり。御文は、大納言殿取り給ひて、殿にたてまつらせ給へば、ひき解きて、關白いとゆかしき御文かな。ゆるされ侍らば、あけて見侍らむ」との給はすれど、あやしと覺いたためり。關白かたじけなくもあり」とて奉らせ給へば、取らせ給ひても、ひろげさせ給ふやうにもあらず、もてなさせ給ふ御用意などぞありがたき。隅のまより、女房褥さし出でて、四三人御几帳のもとに居たり。關白あなたにまかりて、祿の事物し侍らむ」とて、立たせ給

心を、女房達はどうか承知し奉つて、集まられたのか。それはいかにも卑しく物吝みなされるお方の事とて、私はそのお生れなされた時から、一方ならずお仕へ申すけれど、未だにおさかりのお召物一つ頂かない。なんぞ陰口には申上げよう。など仰しやるのが面白いの、皆の人々白笑つた。すると關白殿は、いや眞實の事ですぞ。私を馬鹿と思つて、かう笑つてお出なさるのか。恥かしい。など仰しやるうちに、主上から御使で、式部丞某が参つた。お手紙をば大納言殿にお取りになつて、殿に差上げられると、殿はその結びを解いて、大層ゆかしい御手紙よ。お許しがあるならば披いて見ませう」と仰しやるが、御自分でも怪しからぬ事と思召したやうであ

ひぬる後に、御文御覽す。御返しは、紅梅の紙に書かせ給ふが、御衣のおなじ色にほひたる、なほかうしもおし量り参らする人は、なくやあらむとぞくち惜しき。今日はこと更にとて、殿の御かたより、祿は出ださせ給ふ。女の装束に、紅梅の細長そへたり。さかづきなどのあれば、酔はさまほしけれど、式部丞、今日は、いみじきことの行事に侍り。あが君許させ給へ」と、大納言殿に申して立ちぬ。君達などいみじう化粧じ給ひて、紅梅の御衣ども劣らじと着給へるに、三の御前は御匣殿なり。中の姫君よりも大きに見え給うて、うへなど聞えむにぞよかめる。うへも渡らせ給へり。御几帳ひき寄せて、新しく参りたる人々には見え給はねば、いぶせき心ちす。さしつどひて、かの日の装束、扇などの事をいひ合はするもあり。又挑みかはして、大馬まろは何か。只あらむにまかせてを」などいひて、他ノ女房、例の君などにくま。夜さりまかづる人も多かり。かゝる事にまかづれば、えとづめさせ給はず。うへ日々に渡り、夜もおはします。君達などおはすれば、御前人すくなからで、いとよし。うちの御使日々に参る。

(考異) ○賜はらず 原本給はぬとあり。四本による。○いませが 原本おますかとあり。活本による。○御文 原本文とあり。○の給はすれど 原本の給はすればとあり。○あやしと 原本あやしとあり。以上古本による。○さかづきなどの 原本着などとあり。○大納言殿に 原本大納言にもとあり。以上別本による。○紅梅の御衣と

る。「勿體なくもあ
る」と仰しやつて、
中宮に差上げられる
と、中宮はお受取に
なつても、それを展
げてお覽なされるやう
でもなく振舞はれ
る、その御用意など
は、世に珍しい。か
どの間から、女房が
勅使の褥をさし出し
て、三四人御几帳の
際に居た。關白殿は
「あちらに参つて、祿
の事を申付けませ
う」と仰しやつて、お
立ちになつた後で、
中宮は主上のお手紙
を御覽になる。御返
事は紅梅色の紙にお
書なきさるのが、お
召物の同じ色に照り
合つたのが、大層美
しいのを「やはりか
うも美しいは、世間
にはないだらうか」
と思はれて残念だ。
「今日は格別」と仰
しやつて、殿のお方
から、祿はお出しな
さる。女の装束に紅
梅の細長を添へてあ

る。勅使に勸盃のあ
る例だから、醉はせ
たいと思ふけれど勅
使は「今日は大切な
事の世話係です。我
君お宥下さい」と、
大納言殿に申上げて
立つた。關白殿の姫
君方などが、美しく
お化粧なされて、紅
梅の御召物など、互
にひけまいとして着
て居られる中に、三
のお方は御匣殿であ
る。中の姫君より、
大きくお見えなされ
て、北の方など申上
げるに、よりさうで
ある。關白殿の北の
方もお出になつた。
御几帳を引寄せて、
新参の女房達にはお
目通りなさらない心
目、氣の置かれる心
持がする。女房達は
集つて、供養の日の
衣装や扇などの事を
相談する者もある。
又互に競争して「私
は何て用意などしま
せう。只あり合はせ
のまゝに」などいつ
て、皆に「例のすれ者

も 原本紅梅の衣もとあり。抄本による。○すくなからで 原本すくなくは候はねばとあり。古本による。

○たゞ御直衣にかさねて 出衣などせずして、すぐ直衣に重ねてと也。極めて簡略なる服装なるをいふ。○りうもん 綾文の字音。模様ある綾織物。○御前 中宮。○御前に 關白殿が宮の御前にと也。○御いらへ 中宮のなり。○女房どもを 關白殿がなり。○宮に 宮にはと也。○こゝら 許多、澤山などの意。○家々の 然るべき家々のと也。○願みて 眷顧して、目をかけてなどの意。○いかに知り奉りて お前達はいかに承知申してと也。○いかにいやしく云々 如何にも卑しく云々と也。○しりう言 陰口。後言の音便。○式部の承某 下に「式部丞のりまさ」とあり。則理を見よ。○大納言殿 伊周。○ひき解きて 結文ゆゑ解くなるべし。○あやしと覺いたためり 開けて見むことは怪しからずと思したるやうなりと也。「おぼい」は思しの音便。○かたじけなくもあり 開けむことは怪しきのみか、辱くもありの略。○奉らせ給へば 中宮になり。○取らせ給ひても 中宮は御文を取らせ給ひてと也。「も」は歎辭。○褥さし出でて 勅使になり。○祿のこと 勅使に賜ふ被物の事なり。○立たせ給ひぬる 關白殿が座をなり。○匂ひたるの下、いみじうめでたきを補ひて聞くべし。○なほかうしも一あらむ わが今美しと見奉る如くに、かく美しと推測り奉る人は、世にはなからんかと思はれてと也。○さかづきなどのあれば 勸盃などのあればと也。勅使に酒を勸むるをいふ。○今日はいみじき事の云々 今日は大切なる事の世話役にて候ふと也。何か別に所役など控へ居たるなるべし。○あが君 大納言殿をさす。「あが」はわがの古言。○と大納言殿に と勅使が。大納言殿にと也。○君達 こゝは關白殿の姫君達をいふ。○三の御前 道隆の第三女。大鏡に「三の御方は冷泉院のみこ、帥宮(爲道親王)と申し、をこそは、父殿婿取り奉らせ給へりし、云々。さしつぎの四の御方は御匣殿と申し、云々」とありて、三の御前の御匣殿たりしこと見えす。然れども、四の御方の御匣殿たる前に、暫時御匣殿たりしことあるにや。○うへなど聞えむに 北の方、奥方など申

さんにと也。○うへも 道隆の北の方もと也。○見え給はねば 見られ給はねばと也。對面せぬをいふ。○いぶせき心ちす 氣の詰る心持がすると也。○かの日 供養のある當日。○挑みかはして 競争し合ひてと也。○まろは何か 私は何か更に用意せんと也。○まかせてを 「を」は歎辭。○例の君 例のすねたる君よと也。○夜さりまかづる 夜になりて支度の爲に里に退出すると也。○かゝる事に 當日の支度などをさす。○えといめさせ給はず 中宮はなり。

御前の櫻色はまさらで、日などにあたりて萎み、わろうなるだにわびしきに、雨のよる降りたるつとめて、いみじうむとくなり。いととく起きて、泣きて別れむ顔に、心劣りこそすれ」といふを聞かせ給ひて、喜びに雨のけはひしつるぞかし。いかならむ」とて驚かせ給ふに、殿の御方より侍の者ども、下衆など來て、あまた花のもとに、只よりによりて、引きたふし取りて、「關白」みそかにいきて、まだ暗からむに取れ」とこそ仰せられつれ。明け過ぎにけり。不便なるわざかな。とくく」と倒し取るに、いとをかしくて、「いはばいはなむ」と、かねずみが事を思ひたるにやとも、よき人ならばいはまほしけれど、眞かの花ぬすむ人は誰ぞ。あしかめり」といへば、笑ひて、いと逃げて引きもていぬ。なほ殿の御心はをかしうおはすかし。枝どもに濡れまつはれつきて、いかに見るかひなからましと見て入りぬ。

(若異) ○わろう 原本わろうとあり。活本による。○枝ども 原本整どもとあり。○まつはれ 原本まるかれとあり。 九五九

の君よなど憎まれる。夜分になつて支度の爲に里にさがる人も多い。かうした事の爲にさがるのは、中宮もお引止めなさる事が出来ぬ。北の方は毎日お出なされ、夜もお居なさる。姫君方などもお居なさるから、中宮の御前は無人でなくてよい。主上の御使が、毎日参る。

(口譯) 御前の櫻は、色はよくはならないで、日などに當つて萎み、悪くなるのです。心苦しいのに、雨が降つた翌朝は甚だ見立がよい。自分は、大層早く起きて泣いて別れる顔に比べては思ひおとされる。いふのを、中宮が聞きになつて、「ほんに雨の降る様子が見えぬぞよ。櫻はどんなにだらう」と仰しやつて、お驚きなさるに、殿の御方から、侍達

や下衆などが来て大勢花の際にすんすん寄つて、櫻の木を引倒して、殿様が「そつと往つてまた暗いうちに取れ」と仰しやつたのに、明るく成過ぎてしまつた。都合のわるい事よ。疾く急げ」といつて倒して取るので、甚だ面白くて、「いははいはなむ」と、兼澄の例を思つたのかとも話のわかる身柄の人ならば、ひたひたに、相手が相手だから仕方無しに、あの花を盗む人は何者です。悪いでせう」といふと、彼等は笑つて、木を引取つていよいよ逃げて往つた。やは殿のお心は面白くおありなさるよ。その儘置いたなら、花が枝などに濡れ纏はり付いて、どんなに見榮が無からうかと見て引込んだ。

(口譯) 掃部の役人が参つて

り。以上古本による。

〇泣きて別れむ顔に云々 拾遺集、別に詠者未詳「櫻ばな露にぬれたる顔みれば泣きて別れし人ぞ戀しき」とある歌によりていへる也。「顔に」の下、比べてはを補ひて聞くべし。〇いかならむの上、櫻はを略けり。〇みそかにいきて云々 密に往きて、まだ暗きうちに取れと也。〇とこそ仰せられとこそ殿の仰せられと也。〇いははいはなむ 兼澄の歌に見當らず。後撰集春中に、素性の歌とて「山守はいははいはなむ高砂のをへの櫻折りてかさむ」といふがあり。兼澄のにも、これに似たるがありけるなるべし。〇かねずみ 抄に「源兼澄にや、作者部類に、源兼澄は陸奥守信明の子、加賀守從五位にて、寛和の頃までの人、後撰拾遺後拾遺等の作者也」とあり。尊卑分脈には、鎮守府將軍軍信孝の子、加賀介とあり。〇よき人ならば云々 かの歌意を了解するほどの教育ある貴人ならば、兼澄の歌を思ひての事かともいひたけれど、下衆共なれば、その詮なき事と思ひてと也。〇笑ひて 花倒し取りたる者どもが也。〇引きもて その造花の櫻をなり。〇なほ殿の御心は、人の見ぬうちに取去らんとしたる關白殿の御心はやはりと也。「なほ」は、次の「をかしよう云々」にかゝる。〇濡れまつはれつきて 上に、この花取らざらましかばを補ひて聞くべし。「まつはれ」は絡まるをいふ。

掃部寮参りて御格子まゐり、主殿の女官御きよめ参りはてて、起きさせ給へるに、花のなければ、宮あなあさまし。かの花はいづちいにける」と仰せらる。宮あかつき「盗人あり」といふなりつるは、なほ枝などを少し折るにやとこそ聞きつれ。誰がしつるぞ。見つや」と仰せらる。宮さも侍らず。いまだ暗くて、よくも見侍らざ

りつるを、しろみたる物の侍れば、花を折るにやと、うしろめたさに申し侍りつる」と申す。宮さりととも、かくはいかてか取らむ。殿の隠させ給へるなめり」とて笑はせ給へば、宮いでよも侍らじ。春風にして侍るならむ」と啓するを、宮かくいはむとて隠すなりけり。ぬすみにはあらで、ふりにこそふるなりつれ」と仰せらる。も、珍しき事ならねど、いみじうぞめてたき。殿おはしませば、寝たれの朝顔も、時ならずや御覽せむと引き入らる。おはしますまゝに、宮かの花うせにけるは。いかにかくは盗ませしぞ。いぎたなかりける女房達かな。知らざりけるよ」と驚かせ給へば、宮されど、我よりさきにとこそ思ひて侍りつれ」と忍びやかにいふを、いとく聞きつけさせ給ひて、宮思ひつることぞ。世にこと人出でて見つけじ。宰相とそことの程ならむと推しはかりつ」とて、いみじう笑はせ給ふ。宮さりけるものを、少納言は春風におほせける」と、宮の御前のうちゑませ給へる。めてたし。宮虚言をおほせ侍るなり。今は山田も作るらむ」とうち誦んぜさせ給へるも、いとなまめきてをかし。宮さてもねたく見つけられにけるかな。さばかりいましてつるものを、人の所に、かゝるしれ者のあるこそ」との給はす。宮春風はそらに、いとをかしようもいふかな」と、又うち誦んぜさせ給ふ。宮た言には、うるさく思ひより

て侍りつかし。今朝のさまいかに侍らまし」とて笑はせ給ふを、小若君、「されどそれは、いととく見て、『雨にぬれたるなど、おもてぶせなり』といひ侍りつ」と申し給へば、いみじうねたがらせ給ふもをかし。
 さて八日九日の程にまかづるを、鳥今すこし近うなして「など仰せらるれど、出てぬ。いみじう常よりものどかに照りたる晝つかた、鳥花の心ひらけたりや。いかにいかに」との給はせられたれば、鳥秋はまだしく侍れど、夜にこゝのたびなむのぼる心ちし侍る」など聞えさせつ。

(考異) ○侍るならむ 原本侍りなむとあり。○いみじうぞ 原本いみじうとあり。○侍りつれ 原本侍るめりつれとあり。○さりける 原本さりげなるとあり。○御前の 原本御前にとあり。○又うち誦んぜさせ 原本誦んぜさせとあり。○ぬれたるなど 原本ぬれたりなどいひけりとあり。○いかに 原本いかにいふとあり。以上古本による。○夜にこゝのたび 原本よにこゝのたびとあり。白氏文集の一夜魂九升とあるによりて改む。
 ○御きよめ参りはて、御掃除をしまひてと也。○起させ給へるに 宮はなり。○といふなりつるは 清少のいふなりつるはと也。○さも侍らす 「見つや」を承けていへり。○見侍らざりつる 「見」は見えの意。○しろみたる物 花取りたる下衆共の白張など着たりし故、かくいへるなるべし。○さりとも云々 花盗人なりとも、かく残なくは、何とて取るべきぞと也。○よも侍らじ よも殿の御仕業にはあるまじと也。○かくいひはむとて云々 かく春風の仕業といはむと思ひてと也。○隠すなりけり わざと殿の御業なる事を隠すなりけりと也。○ふりにこそふるなりつれ 雨がひどく降るのであつたといふに當る。雨の花を散したる意を含めたり。○珍しき事ならねど 上に、中宮の才氣に富み給へることふに當る。雨の花を散したる意を含めたり。○寝くたれ髪を見よ。○時ならずはを補ひて聞くべし。○寝くたれの朝顔 寝亂れの朝起の顔付なり。寝くたれ髪を見よ。○うせ日の上り過ぎて、今は寝亂れ姿にてあるべき時ならねばいふ。○おはしますま、に 殿のなり。○うせにけるは 「は」は歎辭。○我より先にと云々 私より先に、殿には御存知の筈ならんと思ひ申したりと也。○聞きつけさせ給ひて 殿がなり。○宰相とそこの の上、もし見付くる人あらばを補ひて聞くべし。○さりけるものを 「さりける」は殿の仰せて、取片付けさせたるをさす。○おほせける の下、「よ」の歎辭を略けり。○虚言をおほせ侍る 殿には虚言を仰せ給ふと也。○今は山田も作るらむ 貫之集に「山田さへ今はつくるをちる花のかごは風におほせざらなむ」。○さばかり云々 あれ程人に見付からぬやうにといひ聞かせたるものをと也。○人の所に わが所にと也。「人」は殿みづからいふ。○しれ者のあるこそ の下、くちをしけれを略けり。「しれ者」はかの侍下衆などをさして罵りていふ。遅くして清少に見付けられたれば也。○春風は空に云々 春風の仕業とは、出放題に甚だ面白くいふことよと也。○うち誦んぜさせ給ふ 「山田さへ今はつくるを」の歌を御朗吟なさると也。○たゞ言には云々 只の詞としては、功者に思付きたることよと也。詩歌など引用せざるを、只言にはといへる也。この句上に、春風にして侍るはを補ひて聞くべし。「うるさく」はうるさかりけるを見よ。○けさのさま云々 今朝の花盗みし様は、目の前に見ばいかならん略、可笑しかるべしの餘意あり。「いかに」の上、まのあたり見ましかばの補語あるべし。○小若君 小若君。松君のこと。灌臣の説に「幼稚の時の尊稱にて、汎くたれが上にもいふ。空穂俊陰の巻に、兼雅のことを、はじめの程は、小若君といへり」。○いととく見て 清少がなり。○雨に濡れたる 造花がなり。○おもてぶせ 面を伏すること、即ち不面目なること。こゝは見る影もなきをいふ。○まかづるを 清少がなり。○今すこし近うなして もう少し供養の

仕業といはうと思つて隠すのであるわ、盗むのではなくて、降りに降るのであつた」と仰しやるのも珍しい事では無いが、甚だ面白。關白殿がお出なさるの、寝亂れの朝の顔も、時ならぬいと御覽なさるだらうかと思はれて、奥へ引込まれる。殿はお出なさるとすぐ「あの花が無くなつたわ。何でかうは盗ませたぞ。寢坊だつた女房達であるよ。取られたのも知らなかつたな」と驚いて仰しやるから「さう仰しやるが、私よりも先に御承知の事と思つて居りました」とこつそりいふのを、す早くお聞きつけになつて「さう思つた事よ。決して餘人は出て見付けまい。宰相とお前と位だらうと思像した」と仰しやつて、ひどくお笑ひなさる。事実はさうであ

日に近づかせての略。今少し供養の日近くまで居てといふに同じ。この句の下に、まかれを略けり。○花の心ひらけたりや 花の心開けたりや否やと也。白氏文集の長相思といふ詩に「九月西風興、月冷霜華凝、思君秋夜長、一夜魂九升、二月東風來、草桥花心開、思君春日遲、一日腸九廻、云々」とあり。この草桥花心開とあるを取出でて、思君春日遲の句を思はせ、兼ねて「のどかに照りたる晝つ方」の趣を現して、君を思へば、一日腸九廻するならん、されば早く歸り参れといふ趣に取成したり。思君の「君」は中宮御自身に引當て給へる也。○秋はまだしく云々 これも思君秋夜長、一夜魂九升に據りて答へたる也。今は春にて秋はまだなれども、君を思へば、一夜のうちに魂の九廻も升る心地する也。されば程なく参り上るべしの餘意を含めたり。

つたものを、知らぬ顔して、少納言は告を春風に負はせましたよと仰しやつて、中宮様のお笑ひなされたのがめでたい。そして又「虚言を殿は仰せられましよ。今は山田も作らむ」とお吟じなされたのも、甚だ優美で面白い。殿が「さても残念にも見付けられた事よ。あれほど注意をしておいたものを、自分の家にかやうな馬鹿の居るのが苦しい」と仰しやる。そして「春風とは出鱈目に甚だ面白くもいふ事よ」と仰しやつて又「今は山田も」をお吟じなさる。中宮が「たゞの詞としては、功者に思付きました事よ。今朝の花を取る様子つたでせう」と面白かつたので、小若君が「これぞそれは、少納言大層よく見て、雨

出でさせ給ひし夜、車の次第もなく、まづと乗り騒ぐがにくければ、さるべき人三人と、「なほこの車に乗るさまのいと騒がしく、祭のかへさなどのやうに、倒れぬべく惑ふ、いと見ぐるし。たゞさばれ、乗るべき車なくてえ参らずは、おのづから聞しめしつけて、賜はせもしてむ」など笑ひ合ひて立てる前より、押し凝りて、惑ひ乗りはてて、宮「かうか」といふに、誰かおはする」と問ひ聞きて、宮「いと怪しかりけることかな。今は皆乗り給ひぬらむとこそ思ひつれ。こはなどでかくは後れさせ給へる。今は得選を乗せむとしつるに、珍らかなりや」など驚きて寄せさすれば、清「さばまづ、その御志ありつらむ人を乗せ給ひて、次にも」といふ聲聞きつけて、宮「けしからず腹ぎたなくおはし

に濡れた機など、花の面目だ」といひました」と申されるので、殿は非常に残念がられるのも面白

さて八日九日の頃に私が退出するのを中宮は「もう少し供養當日近くまで居ておれよ」など仰になるけれど退出した。平生より大層のどか、日の照つた晝時分中宮から「花の心は開けたか。どうかどうか」と仰せ遣はされたから「秋はまだで御座いますけれど、夜に九廻も升る心地が致します」と申上げさせた。

けり」などいへば乗りぬ。その次には、まことにみづしが車にあれば、火もいと暗きをわびて、二條の宮に参りつきたり。御輿はとく入らせ給ひて、皆しつらひ居させ給ひけり。宮「こゝに呼べ」と仰せられければ、右京、小左近などいふ若き人々、参る人ごとに見れど、なかりけり。おるゝに隨ひ、四人づつ御前に参りつどひてさぶらふに、宮「怪し、なきか。いかなるぞ」と仰せられけるも知らず、ある限おりはてて、辛うじて見つければ、右「かばかり仰せらるゝには、などかく遅く」とて、ひきゐて参るに、見れば、いつの間にかうは、年ごろの御すまひのさまに、おはしましつきたるにかとをかし。宮「いかなれば、かう何かと尋ねばかりは見えざりつるぞ」と仰せらるゝに、とかくも申さねば、もろ共に乗りたる人、「いとわりなし。さいはての車に侍らむ人は、いかでかとかくは参り侍らむ。これもほととくえ乗るまじく侍りつるを、みづしがいとほしがりて、譲り侍りつるなり。暗う侍りつる事こそわびしう侍りつれ」と、笑うく啓するに、宮「行事する者のいとあやしきなり。又などかは、心知らざらむ者こそつゝまめ。右衛門などはいへかし」など仰せらる。右衛門「されどいかでか、走りさきだち侍らむ」などいふも、かたへの人、憎しと聞くらむかし。宮「さまあしうて、かく乗りたらむもかしこかるべき事は。定めたらむさ

まの、やむごとくならむこそよろしからめ」とものしげに思し召したり。馬おり侍るほどの待遠まちどほに苦しきによりてにや」とぞ申しなほす。

(考異) ○賜はせもしてむ 原本賜はせてむとあり。○乗りはて、原本乗りはて、出てとあり。○乗り給ひぬ 原本乗りぬとあり。○珍らかなりや 原本珍らかなるやとあり。以上古本による。○わびて 原本笑ひてとあり。抄本による。○あやしなきか 原本になし。○御住ひ 原本住ひとあり。○聞くらむかし 原本聞くらむと聞ゆとあり。以上古本による。

○出でさせ給ひし夜 中宮の二條の宮へ出でさせ給ひし夜の略。以下、上に「二月朔日のほどに二條の宮へ入らせ給ふ」とある折の記事なり。通釋以降の註に、中宮は一旦内裏へ還御ありて、更に二條の宮へ行啓ありし也とあるは、大なる誤なり。○車の次第 豫定せられたる車の順序。○まづくと乗り騒ぐ 女房達が我先にと争ひ乗ると也。○祭のかへさなどのやうに 祭の歸さ見物などのやうにと也。祭の歸路のやうにと解するは當らず。○たゞさばれ 一向に人は乗り急がば急けと也。○おづから云々 中宮がなり。○押し凝りて 女房達が一團となりてと也。○かうか かはかりなるかの略。車の行事の詞なり。○まだこゝに の下、ありを略けり。○問ひ聞きて 名を尋ねてと也。○今は皆乗り給ひ貴女方はなり。○得選 トクセン。御厨子所の女官なり。采女中より選任する故に名づく。定員三名。そのうち一名は、髪上采女より兼ねたり。○寄せさすれば 車をなり。○御志ありつらむ人 乗せんと志したる人。即ち得選をいふ。○次にも の下、乗せ給へを略けり。○腹ぎたなく 根性わるく、意地わるくの意。○みづし 御厨子所の女官の略。得選をいふ。○しつらひ居させ 御部屋設備成りて居給へりと也。○こゝに呼べ 清少等をなり。○右京 中宮の女房。傳未詳。○小左近 中宮の女房。傳未詳。

わなどいふから乗つた。その次にはほんに御厨子の車ののを難儀がつて、二條の宮に参り着いた。中宮の御輿は疾くお着きになつて、すつかり御住ひの装飾してお出でになつた。中宮が「少納言をこゝに呼べ」と仰しやつたので、右京小左近などいふ若い女房達が、参る人毎に見るけれど居なかつた。女房は車から下りるに随つて、四人づつ御前に参り集つて伺候するに「不思議な。少納言は居ないか。どうしたぞ」と仰しやつたのも知らず、あるだけの人を下りてしまつた後で、やうやうの事で右京小左近に見付けられて「これ程中宮様が仰せられるのに、何でかう遅く参つたのですね」といつて引連れて参ると、何時たりを見ると、何時

詳。作者部類に、散位中原經相女、三條院女房とあるは、別人なるべし。或ははじめこの宮の女房にて、後に三條院の女房となれるか。○なかりけり 清少等はあらざりけりと也。○おる、車よりなり。○おりはて、ぞ の下、さてわが下りたるを補ひて聞かべし。○見つけられて 右京等になり。○かく遅くの下、参り給へるを略けり。○ひきまて 右京等が引連れてと也。○何かと 何や彼やと。○ともかくも申さねば 清少がなり。○わりなし 餘儀なしの意。○さいはて 最終にて、いはゆる湯桶讀なり。○行事する者 世話をする者。こゝにては宮司をいふ。○又などは の下、其許達は黙し居たるを略けり。○心知らざらむ者云々 勝手を知らぬ者こそ遠慮せめと也。○右衛門などは云々 勝手を知らる右衛門などは、乗り騒ぐ者を制しいへかしと也。○右衛門 中宮の女房。傳未詳。○いかでか走りさきだち云々 何とて我勝に争ひ走りて、人に先だつことあるべきかはと也。○かたへの人 傍なる人なり。こゝの「かたへ」は半分の意にあらず。○定めたらむさまの云々 車の順序は規定通りの正しきがよからんと也。○物しけに 氣障りに、不機嫌になどの意。○おり侍るほどの云々 人々の走り先立ちたるは、この少納言が局におりたる間の、待遠に苦しき故にもやあらんと也。○申しなほす 取繕ひて申すと也。

御經のことに、明日渡らせおはしまさむとて、こよひ参りたり。南の院の北面にさしのぞきたれば、高坏たかつかどもに火をともして、二人三人四人、さるべきどち、屏風引き隔てつるもあり。几帳なかに隔てたるもあり。又、さらても集まり居て、衣きぬどもとぢかさね、裳の腰さし、化粧けしょうするさまは、更にもいはず、髪などいふものは、あすより後はありがたげにぞ見ゆる。女鳥寅の時になむ渡らせ給ふべかなる。などか今まで

の間にやうは年來の住居のやうにお住付になつたのやうと思はれて面白。中宮が何てかういゝるに尋ねる程に見えなかつたのかしと仰しやるが、私は何ともかとも申上げないで、一緒に乗つた人が、まるで無茶です。最後の車に乗ります人は、どうして疾くは参られませう。その車も危く乗れさうも御座いませんでしたのを、御厨子が氣の毒がつて譲つてくれたのです。暗う御座いましたのが難儀で御座いましたと笑ひ、申上げると中宮が、それは車の世話する者が、甚だ怪しからぬのである。又何でお前達は黙つて居たのかい。様子を知らなからう。右衛門などは制するがよいなど仰しやる。右衛門が、けれど制しな

参り給はざりつる。扇もたせて尋ね聞ゆる人ありつゝなど告ぐ。さて、まことに寅の時かと、さうぞきだちてあるに、明け過ぎ日もさし出てぬ。西の對の唐庇になむ、さし寄せて乗るべきとて、あるかぎり、渡殿へ行くほどに、まだうひ／＼しきほどなる今参どもは、いとつゝましげなるに、西の對に殿住ませ給へば、宮にもそこにおはしまして、まづ女房、車に乗せさせ給ふを御覽すとて、御簾の中に、宮、淑景舍、三四の君、殿のうへ、その御弟、六所立ちなみておはします。車の左右に、大納言殿三位の中將二所して、簾うちあげ下簾ひきあげて乗せ給ふ。皆うち群れてだにあらば、かくれ所やあらむ。四人づつ書立に隨ひて、それ／＼と呼び立てて、乗せ給ふに、あゆみゆく心ち、いみじうまことにあさましう、顯證なりともよのつねなり。御簾のうち、そこらの御目どもの中に、宮の御前の見ぐるしと御覽せむは、更にわびしきこと限なし。身より汗のあゆれば、繕ひ立てたる髪なども、あがりやすらむと覺ゆ。辛うじて過ぎたれば、車のもとに、いみじうはづかしげに、清げなる御さまどもして、うち笑みて見給ふも、うつゝならず。されど倒れず、そこまではいき著きぬこそ、かしこき顔もなきかと覺ゆれど、皆乗りはてぬれば、引き出でて、二條の大路に榻立てて、物見車のやうにて立てならべたる、いとをかし。人もさ見

るらむかした、心ときめきせらる。四位五位六位など、いみじう多う出て入り、車のもとに來て、つくろひ物いひなどす。

(著異) ○べかなる 原本べかなりとあり。○さて 原本までとあり。以上、古本による。○六所 原本三所とあり。秋香の説による。釋を見よ。○大納言殿 原本大納言とあり。○乗せ給ふに 原本乗せられ奉りとあり。○立てなべ 原本立ちならべとあり。以上古本による。

いからとて、何て我勝に走り先立ちませうかいなどいふも、側におる女房達は、憎いと思つて聞くだらうよ。中宮は、様わるくかや乗つたのもよい事があらうか。規定した通りの立派なのがよからうと仰しやつて、面白からず思召してゐる。そこで自分は「女房達は私が局に下りておます間が待遠に苦しいので、先に乗つたのでせうか」と取繕つて申上げる。

(口釋) 御經供養の事に、中宮は明日積善寺へ行啓なさうといふので、自分は今夜二條の宮に参つた。南院の北面の間を覗いて見ると、高坏などに火をともし、二人三人四人、然るべき女房同志、屏風を仕切つて居るのもあり、几帳を中に隔て、居るものもある。又さう

てなくとも集つてゐて、衣裳など綴ぢ重れ、裳の腰紐を縫ひ、化粧をする様子は勿論、髪などいふものは、明日から以後は無事、明日の支度で夢中だ。女房の一人が「寅の時に行啓なさる筈です。何で今まで参らなかつたのですか。御注文の扇もたせて、貴女をお尋ねなされる人がありました」など告げる。さては本當に寅の時かと思つて身支度をしておるのに、明るくなり過ぎ、日もさし出た。西の對の唐庇に車を寄せて乗る筈とて、あるだけの人が、渡殿へ出て行くまゝに、まだうぶな新参者などは、甚だきまりわるさうなのに、西の對には關白殿がお住ひになるから、中宮も其處にお出でになつて、まづ女房達を車にお乗せなされるのを御覽な

さるといふので、御簾の内に宮、淑景舎三四の君、殿の奥方、その御妹とお六人立並んでお出でなされる。車の左右に、大納言三位中将お二方、車の簾を引上げて、女房をお乗せなさる。皆が一緒に固まつてさへゐるならば、隠れ所もあらうが、四人づつ乗組の書付のまゝに、誰それと呼立てて、お乗せなさるので、歩いてゆく心持は、ひどくほんに情なく、あらはであるといふのも、また一通りな事である。御簾内に數多の御目もある中にも、中宮の御前が見苦しいと御覽なさるのは、格別につらい事が、この上もない。體から汗がにじむので、綺麗に梳り立てた髪なども立あがりもしようかと思はれる。やつこの事をしてしまふと、車の際

枕草子評釋

つ、ならず 正氣なきをいふ。○そこまで 車の所まで也。○かしこき顔もなきか 賢けなる顔したるもなきかと也。○榻たて、云々 中宮の出御をお待受けする爲なり。○さ見るらむ 「さ」は「物見車のやうにて」とあるをさす。○つくろひ 容儀をなり。○物いひなどす の下、古本に「る中に、明のぶの朝臣の心ち、空をあふぎ、胸をそらいたり」とあり。「明のぶ」は明順を見よ。

まづ院の御むかへに、殿をはじめ奉りて、殿上人地下など皆参りぬ。それ渡らせ給ひて後、宮は出でさせ給ふべしとあれば、いと心もとなしと思ふほどに、日さしあがりてぞおはします。御車ごめに十五、四つは尼車、一の御車は唐の御車なり。それに續きて尼の車、しりくちより水晶の珠數、薄墨の袈裟ころもなどいみじくて、簾はあげず、下簾も、薄色の裾すこし濃き、次にたゞの女房の十、櫻の唐衣、薄色の裳、紅をおしわたし、かたりのうは着ども、いみじうなまめかし。日はいとうららかなれど、空は淺綠に霞みわたれるに、女房の装束の匂ひあひて、いみじき織物の、いろ／＼の唐衣などよりも、なまめかしうをかしきこと限なし。關白殿、その御つぎつぎの殿ばら、おはする限もてかしづき奉らせ給ふ、いみじうめでたし。これら見奉りめて騒ぐ。この車どもの二十立て並べたるも、亦をかしと見ゆらむかし。いつしか出でさせ給はむなど待ち聞えさするに、いと久し。いかならむと心もとなく思ふに、辛うじて、采女八人馬に乘せて引き出づめり。青すそ濃の裳、裾帶、領

巾などの風に吹きやられたる、いとをかし。豊前といふ采女は、くすし重雅が知る人なり。蒲萄染の織物の指貫を着たれば、「重雅は色ゆるされにけり」と、山の井の大納言は笑ひ給ふ。皆乗りつゞきて立てるに、今ぞ御輿出でさせ給ふ。めでたしと見奉りつる御有様に、これはくらぶべからざりけり。朝日はなぐとさしあがる程に、なぎの花いと際やかにかゞやきて、御輿の帷子の色、艶などさへぞいみじき。御綱はりて出でさせ給ふ。御輿の帷子のうちゆるぎたるほど、まことに頭の毛など、人のいふは更に虚言ならず。さてのちに髪あしからぬ人も、かこちつべし。あさまじういつくしう、なほいかで、かゝる御前に馴れ仕うまつるらむと、わが身もかしこうぞ覺ゆる。御輿すぎさせ給ふほど、車の榻ども、ひとたびにかきおろしたりつる、また牛どもかけて、御輿のしりにつゞきたる心ちの、めでたう興あるありさま、いふかたなし。

- (考異) ○殿上人地下など 原本殿上と地下とあり。古本による。○ころも 原本きぬとあり。原本の一本による。
- 霞みわたれるに 原本霞みわたるにとあり。○御つぎ／＼の 原本御次のとあり。○めで騒ぐ 原本騒ぐとあり。
- 出でさせ給はむ 原本出でさせ給はむとあり。○いと久し 原本になし。○笑ひ給ふ 原本笑ひ給ひてとあり。
- 見奉りつる 原本見え奉りつるとあり。○なぎの花いときはやかに 原本木の葉のいと花やかにとあり。以上古本による。○髪あしからぬ人 原本髪あしからむ人とあり。詳解による。○一たびに 原本人だまひにとあり。古本による。

に、大層きまりわろい程に、綺麗な様子をして、大納言殿達にこやかに御覽なされるも、上氣して夢を見るやうである。けれども、鹽梅に倒れず、車の際までには到着したのが、氣の利いた顔も無いかと思はれるが、皆乗つてしまつたら、車を引出して、邸前の二條の大路に、榻を置いて、物見車のやうに立て並べたのは、甚だ面白い。人もさう物見車のやうだと見るだらうと、胸騒ぎがされる。四位五位六位など、非常に澤山出はひりし、車の際に来て、様子振つて話しかけなどする。

(口譯) まづ女院の御迎に關白殿を始め奉つて、殿上人地下人など、皆參つた。女院が先へお出ましになつて、後中宮は行啓なさる。

舎とあるので、甚だ待遠いと思ふうちに、日が昇つてから女院は御出になる。お行列は女院の御車と共に十五輛、その内四輛は尼の車で、一の御車は唐車である。それに續いて尼の車は、車の後前より、水晶の珠數、薄墨色の袈裟衣などが見事な、薄紫色の少し下簾も薄紫色の少し下簾もあるが、次に普通の女房の車十輛、櫻の唐衣、薄紫色の裳で、紅の打衣を大抵着て、緑の上着など、甚しくなまめいてゐる。日は甚だ麗らかだけれど、空は淺綠色に霞み渡つてゐるのに、女房の衣裳の色がうつり合つて、立派な織物色の唐衣などよりもあてやうで、趣のある事がない。關白殿、及びその弟の殿達、入らつしやる限り、御もてなし申上げるのが、甚だめで

○院 女院なり。○それ渡らせ「それは女院をさす。○おはします。女院がなり。○御車ごめに御車と共にと也。○四つは尼車。その内四つは尼の乗れる車。○一の御車イチノミクルマ。第一の車。即ち女院の御料なり。○唐の御車。唐庇の車ともいふ。太上天皇、皇后、東宮、准后、親王、又は攝關などの乗用とす。車の屋根は唐風の破風に作り、總體高大にて、上葺庇腰に檳榔の葉を張り、昇降に棧を用ゐる。(附圖参照) ○しりくちより。車の後口より出せるの略。○裾すこし濃き。末濃なるをいふ。この句の下、を懸けたりを略けり。○女房の十。女房の車十の略。○紅をおしわたし。大抵紅なるをいふ。これは打衣の色をいへるならんと思へど、語簡に過ぐ。上に續けて、これをも裳とするはいかゞ。○かとり。縑。堅織の義。地を細密にして、薄く固く織りたる絹なり。生絹をいふといひ、又水色の生絹をいふともいへり。○そのつぎの殿ばら。道隆の弟たる道長等をいふなるべし。○もてかして奉らせ給ふ。女院をなり。○この車ども。中宮の女房の車どもと也。○亦をかして見ゆらむ。女院方にも亦面白しと見ゆらんの略。○いつしか出でさせ給はむ。中宮がなり。○くすし重雅。抄に「典藥頭」とあり。丹波氏。○知る人妻。古へ男女相馴る、を「知る」といへり。○色ゆるされにけり。禁色を聽されたりと也。織物は禁色の一なればいへり。ゆるしの色を見よ。○皆乗りつゞきて。采女達がなり。○御有様に。女院の行粧のなり。○くらぶべからざりけり。比較すべきにあらずと也。甚しく勝れるをいふ。○なきの花。これは菘花輦なり。「なき」は根葱の轉。屋蓋に、菘花の如き金屬の飾あるを以て名づく。安齋隨筆に「菘の花は圓く尖りたる形にて、いはゆる擬寶珠に同じ。云々」。天皇の神事行幸、又は普通行幸の時に乗御す。こゝには中宮乗らせ給へり。(附圖参照) ○御綱張りて。御綱の介を見よ。○頭の毛など。髪の中の堅つなどの略。○髪あしからぬ人も云々。髪の上りては、髪をあしき人は勿論、髪の上り人も歎く事なるべしと也。原本のあしからむとあるにつきて、詳解に「むにては、人ももの

意通ぜず。わが父の本には、ぬと訂したり」といへる、従ふべし。○馴れ仕うまつらむと。の下、思へばを補ひて聞くべし。○榻ども。の下、に文字なくては、意たしかならず。誤脱ならん。○ひとたびに「牛どもだけて」に係る副詞。○かきおろしたりつる。の下、をを略けり。

おはしましつきたれば、大門のもとに、高麗、唐土の樂して獅子、狛犬をどり舞ひ、笙の音、鼓の聲に物もおぼえず。こはいづくの佛の御國などに來にけるにかあらむと、空に響きのぼるやうに覺ゆ。内に入りぬれば、いろくの錦のあげばりに、御簾いと青くてかけ渡し、屏幔など引きたる程、なべてたゞに、この世とおぼえず。御棧敷にさし寄せたれば、またこの殿ばら立ち給ひて、「とくおりよ」との給ふ。乗りつる所だにありつるを、今すこしあかう顯證なるに、大納言殿、いと物々しく清げにて、御下襲のしり。いと長く所せげにて、簾うちあげて「はや」との給ふ。繕ひそへたる髪も、唐衣の中にてふくだみ、怪しうなりたらむ、色の黒さ赤ささへ見わかぬべき程なるが、いとわびしければ、ふとも得おりず。女房まづしりなるこそは、などいふ程に、それも同じ心にや。女房退かせ給へ。かたじけなし」などいふ。差ぢ給ふかな」と笑ひて立ちかへり辛うじておりぬれば、寄りおはして、大納言「むねたかなどに見せて隠しておろせ」と宮の仰せらるればきたるに、思ひぐまなき」とて、引きおろしてゐて參り給ふ。さ聞えさせ給ひつらむ、と思ふもかたじけなし。



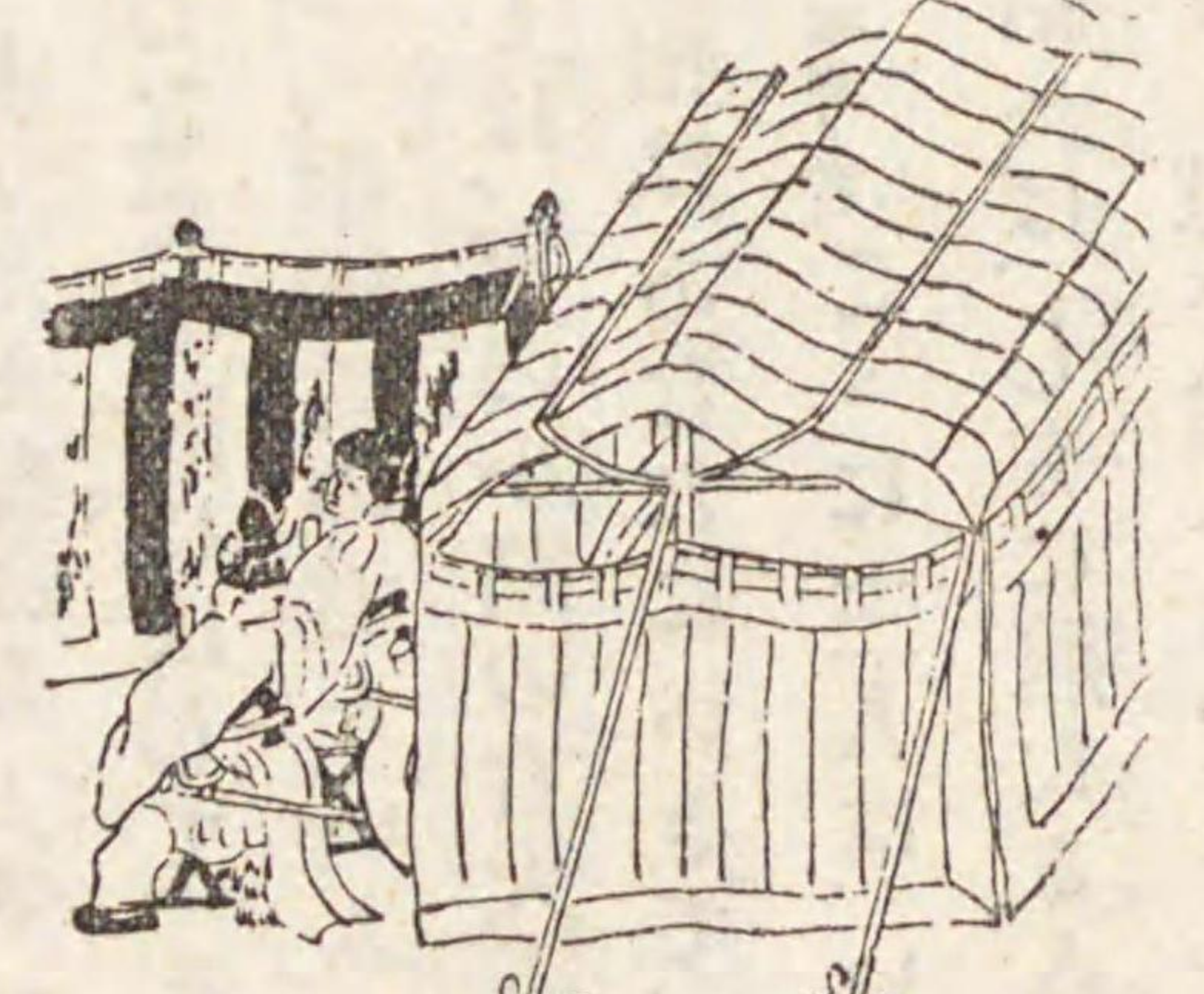
法會 (傳繪師大光圓)

たい。これらの様子をお見上げして、稱讃して騒ぐ。こちらに車ども甘輛立並べたのも、亦あちらから、面白く見えて、何時中宮はお出でになる。上らうなど、お待申上げるにつけて、なにか長い。どうしたのだらうと待遠しく思ふに、やうく馬に乗せて引出すやうである。青裾濃の裳、紺帯、領巾などが風に吹流されたのが甚だ面白。豊前といふ采女は、醫師重正の妻であつた。葡萄染の織物の指貫を禁色を聴された。山の井の大納言は、笑ひなざる。皆が乗續いて車を立て、お出でと、今中宮の御輿は御出でになる。めでたしとお見上げ申立勝つて、これは全く比較にならなかつ

た。朝日が花やかに昇るにつけて、御輿の葱法師が、御まぶしく輝いて、御輿の帷子の色艶などさへ見事だ。御綱を張つてお出になる。御輿の帷子の揺れた具合は、ほんに頭の毛が整つなど人のいふのは更に嘘でない。そして今後は、髪を悪くしない人も、愚痴をこぼす事だらう。膽の潰れる程殿で、どうしてか、お前に馴れて奉仕する事だらうと、やはり我身もかしく思はれる。御輿がお過ぎなさる時に、榻どもに昇おろしてあつた車に、一齊にまた牛を付けて、御輿の後に續いた氣持の、めでたく趣のある有様は、いひ様もない。

略けり。○しりなるこそは、車の後なる人こそは、先つ下り給ふべけれの略。○それも後なる人をさす。○退かせ給へ。大納言に對していふ詞。○かたじけなし。そこにおはしては辱なしの略。○笑ひて立ちかへり。大納言殿がなり。「立ちかへり」とのみにては、語不完なり。脱文あるべし。春註は「よりおはし」に續けて解きたれど、穩かならず。○辛うじて下りぬれば「下りぬれば」は下りんとすればの意。通釋に「おりんとして、いまだおりはてぬなり。次に「ひきおろして云々」とあるにても明かなり。後撰離別の詞書に「いせへまかりける人、とくいなんと心もとなかると聞きて」とあるを、鈴屋翁は「まかりけるとは、既にまかりたるにはあらず、まからんとするをいふと也。これ雅言の格也」といへり。○寄りおはして。大納言殿がなり。○むねたか。藤原致孝か。○思ひぐまなき。の下、事かなを略けり。○さ聞え給ひつらむ。中宮が大納言殿になり。「さ」は「むねたかなどに云々」をさす。

参りたれば、はじめおりける人どもの、物の見えぬべき端に、八人ばかり出て居にけり。一尺よ二尺ばかりの高さの長押のうへにおはします。大納言こゝに立ち隠してゐて参りたり」と申し給へば、喜いづら」とて、几帳のこなたに出でさせ給へり。まだ唐の御衣も奉りながら、おはしますぞいみじき。紅の御衣よろしからむや。中に唐綾の柳の御衣、葡萄染の五重の御衣に、赤色の唐の御衣、地摺の唐のうすも



床胡・幔屏・張揚

(口譯)

積善寺にお著きになると、大門の際で、高麗や唐土の音楽を奏して、獅子や狛犬の

(考異) ○程に。原本程もあり。古本による。○おはしましつき。積善寺になり。○高麗唐土の樂。いはゆる雅樂なり。高麗樂は三韓樂の總稱に用るたり。三韓樂も唐樂も、當時朝廷の式樂となりて、その舞と共に演奏せられたり。○空に響きのぼる云々。音樂の響につれて、身も天上するやうに感ずと也。○あけばり。幄。和名抄に、四聲字苑を引きて、大帳也といへり。幄の字、周禮の註に「四合象宮室曰幄」といひ、漢書禮樂志の註に「帳上四下而覆曰幄」といへり。屋及び四方を幕にて包める幄舎なり。○屏幔。和名抄に「幔。本朝式斑幔讀三萬太良萬久」とあるによれば幔は即ち幕なり。屏は蔽ひ遮る意なれば、添へていふ。清水宣昭が「屏に添へて引わたす幔なるべし」といへるは非。○この世とも覺えず。この人間世界とも思はれずと也。○御棧敷に云々。中宮の御棧敷に、車を寄せたればと也。○この殿ばら。大納言殿、三位の中將等をいふ。○ありつるを。顯證にありつるをの略。○繕ひそへたる髪。髪を入れて添毛したる髪なり。○唐衣の中にてふうぐみ。唐衣の下に髪を着込めたる故に、中にて髪毛のたぐまり亂る、をいふ。○怪しうなりたらむ。の下、に文字を補ひて聞くべし。○色の。上に、その髪のを

舞をし、笙の音、鼓の聲で、上氣して物も覺えない。これは何處の佛の御國に來たのか知らんと、響につれて空に昇るやうに思はれる。門内に入つて見ると、色々の錦の幄舎に、御簾を大層青々とかけ渡し屏帳など引廻した様子、すべて全くこの人間世界と思はれない。中宮の御棧敷に車を寄せると、そこにもまたこの若殿達がお立ちになつて早く下りよと仰しやる。乗つた所できへ差しかつたものを、此處はもう少し明るくあらはであるのに、大納言殿が大層立派で綺麗で、御下襲の裾を、大層長くあたり狭さうに引いて、車の簾をあけて早く下りよと仰しつしやる。袴は添へた鬚の毛も、唐衣の中であつたらう、變髪は毛の黒さ赤さも

のに、象眼かさねたる御裳など奉りたり。物の色、更になべてのに似るべきやうなし。我をばいかゞ見る」と仰せらる。いみじうなむ候ひつる」なども、言に出ててはよのつねにのみこそ、久しうやありつる。それは宮の大夫の、院の御供に來て人に見えぬる、おなじ下襲ながら、宮の御供にあらむ、わろしと人思ひなむとて、こと下襲縫はせ給ひけるほどに、遅きなりけり。いとすき給へりな」とてうち笑はせ給ふ。いとあきらかに晴れたる所は、今少しけざやかにめてたう、御額あげさせ給へる釵子に、御わけめの御髪の、いさゝかよりしてしるく見えさせ給ふなどさへぞ聞えむ方なき。三尺の御几帳一よろひをさしちがへて、こなたの隔にはして、その後には、疊一ひらを、長さまに縁をして、長押の上に敷きて、中納言の君といふは、殿の御叔父の兵衛の督忠君と聞えけるが御女、宰相の君とは、富の小路の右大臣の御孫、それ二人ぞ上に居て見給ふ。御覽じわたして、宰相はあなたにいきて、うへ人どもの居たる所にて見よ」と仰せらるゝに、心得て、宰相の君、こゝに三人は、いとよく見侍りぬべし」と申せば、寫さば」とて召し上げさせ給へば、しもに居たる人々殿上許さるゝ、小舎人なめり」と笑へど、下ふこは笑はせむと思ひ給へるか」といへば、又下ふ人「うまさへの程ぞ」などいへど、そこに入り居て見るは、いとおもたゞし。

見分けられさうな明るさであるが、甚だつらいので、一寸下り得ない。うまづ後に乗つてゐる方こそお下りなさい、などいふまいに、その後なる女房も、同じ心に羞かしいのかしら、大納言殿に「お退き下さい。勿體ない、などいふ。すると大納言殿は「お羞かしがりなさるれ」と笑つて立戻つて行かれるので、漸くの事で車から下りかけると、又近寄つて來られて「中宮が、むれたかなどに見せないで下るせ」と仰になるから來たのに、深い考のない事よ」と仰しやつて、引下ろして連れて參られる。中宮がさう仰せられたらうと思ふのも、勿體ない。

(口譯) 中宮の御前に參ると先に車から下りた女房達が、見物の出來

かゝる事などをみづからいふは、ふきがたりにもあり、又、君の御爲にもかるがるしう、かばかりの人をさへ思しけむなど、おのづから物しり、世の中もどきなどする人は、あいなく畏き御事にかゝりて、かたじけなけれど、ある事などは、又いかゞは、まことに身の程に過ぎたる事もありぬべし。

(考異) ○一尺よ 原本一尺とあり。活本、古本による。○物の 原本織物のとあり。活本、古本による。○なべてのに 原本なべてとあり。抄本、古本による。○宮の 原本殿のとあり。百十段にも、宮の大夫とあり。従ふべし。○こと下襲 原本ことに下襲とあり。以上古本による。○すき給へりなとて 原本すき給へりなどとあり。活本による。○笑はせ給ふ 原本笑はせ給へるとあり。古本による。○忠君 原本た、きよとあり。旁本による。○右大臣 原本左大臣とあり。○見給ふ 原本見え給ふとあり。以上古本による。○いきて 原本おてとあり。抄本による。○所にて 原本所いきてとあり。○三人は 原本三人とあり。○笑へど 原本になし。○思ひ給へるか 原本思へるかとあり。以上古本による。○などいへど 原本などいへばとあり。活本、古本による。○ある事 原本ある事とあり。活本、古本による。○身の程に 原本身の程とあり。抄本による。

○參りたれば 宮の御前になり。○はじめおりける人 先に車より下りける人なり。○物の見えぬべき端に 供養の儀式などの見えさうなる端の方にと也。○一尺よ 正しくは一尺あまりと訓む。源氏賢木に「十よ人ばかり」とあるを、細流抄に、十人あまりばかりと讀むなりと見ゆ。○おはします 宮がなり。○るて參り 清少等をなり。○申し給へば 大納言殿のなり。○唐の御衣 唐衣をいふ。榮華物語疑の卷に「大宮に唐の御衣の料にそへさせ給へり」。○紅の御衣 紅の打衣。○よろしからむや 一通りの物ならんやとはと也。○唐綾の柳の御衣 唐綾の重袷(內衣)なり。「柳」は表白裏青なるをいふ。○えひ

父の兵衛の督忠君と申上げた方の御娘、宰相の君といふのは富小路の右大臣の御孫、この二人の上藤が、長押上の座に居て御覽になる。中宮はその邊をお見渡しになつて「宰相はあちらへ往つて、殿上人達の居所で見なさい」と仰になると、宰相は中宮の清少を上げて見せたいといふ御意なのを察して、「こゝで三人は、十分よく見えます」と申上げると、「それならば」と仰しやうつて、自分をお召上げになると、長押下に居た女房達が、殿上を許された小舎人のやうだと笑ふけれど、他の女房が「これは笑はせようと思ひなされるのか」といふと、今一人の女房が「馬前の男ぐらゐの所ぞ」などいふが、長押上には、ぼつて見るのは、大層面目がある。かうした

事などを、自分でいふのは、自家宣傳であり、又御主人の御爲にも軽々しく、これ位の人までも時機かして御愛しなされたのかなど、自然物事を心得て、世の中の事は彼是非難などする人は、長多し中宮の御事に關して、愛嬌なくとなく申上げるのが勿體ないけれど、事實ある事などは、又何で書かずに置かれよう。いかにも我が身の程に過ぎた事もあつたらう。

(口譯) 女院の御機敷や方々の機敷などを見渡し、たのが興がある。關白殿はまづ女院の御機敷に参られて、暫くしてこちらに御出でなされた。大納言が二方お供をし、三位中將は近衛の陣にお立ちなされたまゝ、参られ、弓箭を負つて、大層似合はし

やうになりてはと也。○ある事 事實ある事なり。○又いかゞは の下、書かざらんを略けり。院の御機敷、所々の機敷ども見渡したるめてたし。殿はまづ院の御機敷に参り給ひてしばしありて、こゝに参り給へり。大納言二所。三位の中將は、陣に仕うまつりけるまゝにて、調度を負ひて、いとつきづくしうをかしうておはす。殿上人、四位五位、こちたうち連れて、御供に侍ひなみ居たり。入らせ給ひて見奉らせ給ふに、女房あるかぎり、裳、唐衣、御匣殿まで着給へり。殿のうへは、裳のうへに小袿をぞ着給へる。繪にかきたるやうなる御さまもかな。今いらいけふはとな申し給ひそ。三四の君、宮の御裳ぬがせ給へ。この中の主君には、御前こそおはしませ。御機敷の前に陣を居るさせ給へるは、おぼるけのことか」とてうち泣かせ給ふ。げにと、見る人も涙ぐましきに、赤色に櫻の五重の唐衣を着たるを御覽じて、法服ひとくたり足らざりつるを、俄に惑ひしつるに、これをこそ借り申すべかりけれ。さらずばもし又、さやうの物を切りしづめたるにか」との給はするに、又笑ひぬ。大納言殿少ししぞき居給へるが、聞き給ひて、「清僧都のにやあらむ」との給ふ。一言として、をかしからぬ事ぞなきや。僧都の君、赤のうすものの御衣、紫の御袈裟いと薄き色の御衣ども、指貫着給ひて、頭つきの青うつくしげに、地藏菩薩の御

様にて、女房にまじりありき給ふも、いとをかし。僧綱の中に、威儀具足してもおはしまさで、見ぐるしう女房の中に「など笑ふ。父の大納言殿の御前より松君おて奉る。蒲萄染の織物の直衣、濃き綾のうちたる、紅梅の織物など着給へり。御供に例の四位五位、いと多かり。御機敷にて、女房の中にいだき入れ奉る。何事のあやまちなか、泣きの、しり給ふさへ、いとほえだ、し。

(考異) ○陣に仕うまつり 原本陣近う参りとあり。四本による。○いらい 原本いらへとあり。必ず誤とみゆれば改む。○あゝ色に 原本に文字なし。古本による。○さらずば 原本さらばとあり。四本による。○しづめ給へる 原本しらめたるにとあり。別本による。○御袈裟 原本御の字なし。古本、抄本による。○かしらつきの青うつくしげに地藏 原本になし。○殿の御前 原本殿御前とあり。以上古本による。○御供に 原本になし。古本、抄本による。○御機敷にて 原本で文字なし。抄本による。○いだき 原本になし。古本、抄本による。○あやま

ち 原本あやまりとあり。抄本による。○こゝに 中宮の御座所をさす。○二所 の下、参らせ給ひを略けり。「二所」は伊周、道頼をいふか。○陣に仕うまつり云々 近衛の陣屋に著きたる扮装のまゝにてと也。○調度 テウド。道具をいふ。武官の調度は弓箭なり。○負ひて 胡籬を負へる也。但「調度を負ひて」といへば、弓箭を帶したるをいふ。○御供に 三位中將のなり。○入らせ給ひて 關白殿がなり。○今いらいけふは云々 春註に、今より以來、今日はかく窮屈なる目見つと申し給ふなど也。各裳唐衣にて行儀正しき故也」とあるに従ふ。○三四の君 三の君(今の御匣殿)四の君(のちの御匣殿)。○この中の主君云々 「宮の御前こそ、この中の主君にはおはしませ」を、前後にいへり。「主君」はスタンと讀む。○陣をすゑさせ この陣は近衛の陣

く、見よてお出でなさる。殿上人や四位五位が、仰山に連立つて、御供をして並んで居た。殿が中宮の御方へ入らせられて御覽なさるに、女房はあるだけ悉く裳唐衣を着、御匣殿までお着なされた。殿の北の方は、裳のうへに小袿をお着なされた。殿は御覽になつて、「繪にかいたやうな美しい御様子であるよ。今後今日など申されるな。三四の君達よ、中宮の御裳をお脱がせ申上げなさい。この中の御主人としては、中宮様がお出でなさる。御棧敷の前に近衛の陣屋をお立てなされたのは、並大抵の事か」と仰しやつて、お泣きなされた。尤もな事と、見る人も涙が催されるのに自分が赤色に五重の唐衣を着てゐるのを御覽になつて、殿は

なり。すべて行幸啓には、近衛府警護の爲に供奉して、御座所に陣を立つ。○おほろけの事か 一通りの事かはと也。「か」は反語。○赤色に櫻の五重の唐衣 赤色の地に、櫻の模様を五重の綵絲にて織出したる唐衣なり。赤色を赤色の袿、櫻を櫻重と解ける説は非なり。「赤色の唐衣」なればこそ、下にも「法服に借り申す」とも、「切しめたる」ともいひたるなれ。さて赤色を唐衣の地色とする時は、櫻は櫻重（表白裏赤）にあらざる事知るべし。故にこれを織出しの模様とするを至當とす。織物に五重三重などいふは、模様を織出したる綵絲をいふ也。○着たるを わが着たるをと也。○法服ひとくだり 僧衣一領と也。法服は所謂ころも也。○俄に 俄にてと也。○これをこそ 清少の赤色の唐衣をさす。○さらすは 法服ならずばと也。○さやうの物 法服をさす。○切りしめたるにか 切縮めて唐衣に縫ひたるにかの略。○清僧都の云々 清僧都の衣の事ならんかの略。關白殿の詞につきて戯れていへる也。「清」は氏の清原を略して呼ぶ。○僧都の君 隆圓のこと。○赤のうす物の御衣 上に着たる法服なり。○いと薄き色の御衣 相ならん。○地藏菩薩 その體、剃髮の僧形なり。なほ地藏を見よ。○威儀具足して威儀を整へてとなり。「威儀」は行住坐臥の四つあり。居常の動作禮にかなひ、品位おのづから具るをいふ。○女房の中に の下、まじり居給ふよを略けり。○濃き綾のうちたる 打衣なり。下に、の辭を略けり。○紅梅の織物 相なるべし。○例の 例の如くの意。○何事のあやまちにか の下、あらむを略けり。

事始りて、一切經を、蓮の花のあかき、一花づつに入れて、僧俗、上達部、殿上人、地下六位、何くれまでも渡る、いみじうたふとし。大行道、導師まゝり回向、しばし待ちて舞ひなどする、日ぐらし見るに、目もたゆくくるし。うちの御使に、五位

の藏人参りたり 御棧敷の前に、あぐら立てて居たるなど、げにぞなほめてたき。夜さりつかた、式部の承則理参りたり。「やがて夜さり入らせ給ふべし。御供に侍へ」と、宣旨侍りつ」として歸りも参らず。宮はなほ、「歸りて後に」との給はすれども、又藏人の辨参りて、殿にも御消息あれば、「只仰のまゝ」とて入らせ給ひなむとす。院の御棧敷より、「ちかの鹽竈」などいふ御消息、をかき物などもて参り通ひたるなどもめてたし。事はてて、院還らせ給ふ。院司、上達部など、このたびは、かたへぞ仕うまつり給ひける。

「法服が一領足らなかつたのを、俄の事でお借り申せばよかつた。それとも又、しそんな法服のやうな物を切縮めて作られたか」と仰しやるので、又笑つた。大納言殿は少し後去つて居られたが、これをお聞きになつて、「清僧都の衣の事です」と仰しやる。事として面白くない事はないよ。隆圓僧都の君は、赤色の薄物の御衣、紫の御袈裟に、大層薄い色の袖の御衣などに指貫をおはきなされて、剃髪した頭付が青く美しげに、地藏菩薩の御容體で、女房の中にまじつてお歩きなさるのも、甚だ面白い。僧綱の中に威儀を整へてもお出でなさらないで、見苦しく女房の中にもまじつてお歩きなさる事よなどいつて、女房が笑ふ。大納言殿

（考異） ○苦し 原本苦しうとあり。○などいふ 原本などやうとあり。古本による。
 ○事はじまりて 供養の法事の始りてと也。○蓮の花 蓮の造花なり。○一花づつに入れて 一花づつに經一卷を入れてと也。○大行道 ダイギヤウダウ。法會の際、衆僧が列を正して、經を讀みながら、佛の周圍を轉回する儀式をいふ。「大行道」の下、ありを補ひて聞くべし。されど文理完からず。四條本には、大行道の三字なく、「導師参り、かうはじまりて舞などする」と續けたり。○廻向しばし待ちて 廻向ありそをしばし待ちてと也。○廻向 法事の終に回向文を唱ふるをいふ。もと己れの修めたる諸善萬行の功德を轉回して、一切衆生に手向け、佛道を成ずる義。天台四教義に、「廻向事向理、廻向因果、廻向功德、施衆生、事理和融、入法界、故名廻向」と。○舞などする の下、をを略けり。○五位の藏人 從五位上藤原登明ならん。○あぐら 胡床。上座の義。狩谷掖齋いふ「古にいふあぐらは床子、整の類にて、胡床にあらず。源語、榮華物語、枕草子などに見ゆるは交牀にして、後世の床几の類なり。

の御機敷から、松君をお連れ申上げる。松君は葡萄酒の織物の直衣に、濃い綾の打つた袖や、紅梅の織物の單などお着なされた。御供にいつもの四位五位が、大層多くついてゐる。御機敷で女房の中に松君をお抱き入れ申上げる。何事の鹿相でか、松君が泣いてられるのも、ひどく榮えて聞える。

(口譯) 法事が始つて、一切經を蓮の花の赤いのに入つて、僧俗上達部殿上人、地下の六位、何や彼やに至るまで持つて渡るの、非常に尊い。大行道があり、導師が待つて回向があり、暫く待つて舞樂などする。終日見るに、目もだるく苦しい。主上のお使に五位の藏人が参つた。中宮の御機敷の前に胡床を

すみて居たのなどは、ほんにやはり結構だ。夜になる時分に式部丞則理が参つた。中宮はすぐ、夜になつて参内なさる筈だ。御供に参れと勅命が御座います。と往かない。中宮はやはり、二條の宮に一日歸つてから後に参内しよう」と仰になるけれども、又藏人辨が参つて、殿にもそれに就いての御便りがあるのだ。殿も「只仰のまゝに参内なされ」とお勤め申して、中宮は参内なさうとする。女院の御機敷から「ちかひの鹽竈」などいふお便りや、果物やらの興ある物などを持つて来て、御文通のあつたなどもめてた。法事がすんで、女院がお還啓になる。院司上達部など、今度は半分ばかりお供を申上げられた。

云々。○則理 源氏。この時六位藏人たり。勅物に、正月十三日式部丞、正曆四年藏人。(十九)とあり。大納言重光の四男。尾張但馬の守となる。○参りたり 御使になり。○入らせ給ふべし云々 中宮には内に歸り入らせ給ふべし、汝はそのまゝ、御供に祇候せよと也。○歸りて後にこそ 二條の宮にいまづ立歸りて後にこそ参るべけれの略。○藏人の辨 右少辨高階信順なり。成忠の子にて、明順の弟。正曆四年十一月五位藏人、同六年五月從四位下に叙せらる。○殿にも御消息あれば 中宮の参内を取計ふやうにと、關白殿にも仰ありたるをいふ。○只仰のまゝ、の下、参らるべしを略けり。○いらせ給ひなむ 中宮がなり。○ちかの鹽竈 女院の中宮と近くおはしながら、御對面なかりしことを、古歌の句を引きて擬へ宣へる也。續後撰集戀二、詠者未詳「みちのくの千賀の鹽がま近ながらからきは人に逢はぬなりけり」。續後撰にはあれど、古歌なり。○をかき物 果物などなるべし。○院司 キンヅカサ。女院の廳の官吏。○かたへ かたへはを見よ。○仕うまつり 御供をなり。

宮は内へ入らせ給ひぬるも知らず、女房の從者どもは、二條の宮にぞおはしまさむとて、そこに皆いき居て、待てどく見えぬほどに、夜いたう更けぬ。内には宿直物もて來なむと待つに、きよく見えず。あざやかなる衣の身にもつかぬを着て、寒きまゝにくみ腹立てどかひなし。つとめてきたるを、「いかにかく心なきぞ」などいへど、のぶることもしはいはれたり。又の日雨降りたるを、殿は「これになむ、わが宿世は見え侍りぬる。いかゞ御覽する」と聞えさせ給ふ。御心おちることわりなり。

(考異) ○もてこなむ 原本もて來らむとあり。古本によら。○いへどのぶること 原本いへばとなふることあり。活本による。

○みえぬ程に 各の主人達がなり。○内には云々 宮中にては、女房達は從者が宿直物を持來るならんと待つうちにと也。○きよく 俗のサツバリに當る。○あざやかなる衣の云々 新しい晴の衣の身にも馴染まぬのを着てと也。○にくみ腹立てど 從者をなり。○きたるを 從者がなり。○のぶること 云々 從者がいひわけすることも、さも尤もいはれたり也。「のぶる」は陳ぶるの意。○これになむ云々 法會の當日は晴天にて、翌日に雨降るといふに、わが宿世は善業を修めたりし事の知らると也。○御心おちる 御安堵、御安心。

本文は正曆五年二月の記事で、淑景舍中宮御對顔(七十段)の一年前の事である。(中宮十九、道隆四十二、うへ未詳、伊周廿一、隆家十六、道賴廿四、隆圓十五、松君二、清少廿九、卅)

この積善寺供養の十三日ばかり前、大江匡衡が書いた、爲關白内大臣請以積善寺爲御願寺上狀だらう。

右茲寺、先公入道太政大臣(兼家)在世之日、ト東郊吉田野、所建立也。當爾之時、怪異類示既知此地之不宣結構、不幾遂遭所天之長逝、臨命之間所誠造寺之事爲先、因茲尋與福壽寺之例、移土木於他所、逼法興院之傍、混風流於同居、斯乃一懷先公起居之難忘、一取微臣往返之不遠也、云々。(本朝文粹)

これによると、道隆の父兼家は、最初洛東吉田野に、積善寺を經營したのであつた。然るに住邸の二條堀川の院に、物の怪が盛に活躍したので、病氣となり、東三條院に引越して、もとの二條院を寺にした。これが法興院で、正曆元年五月の事である。兼家は間もなく薨去になつたが、法興院は出來上つて、正曆

二年七月に、その供養があつた。こんな譯で、積善寺の方は、造りさしたま、であつたのを、道隆は遺憾に思つて、法興院中に、積善寺の建物を持込むことを計畫し、この正暦五年二月に落成に及んだのである。その十七日に勅願寺の請願が濟んで、特に書寫功成つた一切經の供養を、その二十日に行はれたのである。扶桑略記に、

二月廿日、關白道隆供養積善寺、安置金色丈六毗盧遮那佛像、脇侍釋迦藥師梵王帝釋四天王各一軀、圖繪釋迦一萬鉢、書寫大小乘妙典、先公入道大相國以忠事君、以信歸佛、即卜勝地以立道場、積善寺是也、草創後二三年間、牆壁先成不日之功、堂閣始締、如雲之構、豈圖大厦之基、未半、厚夜之駕早催、爰有精舍稱法興院、斯乃先公閑放之地、不日所改成也、林鶯百轉、暗添歌曲、岸柳千條、漫助舞腰、云々。

さて廿日の供養に、朔日から中宮の御退出は、あまり急ぎ過ぎるやうだが、それはこの佛事の爲に、三七日の精進をなされたのではあるまいか。即ち退出前一日から數へると、供養當日まで、キチ／＼廿一日間になる。

二條の宮は中宮御所として、一昨年十一月に落成した新御所である。所在地は、道隆の東三條南院の北隣で、中は廊で、御殿が續いてゐたらしい。行啓の翌朝、目が覺めて見れば、禁中のと、何の相違もないやうに、部屋の裝飾が出来てゐるから驚く。中宮御座の象徴たる獅子狛犬まで、チヨコナンとしてゐる。この手廻しのい、事が、ひどく感興を惹いたと見えて、下文にも「しつらひ居させ給ひけり」、「いつのまに年頃の住居のさまに」など反復驚歎してゐる。御殿は「け近くをかしけなる」だから、極めて手輕な氣の利いた建物と見える。もと／＼小家を取拂つて新築したばかりの處なので、大邸宅に相應した庭木がない。この時代には庭木庭石は、さびのあるのを喜んで、わざ／＼舊物を買集めた位のものだ。いつそ賑やかにと、その南階の東に、造花の櫻を栽ゑた。

(口譯) 中宮は參内なされたのも知らず、女房の從者共は、二條の宮に還啓なさるだらうと思つて居て、其處に皆往つて居て、待つて見ぬうちに、夜は半分更けた。また禁中の方では、女房達は從者が宿直物を持つてくるだらうと思つて待つて居た。さつぱり見えぬ。新しい晴着の身に、馴染まぬのを着て、寒いまゝに、從者のこのぬを惜がり立腹するけれど、何の詮もない。翌朝從者が禁中に来たのを、何でかう氣が利かないぞ、などいふが、從者共の言譯する事も、さうもであつた。翌日雨の降つたのを、殿は「この雨の昨日降らないので、わが果報は見えました。何と御覽なさるか」と、中宮に申し上げられる。さう御安堵なさるの

は、尤もである。

南院から父の殿が、中宮に御面會に參られる。これを里人に覗かせたいのは、感激の餘りからである。女房達を批評された道隆の詞は、圓滿のうち、中宮の御爲に、訓誡の意を寓せた、頗る老婆親切な、紳士的なものである。一體平女房は、諸大夫や受領などの娘だから、論はないが、上臈方は、皆歴々の名家の娘である。たまには寡婦住から花を咲かせに出るのもあらうが、そんなのばかりではない。それが何で出るかといふに、その御主人たる后妃の父兄は、大抵攝關なり、大臣なり、族長なりだから、その絶對權を使用して、徵發するのである。されば、娘がその指名に遇つたとて、大に憤懣した參議殿もあつた。「皆家々の娘ぞかし」で、家に居れば、何不足ない、立派なお姫様である。よく勞はつて使はねばならぬ事情が、特に伏在して居るではないか。さて生真じめな訓誡から、忽ち散樂言に一轉した、突梯の味ひも面白い。當時は隨身など賜はるとしても、その衣食の賄ひは、主人持であつた。女房達も頂戴物が俸給であつた。道隆は親の事だから、中宮からは大した獻上物こそあらうが、着古しなど上げる筈がない。それを永年奉公しても着古し一つ下さらぬとは、女房並に身分を下けた言方で、そこに滑稽味が湧いてくる。

式部丞勅使の條は、御親子間の揖讓に、いはれぬ美しい情味がある。常ならば女房の取次ぐべき主上の御文を、折柄居合はせた伊周から、父の殿の手を経て、中宮に差上げる。それにも道隆の散樂言は附いて廻つて、「いとゆかしき御文かな」など、開けても見たいやうな事をいつて、實はそんな失禮な眞似はしない。中宮は又その御文をさし置いて、やはり父君のおあしらひを勤められる。これを用意あり難しと、清少は贊めちぎつてゐる。簾下からさし出した茵は勅使の料で、女房三四人が几帳際に出たのは、勅使款待の爲である。蓋し勅使は御文の御返事を待つてゐるのである。氣を利かせて、道隆は祿の事にかこつけて、その座を外す。そこで始めて中宮は御返事を認める段取になる。御返書の紅梅の薄様が、

御召の紅梅と映り合つた具合がい、といふのは、手紙には同色の配合を喜ぶ慣習からだらう。この點に心付いたのは、自分一人のやうな事をいつて、他の者を見縊つてゐるのは、この人の悪い癖だ。

中宮への勅使に、その祿を關白殿から出すのは特別の事で、中宮の御父として、娘の特寵を蒙る謝意を表し、勅使の勞を憐れられたのである。定例の女裝束の外に、更に紅梅の細長をはずんだことが、この消息を語つてゐる。かういふ勅使に勸盃は、例の事だ。

君達とは、大姫君たる中宮を除いた、他の姫君達をさしたのである。中、姫君は必ず第二女の稱だから、これは淑景舎原子の事である。諸註、大鏡や榮華物語等に、四の君を御匣殿とあるのを見て、この「三の御前は御匣殿なり」を疑つたのは、四の君がこの時、まだほんの小娘であつた事を心付かぬ謬見である。當時の御匣殿には、本來なら、年嵩な中の君が適任だが、今は東宮の后がねてましますから、餘儀なくさし次の三の君が就任された事を知るがよい。それも敦道親王に縁邊が定つてから、四の君が後任に乘出されたのである。是等の君達の外に、北の方が毎日お見えでは、全くお前は賑やかだ。

「雨降らば萎みなむかし」は、造花撤去及びそれに隨伴した波瀾の伏線である。かう思つたのは、二日のまだ曇つてゐた時の事だらう。そのうち折々雨が、つて、三日の晝頃まで降つた。造花撤去の一節は、「雨のよる降りたるつとめて」とあるので、三日の朝の出来事と斷ずる。

白樂天は楊貴妃の泣顔を、梨花の雨と見立てたが、雨に遭つた造花では、全くお話にならぬ。夜前當直だつた清少は、こんな事を思つて、咬いてゐると、花盗人の事件が、眼前で突發した。相手が下衆なので、話は露骨だ。手狭の御殿だから、忽ち中宮のお耳にはひる。

清少が事實を隠蔽して、「春風にして侍る」など、虚偽の申立をしたのは、關白殿の折角の御用意を無にすまいの、殊勝な心掛からだらう。然るに中宮は妙にお拗ねなさる。關白殿はわざと吃驚したりなど、

空とぼけて、攻撃の火の手を、此方に向けてくる。正當防衛で、據なく一寸底を割ると、狡猾にも一切を笑ひ消して、道隆は胡麻化された。「宰相と其許との中」と、道隆の許可した意味は、この二人が秀でた才女といふのみではあるまい。いぎたない若者達とちがひ、相應に年嵩で目敏い故と思はれる。

春風の頓作は、大したものではない。却て貫之の「今は山田も」の歌を引用して、かごとを風におほせた清少を揶揄された、中宮の御機轉の方が、すつと手である。この邊一座の會話に、極めて香氣さうな氣分が漂つてゐる。

「人の所にかゝる痴者の」と、残念がられたのは、あらゆる召使を精選されてゐる口吻で、何不足ない貴紳の家の不足は、よい奉公人のない位のものだつた。清少に看破されたことなどを、反復口惜しがつてゐる、その太平無事さ加減も、道隆の福徳圓滿な境遇を思はせる。

清少が八九日に退出したのは、例の當日の服裝などの準備の爲であつた。「今少し近うなして」は、少しでもおそばに置きたい中宮の思召と拜察する。然し「かゝる事に罷つれば、えといめさせ給はず」であつた。文集の句を活用しての應酬は、そのハイカラ振に驚かされるが、出来榮は、さう大したものではない。この人達の間では、尋常茶飯事であつた。

「出でさせ給ひし夜」の條は、立返つて、二月朔日の宮中御退出の夜の出来事を叙したのである。車は四人が定員だから、下る、に隨ひて參るのも、やはり四人づつな譯である。上臈は前車に、下臈は後車に乗ることはいふまでもない。それを我勝に乗込んだ混亂状態は、若い勢にまかせたものである。若くもおし上げられた人や、おとなだつ者、また年嵩な者は、勢ひそのお仲間にはなれない。そこで一寸旋毛を曲けて大に拗ねたものだ。それがなかく、皮肉で、しんねり強い。いはく「さばまづ志ありつらむ人を乗せ給ひて次にも」、いは、「最はての車に侍らむ人は、いかでか疾く參り侍らむ」——御づ

しがいとほしがりて譲り侍りつる、いはく「いかで走り先立ち侍らむ」など、甚だ手きびしい。されば宮司も「けしからず腹汚く」と吐き、清少も「憎しと聞くらむ」と思つてゐる。蓋し婦人氣質殊に女房氣質の、暗い半面の暴露である。「火も暗き」は、御厨子の車あたりはお行列の末なので、松明の数も少い爲である。

流石に中宮は貴人であらせられるから、秩序の紊亂は、何にしてもお嫌ひだ。この無秩序な乗車の一條は、單なる挿話のやうだが、實は次條の儀式だつた晴の車立を叙する前提となり、對映となる。

北面は陰の間だから、南の院でも、こゝが女房の支度部屋となつた。几帳や屏風の陰では、裁縫やらお化粧やらで大騒ぎだ。着物を綴付けるのは、行文を揃へて、おめらせ具合のいゝやうにする爲、裳の腰を刺すのは、新調のに取換へる爲だらう。寅の刻のお成なりでは、間が無いので、その夜は一睡も出来な

い。
中宮をはじめ御一家總出の御檢分、そのうへ、伊周、隆家お二方が世話係では、車に乗るのも大變だ。例の四人つつ呼立てられて、御前に入る。全く顯證の極である。これが豫定の寅の刻ならまだしも、なまじ刻限が延引して明るいだけ、始末にいけない。「されど倒れず、そこまでは往き着きぬる」の困惑し切つた叙事は、決して誇張ではあるまい。

道隆は、まづ諸卿を従へて、女院お迎の爲、その御所に參上した。自分の妹ではあるが、主上の御母儀で、隱然たる大勢力を把持して居られるから、敬意を表する爲であつた。二條の宮までお供を申し、それから中宮女院打揃つての、積善寺詣となつた。道長がこの同時二回の異なる供奉に、下襲の着換をしたのは、中宮の仰しやる通り、甚だお洒落なものであつた。當時でも珍しいと見えた。この物好きは、前々からの計畫ではなかつたらしい。急な思付と見える。そこで裁縫が間に合はず、供奉の參着が遅れ

る失態を來した。外の役人ならとにかく、宮の大夫だから、それが來ぬのに御發聲もならぬので、據なく待合はせる。二條の大路では、女房達の車が先刻から待あぐんでゐる。

女院のお側には、昔の上誦女房などが、同じく法體して伺候してゐるのである。尼車の事だから、裝飾が無論派手ではない。水晶の數珠を出したのも通常の慣例で、殊なる趣向でもない。女房達とても、比較的ジミな扮装である。けれども折柄の春の日ざしは、それをも美しく映えさせる。

と、かう譽上げて置いて、まして派手に飾つた自分達の車が、立派に見えぬ筈はないことを暗證してゐる。「これを見奉りてめで騒ぐ」、「またをかしと見るらむかし」と、自他を交錯させた叙法も面白い。この女院一行の車と女房車とが卅五臺、二條の大路にズラリと並んだ、きら／＼しい光景は、やがて中宮出御の場面の展開さるべき背景となつてゐる。

采女の乗馬姿は、まさに中宮の行啓であることを直覺させる。青末濃の清楚な裳、ひらく／＼する領巾襟帶、清少の何時も喜ぶ所である。道頼の散樂言は親譲りである。この洒落は、豊前をその男の名で呼んだのが可笑しいのみではない。一體典樂頭などは、絶対に織物など聽される身分でない。それを妻の豊前が、采女装束で着たのを見て、重雅は色聽されたと、豊前を重雅にまで擴張した點に、面白味が生ずるのである。

御輦の出御を、まづ朝日に映する菘花から叙し、次に帷の光彩を述べ、次にその動搖を描いたのは自然である。層一層漸一漸、目前に近づいてくる光景が浮動する。帷のゆらぎは、御輦が咫尺に迫つたことを象徴するもので、平素奉仕の身でも、かう威儀莊重な典儀を拜見すると、殆ど上氣してしまふ。そしてつく／＼奉仕の光榮を感じることは、形の通りである。髪の毛の詮義は、この際何だか餘裕があり過ぎるやうだ。恐多い御輦に車を遣り續けて往く事すら、我ながらめでたく面白い。

法興院は二條の大路に面して、その南大門があつたらしい。大門際の幄舎や屏幔内では、狛唐の左右樂の吹奏演奏がある。極樂浄土では、行樹の風も徳池の波も、微妙の音楽をかなでるといふ。さればこも極樂の佛地だ。道長が法成寺建立の時、「いかで御堂の草木になりしかな」と、士人が希つたのも、寺域を佛地と観するからであつた。その頃の人の崇佛思想は、一面から見れば、頗る旺盛で、

そこへに住む某聖は、庵よりいづる事もせられねど、後世の責を思へばとて、上り参らせたりけるに、關白殿(頼通)の参らせ給ひて、雜人共を拂ひのしるに、これこそは一人におはしますめれと見奉るに、入道殿(道長)の御前に居させ給へば、尙勝らせ給ふなりけりと見奉る程に、また行幸なりて亂聲し、待受け奉らせ給ふさま、御輿の入れ給ふ程など見奉りつる、殿達の畏り申させ給へば、尙國王こそ日本第一の事なりけれと思ふに、おりおはしまして、阿彌陀堂の中尊の御前にいひなさせ給ひて、拜み申させ給ひしに、尙々佛こそなくはおはしまして、この會の庭に賢く結縁し申して、道心なむいと熟し侍りぬる。(大鏡)

車が棧敷前に著くと、乗車の際と同様の葛藤が反復される。伊周の口から、中宮の辱い思召を承つて、お手敷をかけた自分等の淺慮を悔いる。致孝は、その名前を呼付けにしてゐる所を見ると、地下の下衆か、或は新參の六位の藏人か。とにかく宰相の君の甥だから、特に近く出入して居たのだらう。

さて宮のお目通りになる。こゝで始めて宮の御服装を叙する機會を得た。赤、葡萄色、柳、白、紅と、比較的強烈な衣色に、象眼の精緻な裳は、うつりが至極い。その染色のあがりか又格別、「我をばいが見る」は、聊か御自讃の體である。御髮毛が、一寸釵子のさし具合で、四分六位に分け目の片寄つた御様子、「聞えむ方なし」と喜んでゐる。後世の乙とか意氣とかいふ氣分は、平安時代でもあつたと見える。女房達が髮を唐衣に着込めたのは、車の出這入に便する爲らしい。

中宮の御座は、御見物に都合のい、やうに、高い長押上である。その脇座の下には、女房達が着席する。仕切に、几帳を二つ遣りちがはせた、御座の後の細長い空席に、眞座を横に敷いて、特に其處に着座を許されたのは、身分のある中納言の君と宰相の君とであつた。そこへ清少が見えたので、宰相の君と入換らせようとなされたが、幸に三人すわられたので、それには及ばなかつた。宰相の君が、豫め中宮の御胸中を察した敏慧さは、全くこの宮の上臈女房たる資格がある。

清少が中宮の特寵を得たことは、この時だけでも、その退出を延ばさうとなされた事、文集の句で思慕の情を寄せられた事、上臈と同車の事、參著する否やまづ召出された事、人目を思つて隠さうとなされた事、几帳まで御自身出迎へられた事などに依つて、明白である。況や今長押上で陪觀を許される、清少の身に取つては、かうした暗の場所、公々然と特待を受けるのだから、誠にその自覺する如く、身の程過ぎた光榮であつた。嫉妬偏執が持前の女房連が、何で黙つてゐよう。「殿上聽さる、小舎人」の「馬副のほどぞ」と、皮肉は至つて鋭い。然し彼等とても、馬鹿にならぬ頓才の子である。とにかくこの宮人に、一人だとしてソツのある人間の居よう筈がない。かう清少の歡迎を蒙るのは、所謂台縁奇縁といふ事の外に、中宮御自身が才女なので、その才氣に共鳴されたい。「誰が事も殿上人譽めけりと聞かせ給ふをば、さいはる、人を喜ばせ給ふ」お方であつた。

序に中宮の御人格に就いて、一言したい。御性分は花やかで才氣煥發、慈愛の權化の如くあらせられた。源氏に見える、重りかにそばくしい葵上、あえかに兒めかしい夕顔上などは、性格が反對で、

尋常一様の深窓の姫君のやうでない。それもその筈、母北の方の教育法が、一風變つてゐた。北の方、宮仕に慣ひ給へば、いたう奥深なることをば、いとわるきものに思つて、今めかしう氣近き御有様なり。(大鏡)

散樂勝な父君の陽氣な氣質を稟けたうへに、北の方のこの教育法による、偉大な薰化を受けて、子女達は皆花やかに今めかしかつた。

棧敷は堂前の廣庭を挟んで、兩側に宮をはじめ、女院、爲尊敦道兩親王、右大臣源重信、その他上達部等のが、澤山構へられた。非常な盛儀だ。道隆は一旦女院の御棧敷に御挨拶をして、中宮の御棧敷にくる。文武官の御子息方、四五位の家來連など、ずらりと供に並ぶ。棧敷内は今日を暗と、盛裝の限を盡して、女房達が祇候する。その花やかさには眼が眩む。

北の方が小袷の下に裳を着けたのは、一寸變つてゐる。ほかの方は一樣に、唐衣に裳の禮裝だ。佛の御前ではとにかく、この棧敷内では、中宮は第一の人でありせられる。道隆が、せめて裳だけは脱がせ奉れと、妹の姫君達に仰せられたのは、表面に中宮をもてはやし、裏面にその親たる自身の幸福を歡喜したので、感情昂奮の結果は、嬉し涙に咽ぶ事となつた。陣の立つことは、道隆のいふ通り、おぼろけの事ではない。

女の幸は后こそ、極めておはします。さるなめれど、それはいと所せげにおはします。——陣屋の居れば女房たはやすく、心に任せても、え仕まつらす。(大鏡)

とある位のものであつた。

貴人は、さう何時までも心の見られる振舞はしない。一寸氣を換へて清少への散樂言は、赤色の唐衣が種であつた。その色相から緋の法衣を聯想して、「法服云々」は、場處が折柄即妙の面白さがある。況や「さやうの物を切縮め給へるか」の押掬に至つては、殆ど絶倒せぬ者はあるまい。「など唐衣は、短き衣とこそいはめ」と評した事を思ふと、いよゝゝ可笑しくなる。息子の伊周も透かさず、「清僧都のにや」と、到頭中年増の清少を、いゝ坊様扱ひにしてしまつた。これもなかく、父兄に遜らぬ辯才家である。

僧都の君は隆圓のことで、父の威光は從來の恒例を破つて、わづか十五の少年を、一躍僧都にした。あ、俗界の榮華は既に達した、せめて一子は出家にして、九族生于天の功德を望んだものと見える。僧都は僧正の次位で、普通なら大層もない活佛だが、可愛らしい頭付が、纔に地藏菩薩を彷彿させるに過ぎず、「見苦しく女房の中に」と冷かされて、指をくはへる僧都さんだから、から持はない。松君は赤坊だが、餘所行なので、服裝は正式だ。それにもお供はぞろ／＼。お祖父様の光は七光以上であつた。思ひなしか、泣聲さへ今日は陽氣だ。

嬉し涙やら、笑聲やら、すべてが花やかな明るい、のび／＼した氣分を象徴して、それが清少の妙筆

に面白をかしく活躍して、讀者もおなじ榮華の氛圍氣中に生息してゐる感じがする。

一切經だから卷敷は頗るおほい。それを紅蓮の造花に一々入れて、月卿雲客以下總出で、行列を作つて、佛前へと捧げ運ぶ。さて本尊の毘盧遮那を繚繞して、印度の最敬禮たる行道がはじまる。この時散花僧が花瓶から、各色の蓮花をはら／＼と撒くことは勿論だ。回向の式があり、舞樂がある。刺戟の鋭い事件の續出に、耳も目も疲れ切つて、神經衰弱を訴へるに至つて、今日の盛儀は極る。

五位の藏人が、今日の法會に勅使として差遣された。それが勅願寺の故である事は、いふまでもない。中宮の棧敷前に床几を立てたのは、特にこの一門の光榮を表象する。

日が暮れて、六位の藏人則理が、中宮お迎の御使にくる。追つかけ藏人の辨信順が、御父の道隆にも、その御上意を傳へにくる。中宮の御殊遇は絶對である。なほこれらの御使が、この一門にそれ／＼縁邊を有つてゐることも、意味があるやうに思はれる。即ち則理の妹は伊周の妻であり、信順は中宮の叔父である。實際今日の法會は、道隆の妻黨の光榮を表現する爲といつてよい。中宮の母方の祖父高階成忠は、當時二位の新發意で、

(成忠)後の世には、高二位とこいひ侍りしか、積善寺供養の日、この入道殿(道長)の上に居侍りしは、いと珍らかなりし業かな。(大鏡)

後にはこの世をわが世と振舞つた道長の上座に陣取つた。これも道隆の威勢のすさまじさを物語るものであつた。

中宮は豫定を變更して、すぐ様禁中へといふ事になる。女院には咫尺の間で、御面會の機を逸してしまつた。そこで兩宮の間に、御挨拶が交換された。女院のお供が半分減つたのは、還啓ゆる略式にされたのである。

末節、俄の御入内から生じた手違で、筆鋒をからり轉じたのは、頗る氣がかはつて、別天地に出た心地がする。女房の従者などは、直接供奉の役でないから、行動は隨意だ。先潛りをして、二條の宮に往つて、待てども、主人達の影は見えないので、氣を揉みながら夜深になる。女房達は宿直物も届けて來ぬ従者の心なしを罵りつ、春の夜の薄ら寒さを、禁中の局で慄へてゐる。困惑と狼狽、それが矛盾から生ずる滑稽味によつて、程よく緩和され、調節されてゐる。

翌日になつての雨といふのは、お詠向の關白日和なので、道隆は、わが宿世を自慢してゐる。この自慢は例の散樂言といつてしまへばそれまでだが、暗に昨日の法會に對しての、一通りならぬ眞劍味を語つてゐる。

この文は草子中の最大長篇で、規模宏大、結構齊整、行文瑰麗、その堂々たる雄風は、恰も關白殿が前驅後從雲の如く、檳榔毛の車に黄牛かけて、大宮をあがりに、陽明門外に朝參するやうな趣がある。すべてが、一年後の淑景舎中宮御對面の條(九十段)と關聯した事項が多いから、随つてその批評を此處に移して、見て貰ひたい。

抄本にはこの文の最末に、なほ左の一節がある。

されどその折、めでたしと見奉りし御事共も、今の世の御事共に見奉りくらぶるに、すべて一つに申すべきにもあらば、物うくて、多かりし事ども、皆とどめつ。

これも清少の筆と思はれるが、道長の全盛時代を目撃しての感想だから、後年に或は追加したのではあるまいか。文の結構から見ても無い方がよく、又文品も大に下つて面白くない。

兼家、道隆父子二代が、これ程心力を盡し、財力を傾けて建立した積善寺も、情ない哉、廿二年後の長和五年閏十月に焼失してしまつた。

二百二十八段

たふときもの 九條錫杖 念佛の回向

○九條錫杖 書名。錫杖經ともいふ。一卷。作者未詳。或はいふ不空三藏作と。その文九條より成る。一條を唱へ終はる毎に錫杖を振る法なる故に、この名あり。錫杖は智杖聲杖ともいひ、僧侶修驗者などの携ふる杖なり。上部を錫、中部を木、下部を牙又は角にて作り、頭を塔婆形にして、一の大環をはめ、それに又數箇の小環を付く。もと印度において、僧侶が道を行く時、響を發して猛獸毒蛇を警むる爲の具なり。○念佛の回向 念佛の後に唱ふる廻向文なり。觀無量壽經の光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨の十六字をいふ。

評 錫杖經には、錫杖の有難さを述べてあるが、清少の尊く感じたのは、源氏幻の卷に、御佛名もことしばかりにこそと思せばにや、ことに錫杖の聲々など、あはれに思さる。

とあると共通するもので、導師が佛名を唱へ畢つて、錫杖經を聲明に唱へ、錫杖をカラ／＼と鳴す、その當夜の氣分を、信仰的に感受したのである。念佛の廻向とても、亦その通りである。

二百三十九段

うたは 杉たてる門。神樂歌もをかし。今様は長くてくせづきたる。風俗よくうたひたる。

(口譯) うたは 杉たてる門が面白い。神樂歌も面白い。今様は節が長くて癖付いたのが面白い。風俗をよく詠つたのが面白い。

○歌は こゝは謠物をいふ。○杉たてる門 梁塵秘抄に「戀しくはとう／＼おはせわが宿は大和なる三輪の山本杉立てる門」。古今集雜「わが庵は三輪の山本戀しくはとぶらひきませ杉たてる門」を歌ひ換へたるもの。○神樂歌 邦樂の一種。神祇を祭る時に用ゐる歌。本歌末歌にわけて歌ひ、本末を聯ねて一曲とす。庭燎、宮人、薦枕等數十首、今に傳はれり。○今様 今様歌の略。古き謠物の神樂催馬樂などに對して、當世風の歌といふ義にて、字數も長短不定なりしが、漸く七音五音の四句より成る、かのいろは歌の體を稱することゝなれり。平安中期より流行して、末期に至り、その盛を極めたりき。○長くてくせづきたる 節長くて曲折のあるをいふ。この句の下、をかしを略けり。○風俗 フゾク。風俗歌の略。もと神樂の一部なり。催馬樂東遊などに同じく、坊間に行はれたる俗謠なるが、それ等の中より、遍く貫紳間に行はれたるものを選びて、一卷の歌譜を作り、特殊の樂調を加へたるものゝ稱となれり。今に傳はれるもの、平津久波、小由流木、玉垂等二十五首あり。○よく歌ひたる の下、をかしを略けり。

評 「杉たてる門」は古今集中の本歌だが、獨立の謠物になつてゐたのである。當時は本歌の詞を伸べも縮めもして、さまざまに詠つたものだ。神樂や東遊やなどにも、本歌が澤山ある。傀儡子記に、當時の謠物を列ねて、

今様、古川様、足柄、片下、催馬樂、黒鳥子、田歌、神歌、棹歌、辻歌、滿周、風俗、呪士、別法師之類、不可勝計、云々。

とある。杉たてる門も、その一つだらう。なほいろ／＼の拍子物を、雜藝と概稱してゐるが、その歌體は頗るまち／＼であつた。さて古本には、「歌は風俗の中にも杉たてる門」とあるが、現存の風俗の中には、杉たてる門はない。

神樂歌の興あることは、上文に屢出てゐる。今様は「長くて曲づきたる」とあるので見ると、今様に一定の曲譜が、當時既に撰定されてゐたことは明らかだ。すると狹義の固有名詞に解釋するが、當然と思ふ。榮華物語に讀經爭、今様歌とある、今様歌もこれだらう。和讃、神歌など稱するものも、この一部である。催馬樂朗詠などと共に、興宴の際に、専ら歌つたものである。

風俗は、うちの局はの段の「あら田におふるとみ草の花」の評を參看してほしい。野曲抄に、風俗の音聲みじかく、節にいやしめる聲のあり。云々。と見えて、他の謠物に比べると、優雅な趣に乏しいうたひ振だが、さういふのをまた上手に詠ふと、溜らなくよいのである。

二百四十段

指貫は 紫の濃き。萌黃。夏は二藍。いとあつき頃、夏蟲の色したるもすゞしげなり。

二百三十九段 二百四十段

(口譯) 指貫は 紫の濃い、萌黃などがいい。夏は二藍がいい。大層

暑い時分に、夏蟲の羽色したのも、涼しさうである。

釋 ○夏蟲の色 蟬の羽色なり。二藍の色を譬へていへる也。諸註非なり。夏蟲は、蟬にも螢にも火取蟲にもいへど、こゝは蟬なり。
評 紫に濃いのを望んだのは、清少の好みだらう。中宮の「萌黄などのにくければ」と仰せられた萌黄も、指貫で男が着る分には、よいと見える。蟬の羽色が聯想される二藍、夏は全くい。

二百四十一段

狩衣は 香染のうすき。白き。ふくさの赤色。松の葉いろしたる。青葉。さくら。やなぎ。又あをき。ふぢ。男は何色のきぬも。

(口譯) 狩衣は 香染の色の薄い、白、ふくさの赤色、松の葉の色した、青葉、櫻、柳、又青、藤などがいい。一體男は何色の衣でもよく見える。

釋 ○ふくさ 表裏同じ色の絹にて縫合せるもの。○赤色 櫛を茜にて染めたる色なり。織色にては經紫、緯赤なり。○松の葉色。表青、裏紫の稱。即ち松がさねなり。○青葉 染色織色とも、この名稱なし。青朽葉の誤脱か。或は青丹などの誤寫にもや。青丹は表濃青の差黄、裏同色なり。○藤 表薄紫、裏白とぞ。これは兼良公説なり。物具裝束抄、西三條裝束抄には、表經青緯黄、裏萌黄とあり。藤の下、などをかしを略けり。○男は何色の衣も 然し男は何色の衣も、をかしとぞ見ゆるの略。
評 狩衣は手輕な服だから、色合も輕いのや派手なのやが、一般にすかれてゐる中に、特に清少の好みを見せてゐる。結句男は何色でもい、といつて、婦人は衣色に周到な用意を要することをほのめかしてゐる。

二百四十二段

單衣は しろき。日の裝束の紅のひとへ裨など、かりそめに着たるはよし。されど、なほ色きばみたる單衣など着たるは、いと心づきなし。練色のきぬも着たれど、なほ單衣は白うてぞ、男も女もよろづの事まさりて。

(口譯) 單衣は 白いのがい。束帶の時の紅の單袖など、一寸着たのはいい。白いのがいといつても、やはり汚れて色の黄ばんだ單など着たのは、甚だ氣にくはない。練色の衣も着てはゐるが、やはり單は白くあつてこそ、男でも女でも、萬事がすぐれて見える。

(考異) ○まさりて の下、原本こそとあり。活本による。

釋 ○單衣 裏なしの服にて、袖の下に着る。その製袖とほゞ同じ。○ひとへ裨 裨は普通裏附の物なるが、又一重なるもあり。桃華菫葉に、或紅打袖一重ニテモと見えて、單兼用に着たりしならん。これ「假初に着たる」といへる所以なり。紅の單に、袖を重ねたる意にも聞かれぬにはあらねど、さるは束帶の正装にて、假初といふべからず。○色黄ばみたる 紅色の褪せて黄に變れるをいふ。○まさりて の下、見ゆるを略けり。
評 束帶の時には、あかい袖を着る。しかも何枚も用意して、寒暄に隨ひ、調節して着たものである。大鏡に、

緋の御袖あまた候ひけるを、これらあまた重ね着たるなむうるさき。綿一つに入れなして。とある。暑い時は、單袖を着る。それを束帶姿でない時に、假初に一寸着たのはいい、ものだとはいふのは、正式を崩した點に、碎けた味ひを認めたのである。又後世は紅の一點張になつてしまつた單も、この頃では、かう色々あつて、清少は、極力白單を主張してゐる。實際練色などは、汚ればつくていけない。

二百四十三段

・わろきものは 詞の文字あやしく使ひたるこそあれ。只文字一つに、怪しくも、あ

(口譯) わるいものは 詞の文字を怪しく使つた

のである。只文字一つで、怪しくも上品にも、下品にもなるのは、どうした譯だらうか。それはかう思ふ人とても、格別上手に立勝つてあり得もすまい。して見ると、どれを善いどれを悪いとは、どうして知るだらうか。けれど人の事をば構ふまい。只さう感するのである。何事をいつても「その事させんとす」「いはんとす」といふのを、と文字をぬいて只「いはんとす」「里へ出てんする」などいへば、即ち甚だわるい。まして文に書いては、悪いことはいふまでない。物語はさ、悪く書損じなすとすると、いひやうもなく悪く、作者までも氣の毒になる。校訂して「なほす」

てにも、いやしくもなるは、いかなるにかあらむ。さるはかう思ふ人、ことに勝れてもえあらしかし。いづれを善き悪しきとは知るにかあらむ。されど人をば知らじ。只さうち覺ゆるなり。何事をいひても、「その事させむとす」「いはむとす」といふを、と文字をうしなひて、只「言はむする」「里へ出てむする」などいへば、やがていとわるし。まして文に書いては、いふべきにもあらず。物語こそあしう書きなどすれば、いひがひなく、つくり人さへいとほしけれ。「なほす」「定本のま」など書きつけたる、いとくちをし。「ひてつくるまに」などいふ人もあり。もとむといふ事を、「みとむ」と皆いふめり。いとあやしきことを、男などは、わざとつくるはで、殊更にいふはあしからず。わが詞にもてつけていふが、心おとりするなり。

(考異) ○ことに 原本よりづの事にとあり。○されど人をば 原本さりとも人をとあり。○覺ゆるなり 原本覺ゆるもいふめりとあり。○何事 原本難儀の事とあり。○いひても 原本いひてとあり。○文に 原本文をとあり。以上古本による。○人もあり 原本人もありきとあり。○みとむと 原本みむととあり。古本による。

釋 ○使ひたるこそ 使ひたるにこそ略。○かう思ふ人云々 かく文字一つに巧拙ありと論ずる人も、殊に他に立勝りてもあり得じと也。「人」は清少みづからいふ。○いづれを善き悪しきと云々 その文字一つを、どれが善き、どれが悪き使方とは、いかにして知るならんかと也。○人をば知らじ 人の事は構はぬと也。「知る」は領知の意。○さうち覺ゆる 「さ」は「只文字一つに云々」とあるをさす。○と文字を失ひて 「と」の辭を省略してと也。○いふべきにも わるしとはいふべきにもあらずの略。○つくり

「定本のま」など書きつけたのは、甚だ残念だ。一つ車に「ひてつ車に」などいふ人もある。もとむといふことを「みとむ」と皆いふやうである。甚だ怪しい事を、男などはわざと繕はないで殊更にいふのは、悪くない。わが生地のこと取扱つていふのが、その人の心の中が見えかけられるのである。

人さへ 作者さへ拙く見られてと也。○なほす 直すと也。○定本のま、云々 本文の疑はしき所には、定本のま、など脇書すると也。「定本」は校定したる原本をいふ。○ひてつくるまに 一つ車にの詛。上に、ひとつ車にをを略けり。古註に、祕點附くる間に書損じたりといふにやといへる覺束なし。今は通釋の解に従ふ。○みとむ もとむを詛りていへる也。○わが詞に云々 自分の持前の詞として使用するがと也。

評 言辭に靈妙不可思議な活用のあることを認めたのは、思ふに歌人達が、その先驅だらう。歌詠み文書く修業を日課としてゐた、當時の上流士女は、痛切に感じたことと思ふ。何も清少ばかりではあるまい。只さう感するだけで、その理窟は知らぬといふ。これも清少に限つた譯ではあるまい。言辭の雅俗などいふことは、習慣上感情上からの問題もあるので、音韻轉訛の理論ばかりでは、解決はつかない。「いはむする」「いでむする」は訛語で、會話上でも悪いが、文に書いてはなほ悪いといふ。この一語は、當詩すでに文語と會話語とに、幾分の距離のあつたことを證明する鐵案である。「ひてつ車」だの「みとむ」だの、なか／＼ちうせい折敷の生昌ばかりを笑はれない。い、氣になつて、こんな訛語を喋舌る人間は、全く笑草だが、わざとの興に任せて使ふのは、洒落だから咎はないと、念を押したものだ。

誤寫で作者の迷惑するのは、今日活字の誤植や何かで困ると一致してゐる。それを物語に限つたことは、婦人の嗜好から來てゐるらしい。明らかに誤字なのは、訂正して「直す」と附記し、不明なのは「定本のま」と附記する。これが後世まで筆寫の慣例となつてゐた。但こんな脇書などのない方が、氣持はよかろう。

二百四十四段

下襲したかまは 冬は躑躅かいたり、搔練かいたりがさね、蘇枋すぼうがさね。夏は二藍、白襲。

釋 ○躑躅 台記に、表は蘇枋、裏は紅打とあり。胡曹抄などに、裏を青打とするは、後世の襲ならん。冬春の服なり。○搔練がさね 紅の練絹の下襲なり。雅亮裝束抄に「紅の濃く打ちたる綾のおもてに二重紋のふくさ張りたる裏つけたる也」。○蘇枋がさね 胡曹抄に「表白瑩(白く光らす)裏濃打(濃紅を打つ)公卿禁色人常所着用也。又主上之着給」。

評 冬はあかの色が暖さうでよし。夏は青すんだのや白が涼しさうでよい。上に、二藍は夏の指貫にもよ

二百四十五段

扇の骨は 青色はあかき。紫はみどり。

釋 ○青色はあかき云々 紙の青色なるは赤き、紫色なるは緑なるがをかしの略。別本には「扇の骨は、紙の色は赤き、紫、緑」とあり。

評 例の蝙蝠扇についての好みである。當時の骨は大抵木で、塗骨や木地物の外は、それを染めて使ふ。今日のとほ色の程度に、多少の相違はあるが、この地紙と骨との色合は、配色の原則からいつても、甚だ不快で、くどい。

二百四十六段

檜扇は 無紋むもん から繪。

釋 ○無紋 模様なしにて、描きも繡ひもせぬをいふ。

評 檜扇の模様なしは、いつそさつぱりして、唐繪は革帶のうしろでも、何に描いてあつても、結構なものとしてあつた。

二百四十七段

神は 松の尾。八幡や、この國の帝みかどにておはしましけむこそ、いとめてたけれ。みゆきなどに、なぎの花の御輿みこしに奉るなど、いとめてたし。大原野。賀茂は更なり。稲荷。春日いとめてたく覺えさせ給ふ。佐保殿さほどのなどいふ名さへをかし。平野ひらのはいたづらなる屋ありしを、「こゝは何する所ぞ」と問ひしかば、「神輿みこしやどり宿」といひしもめてたし。忌垣いげに葛などの多くかゝりて、紅葉もみぢのいろくありし、「秋にはあへず」と貫之が歌おもひ出でられて、つくぐと久しう立たれたりし。みこもりの神、いとをかし。

釋 ○松の尾 山城葛野郡松尾村にある社。大山昨命に、別雷神わかづかみのかみを配祀す。二十二社註式には、別雷神を省きて、賀形中初大神即ち市杵島媛を配祀すとせり。○この國の帝にて云々 八幡の祭神を應神天皇とする故に、かくいへり。○みゆきなどに 天皇の八幡參詣の行幸などにと也。○大原野 オホハラノ。山城乙訓郡大原野にある社。桓武帝の平安遷都の時、皇后藤原乙牟漏、氏神大和の春日にありて遠隔なる

二百四十四段 二百四十五段 二百四十六段 二百四十七段

(口譯) 神は、松の尾がめでたい。八幡、この神はわが邦の天子であらせられたのが、甚だめでたい。天子御參詣の行幸などに葱花盤はなばんに召されるなど甚だめでたい。大原野がめでたい。賀茂のめでたい事は、いふまでもない。稲荷がめでたい。春日は大層めでたく思はれ申される。佐保殿などいふ名までも面白。平野は空いてゐる屋のあつたのを、「こゝは何をする所か」と尋ねたら「神輿宿です」といつたの

もめでたい。忌垣に葛などが多くあつて、紅葉が色々あつたのも「秋にはあへず」と詠んだ、貫之の歌が思ひ出されてつくんと長いこと佇立された。みこもりの神は、甚だ面白

を以て、こゝに勸請す。或はいふ、嘉祥三年左大臣藤原冬嗣これを移すと。藤氏の后妃の氏神參詣に便せんが爲に、遷祀したる社なり。○佐保殿 拾芥抄に「奈良佐保殿、淡海公家、冬嗣大臣家」とあり。大和添上郡佐保村にあり。氏長者の家人が、その預に補し、御祭役に當る。○平野 山城葛野郡平野にあり。祭神今木神、久度神、古關神、相殿姫神の四座なり。○いたづらなる屋 不用なる屋、即ち空屋なり。○神輿宿 神輿を容る、所をいふ。○忌垣 齋ひたる垣の義にて、社の周圍にある垣をいふ。○ありしありしがの略。○秋にはあへず 古今集秋下、貫之「ちはやぶる神の忌垣にはふ葛も秋にはあへず移ろひにけり」、「あへず」は敢へずにて、立合ひ難きをいふ。○立たれたりし の下、よの歎辭を略けり。○みこもりの神 「みこもり」は水分の轉。後世籠の宮、又は子守明神と稱す。みこりの社を見よ。○松の尾は祭神の石柱が、賀茂とおなじであり、八幡は宗廟の御神であり、大原野、春日、賀茂、稻荷は、皆當時信仰の標的であつた。佐保殿は藤氏の氏人が、春日社參や興福寺詣に、必ず一憩する所で、第一その名が面白といふのは、佐保姫、佐保山、佐保川など、古歌からの聯想に因るものだらう。平人の家の車宿といふ所を、神様だから御輿宿は、理窟では當然だが、打聞いた端的の感じに、ゆかしみがある。忌垣の薦紅葉に、貫之の名歌を聯想して、感懐に耽るみやびな態度は、溜らなくいふ。みこもりの神は、みくまりの轉語として水を配るといふことに、直覺的に興味を感受するほど、清少が言語學者であつたとは思はれぬ。却て轉訛した御子守の意義によつて、子供好の例の心がそゝられたと見るが至當だらう。

二百四十八段

崎は 唐崎。伊加が崎。三保が崎。

釋 ○唐崎 近江滋賀郡滋賀村、琵琶の湖畔にあり。辛崎、韓崎など書す。○伊加が崎 近江滋賀郡石山の南、勢多川心見の瀬の邊。蜻蛉日記に「石山に參りて、舟にて歸るとて、いかゞ崎、山吹の崎などいふ所を見やりて、云々」○三保が崎 駿河に三保の松原あり。又出雲に三穗が崎あり。

評 例の六帖には由良の御崎、清見が崎の外に、思ひつゝくれどきわれつみをが崎まかなの浦を又へりみつ(萬葉、九)

といふ近江の高島郡三尾が崎を詠んだ歌がある。唐崎、伊加が崎も近江であるのを見ると、これも駿河や出雲ではなくて、近江の三尾かも知れない。但假名が違ふ。

二百四十九段

屋は 丸屋。あづま屋。

釋 ○まろ屋 屋根も周圍も、一種の材料のみにて造れる家。その材料によりて茅の丸屋、草の丸屋などいへり。眞淵の説に「まろは全きことなり」と。○あづま屋 四阿。家屋雜考に「阿は簷の事にて、隅へ角木を互し、搏風をいれず、檜皮を葺き卸にしたる造方なり。これを東屋造といふ」。

評 丸屋も東屋も、そのはかなげなわびしげな所に、あはれに優しい氣分が動く。旅人のみや刈りおほひ造るてふまろ、やは人を思ひわする(拾遺集戀、詠者未詳) あづま屋のまよのあまりの雨そぎわれ立沾れぬその戸開かせ(催馬樂、東屋)

の歌謠も、そのゆかしさを思はせる、有力な原因の一つだらう。

二百五十段

時奏するいみじうをかし。いみじう寒きに、夜なかばかりなどに、こほく〜とこほめき、沓ずりきて、弦うちなどして、「なん家のなにがし。時丑三つ、子四つ」など、あてはかなる聲にいひて、時の杵さす音など、いみじうをかし。「子九つ、丑八つ」などこそ、さとりたる人はいへ。すべて何も〜、四つのみぞ杵はさしける。

○時奏する 禁中にて、夜警の武士の時刻を奏するをいふ。侍中群要に「亥一刻、左近衛夜行官人初奏時事(終子四刻)」、又「丑一刻、右近衛夜行官人初奏時事(終寅四刻)」。○こほく〜とこほめき 沓摺の音なり。濱臣の装束の音といへるはいかゞ。○弦うち 鳴弦なり。弓弦を横に弾きて鳴す妖魔を退けんが爲とぞ。○なん家のなにがし 何家の某なり。時奏すとて名乗りする也。○丑三つ子四つ 丑三つは丑の三刻にて、今の午前三時、子四つは子の四刻にて、今の午前一時半なり。春註に「漏刻とは、銅壺に水を入れて、箭をたて、其箭に四十八刻をつけて、彼銅壺の水のしたりて、一つのきさをあらはせば是一刻也。二つをあらはせば二刻也。かくて四つあらはせば一時也。其故に子一二三四といふ也。此漏刻の箭のきさの數、或は百刻にせし事もあれど、此草紙などの比は四十八刻にや。すべて何も〜四つのみぞ杵はさしけるといへり」。○時の杵さす 清凉殿の殿上の間の小庭に、時を書ける簡あり。それを杵にさすなり。一晝夜十二時のうち、各時の第四刻にのみさす。讚岐典侍日記に「時の簡に杵さす

(口譯) 時を奏するの、甚が面白い。甚だ寒いのに、夜半時分などに、沓をこほくと踏立て、沓摺して来て、弓弦を打鳴しなどして「何家の某時丑三つ、子四つ」など上品な聲でいつて時の杵さす音など、ひどく面白い。子九つ、丑八つなど、間違つた稱呼を、田舎びた者はいふが、すべて何時も〜、四つには〜杵はさした。

音す」。○子九つ 丑八つ 延喜式に「諸時、擊鼓、子午、各九下、丑未、八下、寅申、七下、卯酉、六下、辰戌、五下、巳亥、四下、並平聲、鐘、依三刻數」と見えて、鼓は子午の刻には、九下即ち九つ撃つなり。以下これに準じて知るべし。故に擊鼓の數に隨ひて、田舎者は、子九つ、丑八つと混線させて呼ぶと也。○何も何も四つのみぞ云々 何時にても、第四刻にのみ、時の杵はさしたりと也。
評 近衛は武裝して夜警する。その沓音や弦打の響がしたと思ふと、殿上の方で、名告をあけ、時を唱へ、杵をさす。これが霜の降る音さへ聞えるといふ嚴寒の眞夜中だけに、際やかに冴えて、嚴肅な氣分に打たれる。丁度黒戸に上直してゐる折の即興だらう。時の稱呼の批正は、全く餘波である。

二百五十一段

日のうらく〜とある晝つかた、又いたう夜更けて、子の時などにもなりぬらむかし大殿ごもりおはしましてにやなど想ひ參らするほどに、主上をのこども」と召したるこそ、いみじうをかしけれ。夜中ばかりに、又御笛の聞えたる、いみじうめでたし。

(考異) ○又 原本になし。○にもなりぬらむかし大殿籠りおはしましてにやなど 原本になし。以上抄本による。
○をのこどもと 原本と文字なし。古本による。
○をのこどもと 殿上の男ども參れとの略。殿上の男は殿上人なり。
評 大建物のたち並んだ宮中は、晝間でも森閑としたものである。そこに端なく、主上の侍臣を召される御聲や、御笛の音が、深夜の靜寂を破つたことは、主上の御生活の響を傳へるものであつて、宮中奉仕

(口譯) 日が麗らかにさした晝時分、又は夜が大層深くて、子の刻などにもなつたらうよ。主上はもう御寢なつてあられるかしら、など想像し申上げる時分に、「をのこ共參れ」と殿上人を召したのが、非常に面白い。夜中時分に又、主上の御笛の音が聞えたのは、非常にめでたい。

に、一段の興味を饒からしめる。

當代の一條帝は笛の妙手であらせられ、時に「大殿籠りおはしましてにや」の想像を裏切つても、吹奏されたと見える。

二百五十二段

成信なりのよの中將は、入道兵部卿の宮の御子にて、かたちいとをかしげに、心ばへもいとをかしうおはす。伊豫の守兼資がむすめの忘れられて、親の伊豫へゐてくだりしほど、いかに哀なりけむとこそ覺えしか。曉にいくとて、こよひおはしまして、在明の月に歸り給ひけむ直衣姿などこそ。

○成信 十段の權中將を見よ。○入道兵部卿の宮 致平親王。村上帝の皇子にて、四品兵部卿たり。天元四年薨髪、長久二年薨す。年八十九。○伊豫守兼資 源氏。その女はじめ藤原隆家の妾たり。のち成信に逢ふ。○曉にいくとて その女が明日の曉に出立すると聞きての略。○こよひおはしまして 成信がその夜女の家にお出なされての略。○直衣姿などこそ の下、いかに見奉りけむを略けり。

そのかみ常におはして物語し、人のうへなどわるきはわるしなどの給ひしに。物忌などくすしうする者の、名をさうにてもたる人のあるが、こと人の子になりて、平などいへど、只もとのさうを、若き人々、言ぐさにて笑ふ、有様もことなる事なし。

(口譯) 成信の中將は、入道兵部の宮の御子で、容貌も大層美しげで氣立も甚だ面白くおありなさる。伊豫守兼資の娘が、この中將に見棄てられて、親が伊豫へ連れて下つた時、どんなに哀であつたらうかと思はれた。曉に女が出立するといふので、中將がその夜お出なされて、在明の月の出る頃にお歸りなされた折の直衣姿などをば、女はどうお見上げ申したらう。いかにも名残惜しかつたらう。

其以前、この中將は常に自分の所に來て物語をし、人のうへなども、悪いのは悪いなど正直に申されたのに、見下げられる振舞をなされた事よ。物忌などを奇特にする者で、名を姓で呼ばれてゐる人のあるが、他人の養女になつて、平などいふけれど、若い女房達は、只以前の姓を言草にして笑ふ。その女は様子も格別な所もない。それは兵部といつて、優な所もありにくい。流石に自身では、人中に出しや張る心などのあるは、中宮のお前あたりでは「見苦しい」など仰になるけれど、意地悪く、それを當人に告げる人もない。一條院内に造られた一間の部屋には、厭な人をは、

兵部とて、をかしきかたなどもかたきが、さすがに人などにさしまじり心などのあるは、御前わたりに、「見ぐるし」など仰せらるれど、腹ぎたなく告ぐる人もなし。一條院につくられたる一間の所には、つらき人をば更に寄せず、東の御門みかどにつと向ひて、をかしき小廂こよみに、式部のおもとも共ともに、よるも晝もあれば、うへも常に物御覽みじに出でさせ給ふ。こよひは皆内にねむとて、南の廂に二人臥しぬる後に、いみじう叩く人のあるに、うるさしなどいひ合はせて、寢たるさまにてあれば、なほいみじうかしがましう呼ぶを、言あれおこせ。虚寢そらねならむ」と仰せられければ、この兵部來て起せど、いみじう寢たるさまなれば、兵部更に起き給はざりけり」といひにいきたるが、やがて居つきて物いふなり。しばしかと思ふに、夜いたう更けぬ。權中將にこそあなれ。清少等こは何事をかはいふ」とて、只みそかに笑ふも、いかでか知らむ。曉までいひ明して歸りぬ。清少等この君いとゆゝしかりけり。更におはせむに物いはじ。何事をさはいひあかすぞ」など笑ふに、遣戸やちどをあけて、女は入りぬ

(考異) ○おはして 原本おてとあり。別本による。○腹ぎたなく の下、原本しりの二字あり。古本による。○一條院に 原本に文字なし。古本による。○おもと 原本おととあり。古本による。○いみじう 古本によりて補ふ。○さま 原本やうとあり。活本による。

○常におはして 成信が常にわが許におはしてと也。○などの給ひしに の下、必ず脱文あるべし。

一向寄せ付けない。この院の東の御門にさし向つて、趣のある小廂に、自分はお許と一緒、夜も晝もゐるので、中宮も物見にお出ましになる。今夜は、この小廂でなく、皆内に寝ようといつて、南の廂の間に二人で寝た後に、大層戸を叩く人があるの、うるさいなど言合はせて、寝た振でゐると、やはり盛に喧ましく喚び立てるのを、中宮はお聞になつて、「あの少納言を起せ。空寝だらう」と仰になつたので、この兵部が来て起すけれど、ひどく寢込んだ様子なので、「一向お起さなさらぬわ」と戸を叩く人に告げに往つたが、そのまゝ其處に腰をすゑて、話をする。暫時

假に「心おとりせらる、業こそし給ひしか」を補ひて、文意を疏通せしむ。春註は、書きさしたる文法といひ、通釋は、この句の下に「その語らひ給ひしを見れば」を含めて聞くべしといへれど、いづれも的確ならず。○物忌などくすしうする者の物忌などを奇特にする者にてと也。「くすしう」は奇しうの義。○名をさうにてもたる 宮中の呼名を、姓にて呼ばれたると也。即ち藤式部、赤染衛門の如きをいふ也。「さう」は姓の直音。○言ぐさに、言種にしてと也。話の種にするをいふ。○をかしき方なども難きが優れたる點なども難きがと也。○さしまじり心 出シ、張る心なり。通釋に「さしまじり」にて切り、心などのあるは」と讀みて、心を好色心と解きたるは強ひたるが如し。○御前わたりに 中宮のなり。○腹きたなく 腹きたなくてと也。意地わるきをいふ。○告ぐる人もなし 兵部になり。○つらき人 仕打の面白からぬ人。古本にくき人とある、可なるに似たり。○をかしき小廂 一間の所にあるなり。○式部のおもと 女房の名。○うへも 中宮を申す。○内に 殿内になり。○いひ合はせて 式部のお許と話し合はせてと也。○やがて居つきて そのまゝ、其處に居付きてと也。○權中將にこそか のいみじう叩きし人はを、上に補ひて聞くべし。「權中將」は上なる「中將」と同じく、成信のこと也。○いかでか知らむ 兵部はなり。○いとゆゝしかりけり 清少を尋ねてきながら、下腐の兵部などと語り明す故、厭らしといふ也。○更におはせむに 他日改めてわが方に來給はむにもと也。「更に」を「物言はじ」の副詞とするは、その用法古にあらず。○女は 兵部をいふ。

の事かと思ふと、夜が大層深けた。戸を叩いたのは權中將であつた。「それは何事を、あんなに話すのか」といつて、こちらでは只密に笑ふのを、あちらでは何ぞ知らうかい。曉まで權中將は話し明して歸つた。「この中將の君は、甚だいやらしい事よ。またと御出でなされても、口を利くまい。何事をあゝは話し明すのか」など思つて笑ふ時に、遣戸をあけて、兵部は還入つた。

の頃は、うちしきり見ゆる人の、こよひもいみじからむ雨に障らて來らむは、一夜も隔てじと思ふなめりと、あはれなるべし。さらで日ごろも見えず、おぼつかなくてすぐさむ人の、かゝる折にしも來むをば、更にまた、志あるには得せじとこそ思へ。人の心々なればにやあらむ。物見しり思ひ知りたる女の、心ありと見ゆるなどをば語らひて、數多いく所もあり、もとよりのよすがなどもあれば、しげうしも得來ぬを、なほさるいみじかりし折に來りし事など、人にも語りつがせ、身を響められむと思ふ人のしわざにや。それもむげに志なからむには、何しにかは、さも作事しても見えむと思はむ。さねど、雨の降る時は、只むつかしう、今朝まで晴れ、ましかりつる空とも覺えず、にくくて、いみじき細殿の、めでたき所とも覺えず。ましていとさらぬ家などは、とく降り止みねかしたこそ覺ゆれ。月のあかきに來らむ人はしも、十日、二十日、一月、もしは一年にても、まして七八年なほとせやとせになりても、思ひ出でたらむは、いみじうをかすと覺えて、え逢ふまじうわりなき所、人目つゝむべきやうありとも、必ず立ちながらも、物いひて返し、又とまるべからむをばとゞめなどしつべし。

(考異) ○よへも 文字原本になし。○さらで 原本さてとあり。以上古本による。

○例の廂に 例の廂にてと也。廂の間は女房達の詰所なれば、「例の」といへり。○物いふ 兵部がな

と思ふ事も、皆忘れ
てしまひさうであ
る」といふは、何で
さういふのだらうか
え。昨夜も一昨夜も
すべてこの頃は、類
繁に見える男が、今
夜もえらい雨にめげ
ないで来たなら、一
夜も隔を置くまいと
思ふのであるやうだ
と、男の心がやはゆ
いだらう。さうでは
なくて、日頃は見え
なくて、待遠に月日
を過すやうな男が、
こんな雨の降る時に
選りに選つて來うの
をば、一向にまた眞
實の志あるものには
なし得まいと思ふ。
それも人の心だから
であらうか。物事を
見知り辨へ知つた女
の、情心があると見
える者などをば懸に
して、心には思ひな
から、あちこちと通
ふ所もあり、本から

の連れ合ひなどもあ
れば、繁々とも來ら
れないのを、やはり、
さうしたえらい雨の
折に來た事などを、
人にも吹聴させ、わ
が身を譽められ様と
思ふ男の所爲たらう
か。それだとも、一
向に志の無からうに
は、何しにそんな癖
へ事しても、逢はう
と思はう。けれど雨
の降る時は、只氣持
悪く、今朝まで晴れ
晴れしつた空とも
思はれず、憎らしく
て、すぐれた細殿の
結構な所とも思はれ
ない。まして大して
よくもない家などは
早く雨が止んでくれ
よと思はれる。これ
に引換へ、月の明る
い夜に來よう人は、
十日廿日、一月又は
一年でも、まして七
八年になつても、自
分の事を月に思ひ出

り。○などていふにか云々 何とてかくいふならんかと也。「を」は歎辭。以下清少が兵部の言を非難する語。○それがあなたの夜 一昨夜。○思ふなめりと 思ふなめりと思はれて也。○かゝる折 雨の降る時をさす。○志あるには得せじ 愛の心のあるものとは、ようせられまじと也。○人の心々云々 雨降にくる人をあはれといふ兵部もあるに、自分は反對にかく思ふは、人の心はそれぐに違ふ故ならんかと也。○物見知り思ひ知りたる女 物事の目はしが利き、辨へのある女なり。○心あり 情あるをいふ。○語らひて の下、心には思ひながらを補ひて聞くべし。○數多く所 他の情婦の所なり。○もとのよすが 本來のたより所、即ち本妻なり。○さるいみじかりし折 雨降の夜をさす。○人にも語りつがせ 他人にも女に吹聴させと也。○見えむ 女に見られむと也。○いみじき細殿の云々 雨にてはさる場所も風情なしと、大様にいへる也。春註に、逢ひても雨には無興といへるはいかや。○さらぬ家 いみじき細殿ならぬ家なり。○思ひいでたらむは 昔の契をなり。○わりなき所 無理やりなる所。

月のあかき見るばかり、遠く物思ひやられ、過ぎにし事、憂かりしも、嬉しかりしも、をかしと覚えしも、只今のやうに覺ゆる折やはある。こま野の物語は、何ばかりをかしき事もなく、詞もふるめき、見所多からねど、月に昔を思ひ出でて、蟲ばみたる蝙蝠とり出でて、「もとし駒に」といひて立てるが、いとあはれなるなり。雨は心もとなきものと思ひしみたればにや、かた時降るもいと憎くぞある。やむごとなき事、おもしろかるべき事、尊くめでたかるべき事も、雨だに降れば、いふかひなくくち惜しきに、何かその濡れてかこちたらむがめでたからむ。げに交野の少將もど

きたる落窪の少將などはをかし。それも、よべもおと、ひの夜もありしかばこそをかしけれ。足洗ひたるぞにく、きたなかりけむ。さらでは何か、風などの吹く荒れめや」などひとりごちて、忍びたることは更なり、いとさあらぬ所も、直衣などは更にもいはず、狩衣、袍、藏人の青色などの、いとひや、かに濡れたらむは、いみじうをかしかるべし。緑衫なりとも、雪にだに濡れなばにくかるまじ。昔の藏人は、よるなど人の許などに、只青色を着て、雨に濡れてもしぼりなどしけるが、今は晝だに着ざめり。只緑衫をのみこそかづきためれ。衛府などの着たるは、ましていとをかしかりしものを。かく聞きて、雨にありかぬ人やあらむとすらむ。月のいとあかき夜、紅の紙のいみじうあかきに、只「あらず」とも書きたるを、廂にさし入れたるを、月にあてて見しこそをかしかりしか。雨降らむ折はさはありなむや。

(考異) ○もとし 原本もとみしとあり。後撰集、大和物語による。○なるなり 原本なりとあり。○人やあらむとすらむ 原本人やあらんすらんとあり。以上古本による。
○遠く物思ひやられ 遠方にゐる人の上まで、いかならんと推量せらると也。「思ひやる」は排悶の意にも用ゐれど、こゝは想像の意。○もとし駒に 後撰集戀五、詠者未詳「夕やみは道もみえねどふる里はもとこし駒にまかせてぞくる」。これ、韓非子説林に「管仲濕朋、從於桓公、而伐孤竹、春往冬反

したらう事は、非常に面白いと思はれて、よう逢はれまい無理な所や人目を憚るべき譯があつても、立ちながらも屹度話を返して返し、又は泊めてもよいやうなのをば、引留めなどもするであらう。

(口譯)

月の明らかなのを見る位、はるかに物を思ひやられ、過去の事で、憂かつた事も、嬉しかつた事も、面白かつた事も、只今のやうに感ずす折があるかい。狛野の物語は何程の面白い事もなく、詞も古めかしく、見所が少いけれど、月に昔を思ひ出して、蟲の喰つた蝙蝠扇を取出して、「も」とし駒に」といつて立つてゐるのが、ひどく趣があるのである。雨

は面白くないものと思ひ込んだ故かして片時降るのも、甚だ憎いのである。尊い公事でも、面白からう事でも、殊勝に結構であらう事でも、雨さへ降れば、いふ詮もなく残念であるのに、何であの雨に濡れて啣つたのが、結構だらう。まことにおなじ雨でも、交野の少将を非難した落窪の少将などは面白。それも昨夜も一昨夜も、通つて来たからこそ面白い。足を洗つたのが憎らしく汚かつたらう。毎晩纏けて来たのでなくて、何で雨がよからうかい。風などの荒々しく吹く夜に来たのは、頼もしくて、面白くもあるだらう。雪が甚だよるしい。「忘れめや」など獨言して、忍

迷惑失道。管仲曰、老馬之智可用也、乃放老馬而隨之、遂得道。の故事に出づ。○何かその云々兵部の「濡れて來らばうき事も皆忘れぬべし」といへるを否認したる也。○けに 兵部の詞を助けて、雨の風情ある事をいはんとて、「けに」といひ出でたる也。○交野の少将云々 交野の少将を非難したる也。この「交野の少将」は、落窪物語中に出でたる人物にて、右近の少将と落窪の君を争ひし人なり。現存の落窪物語中に、落窪の少将の、交野の少将をもどきたる文字見當らず。但「都の内に女といふ限は、交野の少将めで惑はぬなきこそ羨ましけれ」、また「交野の少将の私物設けむ時は、もしおほやけやけしくて取られむと笑ふ」などあるを思へるか。○落窪の少将 落窪物語の主人公なる右近少将の事なるべし。落窪の君の許へ、雨の降る夜も通ひたること見ゆ。○ありしかば 通ひてありしかばの略。○足洗ひたるぞ云々 上に、それだにを補ひて聞くべし。「足洗ひたる」は、落窪にかの少将雨夜に落窪の君を訪ねて、「帯刀が曹司にて、まづ水もて御足すます」とあるをいふ。○さらでは何か 昨夜も一昨夜も通ひたりしならでは、何か雨に濡れて來るがめでたからむと也。○頼もしくて 力強くてと也。○忘れめや 萬葉四に笠女郎「わが命またけむかざり忘れめやいや日にけには思ひますとも」。但この歌、雨に縁なし。必ず他に典據あらんが、未だ考へず。○さあらぬ所 人目を忍ばで通ふ所。○緑衫 六位の當色の緑なる袍をいふ。ロウサウはリヨクサンの音便。○晝だに着ざめり 晝だに青色を着ざめりと也。○衛府など云々 衛府を帯びたる藏人などの青色着たるはと也。衛門、兵衛の尉は六位の藏人を兼ね、麴塵(青色)の袍を着る。「衛府」は 近衛衛門兵衛をいふ。○をかしかりしものを の下、などて着ざるを略けり。○雨にありかぬ人や云々 雨降に女の許に通はぬ人が出来ることならんかと也。○あらず 用事にてあらずと也。この月をいか見給ふの餘意を含めたり。○廂にさし入れたるを 人のなり。

評 成信のことは、枝扇や早耳の話で、前に二度ばかり出てるが、齊信の中將のやうに、褒めちぎつて

は居ない。尤も道長の養子で、あちら方の人でもあるが、續古事談に、

才學深かられど、心ばへ人にすぐれたり。

とある。本文にも「心ばへをかしようおはす」と見えて、氣立のいいのは結構だが、才學が淺くては、この學者揃才人揃の中宮邊では、さう歓迎はされさうもない。「形をかしかけ」は全く事實で、耀中將の艶名は朝野に喧傳した。

一條院御時、耀中將成信、光少將重家といふ若き有職の殿上人ありけり。さそひいでて、内裏より靈山寺にゆきて、頭おろして、三井寺に向ひけり。中將年廿二、少將は廿五なり。時の左右大臣の御子なり。云々(續古事談)

事談)

この出家は行成の權記によると、長保三年二月の事であつて、餘程前々からの宿望らしかつた。

この中將少將の時、時々内より豐樂院に見まはりけり。人何の心と知らず。後に思ふに、かの所壞れかたぶける事、恰も姑蘇臺の如し。無常の觀念をまして、いよく發心を固くせん爲なるべし。(續古事談)

そこで兼資の娘が忘れられたのも、單なる浮氣からではなくて、かうした深い理由で、愛着の道を厭離されたのではあるまいか。この兼資の娘は、もと隆家の中納言の妾で、二人以上も女の子を設けたが、隆家流罪の後、この成信に逢つて、隆家を袖にした女で、清少の立場からは憎らしい筈だが、男に見捨てられて田舎落をすることは、流石に女同志としては、同情に堪へぬ仕儀だつたらう。所が妙な時世で、明日出立といふ前夜に、その情なし男が暇乞にくるではないか。源氏物語に、六條御息所が娘の齋宮について伊勢に下る前に、源氏の君が音づれる所がある。おなじ事だ。これが何處までも美しく情らしくと振舞ふ、當時の紳士の典型であつた。

(御息所)情なうもてなむにも猛かられば、とかう打歌きやすらひて、おざり出て給へる御けはひ、いと心に

んだ場所は勿論、全くさうでない所でも直衣などを着てゐるのはいふまでもなく狩衣、袍、又は藏人の袍の青色などが、大層冷やかに濡れてあらう、非常に趣があるであらう。縁彩でも、雪にさへ濡れるなら、憎くはないからう。昔の藏人は、夜分など、人の許などに行くに、只青色を着て、雨に濡れて紋りなどして来たが、今は晝でさへ着ないやうである。只縁彩ばかりを着てゐるやうである。衛府などは、まして大層面白かつたものよ。かう自分が雨の夜にくるのを攻撃するのを聞いて、雨の夜には出歩かぬ男が出来様とするだらうか。月の大層明るい夜、紅の

紙の非常に赤いのに、只「何の用事でもない。この月を何と御覽なさるか」とも書いてあるのを、使が来て席に置いて往つたのを、月の明りにさし翳して見たのが面白かつた。雨の降らう折は、さうは出来ようか。

枕草子評釋

し。此方(源氏)は「簀子ばかりの御許されは侍るや」とて上り居給へり。花やかにさし出でたる夕月夜に、打振舞ひ給へるさま匂、似るものなくめてたし。——あけゆく空もはしたなくて、出て給ふ道のほどいと露けし。女も心強からず、名殘哀にて詠め給ふ。ほの見奉り給へる月影の御かたち、尙とまれる匂など、若き人々には身にしてみても、過ちもしつべくめて聞ゆ。(源氏、賢木の巻)

これは本文の注脚であり、清少のゆかしがつた理由を説明するものである。「そのかみ」からは、話が以前に溯る。今こそ少し人らしい平家の養女になつてゐるが、本姓はさつぱり振はない微姓の女がある。そこで若い女房達は、侮蔑的に本姓の方で何兵部とか呼んで、密に溜飲を下けてゐる。あの同情深い中宮様さへ見苦しいと仰になる。よく／＼の事だ。それを親切に知らせてやる人もない。いかに人望がないかわかる。と頭から兵部をこきおろしたのは、實は清少の癩癪が破裂したからである。

一條院の記事は、長保二年の二三月か、八月かのうちである。或晩中宮の御寢所近くの南廂に參つて宿直した。懸想人でなくても、格子をたたく男は多い。うるさいから、人により場合に依つては、狸避入もする。中宮の「そら寝ならむ」のお詞は、全くお手の内であつた。起しに来た兵部が、少納言はどうしても起きませんの報告に、遣戸口まで往つたま、お尻をすゑて、夜深までその男と語り合つてゐる。實にさしまじり心のある奴で、人のお客を横取して話し込むのも圖々しいが、あんな女とベン／＼打解話をして、い、氣になつてゐる男も見識がない、これからは來ても口をきくまいと、陰口は大變だ。男が成信であることは、初から承知なのだ。丁度それが或雨降の一夜であつた。

兵部は雨夜にくる男を、情らしく嬉しいと揚言した。もとより意表の詞で、或は成信を歓迎した自家辯護かも知れないが、成信に無愛想をした清少に取つては、全く耳が痛い。たゞなるすら思はしからぬ

人の憎氣ごとしたる」のだから溜らない。さあ厄鬼となつて攻撃を開始した。或は皮肉に男心を揣摩し、或は痛切に雨のすさまじさを論じて、反復丁寧、波瀾の限を盡してゐる。一體「雨は心もとなきものと思ひしみたる」は尋常の感想で、何の變哲もないが、戀愛問題が搦み付いたので、話が複雑に面白くもなつた。結局月夜を推賞して、や、誇張氣味に「七八年になりても」とまでいつて退けたのは、清少の趣味にもよるが、兵部の「日頃おぼ束なうつらき事ありとも云々」に對した、反駁の矯語と思はれる。

さて漢詩の影響から來たらしい、月夜に遠情をほせ、懷舊の念に耽る感興や、この物語の、月に風情あるのを持出して、雨は仕方がないとけなす。當時禁中の公事などは、多く青天井の庭上で行ふのだから、雨降では略儀になつたり、中止にしたり、實際口惜しい事だらけで、こぼすのも尤である。

狛野の物語のもとこし駒にの場面は、「月のあかきに來らむ人はしも云々」とある清少の理想に打合つたものである。落窪の少將のことは、

げに今宵は三日の夜なりけり。物の始に物あしう思ふらむと、いといとほし。雨はいや増りに増る。——我は只白き御衣一重を着給ひて、大笠さして、帯刀と二人出て給ひぬ。道に衛門の夜行に告められて尿の上についてぬ。これより歸りなむ。尿づきにたり。いと臭くてと宣へば、帯刀「かゝる雨にかくておはしましたらば、御志を思さむ人は、麝香の香にも嗅ぎなし奉りてむ」といへば、かばかり志深きさまに下り立ちて、徒にやなまむと思しておはしぬ。帯刀が曹司にて、まづ水とて、御足すます。(落窪物語抄録)

さて「落窪の少將はをかし」、「さらでは何か」と、一場一抑波瀾横生して、遂に風に及び、雪に及び、雪につけて、青色から縁衫に及んだ。そして流行の變化を歎いてゐる。色相の上では、青色の方が興味が多いが、時世につれて嗜好はいつも變るから、どれが必ずい、と定まつた事はない。只清少はひどく青色を好いてゐるのである。「雨にありかぬ人や云々」は、兵部の詞に對しての當てこすりである。

紅い紙に「あらず」は、濃い墨で書いたのだらう。使が廂にさし入れて往つたのを、月明りに透して讀むのは、面白い仕打である。蜻蛉日記に、

取りてさし出でたれば、簀子にすべり出でて、朧なる月にあて久しう見て入りぬ。

火燭の不便な結果、却て暗中摸索といふやうな物のおぼつかない境に、趣味を感じたことは、現代人の思ひも寄らぬことである。次段にも、炭火で手紙を讀むことがある。

二百五十三段

常に文おこする人の、「何かは。今はいふかひなし」などいひて、又の日音もせねば、さすがにあけたてば、さしいづる文の見えぬこそさうぐしけれと思ひて、「さてもきはぐしかりける心かな」などいひて暮しつ。又の日、雨いたう降る晝まで音もせねば、「むげに思ひ絶えにけり」などいひて、端のかたに居たる夕暮に、笠さしたる童のもてきたるを、常よりもとくあけて見れば、「水ます雨の」とある、いと多く詠み出だしつる歌どもよりはをかし。只けさはさしも見えざりつる空の、いと暗うかき曇りて、雪のかきくらし降るに、いと心ぼそく見出だすほどもなく、白くつもりて、なほいみじう降るに、隨身だちて、細やかにびしきをこの、傘さして、そばの方なるへいの戸より入りて、文をさし入れたるこそをかしけれ。いと白

(口譯)

平生後朝の手紙を、必ずよこす男が、腹立つて「何で中よくなつたのかい。もう彼はいふ詮もない。これまでだ」などいって、翌日は音沙汰もしないから、こちらもその氣では居ても、流石に夜が明ければ、屹度さし出されず手紙の見えないのが物足らないと思つて「それにしても几帳面過ぎた心よ」などいって、その日は暮した。その明る

きみちのく紙、白き色紙のむすびたるうへに引きわたしける墨の、ふと氷りにければ、すそ薄になりたるをあけたれば、いとほそく巻きて、結びたる巻目は、こまぐらとくぼみたるに、墨のいと黒う薄く、くだりせばに、うらうへ書きみだりたるをうち返し久しう見るこそ、何事ならむと、よそにて見やりたるもをかしけれ。まいてうちほゝゑむ所は、いとゆかしけれど、遠う居たるは、黒き文字などばかりぞ、さなめりと覺ゆるかし。額髪ながやかに、おもやうよき人の、暗きほどに文を得て火ともす程も心もとなきにや、火桶の火をはさみあげて、たどぐしげに見居たるこそをかしけれ。

(考異) ○さしいづる 原本になし。古本による。○よりも 原本よりはとあり。旁本による。○へい 原本家とあり。古本による。

釋 ○常に文おこする人 平生後朝の文を、必ずよこす人なり。○何かは 何かは契り聞えむの略。○今はいふかひなし 最早いひ立つる詮もなしと也。○あけたてば 夜の明くれればと也。古今戀一「あけたてば、蟬のをりはへ鳴暮しよるは螢のもえこそ渡れ」。○きはぐしかりける心 際立ちて境目をつけたる心、几帳面な心などの意。○思ひたえにけり かの男はなり。○水ます雨の 引歌未詳。古註は、古今戀二「まこも刈る淀の澤水雨ふれば常よりことまざるわが戀」の詞を略けるにやといへれど、古歌を典據とするには、成るべく成句を引用するが當然なり。略きも變へもしては、通用すべくもあらず。○へいの戸 屏の戸なり。屏を切りて作れる出入口の戸をいふ。○文をさし入れ 文を局にさし入れよ

日、雨が甚しく降る晝時分まで、音沙汰もしないから「男は一向に思ひ切つてしまつたな」などいって、端近い方に出てゐた夕暮に、笠さした童が持つてきた手紙を、平生よりも急いで披いて見ると、「水ます雨の」と書いてあるのは、大層澤山よみ出した歌などよりは面白い。只今朝はさうも見えなかつた空が、大層黒く曇つて、雪が暗くなつて降るに、大層心ぼそく詠めてゐる間もなく、白く積つてなほ盛に降るに、隨身めいて、ほつそりと綺麗な男が傘をさして、そばの方にある屏の戸から這入つて、手紙をさし出したのが面白い。大層白い陸奥紙や白い色紙の結んだ上に、引

也。○結びたるうへに云々 封じ目の引墨なり。○すそ薄になりたる 濃き墨色の末の淡くなれるをいふ。○こまんとくばみたるに 細かく折目の附きて凹みたるにと也。○くだりせばに 行間狭くと也。○うらうへ書き亂り 表も裏も書きすくめたるをいふ。○うちほゑむ所 文見る人がなり。○遠うるたるは 遠く居たる時はと也。

前段の餘波で、聯想は遂に懸想文即ち艶書に立入つた。

痴話喧嘩のはてでもあらう。男は腹立つて歸つたまゝ、その日も翌朝も、手紙もよこさない。無論來もしない。「きはくしかりける心」と怨めしくも思ふ。平生缺かさず挨拶があつただけ、餘計に物足らなさを感ずる。そのうへ朝からの雨で、物寂しさは一入だ。「むげに思ひ絶えにけり」に、男を怨み思ふ心持が出てゐる。夕暮の端居もこれが爲だ。「常よりも疾く」手紙を開封したのも、心待にして居た趣が見える。手紙には、雨ゆゑに戀心が増るといふ意味の古歌の一句が、只一寸書いてあるのみだ。却て意味深長で、折柄の面白い仕打である。

細やかな隨身、雪の日、細殿、傘、みな清少の好に叶つたもので、それに艶書が搦んでは、風情が頗る面白くなつてくる。

次は朋輩の所に來た手紙である。結文は立文を更に結ぶのだから、折目だらけだ。封じ目の引墨の濃淡を、筆先の氷つた爲にしたのは、少し穿ち過ぎではあるまいか。料紙が白いから、餘所ながらも、「さなめり」位は、察して讀める文字もある。裏まで文言を書出すことは、今の人の一向氣の付かぬ事だ。尤も昔のは薄様といつても、可なり厚い物だから、泌み透つて文字の讀めなくなる心配はない。そんなに澤山書續けたことは、その情合の深さを説明するものである。打返し久しう見るのも、折々打ほゑむのも、それが爲で、羨ましげにそれを見遣つてゐる清少の様子も思ひやられる。

火桶の火を挟み上げて、手紙を見るのも、變つた面白い仕打である。寸時も待切れないといつた戀のはやり心が、そこに動いてゐる。「面やうよき人」と但書をつけたのは、風情を重んじたからである。

二百五十四段

きらくしきもの 大将の御さきおひたる。孔雀經の御讀經。御修法は五大尊、藏人の式部の丞、白馬の日大路ねりたる。御齋會、左右の衛門の佐摺衣えうする。季の御讀經。尊勝王の御修法、熾盛光の御修法。神のいたく鳴るをりに、雷鳴の陣こそいみじうおそろしけれ。左右の大将、中少將などの、御格子のつらに侍ひ給ふ、いとをかしげなり。はてぬるをり、大将の仰せて、「のぼりおり」との給ふらむ。坤元録の御屏風こそ、をかしう覺ゆる名なれ。漢書の御屏風は、をしくぞ聞えたる。月並の御屏風もをかし。

(考異) ○えうする 原本やりたるとあり。古本には、やうするとあり。やうはえうの誤ならん。原本の意不明なれば、假に改む。

釋 ○きらくし 光り輝く貌。こゝは威儀の立派に、物のはえある趣にいへり。○大将の御さきおひたる 近衛の大将の前驅の警蹕したるがきらくしと也。○孔雀經 クザクギヤウ。佛母大孔雀明王經の略。不空三藏の譯にて三卷あり。この御讀經は、一頭四臂、孔雀に駕せる孔雀明王を本尊として修する大法なり。○御修法 ミズホフ。ミシホ。修法を見よ。○五大尊 中壇に不動明王、東壇に降三世明王、

渡した封じ目の墨が一寸氷つたので、先の方が薄くなつてゐるのを、披いて見ると、大層細く巻いて結んだ方の巻目は、こまんとくばみたるに、墨が大層黒くまた薄く、行間を狭げに、裏も表も書亂してあるのを、繰返して長いこと見るのが、何事だらうと、餘所ながら見遣つたのも面白い。ましてその人が、讀みながらニヤ／＼するあたりは甚だゆかしいが、離れてゐる時は、格別に黒い文字などはかりが、それだらうと思はれる。額髪が長目で、顔付のいい女が、暗い時分に手紙を受取つて、燈をつける間も待遠いのかして、火桶の火をさみ上げて、覺束なげに讀んでゐるの

が面白い。

(口讀) きらくしきもの 大将の先拂をしたのきらくしきもの。孔雀經の御讀經がきらくしきもの。御修法は五大尊のきらくしきもの。藏人の式部丞が、白馬の日に大路を練り歩いたのがきらくしきもの。御齋會に、左右の衛門の佐が摺衣を疊したのがきらくしきもの。季の御讀經、尊勝王の御修法がきらくしきもの。熾盛光の御修法がきらくしきもの。雷鳴の陣は、甚だ恐ろしい。左右の大将、中少將などが、清涼殿の御格子の際に伺候なさるの



孔明雀王

甚だ面白さうである。雷の鳴止んだ時、大將が差圖の聲かけて「のぼり、おり」と仰しやるのだから。坤元録の御屏風は、面白く思はれる名である。漢書の御屏風は雄々しく聞えた。月次の御屏風も面白い。

中の大極殿に於いて、國家護持の爲に、最勝王經を講ぜしむる法會をいふ。最勝王經は具には金光明最勝王經といひ、唐の義淨三藏の譯にかゝり、十卷三十一品より成る。○左右の衛門の佐云々 御齋會に左右の衛門の列することは、江次第御齋會始に「檢非違使着庭中座糺察非違」とあり。檢非違使は常に衛門の兼帶なるよりかくいへるか。抄本には、御齋會以下はなくて、「その日靱負の佐の摺衣やりたる、尊勝王の御修法」とあり。○摺衣えうする 摺衣を疊すると也。疊はこすりて澤を出すをいふ。○尊勝王の御修法 佛頂尊勝陀羅尼經に據りて、尊勝佛頂を本尊として、息災增益除病滅罪の爲に修する法。尊勝陀羅尼を見よ。○熾盛光の御修法 シジャウクウ。金輪佛頂を本尊として、天變兵亂を鎮むる爲に修する法。天台の密部にては、八字文殊を本尊として修し、大法の一としたり。大聖妙吉祥菩薩説除災救金輪法、又の名熾盛光佛頂軌を本據とす。○のぼりおり 指揮する語。北山抄に「即向御前召左第一將監名、稱唯、越進庭中、跪脱笠置地起、次召右將監同左、上卿仰云陣解介、將監共稱唯、畢左先召、御殿昇(二音)近衛稱唯、仰云下(右又如之)將監取笠懸大刀復本列、相引退出云々」。○坤元録の御屏風 昔宮中にありし有名なる屏風にて、坤元録に載せたる山河などの形を描きたるもの。日本紀略天曆三年の條に「月日、仰左大辨大江朝綱朝臣、令撰坤元録、爲詩題二十首、仰采女正巨勢公忠、令圖畫屏風八帖、仰朝綱朝臣、文章博士橋直幹、大内記菅原文時等、作詩、式部大輔大江

維時撰定之、右衛門佐小野道風書之云々」とあり。坤元録は支那の地誌にて、或は十卷といひ、或は百卷といひ、卷數未詳。○漢書の御屏風 漢書に載せたる事蹟を描きたる屏風なり。全部八帖。江次第、相撲召合南殿儀の條に「御帳東間、東傍御簾南北行、立互漢書御屏風三帖、云々」。漢書はカンジヨと濁りて讀む。後漢の班固の撰にて、前漢の歴史なり。百十五卷。○月次の御屏風 年中行事を描きたる屏風なり。月次は連月の意。○御さき追ひたる。御讀經。五大尊。大路ねりたる。えうする。季の御讀經。尊勝王の御修法。熾盛光の御修法 の下、各、きらくしを略けり。

評

大將は最高武官で、威儀が立派だ。大臣と雖も雑色の前だのに、大將は隨身の前である。

至二條東洞院、隨身雑色不發前音、予(頼長云)大將を退きたれば、隨身の前こそなからめ、よやいと追ふべきものを。此時隨身番長以下雑色等、皆よやい前を追ふ。(日記、保延二年十二月九日任大臣の條)

は、この注脚になる。弓箭兵仗を帶した八人からの隨身が、御前仕うまつるのだから、實に重々しく、派手やかだ。

白馬の行列は、禁中で主上の御覽がすむと、分れて三宮、東宮、齋院等に參る。それに附いて式部丞が大路を練る。白馬の官人は皆武官だが、この丞獨文官で、縫腋を着て、しかも藏人兼任の者だと、今日を晴と麴麴の袍で渡るから、様子が頗る立派だ。されば、

舉周の藏人(赤染衛門の子)白馬の日式部丞にて渡りしを見て、又の日雅致がむすめ(和泉式部の妹)のいひたりし。去りて後なれば、

いづくに目のとまりけむゆき過ぐるおほよそ人と且は見ながら。(赤染集)と、縁の切れた女の目にさへとまつて、縁が戻したくなる程であつた。

莊重な場面である。御齋會に衛門の整した摺衣も、きら／＼しい相當の理由があらう。御修法や御讀經は有難づくめで、しかも密部の修法は、その行儀からして、威嚇的にきら／＼しい。坤元録も漢書も、内容の聯想が多少手傳ひもするが、その字音で呼ぶことも、こは／＼しく重々しく感ぜられた所以だらう。この種の屏風は、當時の流行と見えて、齊信の家の屏風をば、

よるづの御具ども輝くやうに、漢書の御屏風、文集の御屏風などもなほあつめ給ふなれば。(榮華もとの雲)と書いてある。月次の屏風は、年中の公事の項目を書いたのだから、公向のものだが、その又聯想は、一面白いのである。

二百五十五段

方違などして夜深くかへる、寒きこといとわりなく、願なども皆おちぬべきを、辛うじてきつきて、火桶引き寄せたるに、火の大きにて、つゆ黒みたる所なくめてたきを、こまかなる灰の中よりおこし出でたるこそ、いみじう嬉しけれ。物などいひて、火の消ゆるむも知らず居たるに、こと人の來て、炭入れておこすこそ、いとにくけれ。されど、めぐりに置きて、中に火をあらせたるはよし。みな火を外ざまに搔き遣りて、炭をかさね置きたるいたゞきに、火ども置きたるが、いとむつかし。

釋 ○おこしいでたる 火箸にて搔起したると也。○炭入れておこす この「おこす」は熾すの意。○めぐりに置きて 周圍に炭を置きてと也。

(口譯) 方違などして夜深くかへる、寒きこといとわりなく、願なども皆おちぬべきを、辛うじてきつきて、火桶引き寄せたるに、火の大きにて、つゆ黒みたる所なくめてたきを、こまかなる灰の中よりおこし出でたるこそ、いみじう嬉しけれ。物などいひて、火の消ゆるむも知らず居たるに、こと人の來て、炭入れておこすこそ、いとにくけれ。されど、めぐりに置きて、中に火をあらせたるはよし。みな火を外ざまに搔き遣りて、炭をかさね置きたるが、いとむつかし。

を入れておこすのが甚だ憎い。けれど炭を周圍に置いて、中に火をあらせたのはよい。火を皆外の方へ搔退けて、炭を重ねて置いた頂に、火などを置いたのが、甚だ面白くない。

(口譯) 雪が大層高く降つたのを、何時ものやうでもなく、御格子をおろして、炭櫃に火をおこして、話などして集つて伺候してゐると、中宮が、「少納言よ。香鑪峯の雪はどんなだらう」と仰になつたから、自分は御格子を上げさせて、御簾を高く捲上げたので、中宮は興に入つて、お笑ひなされる。他の人々だとも、皆こんな事は知り、歌などにまで詠むけれども、こ

方違には出たが、明日になると、又日が悪くなる場合には、寒からうが、夜深だらうが、遠慮しては居られぬ。早々に局に歸つて嚙り付いた火桶に、ゆくりなく火を澤山見出したのは、實際あり難からう。假令火が消えたにせよ、誰やら來て炭をつぐのは、話の腰を折るものだから、憎らしがつてる。すべて女房生活の實寫と思はれる。炭のつき方の注文は、女だけに行届いて、頗る實際的である。

二百五十六段

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火おこして、物語などして集まり侍ふに、少納言よ。香鑪峯の雪はいかならむ」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く巻き上げたれば、笑はせ給ふ。人々も皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。人々なほこの宮の人には、さるべきなめり」といふ。

釋 ○例ならず御格子云々 何時になく御格子を下してと也。○集まり侍ふに 女房達がなり。○香鑪峯の雪 白氏文集十六、香鑪峯下新ト山居といふ律詩に「日高睡足猶慵起、小閣重衾不怕寒、遺愛寺鐘敲枕聽、香鑪峯雪撥簾看、匡廬便是逃名地、司馬仍爲送老官、心泰身寧是歸處、故鄉可獨在長安。」とあり。○御格子あげさせて 人になり。○御簾高くまきあげ みづからなり。○笑はせ給ふ 中宮がなり。○さる事 白居易の香鑪峯云々の詩句をさす。○なほこの宮の人には云々 やはり中宮の宮仕人には、清少は然るべき人なるべしと也。新註多く誤れり。

の場合思ひ寄らなかつた。人々は「やはりこの宮に奉仕する女房として、然るべき人のやうだ」といふ。

雪とさへいへば、慄へながらもめでたがつた人達が、格子をおろして話し込んでゐたのは、蓋し異例である。中宮の「香鑪峯の雪は」の提唱は、格子をあけさせたかと思召しての御方便だらう。香鑪峯の句は、菅公の名句「都府樓、纒看瓦色、觀音寺、只聽鐘聲」の藍本として著名であり、公任もその朗詠集中に収めたほどで、當時誰知らぬ者もない。撥簾看は中宮の豫期して居られた歸結だが、只それを女房達が、どんな鹽梅に扱ふか、どんな形式で發表するかに、興味をもたれたのである。女房達の中には、折角思ひ寄つても、氣の利いた御答が出来ないので、躊躇した者もあらうが、清少の如く、何もいはずすつと起つて、簾を捲上げる態度に出ることは知らなかつた。これは單なる聯想だけで終るのではなく、更に體現して見せたのである。しかも咄嗟の仕事だけに、いよゝゝその敏慧さに驚かされる。清少が再三名辭を博したのは、文辭上口舌上の才鋒であつたが、これは更に一步を進めた仕打である。清少の手柄話は數ある中に、こればかり後世まで、特に傳稱された所以も、そこにある。「然るべきなめり」が、清少の才女なことを、直接に保證すると同時に、「この宮の」が、中宮の才學に勝れた御方であることを、間接に保證してゐる。甚俊の悦目抄に、「香鑪峯の雪は」を、一條院の勅言とあるのは誤解である。

二百五十七段

陰陽師のもとなる童こそ、いみじく物は知りたれ。祓などしに出てたれば、祭文など讀むこと、人はなほこそ聞け。そと立ちはしりて、白き水いかけさせよともいはぬに、しありくさまの、例知り、いさゝか主に物いはせぬこそ羨ましかれ。さらむ

(口譯) 陰陽師の許にゐる童は、感心によく物は知つてゐる。祓などしに出た時に、祭文など讀む事は、人は

人もがな。使はむとこそ覺ゆれ。

○祓などしに 陰陽師がなり。○なほこそ聞け 尋常に聞く、當り前として聞くなどの意。「なほは直なり。尋常なるをいふ。この句の下、されどを補ひて聞けば解し易し。○しろき水 新鮮なる水。清水。○いかけさせよ云々 病氣にて正氣を失へる人の面などに、冷水を濺ぎ掛けさせよと、主人もいはぬにと也。「いかけ」は沃懸けなり。濺ぎ掛くること。○しありく みづから爲歩くと也。○さらむ人さやうならん人なり。氣の利きたるこの童をさす。

評 既にあり難きもの、段に「使ひよき従者」を數へた以上は、この陰陽師の童を羨ますには居られぬ理由がある。主人の指圖するまでもなく氣が付いて、さつさと仕事をする。「使はむとこそ覺ゆれ」に至つて、もう餘所ながら羨んでゐる餘裕がなくなつた趣が見える。

二百五十八段

三月ばかり物忌しにとて、かりそめなる人の家にいきたれば、木どもなどはかくしからぬ中に、柳といひて、例のやうになまめかしくはあらで、葉廣う見えてにくげなるを、「あらぬものなめり」といへば、「かゝるもあり」などいふに、さかしらに柳の眉のひろごりて春のおもてをふする宿かな。

○木どもなどはかくしからぬ 目立つほどの木立なきをいふ。○柳といひて の下、その癖になど

當り前の事として聞く。けれど物の怪などて氣絶した人などに「清水を濺ぎ懸けよ」とも、主人の陰陽師のいはぬに、そつと立走つてして歩く様子、仕事の例をよく知つて、少しも主人に物をいはずないのが羨ましい。さやうな氣の利いた人もほしい、使はうと思はれる。

(口譯) 三月時分、物忌しに、一寸とした人の家に往つてゐると、庭木なども碌なものない中に、柳といつて、その實普通のやうに優美ではなく、葉が廣く見えて、醜げなのを「柳でないやうだ」といふと、「かゝるふのも柳にはある」などいふので、

さかしらに柳のま
ゆの廣がりて春の
おもてを伏する宿
かな(生意氣に柳
の眉が廣がりて春
の面目を掩つて潰
した宿であるよ)
と思はれた。

(口譯)
その頃又おなじ物忌
しに、前のやうな所
に退出した時に、二
日目といふ日の晝時
分、いよゝ退屈が
増して、物忌を破つ
て、只今でも禁中に
参りたい氣持がする
折にもさ、中宮から
の仰言の御手紙があ
るので、大層嬉しく
て見る。淺緑の紙に、
女房の宰相の君が、
大層面白くお書きな
された。
いかにして過ぎに
し方をすぐしけむ
暮しわづらふ昨日
けふ哉(どうして

從來は過して来た
事だらう、お前が
退出してから、退
屈で暮しかれたこ
の頃であるよ)
と、中宮のお歌が書
いてあつた。宰相自
身の詞としては「今
日一日も千年の心持
がして待遠なのを
この曉になりとも早
くお返り下さい」と
書いてある。この宰
相の君の仰しやるの
でさへも面白からう
ものを、まして中宮
の仰言の様子では、
疎そやにならぬ心持
がするけれど、下手
な御返事は申し上げ
う事とは思はないの
である。

いふ語を補ひて聞くべし。○あらぬ物 柳にあらぬ物なり。○かゝるも かゝる柳もと也。○さかしら
にの歌 生意氣にも柳の芽が廣がりて、春の面目を潰す宿なるよと也。「柳のまゆ」はその芽の萌えたる
様を、蠶の形に喩へていふが本なるが、こゝは「おもて」の縁語として、眉の意を響かせたり。「おもてを
伏す」は面を伏すること、即ち面伏ともいひて、面目を失ふの意。

そのころ又、おなじ物忌しに、さやうの所に出でたるに、二日といふ晝つかた、いと
どつれど、まさりて、只今も参りぬべき心ちする程にしも、仰言あれば、いとうれ
しくて見る。淺緑の紙に、宰相の君、いとをかしく書き給へり。

いかにしてすぎにし方をすぐしけむくらしわづらふ昨日けふかな。

となむ。わたくしには、宰相の君、今日しも千年の心ちするを、曉だにとくとあり、こ
の君のの給はむだにをかしかるべきを、まして仰言のさまには、おろかならぬ心ち
すれど、啓せむ事とは覺えぬこそ。

雲のうへにくらしかねける春の日を所がらともながめつるかな。

わたくしには、「今宵のほども、少將にやなり侍らむずらむ」とて、曉に参りたれば
昨日の返し、暮しかねける、いとにくし。いみじうそしりき」と仰せらるゝ、いと
わびしう、まことにさることなり。

(考異) ○暮しかねける 原本暮しかねける、こそとあり。○さる事なり 原本さる事もとあり。以上古本による。

釋 ○さやうの所 上に「かりそめなる人の家」とあるをさす。○只今も参りぬべき 中宮のお前になり。

○おほせ言 中宮よりのなり。○いかにしての歌 清少の居らぬ故物寂しくて、昨日今日の僅か一日二
日すら、かく暮しかねるを、如何にして清少の宮仕せぬその以前は、過し來りしことならんと也。○と
なむ の下、宮の仰せられつるを略けり。○私には 中宮の仰を傳ふるに對して、宰相の君自身の意中
を陳ふる爲に、かくいへり。次にあるも同意にて、清少の中宮への御返事の序に、宰相の君に告ぐる故
にいへり。○千年のこゝちする 後拾遺集戀二、詠者未詳「暮る、まは千年をすぐす心ちしてまつはま
ことに久しかりけり」。待つに松をかけたなり。○曉だにとくとく の下、参り給へを略けり。○この君 宰相
の君。○啓せむ事とは云々 拙き御返しは、中宮に申上げん事とは思はぬなりと也。「こそ」の下、あれ
を略けり。○雲のうへにの歌 雲の上にも暮しかね給へる、この春の日なるを知らずして、かゝる所
の一人ゆゑに暮しかねるかと思ひて、物思しつる事よと也。「雲の上には雲の上にも」の意。○少將にや
云々 春註に「百夜通へといひし女のもとへ、九十九夜ゆきて、今一夜を待あへずしてうせたりし、深草
の少將の世がたりにていへる詞にや。清少も早く参りたき心いられて、今夜一夜を待かねてうせ侍らん
となるべし」とあるに、假に従ふ。○暮しかねける云々 暮しかねけることを、清少は只所柄とのみ詠
めて、中宮が清少を待兼ねさせ給へる御心中を察せざりしを、中宮もわるしと宣ひ、女房達も譏れる也。
「いみじう譏りき」は女房達がなり。

評 前段の陰陽師の童から、物忌の叙事に入つた。

一寸とした家だから、庭にだつて碌な植木はない。宿柄か柳さへ變な葉で、流石の春も趣がない。歌
にも「春のおもてを伏する宿」と詠んでゐる。この葉廣柳は川楊で、もあらう。一體普通のでも葉の開い
たのは、清少は嫌ひであつた。

しては、殆ど耐へ得まい。そこに中宮の仰言は優曇華の花だ。「いかにして」の歌は、千載集の詞書に、一條院の御時、清少納言、始めて侍りける頃、三月ばかりに、二三日まかり出て侍りけるに、かの宮より遣はされて侍りける。

とある。始めての一語は、この間の事情を、最もよく説明してゐる。「思召すやうこそは」と、初宮仕から、中宮の御意に協つた清少だから、居ないと實にお寂しう思召されたらうに、それを一向お察し申さなかつたらしくも聞える調子の返歌なので、「いみじう譏りき」と、一寸お慰におからかひなされたのだが、當人の身になつて見ると、なか／＼笑事ではない。若し申し損つたかと、大心配だ。初奉公してから僅四月目だものを。されば、この記事は正暦三年の三月の事らしい。

二百五十九段

清水に籠りたるころ、茅蜩のいみじう鳴くを、あはれと聞くに、わざと御使しての給はせたりし、唐の紙の赤みたるに草にて、

寫山ちかき入あひの鐘のこゑごとに戀ふる心のかずは知るらむ。

ものを、こよなの長居や」と書かせ給へる。紙などのなめげならぬも。取り忘れたるたびに、紫なる蓮の花びらに書いてまゐらする。

○清水 京の音羽山清水寺。本尊千手觀世音菩薩。阪上田村磨の建立。○の給はせたりし 中宮のなり。○山近きの歌 山近き入相の鐘の聲を聴く毎に、その數を數へて、お前を戀ふるわが心の數は知ら

日を、自分はこの所柄かうも退屈なのかと思つて詠めたことよ

と申上げ、宰相への私信としては「今夜の間でも、少將になりますかとも知れませんと」と書いて、曉に参つた所が、中宮が「昨日の返歌に暮しかれけるとあるのは甚だ憎らしい。大層皆がわるくいつた」と仰になるのが、甚だつらく、さう非難されるも、洵に尤もな事である。

(口譯) 清水に籠つてゐた頃、蜩が盛に鳴くのを面白くと聞く程に、中宮からわざ／＼御使で仰になつた。料紙は唐渡の紙の赤みがあるのに草書きで、「山近き入相の鐘の聲ごとに戀ふる心の數は知るらむ。」(山際ちかき寺の夕

暮の鐘は、數を擲くが、その聲毎に、其許を戀しう思ふわが心の數は、思ひ知る事だらう)ものを、この上ない長逗留であるよ」とお書きなされた。紙などの失禮にならぬのを、取忘れた際、御返事を紫の蓮の花びらに書いてさし上げる。

る、ならんと也。「山」は清水寺の後方なる音羽山なり。「入相」は夕暮なり。○ものを 歌より續けて、戀ふる心の數は知る、ならんものをと解く。○こよなの長居や この上なき長逗留よと也。○取忘れたるたび 「たび」は、度に旅の意をかけたなり。○書きて参らする この句連續言にて止りて 文意完了せず。次に清少の返歌のあるが脱けたるなるべし。○草にて 草書きにて。
清水寺の結構は、所謂棧造で山に倚り、雲端鐘韻逐風去、澗口泉聲穿石流(道長作)といつた趣で、夏秋の交は蜩の本場だ。「蜩の鳴きつるなべに日は暮れぬ」と、古歌にもあるやうに、この聲は夕暮をせき立てる。「御手紙の色の赤みたる」のは夕暮の象徴で、御歌の入相の鐘に響かせた御趣向である。かう何もかも夕暮に打合つた事が、頗る清少の興味をそつたので、適當ない、紙のないがまゝに、御返事を紫の蓮花に書いたとある。紫も夕暮の色相である。この蓮花は、散花の蓮花だらう。法會の際に撒かれたを拾つて置いたので、色々なのがある中から、特に紫のを擇出した。
大殿のうへ(道長の妻倫子)が、「思ひきや」の歌を贈つた(百廿四段の評中に出つ)のも、この時の事か。(續後拾遺集に、その歌を道長の作としたのは誤だらう)

二百六十段

十二月廿四日、宮の御佛名の 初夜の御導師聞きて出づる人は、夜なかも過ぎぬらむかし。日ごろ降りつる雪の、今朝はやみて、風などのいたう吹きつれば、垂氷のいみじうしだり、土などこそむらく黒きなれ。屋のうへは只おしなべて白きに、あ

(口譯) 十二月廿四日、中宮の御方である御佛名會の、初夜の御導師の佛名經讀誦を聞いて退出する人は、夜

中も過ぎたらうよ。日頃降つた雪が今朝は止んで、風などが甚しく吹いたので、垂氷が甚しくさがり、土などこそむらむらに黒くもあれ、岸の上は只一體に白いの、いやしい賤の家も、雪にうはべを隠して、それに在明の月が隈もなく明るいの、大層面白い。屋根は恰も銀などを葺いたやうであるに、垂氷は水晶の溜などいひたいやうで、長く短く、わざわざ懸渡した物と見えて、詞にもいひ切れぬ程見事なのに、下簾も懸けない車の簾を、大層高く上げたので、奥までさし込んだ月に、薄色、紅梅、白のいなど、七つ八つほど、着重ねた上に、濃紫の衣の大層鮮やかなつやなど

やしき賤の屋もおもがくして、在明の月のくまなきに、いみじうをかし。白かねなどを葺きたるやうなるに、水晶のたきなどいはまほしきやうにて、長く短く、ことさら懸け渡したると見えて、いふにもあまりめてたきに、下簾も懸けぬ車の簾をいと高く上げたれば、奥までさし入りたる月に、薄色、紅梅、しろきなど、七つ八つばかり着たるうへに、濃き衣のいとあざやかなる、つやなどはえてをかしう見ゆる傍に、蒲萄染の固紋の指貫、白き衣どもあまた、山吹、紅など着こぼして、直衣のいと白き紐を解きたれば、ぬぎ垂れられて、いみじうこぼれたり。指貫の片つかたは、とじきみの外にふみ出されたるなど、道に人の逢ひたらば、をかしと見つべし。月かげのはしたなきに、うしろざまへすべり入りたるを、引き寄せあらはになされて、わぶるもをかし。「凜々として氷鋪けり」といふ詩を、かへすがへす誦んじておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、いく所の近くなるもくちをし。

(考異) ○過ぎのらむかし の下、原本は「里へも出て、もしは忍びたる所へも、夜のほど出づるにもあれ、相乗りたる道の程こそをかしけれ」の一文あり。前後の意疏通を缺くところあれば、古本によりて略く。○しろかねなどか葺き 原本かねなどおしへぎとあり。古本による。○水さうのたき 原本水しやうのくきとあり。水本による。

○めでたきに 原本めでたき垂氷にとあり。古本による。○たれば 原本たるはとあり。抄本による。○つやなどはえて 原本つやなど月にはえてとあり。上に「さし入りたる月に」とあれば、この月には重複なり。よりて削る。○紐を 原本ひきとあり。古本、抄本による。○わぶる 原本笑ふとあり。古本による。

か、榮えて面白く見え、胸に、蒲萄染の固紋の指貫をけき、白い単など澤山重ねて、山吹や紅などの衣を出して、直衣の大層白い紐を解いたので、直衣がはづれて下つて、下の着物が大層あらはになつてゐる。指貫の片方は、軾の外に踏出されてゐるなど、途中で人が逢つたならば、面白いと見るだらう。月が明る過ぎ、後の方へとすべり込んだのを、男に引寄せられてあらはにされて、迷惑がるのも面白い。男が「凜々として氷鋪けり」といふ詩を、繰返し繰返し吟じて居らるゝのは、甚だ面白く、夜通しも歩きたいのに、行先の近くなるのも残念である。

○十二月廿四日 年代不明。○宮の 中宮の御方のなり。○そやの御導師 佛名會は初半後の三夜にわかち、各その導師を別にす。「そや」は初夜なり。導師は法會の時の唱導の師なり。江次第十一、御佛名の條に「初夜乃御導師、某大以法師(自亥二刻至子一刻) 半夜乃御導師某法師(自子二刻至丑一刻) 後夜乃御導師某法師(自丑二刻至寅三刻)」。○聞きて 御導師の佛名經讀を聞きてと也。○夜なかも云々 初夜乃佛名會は、子の一刻即ち午前零時半に終るなり。後夜を見よ。○けさは 廿五日の朝なり。○垂氷 タルヒ。氷柱のこと。俗にいふツラ、。○いみじうしだり 軒端より甚しく垂さがりと也。「しだり」は末垂の義。○屋のうへは 以下雪を叙す。○面隠して 表面を蔽へるをいふ。○水晶のたき 以下、垂氷を叙す。○薄色紅梅云々 女の裝束なり。○蒲萄染の云々 男の裝束なり。○白き衣 單袖などならん。○山吹紅など 出衣ならん。○着こぼして 外に見ゆるやうに着たるをいふ。○とじきみ 軾。車の前方のかまちをいふ。和名抄に「軾、音式、和名車乃止之岐美、車前也」。○引き寄せられ 男に前の方へ引寄せられと也。○凜々として氷鋪けり 朗詠集、八月十日夜に公乘億「秦甸之一千餘里、凜々氷鋪、漢家之三十六宮、澄々粉飾」とあり。明月の光は、秦國の周圍一千餘里に冴わたりて、氷を鋪きたる如く、漢王の三十六の宮殿に澄渡りて、白粉を飾れる如しと也。「凜々」は字書に「寒也、又凄清也」と見ゆ。○おはする 男のなり。

この廿四日の佛名は、中宮の里第で行はれたので、禁中ではない。禁中では十九日から三日間あり、それが済んでから、中宮、東宮のは行はれた。

月下雪後の景は、寫生の妙を窮めた筆づかひで、雪と垂氷とを、あざやかに書分けた手際は、敬服に値する。「土などのむらく黒き」は、氷雪の白色を反映させる氣の利いた句で、「殊更に」の副詞は、軒の垂氷に有意味の感じを與へる。

隙も下さず、下簾も懸けぬあらはな車に、男女の合乗は、冬の夜だけに珍しい。

車の軒から斜にさし込む弦月の光は、あざやかな衣色の反射によつて、いよ／＼寒けである。それに男の紐まで外した、打解け切つた自ま、な容體、興趣に浮かれて、他に何物もないといった調子である。「をかしと見つべし」と自認はしながらも、餘りの顯證を壓はずには居られぬ所に、婦人の情味が漂ふ。それを又、端近く引張り出す男、素直にあらはになされてゐる女、互になまめきはす様子は、甚だ艶なものだ。つい今の先までも、菩提聲を打上げた罪障消滅の信心を、初夜で中座して、何處へまた罪障を作りにゆく氣か。「凜々氷舖」の朗詠に、いよ／＼惚々して、夜通しかうして歩きたいといふ。鞍馬おろしに底冷のする寒夜も、全く忘れてゐる。これ等の光景と氣分は、實に面白い。「道に人のあひたらば云々」は、清少の持論である。

さてこの女は清少自身とも聞えるが、又餘に印象を強く出さうとして、自叙のやうになつたとも見られる。

二百六十一段

宮仕する人々の出て集まりて、おのが君々の御事めて聞え、宮の内外のはしの事ども、かたみに語り合はせたるを、その家あるじにて聞くこそをかしかけれ。家廣く

(口釋)
宮仕する人達が、里に出て集つて、銘々自分の御主君の御事

清げにて、親族は更なり、只うちかたらひなどする人には、宮仕人、片つ方にすゑてこそあらまほしけれ。さるべき折は、一所に集まり居て物語し、人の詠みたる歌、何くれと語りあはせ、人の文などもてくる、もろともに見、返事かき、又むつまじうくる人もあるは、清げにうちしつらひて入れ、雨など降りて得歸らぬも、をかしくもてなし、參らむをりは、その事見入れて、思はむさまにして、出し立てなどせばや、よき人のおはします御有様など、いとゆかしきぞ。けしからぬ心にやあらむ。

(考異) ○おのが、原本になし。○語りあはせたるを、の下、原本おのが、君々とあり。以上古本による。

○出で集まり 宮仕所よりなり。○宮の内外のはしの事 宮の内外に關する出來事の一端と也。古本にはこの句「宮の内殿ばらの事」とあり。○その家あるじ 出集りたる家の主人なり。○只うちかたらひ云々 只話し合ひなどする位の友達にてもと也。○片つ方 家のなり。○文などもてくる その宮仕人の許になり。下に、をの辭を補ひて見るべし。○むつまじうくる その宮仕人の許になり。○うちしつらひて 室内の裝飾をしてと也。○得歸らぬ その客人がなり。○參らむ折は その宮仕人のなり。○その事見入れて 參る支度の世話をしてと也。○よき人の云々 高貴の方のあらせらる、御様子と也。○ゆかしきぞ 奥ゆかしきなるぞと也。○けしからぬ云々 此は我ながら怪しからぬ心ならんかと也。評 こんな理想は實現されぬ事はない。只自分のお客でもない者の出這入りの世話までしたいといふのは、一寸變つた物好である。宮中の消息が知りたい、よき人の御様子がなつかしい。これも相當の理由ではあるが、或時は親めいたり、或時は友達めいたりして、宮仕人と暮りたいなどは、決して、普通の家庭

をおほめ申上げ、宮まはりの一寸とした事なども、互に話し合つてゐるのを、自分がその家の主人で聞くのが面白い。家が廣く綺麗で、親屬はいふまでもなく、只一寸話し合ひなどする人も、宮仕人を家の片端に置いてあつた。然るべき時には、その人達と一緒に集りて話をし、人の詠んだ歌、何やかやと話し合ひ、人の手紙など持つてくるのを、一緒に見たり、返事を書いたり、又懇意に来る朋輩もある時は、綺麗に家の中を裝飾して迎へ入れ、雨などが降つて歸られないのを、面白く待遇し、又その宮中に上らう折はその事の世話をして、思ふ存分な様にして出して遣りなど

したい。貴い方の御様子などが、大層ゆかしいのであるぞ。これは我ながら變な心であらうか。

の女主人公の考ではない。自分でも「怪しからぬ心にや」と嘲つてゐる。但これには深い理由がある。宮仕人はその里とする家に、とかく適當な安心なのがないので、閉口する。親の家なら何でもないが、それが兄弟の家、家來の宿、他人の邸となると、随分むづかしい、面倒ないきさつが生じてくる。宮仕人の里(百五十六段)の本文を参照したら、忽ち了解がいかう。そこで宮仕人に、そんな苦勞を掛けない、面白い合宿所を造つてやりたくなる。

自分が女房生活者なので、かうした事も思ひ寄るが、一面には、もう男狂でもあるまいといふ年配の獨身女が、心の底の寂しい影から遁れて、只賑やかなハシヤイダ生活を追はうとする、もがきではあるまいか。

二百六十二段

見ならひするもの 欠伸。ちごども。なまけしからぬえせ者。

○なまけしからぬえせ者 何となくよからぬ賤者。

評 欠伸のうつるのは昔からと見えた。乳兒共やえせ者は、故意に眞似る方で、乳兒は模倣の天才である。殊にえせ者の生けしからぬ奴と來ては、身分も忘れて、無闇と僭上らしい模倣をする。

二百六十三段

うちとくまじきもの あしと人にいはるゝ人。さるは、よしと知られたるよりは、

(口譯) 氣の許されまいもの

うらなくぞ見ゆる。船の路。

悪いと人からいはれる人は、氣が許されぬ。それは善いと知られてゐる人よりは、却て奥底な？見える。船路は氣が許されぬ。日が麗らかであるに、海上がひどく長閑で、淺緑の衣を打つたのを引渡した様に見えて、少しも恐ろしい氣色もない時に、若い女の袖ばかり着たのが、侍の者の若やかな者と一緒になり、櫓といふ物を押して、歌を盛に歌つたのが、大層面白く、貴い方にもお見せ申上げたと思ひながらゆくと、風がひどく吹いて、海上が只荒れに荒れてゐるなるに、夢中になつて、船泊りする所に漕ぎける間、船に波が打懸けた有様などは、あれ程穩やかに

日のうらゝかなるに、海のおもてのいみじうのどかに、淺緑打もたるを引き渡したるやうに見えて、いさゝか恐ろしき氣色もなきに、若き女の、袖ばかり着たる、侍の者の若やかなるもろ共に、櫓といふ物押して、歌をいみじううたひたる、いとをかしう、やむごとなき人にも見せ奉らまほしう思ひいくに、風いたう吹き、海のおもての、たゞ荒れにあしうなるに、物もおぼえず、泊るべき所に漕ぎつくるほど、船に浪のかけたるさまなどは、さばかり、なごかりつる海とも見えさずかし。思へば、船に乗りてありく人ばかり、ゆゝしきものこそなけれ。よろしき深さにてだに、さまはかなき物に乗りて、漕ぎゆくべきものにぞあらぬや。ましてそこひも知らず、千尋などもあらむに、物いと多く積み入れたれば、水際は只一尺ばかりだになきに下衆どもの、いさゝか恐ろしとも思ひたらず、走りありき、つゆあらくもせば沈みやせむと思ふに、大きな松の木などの、二三尺ばかりにてまるなるを、五つ六つ、はうくくと投げ入れなどするこそいみじけれ。やかたといふ物にぞおはす。されど、奥なるは、いさゝかたのもし。端に立てる者どもこそ、目くるゝ心ちすれ。早緒とつけて、櫓とかにすげたる物の弱げさよ。絶えなば何にかはならむ。ふと落ち

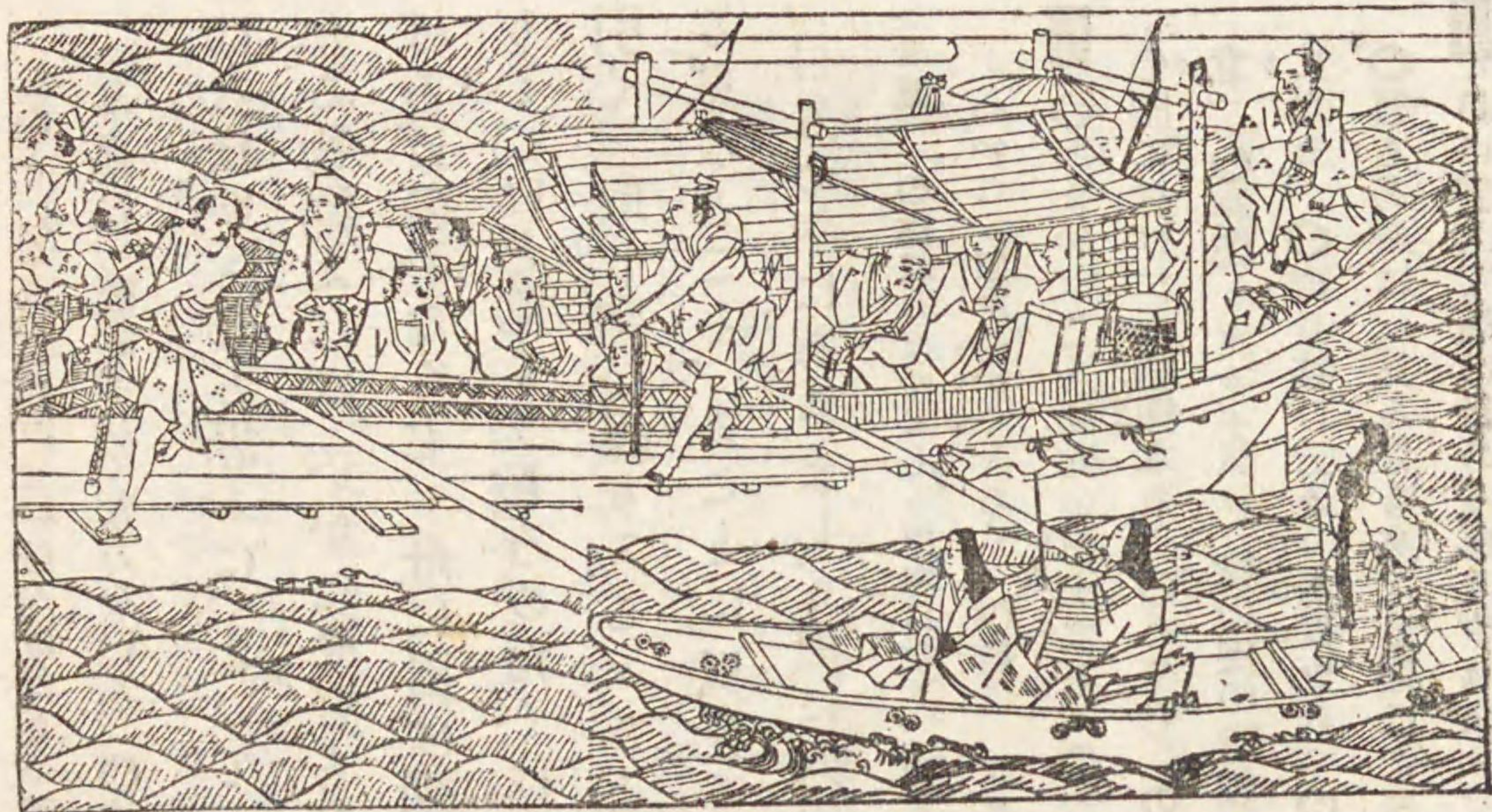
あつた海とも見えな
いよ。思へば船に乗
つてゆく人位、いや
なものはない。い
加減な深さまでへ
見た様のタライもな
い物に乗つて、漕行
くべきものではない
ぞや。まして底のは
てもわからぬ、千尋
などもあらう海に、
船には物を大層多く
積込んだがら、水際
は只一尺ほどすらな
いの、下衆共が、
少しも恐ろしいとも
思つてぬないで、驅
歩き、一寸でも荒く
もせうなら洗むたら
うかと思ふのに、大
きな松の木などの二
三尺位な丸いのを、
五本も六本も、ほん
ほんと投込みなどす
るのが、ぞろい事だ。
貴い方は屋形といふ
大船にお乗りなさ
る。けれどそれも、奥
にゐる者は少し氣強

い、端の方に立つて
ゐる者こそ、目も眩
む心持がする。早緒
と名を付けて、櫓と
かいふ物に上げた物
の弱さうな事よ。切
れようなら何になら
うかい、つい一寸海
に陥つてしまはう
よ。その早緒すら大
して太くなどもな
い。自分の乗つた船
は綺麗で、帽額の簾
かけ、妻戸あげ、格子
を上げなどして、け
れど他の船と同じや
うに、重さうになど
もないが、只家の小
さいのである。多少
安心だ。他の船を見
渡すのが、甚だ恐ろ
しい。遠くにあるの
は、實に笹舟を作つ
て撒散したやうに、
よく似てゐる。船が
がりした所で、泊船
毎に火をともしたの
が、面白く見える。大
船と名づけて、大

入りなむを。それだにいみじう太くなどもあらず。わが乗りたるは清げに、帽額
のすかけ、妻戸あげ、格子あげなどして、されど、ひとしう重げになどもあらねば、た
だ家の小きにてあり。こと船見やるこそいみじけれ。遠きはまことに、笹の葉を作
りて、うち散したるやうにぞ、いとよく似たる。泊りたる所にて、船ごとに火とも
したる、をかしう見ゆ。はし舟とつけて、いみじうちひさきに乗りて漕ぎありくつ
とめてなど、いとあはれなり。「あとのしら浪」は、まことにこそ消えもてゆけ。よ
ろしき人は、乗りてありくまじき事とこそ、なほ覺ゆれ。かち路も亦、いとおそろ
し。されどそれは、いかにもく地につきたれば、いと頼もし。

(考異) ○なきに 原本に文字なし。○多く 原本になし。以上古本による。○帽額のすかけ 原本帽額のすかけ
とあり。原本の一本による。○妻戸あげ 原本妻戸とあり。古本による。

○さるは 上の「あしと人」にはる、人「をさす。○うらなく 裏なくなり。奥底なきをいふ。○淺緑
打ちたる 淺緑の衣打ちたるの略。打衣を見よ。○着たる の下、がの辭を補ひて見るべし。○思ひい
くに 思ひつ、往くと也。○なごかりつる 和くありつるにて、風ぎてあるをいふ。○さまはかな
き物 舟をいふ。○そこひ 底の限をいふ。そきにおなじ。○千尋 尋は兩手をひろけたる程の距離の
稱にて、八尺を一尋といふ。○物いと多く云々 の上、船を補ひて聞くべし。○水際は 水際までの
距離はと也。○ほくくと 擬聲語なり。ボンくと、又ボンくと。○やかたといふ物にぞおはす
貴人はを、上に補ひて聞くべし。○やかた 船屋形。和名抄に「笹庫、和名布奈夜加太、船上屋也」。○



屋形船 (傳繪師大光圓)

奥なるは 屋形の奥なるはと也。○早緒とつけて 早緒
と名づけてと也。○早緒 櫓につけたる繩をいふ。○清
けに の下、屋形を補ひて聞くべし。○あけなどして
の下、あるを略けり。○ひとしう 他の船と等しく
と也。○重げになどもあらねば この句續き悪く、前後
の意たじろく。「あらねば」はあらねどの誤ならん。又思
ふに、「格子あげなどして、只家の小きにてあり。されど
等しう重げになどもあらず」とあるが錯簡したるならん
か。或は「ねば」を「天の川淺瀬しら波たどりつ、渡り
はてねば明けぞしにける」(古今集)の如き、特殊の用法
と見て、重げになどあらねば不安心の管なるに、安心せ
られて、その様は、只家の小きにてありと解すべきか。
○小きにてあり の下、や、頼もしなどいふ語を含め
て見るべし。○笹の葉を作りて 笹の葉を舟に作りての
略。所謂笹舟なり。○はし舟とつけて はし舟と名づけ
てと也。○はし舟 今のハシケ舟。和名抄に「漢語抄云、
艇、手夫禰、遊艇、波之布禰、小舟也」。○あとのしら浪
拾遺集哀傷に、沙彌滿誓「世の中を何にたとへむ朝ば
らけ漕ぎゆく舟のあとの白波」とあるによる。跡の知ら

れぬといふに、白波をいひかけたり。萬葉集には、三句朝びらき、結句あとなきがごととあり。○消えもてゆけ 痕跡のなくなるをいふ。○地につきたれば 地上なるをいふ。

海はなほゆゝしと思ふに、まいて海士のかづきしに入るは憂きわざなり。腰につきたる物絶えなば、いかにせむとなむ。をのこだにせばさてもありぬべきを、女はおぼろげの心ならじ。舟に男は乗りて、歌などうちうたひて、この桡繩を海にうけありく。いと危くうしろめたくはあらぬにや。海士ものぼらむとは、その繩をなむ引く。取り惑ひ繰り入るゝさまぞ、ことわりなるや。船のはたをおさへて、放ちたる息などこそ、まことに只見る人だにしほたるゝに、落し入れて漂ひありく男は、目もあやにあさまし。更に人の思ひかくべき業にもあらぬことにこそあめれ。

〔考異〕 ○海はなほゆゝし 原本になし。○まいて 原本になし。○かづきしに入る 原本がづきしたるとあり。○いかに 原本いかにとあり。○船に 原本になし。以上古本による。

〔釋〕 ○あまの こ、は女の海士なり。○かづき 潜きなり。水をくゆるをいふ。○腰につきたる物 海士の腰に付けたる桡繩なり。○となむ の下、覺ゆるを略けり。○おぼろげの 大方の、並大抵のなどの意。○桡繩 タクナハ。楫の皮の纖維にて作れる繩。○うけ 浮ぶること。○のぼらむとは 水上になり。○取り惑ひ云々 男がなり。○船のはたを云々 海士がなり。○おとし入れて 海士をなり。○目もあやに 見る目も文なる程にと也。目ぶしき程に、目も眩む程にといはんが如し。

〔評〕 口に蜜して腹に針ある悪人や海路は、今でも氣が許されない。

層小さな舟に乗つて
漕行く早朝など、甚
だあはれてある。舟
の漕去つた「あとの
白波」は、古歌にい
つた通り、ほんに迷
しに消えてゆく。大
抵な人は乗つて行く
まい事だと、やはり
思はれる。徒路も亦
大層恐ろしい。けれ
どそれは、とにかく
地上に立つてゐるか
ら、大層力強い。

〔口譯〕
然し海はやはりい
だと思ふに、まして
海士が潜きしにはひ
るのは、心憂い仕業
である。腰に付いて
ゐる物が絶えような
らば、何とせうと思
はれる。男でもする
なら、それでもよ
からうものを、海士は
並大抵の心ではある
まい。よく／＼のこ
とだ。舟に男は乗つ
て、香氣らしく歌な

風渡つた海面を、緑の打衣に喩へたのは、比喩が適當で、流石に婦人らしい。若い女が表着なしの袴穿かすで、腰結一つした姿は、まさに賤の女の風體である。侍の者といつたとて、主人持ではない。船頭である。一艇の櫓に、この夫婦がつかまつて、

唐泊より川尻おす程は、いとかなしき妻子も忘れぬ。(源氏、玉葛の巻)
妻もさだめゆの岸のひめ松。(住吉物語)

とか何とか歌つて、甚だ香氣なもののさ。そのうち風が出て波が白く立つが最後、大變で、やつと泊に着いても、安い心地はない。

考へて見れば、危なかしい板子一枚下は地獄の舟の上に、重荷を積込んだり、驅歩いたりする船頭の心理状態がわからぬといつた調子で書いてゐる。松の木を投込む所など、いゝ印象である。

屋形船は、船體もいさ、か大きい、やはり水の上だ。細い早緒は、最も便ない。遠方の船が、小供の笹舟位に見えるのものはかない。自然に對しての人間の仕事の小ささ、を、しみ／＼感じさせる。元船に往來するは、しけの様子は、今と大差はない。見るまゝに波上に影を没してゆく光景は、滿誓の歌によつて、いよく世の無常觀をそゝる。

以上の觀察は、すべてこはい心細いの色眼鏡を透したもので、その結論は「よろしき人は乗りてありくまじき事」となつた。その癖「やむごとなき人にも見せ參らまほしう」と揚言した時であつたが、

前節と後節との楔子として、徒路の恐ろしさを擧げたのは、なほ命題の本意が見える。徒路の恐ろしさは、現代では了解がむづかしい。當時追剥強盜は、所在に充滿してゐたので、丹波路の大江山、大和路の栗子山などは、特にその名所であつた。うっかりすると命までも取られる。

後節の潛女の條は、殊によく出てゐる。同性だけに、流石に思やりが深い。同情すればする程、男の

どを歌つて、この桡繩を海に浮べてある。甚だ危険に氣がかりではないのだから、海士も昇らうとして、その繩を引く。すると男が周章で、繩を繰上げる様子は尤でもあるよ。海士が船端をおさへて放つた息などは、苦しげであつて、洵に只見る人ですらしほしほとするに、その海士を海中に陥れて漂ひある男は、目も向けられない程に、驚かされる。更に人の思ひかくべき仕業でもないことであるやうだ。

海士が無情らしく憎々しくも感ぜられてくる。兩者の反映が、極めて際やかである。今の蟹は腰繩を付けないが、昔のは皆付けた。「船の端をおさへて放ちたる息」は、漫然と聞過してはならぬ。蟹のつく息は、尋常の息ではない。溜めに溜めてつく息なので、恰も笛を吹切る時のやうな響がする。あんな切ない目を見るのかと思ふと、「見る人だにしほたる」のである。「落し入れて」は、いかにも憎體らしいひ方である。

中古文に海の記事は尠い。源氏の須磨明石の巻には、迅雷暴雨の海を描寫した名文があるが、あれは尋常の場合でない。これは平素海に對してもつ人間の恐怖心をとほしての觀察で、特殊の場合でないだけ餘計に、點頭かれる點が多い。

清少の父元輔は周防肥後の國守を歴任した。その折清少が同行したとすれば、瀬戸内海の往返に、海の様子は熟知された譯である。が果して同行したか。例令同行したとしても、その頃は幼少な筈だから、細かな印象は残るまい。或は特に住吉詣か天王寺詣、さては須磨邊に船道遙を催した折の印象記ではあるまいか。

二百六十四段

右衛門の尉なる者のえせ親をもたりて、人の見るにおもてぶせなど、見ぐるしう思ひけるが、伊豫の國よりのぼるとて、海に落し入れてけるを、人の心うがり、あさましがりける程に、七月十五日益を奉るといそぐを見給ひて、道命阿闍梨、

(口釋) 右衛門尉である者が、詰らぬ親をもつてゐて、人の見るにきまりが悪いなど、見苦しく思つてゐたが、伊豫の國から都へく

わたつ海に親をおし入れてこのぬしのぼんする見るぞ哀なりける。

と詠み給ひけるこそいとをかしけれ。

(考異) ○をかしけれ 原本はしけれとあり。抄本による。

○右衛門の尉 エモンノゾウ。右衛門府の三等官。衛門府を見よ。○えせ親 よからぬ親。老いて醜き故にいへるか。○おもてぶせ の下、なりを略けり。○益を奉る 親の爲に益供養を奉ると也。○益孟蘭盆會の略。地獄に墮ちて倒懸の苦を受くる者を救ふ法會にて、毎年七月十五日に行ふ。孟蘭盆は梵語にて、救倒懸と譯す。委しくは孟蘭盆經に出づ。○いそぐを 支度するをと也。○道命阿闍梨 道命は大納言藤原道綱の長子。天王寺別當となる。諷誦の名手。又歌人たり。○わたつ海の歌 海中に親を陥し入れておきながら、この人が孝行顔に、その益供養をするを見るに哀れであつたと也。○わたつ海」は、諸本うたつうみとあれど、正しきに從つて、わたつみと讀むべし。

人文が發達してからは、親殺しは流石に尠いが、決して絶えない。で律は八虐、經は五逆の一に數へて重罪としてゐるのに、外聞がわるい位の事での親殺しは、ひどい奴だ。蓋しこの男は伊豫の田舎武士で、本來無教育者だらう。それが何と思つての益供養か。一寸見當がつかぬ。日本靈異記に似た話がある。

陸奥の掾になつてゆく男が、舅の僧から廿貫の借錢を貰うて、催促される苦しまされに、陸奥につれてゆく途中海中につき落して、妻には難船して舅だけ死んだと欺いて、その追善の法事をして、施餓鬼をしてゐる所へ、舅は不思議にも助かつて、乞食になつて物貰ひに来て、この増に出合つた。(原文は漢文) まづこの陸奥掾の類で、これも人前を繕ふ爲の法事だらう。

るとて、途中へ海に落し込んだのを、人が心憂がり、淺ましがつてゐる頃に、七月十五日、右衛門尉が益供養をするといつて準備するのを、道命阿闍梨が御覽なされて、わたつ海に親をおし入れてこの主のぼんする見るぞ哀なりける(海中に親をおし込んで、孝行らしく、この主が益供養するのを見るのが哀であつた)とお詠みなされたのが、甚だ面白かつた。

親不孝が孝行な真似をする矛盾が表面で、海中に眞逆様に陥れたのは正に倒懸なのに、孟蘭盆は救倒懸の意だから、理窟が旨く打合ひ過ぎた可笑味を裏面として、わたつ海にの歌は出来たのだ。作者は坊さんだから、甚だ抹香臭い構想である。清輔の續詞花集にも、戲吟歌の部に収めてあるのは、この所以だらう。それを佛道によりて孝道の廢れぬが哀なる意也と解いた註は、唐變木の言草である。又「ぼん」は陥れた水音を利かせたといふ説は、狂歌かぶれのした江戸人の鑿説である。

道命は和泉式部の情夫で、極めて聲のい、諷誦の名人だつた。殊に清少の姉は、道命の祖母道綱の母の兄藤原理能の妻で、この一家に多少交渉がある。

二百六十五段

又、小野殿の母うへこそは。普門寺といふ所に八講しけるを聞きて、又の日、小野殿に人々集まりて、あそびし、文つくりけるに、

薪こることはきのふに盡きにしを今日はをの柄こ、にくたさむ。

と詠み給ひけむこそめでたけれ。こ、もとは打聞になりぬるなめり。

○小野殿の母上こそは この歌の作者、拾遺集には、春宮大夫道綱の母とあり。同人の作なる蜻蛉日記にもこの歌出でたり。さて道綱の母は陸奥守藤原倫寧の女にて、攝政藤原兼家の妻の一人なり。蜻蛉日記を著す。歌人。この句の下、いみじけれを略けり。○普門寺 小野にありき。○八講し 上に、人のを略けり。○小野殿 山城葛野郡高雄の奥、及び比叡山の西麓に、小野といふ所あり。○薪こるの歌 「薪こる」は、法華經提婆品に「時有三仙人、來白王曰、我有大乘一名妙法蓮華經、若不違我、當爲宣説、

(口譯) 又小野の母上こそはおえらい。普門寺といふ所に、人が八講したのを聞いて、その翌日、小野殿に人々集つて、音楽をし、詩文を作つた時に、

こて度してしまはう)とお詠みなされたのが面白い。このあたりは打聞になつたやうである。

王聞^ニ仙言^ニ、歡喜踊躍、即隨^ニ仙人^ニ供^ニ給所須^ニ、採^ニ果^ニ汲^ニ水^ニ、捨^ニ薪^ニ設^ニ食^ニ、乃至^ニ以身^ニ而作^ニ牀座^ニ、身心無^ニ倦^ニ、云々」の拾薪を據とし、釋尊が求法の志深くて、阿私仙人に仕へて難行苦行の末に、法華經を得たことをいへり。「斧の柄」は斧の柄もくちぬべきを見よ。「くたさむ」は腐らせんの意歌の意は、法華經の薪こる業即ち八講は、昨日にて果てしものを、今日は十分に遊び耽りて、もはや用なき斧の柄は、こゝにて腐さんと也。果つる事を薪の縁にて「盡きにし」といひ、斧に小野をかけたなり。○こ、もとは 此のあたりはと也。○打聞に云々 前段もこの段も、歌を主としたる隨録なれば、打聞の如しといへる也。

評 前段に、道命の歌を擧げた縁で、道命の祖母で歌人だつた、道綱の母の歌を思ひ寄つたのである。

八講には行道の折、法華經の文句に本づいて、坊さんが銀箔や金箔をおいた張子の薪や水桶を擔いで、行道の列に加はる。だから八講に水汲、薪樵を持出すのは、格別な手柄でもないが、薪から斧を介して、爛柯山のご事を合拍させたのは、慥に氣が利いた取成しである。況や小野の秀句まで景物に付いてゐる。拾遺集のこの歌の詞書には、

爲雅朝臣、普門寺にて經供養し侍りて、又の日これかれ諸共に參りける序に、小野へまかりて侍りけるに、花の面白かりければ、

とあつて、歌は「けふが、いざとなつてゐる。この方が味ひがある。爲雅は道綱の母の姉の夫である。そんな縁で、八講の翌日普門寺をかけて、別荘の小野殿に、遊山に出掛けたらしい。

二百六十六段

又、業平が母の宮の、「いよく見まく」との給へる、いみじうあはれにをかし。引

(口譯) 又業平の母の宮が、「いよく見まく」と

仰せられたのは、甚だ哀で面白い。この手紙を得て披いて見たらう時の、業平の心の中は、さぞ悲しかつたらうと思ひやられる。

きあけて見たりけむこそ思ひやられる。

釋 ○業平が母の宮 伊登内親王。桓武帝の皇女にて、阿保親王の妃たり。○いよ／＼見まく 古今集、雜上に「業平朝臣の母のみこ、長岡に住侍りける時に、業平宮づかへすとて、時々えまかりとぶらはす侍りければ、しはすばかりに、母のみこのもとより、とみの事とて文をもてまうできたり。あけて見れば、詞はなくてありける歌『老ぬればさらぬ別もありといへばいよ／＼見まくほしき君かな』とあるをいふ。伊勢物語には「去らぬ別の」とあり。○引きあけて 業平が。

評 「いよ／＼見まく」は真情のあらはれで、その卒直な歌ひ振が、ひどく人を引付けるが、「さらぬ別のなくもがな」と呻いた人の心持はさ。

二百六十七段

をかしと思ひし歌などを、草子に書いておきたるに、下衆のうちうたひたるこそ心憂けれ。よみにもよむかし。

(口譯) 面白いと思つた歌などを、草子に書いて置いたのに、下衆が見て歌つたの心憂い。さもなくば只無暗と、棒讀に讀むことよ。

釋 ○けすの 下衆女のなり。○よみにもよむかし 棒讀にやたらに讀むことよ也。この句の上に、さらずばを補ひて聞くべし。

評 なぜ下衆女が歌つてはわるいか。それは箇中の趣味は、彼等の到底理解し得る所でないといふ心誇からだ。實際趣味の程度は、下級生活者ほど卑い。

歌はないかと思ふと、只無暗と棒讀に讀みつけたりする。それで何かわかるものかと、どちらにし

ても、お姫様おむづかりだ。

二百六十八段

よろしき男を、下衆女などの譽めて、「いみじうなつかしうこそおはすれ」などいへば、やがて思ひおとされぬべし、譏らるゝはなか／＼よし。下衆に譽めらるゝは、女だにわろし。又、譽むるまゝにいひそこなひつるものをば。

釋 ○いひそこなひつるものをば の下、いかでくちをしからざるべきを略けり。古本には「ものをばし」ものとはあり。

評 下衆には譽められるより、譏られるがましといふ、奇矯なやうだが、全く真理だ。下衆に譽められやうとするのは、下衆に同化しなければダメだ。同性でもかうだから、異性ではなほ更さ。下衆女から譽められる男は、さぞと侮蔑される譯である。その又譽められるのが、却て事はしで、譽めるのにならぬ。第一標準が違ふ。

この男は相當の身柄なのだから、相手次第で、沽券が騰貴もし、下落もする。女の名も「何とかや片文字は覚えで」位に氣取る必要がある。ぐつと尊貴の方に至つては絶対だから、その遠慮はないと認められるらしい。それでも謙徳公伊尹は、下衆女に關係した時、大藏丞豊蔭と偽名した。

二百六十九段

二百六十七段 二百六十八段 二百六十九段

(口譯) 可成な身分の男を、下衆女が譽めて、甚だなつかしくおありなさるゝなどいふと、直にその男は話らぬ男と見下げられるであらう。悪くいはれるのは、却ていい。下衆に譽められるのは女ですら悪い。又譽めるに随つて、譽損つてゐるものをば、何で残念で無かつた。

(口譯) 大納言殿が主上の御前に参られて、詩文の事など講義を申上げると、例の如く夜が大層更けたので、御前に伺候してゐた女房達は、一人二人づつ脱け出して、御屏風や几帳のうしろなどに、皆隠れて寢たので、自分只一人になつて、眠たいのを我慢して候ふと、夜警の武士が丑四つと、時の奏をするのである。もう明けますのである」と自分獨言をいふと、大納言殿が「今更に御寝なさいますな」と申上げて、寢るべきものと思つて居られないのを、うたてく何であらう申したのだらうと思ふけれど、又外に人が居るならば紛れもせう。生憎一人だから胡摩化し

大納言殿参り給ひて、文の事など講じ給ふに、例の夜いたう更けぬれば、御前なる人々、二人づつうせて、御屏風、几帳のうしろなどに、皆隠れぬれば、只一人になりて、ねぶたきを念じてさぶらふに、丑四つと奏するなり。明け侍りぬなり」とひとりごつに、大納言殿、「今更にな大殿籠りおはしました」とて、ぬべきものにも思したらぬを、うたて、何しにさ申しつらむと思へども、又人のあらばこそは紛れもせめ。うへの御前の、柱に寄りかゝりて、少しねぶらせ給へるを、大納言かれ見奉り給へ。今は明けぬるに、かく大殿籠るべき事は」と申させ給へば、「げに」など、宮の御前にも笑ひ申させ給ふも知らせ給はぬほどに、長女がわらはの、鶏を捕へもてきて、「あす里へもていかむ」といひて、隠し置きたりけるが、いかゞしけむ、犬の見つけて追ひければ、廊のさきに逃げいりて、恐ろしう鳴きの、しるに、皆人起きなどしぬなり。うへもうち驚かせおはしまして、「いかにありつるぞ」と尋ねさせ給ふに、大納言殿の、「聲明王のねぶりを驚かす」といふ詩を、高ううち出だし給へる、めでたうをかしきに、一人ねぶたかりつる目も、大きになりぬ。いみじき折の事かなと、うへも宮も興ぜさせ給ふ。なほかゝる事こそめてたけれ。

(考異) ○今更にな——おはしました。原本今更に——おはしますとあり。○給へば 原本給ふとあり。○いりて 原本いきてとあり。○うへも 原本になし。以上古本による。

やうがない。主上の御前が柱に倚懸られて、少しお眠りなされたのを、大納言殿が「あれを御覽なさい。今は明けたのに、かう御寝なさるべき事ですか」と申されるると、「ほんに」など仰になつて、中宮にもお笑ひ申されるのも、主上は御存知ない折に、長女の召使の童が、鶏を捉まへて持つて来て、「明日里へ持つて往かう」といつて隠して置いたのが、どうしたのだらう、犬が見付けて追懸けたので、廊の先へ逃込んで、恐ろしく鳴騒ぐので、皆の人が起きなどした。主上もお目覚めになつて、「どうしたのか」とお尋ねなさるに、大納言殿が「聲明王の眠を驚す」といふ詩を聲

○大納言 伊周公。○文の事 詩文の事なり。○只一人に 清少がなり。○丑四つ 丑三つを見よ。○今更に云々 主上に申上ぐる詞なり。○又人のあらばこそ云々 又外に人の居らばこそ、誰のいひたるか不明にて紛れもせんと也。下に、「外に人なき故に、紛れなく自分の言と知らるゝがくちをし」の意を含めり。○かれ 主上の眠らせ給へるをさす。○知らせ給はぬ程に 主上がなり。○うち驚かせ お目覚めになるをいふ。○聲明王のねぶりを云々 本朝文粹三、都良香の漏刻策中の句にて、「鶏人曉唱、聲驚明王之眠、鳧鐘夜鳴、響徹暗天之聽」とあり。朗詠集にも見ゆ。意は鶏人の曉を唱ふる時は、その聲朝政にいそしみ給ふ明王の眠をさまして、朝寢し給ふことなく、漏鐘の夜鳴る時は、その響暗中に鳴り徹りて、侍臣の怠を警むると也。鶏人は鶏冠を戴きて曉の至れるを傳唱する役人なり。鳧鐘は鳧氏の人がいにしへ鐘を作りし故にいふ。いづれも周禮に出でたる支那の典故なり。○いみじき折の事かな 場合の旨く打合へる事よと也。折のいみじき事を打反していへる也。

又の日は、夜のおとぎに入らせ給ひぬ。夜中ばかりに、廊に出てて人呼べば、大納言おるか。我送らむ」との給へば、裳、唐衣は屏風にうち懸けていくに、月のいみじう明くて、直衣のいと白う見ゆるに、指貫をながう踏みしだきて、袖をひかへて、大納言たふるな」といひてゐておはするまゝに、「遊子なほのこりの月に行けば」とずんじ給へる。又、いみじうめでたし。「かやうの事めで惑ふ」とて笑ひ給へど、いかでかなほいとをかしきものをば。

(考異) ○指貫をながうふみしだきて 原本指貫のなからふみく、まれてとあり。古本による。

高くお吟じ上げなされたのが、見事に面白いため、一人眠たかつた目も大きくなつた。皆く場合の打合つた事よと、主上も中宮も、お面白くなりなされる。やはりかういふ事は結構だ。

(口譯)

その翌日は、御寢所にお入りになつた。夜中時分に、自分が廊に出て召使を呼ぶと、大納言殿が「局に下りるのか、私が送つてやらう」と仰しやるから、裳や唐衣はその屏風に打懸けて置いて行くに、月が大層明るくて、大納言殿の直衣が大層白く見えるのに、指貫を長く踏しだいて私の袖を捉へて「轉ぶな」と仰しやつて、連れて行かれるまゝに「遊子なほ残の月に行けば」と

お吟じなされたのが、又甚だ結構だ。大納言殿は「こんな事を餘りめで過ぎる」とお笑ひなさるけれど、やはり大層面白いものをば、何でめでずには居られようぞ。

○父の日 翌日の夜なり。○廊に出でて 清少がなり。○おる、か 局になり。○との給へば 大納言殿がなり。○袖をひかへて 清少のなり。「ひかへて」は捉へてなり。○遊子なほのこりの月に云々 朗詠集、賈島の曉賦に「佳人盡飾於晨粧、魏宮鐘動、遊子猶行於殘月、函谷鷄鳴」とあり。魏宮は支那の魏の宮中、遊子は旅客、函谷は函谷關なり。○めで惑ふ めづることの甚しきをいふ。○をかききものをば 下に、めでずてあるべきかはを略けり。

伊周を大納言とあるから、正暦三年八月から同五年八月までの間にあつた事だらう。(主上御年三十五、中宮十七十九、伊周十九廿一、清少廿七八廿九、卅?)

主上は正に御少年時代で、正式の侍讀は文章博士大江匡衡だが、伯父の伊周が家庭教師の格で、その補修にいそまれたことは、この記事でわかる。下文にも、史記の筆寫をなされたとある。後にも、

閑就典墳、送日程、其中往事染心情、百王勝蹟開篇見、萬代聖賢展卷明、學得遠追虞帝化、讀來更耻漢文名、多年稽古屬儒業、緣底此時不泰平。(本朝麗藻、一條御製)

の類の立派な聖作をのこされ、學問を尊重される態度をお示しになつた。ましてこの時分は勉學盛りであらせられたから、學事の爲の夜深しは珍しくなかつた。御相手として、中宮の御陪聽は勿論の事であつた。眠いながらも清少一人伺候したことは、誰よりも學問に興味をもつてゐたからだらう。伊周の眠いも何もない熱心さは格別だ。その手前「明け侍りぬなり」と、口が這つたのは全くまづい。流石に主上もお勞れで、柱に凭れての坐睡、何とお噂されても御存知がない。

廊の端に鶏が飛込んだので、主上がお目覺になつたので考へると、この御殿が比較的淺間で、下衆近な事が想像される。これは清涼殿ではあるまい。中宮御殿の弘徽殿、または登華殿あたりの事らしい。當時は中宮の外には、上直する后妃がなかつたから、主上は中宮御殿に入浸りの姿であらせられた。

「聲明王の眠を」の朗詠は、折に打合つた機轉である。

清少の局は、初宮仕(百六十段)の評でいつた如く、登華殿の細殿と思はれる。廊に出て呼んだのは、自分の召使だらう。これは御主人のお下りを迎へる爲に、火燭を用意して控所まで来て待つてゐるのである。が眠つてでも居たか、返事がない。伊周に送られて廊傳ひにゆくと、足許が暗いので轉びさうだ。「倒るな」は伊周の親切の象徴である。袖を捉へたのは、今なら手を引くところで、平安時代の貴人は、婦人に對しては、目下でもこんなであつた。折柄の在明月に映し出された、伊周の態度風采に感佩してゐる折も折、「遊子殘月」の朗詠は、これ又面白い機轉である。

「物のめでたきはえやむまじ」と絶叫した清少だから、この氣分、この機才、感激せずには、何で居られよう。清少自身も専らかうした方面に、その才鋒を揮ふことを努めてゐる。蓋し趣味の合致で、それでいよくをかしいのである。

上文にも「琵琶の聲は停んで」と、樂天の詩を朗詠した事があつて、この段と共に、伊周の才人だつた事を語つてゐる。抑も伊周は齊信、公任に並んだ文者で、(七十段の評參看)その機智とても、齊信に一步を遜る者でない。後朱雀帝御誕生の時の和歌の序題に、

第二皇子、百日嘉辰、合宴於禁省、矣、外祖左丞相(道長)以下、卿士大夫、侍座者濟々焉、望龍顏於咫尺、酌鸞觴而獻酬、醉恩餘、私相語云、隆周之昭王、穆王曆數長焉、我君又曆數長焉、本朝廷曆延喜胤子多矣、我君又胤子多矣、康哉常道、誰不歡娛、請課風俗、將獻壽詞云爾。(本朝文粹)

と作つて、滿朝の喝采を博した。又その詩作は、本朝麗藻に、澤山載つてゐる。伊周の學問は、母方の祖父高階成忠から來てゐる。成忠は師尙の孫で、古事談の語る所によると、師尙は在原業平の子であるといふ。王朝第一の風流才子在五の君の血が流れてゐるは、伊周の才人なもの、敢て怪しむに足らない。

序にいふ、當時漢詩を朗吟する方法が、二つあつた。一つは字音のまゝに讀んで詠するので、これを音諷誦といつた。釋奠などの時にはやつたものだ。二つは國文脈に直して吟するので、それが即ち朗詠である。

二百七十段

僧都の君の御乳母のまゝと、御匣殿の御局に居たれば、をのこのある、板敷のもと近く寄りきて、「辛からいめを見候ひつる。誰にかは愁へ申し候はむ」と、泣きぬばかりの氣色にていふ。「何事ぞ」と問へば、「あからさまに物へまかりたりしまに、きたなく侍る所の焼け侍りにしかば、日ごろは寄居蟲のやうに、人の家に尻しりをさし入れてなむ侍ふ。うまづかさの御秣みまぐさつみて侍りける家より出てまうできて侍るなり。只垣を隔て侍れば、よどのに寝て侍りけるわらはべも、ほとく焼け侍りぬべくなむ。いさゝか物も取う出侍らず」などいひ居る。御匣殿も聞き給ひて、いみじう笑ひ給ふ。

酒 みまぐさをもやすばかりの春の日によどのさへなど残らざるらむ。

と書きて、酒、これを取らせ給へ」とて投げ遣れば、笑ひのゝしりて、女房「このおはする人の、家の焼けたりとて、いとほしがりて給ふめる」とて取らせられたれば、男「何の御

(四釋)

僧都の君の御乳母のまゝと、御匣殿の御局に居たら、或男が板敷の際近く寄つてきて「ひどい目を見ました。どなたにお訴へ申しませう」と泣出すばかりの様子といふ。何事があつたのかと尋ねると「一寸餘所へ参りました間に、汚なう御座います私の所が焼けましたから、この頃は寄居蟲のやうに人の家に尻をさし入れて居ります。馬寮の御秣を積んであります家から、出火して参りましたのであ

ります。只垣根一つを隔て、をりますので、寢處に寝てゐました童兒も、危く焼死んでしまひさうでありました。少しも物も取出しません。などいつてゐる。御匣殿もお聞きなされて、大層お笑ひなされる。そこで自分が、

みまぐさをもやすばかりの春の日によどのさへなど残らざるらむ(御秣を燃すぐらぬの春の火に夜殿までもどうして残らず焼けたのだらう)と書いて女房に「これをやつて下さい」といつて投げてやると、女房は笑ひ騒いで「あの此處にお出での方が、お前の家が焼けたといつて、氣の毒がつて下さるさうです」といつて呉れたので、その男

たんじやくにか侍らむ。物いくらばかりにか」といへば、女房「まづ讀めかし」といふ。男「いかでか、片目もあき仕うまつらては」といへば、女房「人にも見せよ。只今召せば」とみにてうへへ参るぞ。さばかりめでたき物を得ては、何をか思ふ」とて、皆笑ひ惑ひてのぼりぬれば、まゝ人にや見せつらむ。さと聞きて、いかに腹立たむ」など、御前に参りて、まゝの啓すれば、又笑ひさわぐ。御前にも、「などかく物ぐるほしからむ」と笑はせ給ふ。

(考異) ○をのこの 原本をのことあり。○申し候はむ 原本申し候はむとてなむとあり。○家より 原本家よりなむとあり。以上古本による。○さと聞きて 原本里にいきてとあり。活本による。

釋 ○僧都の君 隆圓。○まゝ、乳母の通稱なり。源氏、浮舟の巻に「などてこのまゝをといめ奉らすなり」にけむ——と憎むは、乳母やうの譏るなめり。吾妻鏡に「武衛御誕生之初、被召于御乳付之青女、今者尼、號三摩々々」。○御匣殿 道隆の第四女。七十一段に出づ。○をのこのある 男のある者、或は、ある男のといふに同じ。○辛いめ ヲライメ、ヒドイメ。○愁へ 愁訴、歎願などの意。○きたなく侍りける所 わが家を卑下していへる也。○寄居蟲 ガウナ。カミナ。今宿かりといひ、俗にオバケともいふ。蟹の一種。他の螺貝を借りて、尻をさし入れて棲む。○馬づかさ 馬寮。左右あり。○まうで来て 火はなり。○よどの 夜殿。寢所なり。○みまぐさの歌 御秣を燃すほどの僅の火に、夜殿さへ何とて残らず焼けゝるならんと也。御秣を燃すに新草を萌すの意をかけ、火に日をかけ、夜殿に淀野をかけたり。春の日に淀野の萌ゆるを擬へて詠める也。淀野は山城の淀。○取らせ給へ 男になり。○取らせたれば 男になり。○笑ひのゝしりて 女房達かなり。○このおはする人 清少をさす。○たんじやく

「何の御短籍で御座いますか。物くら位下さるのでせうか」といふから女房が「まあ読みなさい」といふ。男は「どうして読めませう。片目も明いて居ませんでは」といふから、人達が「人にも見せない。只今お上がお召しなさるから、急に御殿へ参るぞ。それ程結構な物を頂いては、何を心配する事があるかい」といつて、皆笑ひこけて、御殿へ上つたから「あの男はあれを人に見せたらうか。さうと聞いては、どんなに立腹するだらう」と中宮の御前に参つて、まゝが申上げると、又女房達が笑ひ騒ぐ。中宮にも「何でかう氣狂じみて居るのだらうか」と仰になつて、お

短籍。短冊。大判の紙を短く狭く切りたるもの。カード、附箋の如き物にて、官省などにては、多く人に給ふ米鹽の數など記す。續日本紀に「令採短籍、書以仁義禮智信五字、隨其字而賜物、靈異記に「有錢四貫、著之短籍、而注謂之大安寺、大修多羅供、錢」。江次第、賑給の條に「當日大使於便所、短冊加封、或散短冊定便所、分給之、高年病者貧者等、云々」。○いくらばかりにかの下、侍らむを略けり。○いかでかの下、讀み侍らむを略けり。○片目もあき仕まつらでは「いかでか」の上に反して心得べし。「片目も明かず」とは、全然明旨なるをいふ。○只今召せば 宮のなり。○何をか思ふ 物思するに及ばぬをいふ。「か」は反語。○さと聞きて 「さ」は戯れの歌を書けるをさす。○御前には 中宮のなり。○笑ひさわぐ 女房達かなり。

留守中に隣からの貰ひ火で、丸燒になり、他人の家に同居するなどは、十分同情に値する條件を具へてゐる。それを御匣殿からはじめて、皆で笑ふ理由がわからぬ。いやこれは理窟ではあるまい、感情だらう。

一體泣言ぐらる、聞いて不快なものはない。こちらが幸福な境遇にあればある程、却て反感が起る。況や何だか可笑しな話振なので、一向同情する氣にならず、只々笑ひ消してしまつた。清少の歌も茶化したまで、同情はしてゐない。

紙片を物呉れる短籍と見たのは、「いとほしがりて給ふ」といふ前提があるから、無理もない事で、あながち慾張つた爲のみではない。歌の事だから假字書だらうに、それさへ讀めぬのはひどい。少數の上流者は、和漢に通じた才人で、多數の下層者は、いろはのいの字も知らない。上下の懸隔の甚しかつた事が想ひやられる。

御同情の深いお詞を拜承する。

極めて軽い座談的の記事で、苦もなく筆が運んでゐる。そしてその會話にその態度に、各人各様の性格が、くつきりと現れて、洵に面白い。

二百七十一段

男は女親めおやなくなりて、親ひとりある、いみじく思へども、煩はしき北の方の出できて後は、内にも入れられず、装束などの事は、乳母めのと、また故うへの人どもなどしてせさす。西東の對のほどに、まらうど居などをかしう、屏風、障子の繪も、見所ありてすまひたり。殿上のまじらひのほど、くち惜しからず人々も思ひたり。うへにも御氣色よくて、常に召しつゝ、御遊などのかたきには思しめしたるに、なほ常に物なげかしう、世の中心に合はぬ心ちして、すきくしき心ぞ、かたはなるまであるべき。上達部の、またなきにもてかしづかれたる妹一人あるばかりにぞ思ふ事をもうちかたらひ、慰めなどもするかし。

(者異) ○まらうど居など 原本まらうどにもいふことあり。古本による。○などもするかし 原本所なりけることあり。別本による。

釋 ○親ひとりある 一人ある男親がと也。○いみじく思へども この男をなり。○北の方の 父の後妻にて、この男の繼母なり。○装束などの この男のなり。○故うへの人 もとの北の方の召使なり。故

(口譯) 男は母親がなくなつて、父親が一人ゐるが、その父親が息子の事を大層かはやく思ふけれども、面倒な北の方が出来て後は、父親の身近くも寄せ付けられない。装束などの事は、乳母又は亡くなつた北の方の召使などとして世話をさせる。西東の對の屋のあたりに客間など面白く、屏風や障子の繪も、見所ある様にして住まつてゐる。殿上のお勤の具合も見苦しくはないと、人々も思つてゐる。主上にも

御機嫌に叶つて、常にお召し下りして、御遊の御相手には思召して入らつしやるのに、やはり常に繼母の仕向に物歎はしく、世の中が心に合はない氣がして、その癖好色な心が、異常な程にあるだらう。上達部が雙びな者に寵愛して居られる妹が一人ある。それはかりに、自分の思ふ事を、謀合し、心憂さを慰めなどもするよ。

(口譯) 定澄僧都には、袴がない。すいせい君に

は、袴がないといつた人がまあ面白い。

(口譯) 本當に貴女は、下野に下るのかと、自分に尋ねた人に、思ひだにかゝらぬ山のささも草誰かいぶきのさとは告げしぞ(下野に下るなどいふことは思ひもかけぬ事よ、誰がさう告げましたぞ)

(口譯) 或女房が、遠江守の息子である人を戀に

うへしはこの男の實母なり。故は故人の意。○西東の對のほどに云々。この男はなり。對は對の屋。○まらうど居 客間。○殿上のまじらひ 殿上にての勤務なり。まじらひはこゝにては交際の意にあらず。○御氣色よくて 御機嫌に協ひてと也。○なほ常に物なけかしう云々 繼母との折合の面白からぬ故なるべし。○かたはなるまであるべき 異常なる程にまで甚しからんと也。かたはは片端にて、尋常ならぬをいふ。○又なきにもてかしづかれたる 双びなき者に寵愛せられたると也。○妹 この男のなり。

大抵の小説の繼母騒動は、繼娘を主人公にしてある。然るにこれは繼息子を中心にしてゐる。この點は空穂物語の忠こそに、一寸似てゐる。殿上の交らひもよく、主上の思召にも叶つてゐるなども類似してゐる。

實母の生存時代には、寢殿内に勝手に出入してゐたが、繼母が出来てからは、寢殿の簾打破くことも許されない。對の屋の方に別居を命ぜられて、父親にもたまさかに會ふやうになつては、假令客室が綺麗でも、屏風障子の繪が見事でも、當人には、一向詰らない。忠こそは遂に繼母の毒計に陥つて出踪したが、これはそれ程の事はないにしても、暖い親の愛に活きる事が出来ないで、その満足を好色の道に求めてゐる。ありさうな事だ。そして上達部の愛妻になつてゐる同母妹、こればかりを力に、まさかの時の話相手にして暮す。何たるたよりの寂しい身の上だらう。當時に誰かこんなモデルがあつたのではあるまいか。

二百七十二段

定澄僧都に袴なし、すいせい君に柏なし」といひけむもこそをかしけれ。

釋 ○定澄 十段を參看せよ。○すいせい君 傳未詳。

評 誰ち袴や柏のない人間はない。それを定澄とすいせいとに限つてないといふ。ないのではない。長い袴も定澄に着せると、柏ぐらゐの丈しかなし、短い袴もすいせいに着せると、袴ぐらゐの丈になる。それ故兩人ども、普通物では長し短しで、間に合はぬのである。それを直に「なし」と誇張的に斷言して、定澄の背高と、すいせいの背ひくとを映出させた、滑稽な輕口が面白い。

二百七十三段

「まことや、下野にくだる」といひける人に、

「おもひだにかゝらぬ山のささも草たれかいぶきのさとは告げしぞ。」

釋 ○まことや下野にくだる 下野にくだると聞くは事實かと也。○いひける人 我に問ひける人。○思ひだにの歌 「ささも草」はさしも草の轉。今もぐさといふ。艾の事なり。下野都賀郡伊吹山なる、標茅が原あたりに多く産するより、伊吹のさしも草、標茅が原のさしも草など續けていへり。艾草は灸をすうるに用ゐるより、思ひに火をいひかけて艾草の縁語として、「さと」にさやうの意のさと里とをかけた。歌の意は、私が下野に下るとは誰が告げしぞ、思ひもかけぬ事ぞと也。

二百七十四段

ある女房の、遠江の守の子なる人をかたらひてあるが、同じ宮人をかたらふと聞き

二百七十二段 二百七十三段 二百七十四段

してゐたが、その男が又同じ宮仕人を懇にするに聞いて、怨んだので「男が私の親の遠江守を証人にしてお誓はせなさい。貴女の聞いたのは甚しい虚言だ。夢にすら見ない」といひます。何と返事をしたものでせう」とその女房がいふと聞いて、自分が代にかう詠んでやつた。

誓へ君遠つあふみのかみかけてむげに濱名のはし見ざりきや。
清「誓へ君遠つあふみのかみかけてむげに濱名のはし見ざりきや。」
（考異） ○誓はせ給へ 原本誓はせ給ふとあり。古本による。
○かたらひてある 慇懃を通じたるをいふ。○同じ宮人を その人同じく宮仕する女房をと也。○親などもかけて云々 男の詞なり。わが親の遠江守なども證人にして、佛神に誓はせなされと也。○夢にだに見ず 夢にも逢はずと也。○となむいふ となむ男のいふと也。○いかいふべき この答いかがいふべきの略。○といふと聞きて と女房のいふとわが聞きてと也。○誓へ君の歌 親の遠江守を證人にして、神に誓つて見給へ、私は一向貴方の素振の怪しき事の一端を見ざりし事か、否見たりしものと也。遠江守に神をかけ、橋に端をかけたなり。濱名の橋は遠江第一の歌枕なり。

二百七十五段

便なき所にて、人に物をいひけるに、「胸のいみじうはしる。などかくある」といひける答に。

清「逢坂はむねのみつねにはしり井のみつくる人やあらむとおもへば。」
（釋） ○便なき所 都合わるき場所。○人に 男になり。○胸のいみじうはしる 「胸の走る」とは胸騒ぎするをいふ。○あふ坂はの歌 人に逢ふ時に心の騒ぐは、見付くる人のあらんかと心配する故ぞと也。あ

都合の悪い處で、男に話しかけた所が、男が「あの時胸がドキドキしたよ。何であんな事をする」といつた返事に、逢坂は胸のみ常にしり井のみつくる人やあらむと思へば（忍び逢ふ折は胸ばかりいつも騒ぐ、それは見付ける人があらうかと思ふからさ）

二百七十六段

女のうは着は 薄色。蒲萄染。萌黄。櫻。紅梅。すべて薄色のたぐひ。

（考異） ○この段 原本になし。抄本によりて補ふ。

二百七十七段

唐衣は あかいろ、藤。夏は二藍。秋は枯野。

（考異） ○こゝも 抄本によりて、本文の如く改む。

○あかいろ 胡曹抄に「櫛と茜にて染む。灰汁をさす」。又織色を同抄に「經紫、緯赤歟」。○枯野 胡曹抄の一本に「面黄、裏淺木」。西三條裝束抄に「面黄、裏薄青」とあれど、雜事抄に「面香裏青」とあるや古から。

二百七十八段

裳は おほ海。

（考異） ○おほ海 の下、原本しびらとあり。古本による。

二百七十五段 二百七十六段 二百七十七段 二百七十八段

釋 ○おほ海 海部ともいふ。海波に海松、磯貝などの模様を出したる織物。

二百七十九段

汗衫は 春は躑躅。櫻。夏は青朽葉。朽葉。

二百八十段

織物は むらさき。しろき。萌黄に榊葉織りたる。紅梅もよけれども、なほ見ざめこよなし。

釋 ○織物 織模様ある布帛の稱。綾錦の類なり。固紋浮紋を見よ。○もえぎにかしは織りたる 萌黄地に榊の葉の模様を織りたる也。○見ざめ 見るうちに興のさむる、見飽きのするなどの意。

二百八十一段

紋は あふひ。かたばみ。あられ地。

(考異) ○あられ地 原本なし。抄本による。

釋 ○紋 紋様、紋柄なり。抄本には、綾の紋はとあり。綾に織込みたる紋柄なり。○あられ地 三條裝束抄に「地は小石疊、これを蔽と號ぶ、その中に窠の紋あり」。細かき四角の模様を、互違に重ねたるもの。

(口譯) 織物は、紫、白、いい。萌黄に榊葉を織出したのがいい。紅梅もい、けれど、やはり見ざめがひどくする。

評 以上數段に互つて列擧した、衣裳の色相や紋柄は、多分は時代の好尚を語るもので、一二清少自身の嗜好もまじつてゐるらしい。既に中宮は、「萌黄をにくし」と仰しやつてゐる。

かう名稱こそ色々あるが、大部分は紫と赤とに歸納されるから面白い。人の目につく色は、今でも同じだ。然し細かに分ければ、色の種類も澤山で、至つて花やかにはげくしい。多數の婦人が盛粧して、一堂に會した場合には、殆ど繪具箱を引繰返したやうな觀があるだらう。紋柄も概して大柄である。それには種々な理由もあらうが、餘り徒歩きをしないことも、その原因の一つに數へてよからう。

紋柄は榊葉、葵も面白いが、酸漿は草の段でも、「綾の文にても、こと物よりはをかし」と推稱して、清少の最も氣に入りの物である。霞地は男の表袴の料である。さてこの紋柄は皆織模様で、今のやうな染模様ではない。

色相の名稱が多く植物に因縁のある事も、一寸考へさせられる。もと植物性の染料を使つたからでもあるが、洵になつかしい聯想があつて、特に自然を憧憬した我々祖先の特性が認められる。

二百八十二段

片つ方のゆだけ着たる人こそにくけれ。數多かさね着たれば、ひかれて着にくし。綿など厚きは、胸などもきれて、いと見ぐるし。まぜて着るべき物にはあらず。なほ昔より、さまよく着たるこそよけれ。左右のゆだけなるはよし。それもなほ女房の装束にては、所せかめり。男の數多かさぬるも、片つ方おもくぞあらむかし。

二百七十九段 二百八十段 二百八十一段 二百八十二段

(口譯) 片方ゆきの長い着物を着てゐる人が憎らしい。澤山重ねて着てゐると、一方へ引かれて着にくい。綿など厚く入れたのは

清らなる装束の織物、うすものなど、今は皆さこそあめれ。今やうに、又さまよき人の着給はむ、いと便なきものぞかし。

〔考異〕 ○片つ方の上、原本夏、うすものとなり。堺本による。○にくけれ 原本にくけれど、とあり。と文字必ずず衍ならん。よりに削る。○片つ方おもく 原本片は、かまおもくとあり。原本の一本による。

〔釋〕 ○片つ方のゆだけ 着物の片方の行を、特に長くしたるをいふ。「ゆだけ」は行の長なり。ゆだけの方を見よ。○ませて着るべき云々 普通の着物と取混ぜて着らる、物にもあらずと也。○さまよき着たるこそ 恰好よく着たる普通の着物こそと也。○左右のゆだけなるは 左右共揃ひて長きゆだけなるはと也。○所せかめり 左右のゆだけとも長くは、着物ばかり廣がりて、場所塞けならんと也。○さこそ片つ方のゆだけなるをさす。

〔評〕 片つ方ゆだけは、我々の思ひも付かぬ仕立方である。一方のゆきが長くは、見た形もよくない。且本文にもいふ通り、片重りがして、背縫は片寄り、とても着て居られるものではない。何でこんな變な裁縫を好んだのか。古來これに就いての解説は、全くない。

想ふにこれは、車の出衣に關係した事らしい。車の定員は四名で、主人公は車の前方の右に、上藤はその左に對座する。下藤は、車の後方の左右に、又對座する。着席が何時も殆ど定つてゐる。それで出衣をするとなると、出す方の袖も、左右が殆ど定まつてゐる譯だ。出すにはゆきの長い方が具合がよい。そこで、各左右いづれかの袖を、その人柄に依つて、特に長く仕立てたのだらう。

この裁縫は當時流行の最新型で、頗るハイカラの物らしいが、清少はそれに反感をもつてゐる。兩ゆきを長くしたのは、左右の融通も利き、體裁もい、が、さて女房などの分際では、立居の邪魔になるばかり、やはり古風のま、が見よいと、保守説を出してゐる。實際新奇がつた物には、随分馬鹿氣なものが多い。

二百八十三段

かたちよき君達の、彈正にておはする、いと見ぐるし。宮の中將などの、くちをしかりしかな。

〔釋〕 ○彈正にて 彈正弼にてと也。○彈正 彈正臺は職員令に「掌、巡察内外(宮城ノ)糾彈、非違」と見え、延喜式には「京中弼以下、毎月巡察、勸彈、非違、東西市井諸寺、非違、及客館路橋破壊之類也」とあり。

尹一人、大弼、少弼各一人、以下各員あり。○宮の中將 親王の子の近衛中將たる人の稱。こゝは源頼定なり。○頼定 一品式部卿爲本親王の二男、母は左大臣源高明の女、官正三位參議左兵衛督使別當に至る。公卿補任に據れば、正曆三年八月彈正大弼に任せられ、長徳四年十月左近中將たり。○などの下、彈正にておはせしがを略けり。

〔評〕 彈正尹を親王所帶の職としてゐた當時、君達が彈正であるのは、弼にきまつた事である。その實權こそ檢非違使に移つてゐたが、因襲的にこはいおちさんたる感がある。さては優方な美しい君達などでは不調和だ。その實例に宮の中將を擧げた。頼定は美男だつたらう。村上帝の皇孫で、某女御とふざけて、出仕を停められた位の人だ。

二百八十四段

やまひは 胸。物のけ。あしの氣。只そこはかたなく物食はぬ。十八九ばかりの人の、髪いとうるはしくて長ばかりにて、すそふさやかなるが、いとよく肥えて

二百八十三段 二百八十四段

胸などもあいて、甚だ醜い。それに普通の着物とまけて着られる物ではない。やはり昔から恰好よく着てゐるのがよい。兩方のゆき丈の長いのはよい。それもやはり、女房の衣服としては、場取つて窮屈である。男が澤山重れて着るも、片方重くあらうぞ。綺麗な装束の織物薄物など、今は皆片ゆき長いやうである。當世風に、又様子のいい人が、かういふ着物を着なさうは、甚だ具合の悪いものぞ。

〔口譯〕 容貌のいい君達が、彈正であられるのは甚だ見苦しい。宮の中將などが彈正で、残念であつた事よ。

〔口譯〕 病は 胸、物の怪、脚氣、只何となく食が

す、まぬなどが、心配のものである。十八九ぐらゐの女の髪が大層立派で立背ぐらゐで、先がふさふさしてゐるの、大層よく太つて、非常の色が白く、顔付が愛嬌があつて、よい女と見えるが、齒をひどく病み煩つて額髪もシトシト泣いて濡し、髪が亂れかゝつたのも知らず顔が赤くなつて、それを押へてゐたのが趣がある。

八月時分に、白い單のしなやかなのに、袴もよい程なので、紫苑色の着物の、大層鮮やかなのを引着て、胸をひどく病むと、友達的女房達など、かはるゝ來て見舞ふ。部屋の外の方にも、若やかな君達が大勢來て、「大層お氣の毒な事よ。何

いみじう色しろう、顔あいぎやうづき、よしと見ゆるが、齒をいみじくやみまどひて、額髪もしとゞに泣きぬらし、髪が亂れかゝるも知らず、面赤くておさへ居たるこそをかしけれ。

八月ばかり、白き單衣の、なよらかなるに、袴よきほどにて、紫苑の衣の、いとあざやかなるを引き懸けて、胸いみじう病めば、友達的女房達など、かはるゝ來つとぶらふ。との方にも若やかなる君達あまたきて、「いといとほしき業かな。例もかくや惱み給ふなど、事なしびに問ふ人もあり。心がけたる人は、まことにいみじと思ひ歎き、人知れぬ中などは、まして人目思ひて、寄るにも近くもえ寄らず、思ひ歎きたるこそをかしけれ。いとうるはしく長き髪を引きゆひて、物つくとして起きあがりたる氣色も、いと心苦しくうたげなり。うへにも聞し召して、御讀經の僧の聲よき賜はせられたれば、几帳引きよせてするたり。程もなきせばさなれば、とぶらひ人どもあまた來て、經聞きなどするもかくれなきに、目をくばりつゝ、讀み居たるこそ、罪や得らむと覺ゆれ。

(考異) ○たけばかりにて 原本たけばかりとあり。堺本による。○ひとへの 原本の文字なし。○なよろなるに 原本に文字なし。○とぶらふ 原本になし。以上鈴木による。○との方にも若やかなる君達あまたきて 原本なし。○几帳引寄せてするたり程もなきせばさなれば 原本になし。○きて 原本見きてとあり。以上古本による。

時もかうお煩ひです。かなど、事もなしに尋れる人もある。この女に懸想する男は眞に大した事と心配し歎き、人知れぬ懸念中の男などは、まして人目を憚つて、寄るにも近くは寄得ないで、心配し歎いたのが面白。大層立派な長い髪を束れて、物を吐くといつて起上つた様子も、甚だ氣の毒げに愛らしげである。お上でもお聞きになつて、祈禱の爲に、御讀經する僧の聲のよい人をお遣し下されたので、几帳を引寄せてその備をすわらせだ。場所が面積もなはい狭さであるから、見舞の女房達が氣勢來て、經を聽聞などするも隠れなく見えるのに、僧がその方に目を配りながら、

釋 ○胸 これは胃病らしい。○あしの氣 脚氣を和名抄に「一云脚病、俗云阿之乃介」とあり。○そこはかとなく 何處といふ事なしにわろくてと也。○物くはぬ の下、心配なるものなりを略けり。○しといに しとゞにと也。甚しく濡れたる貌なり。○おさへ 面をなり。○胸いみじうやめば 或女房がなり。○事なしびに いか事なしびに見よ。○心かけたる この女になり。「心がけ」は懸想するをいふ。○人知れぬ中などは 人知れず懸念を通じたる中なる男などはと也。○物つく 嘔吐くこと。○うへ 中宮ならん。○かくれなきに 見舞の女房達の居餘りて、隠れなく見ゆるをいふ。○目をくばりつゝ その女房達に僧が目を配りつゝと也。○罪や得らむ 祈禱しながら女に心を移す故なり。罪は佛の咎めなり。

評 病氣の名目は、百種以上も當時はあつたが、その中で、一寸氣になるのを挙げた。昔の脚氣は範圍の大きい病であつた。何がなしに物食はぬのは、多分氣鬱病だらう。胸の病は胃瘵らしい。病氣の事から一轉して、病人の容體を描いて見た。若い美しい女の齟齬を病むのは、西施の顰の類で、後世でも、意氣なものとしてある。その様子もよく出てゐる。

若い女房が胸の痞とか癢とかいって、胃瘵瘵で苦しんでゐる。一體主持のかうした人達は、睡眠不足や不時の飲食や不攝生で、こんな病氣を起し易い。嘔すとて起上ると、髪は結髪である。一寸乙だ。女の友達、男の友達、情人と、その關係の親疎によつてかはる、各人各様の態度と心理状態とを、この女を中心にして描いた所が、至極面白い。

昔は聲のい、讀經には、佛菩薩や諸天善神も影響するとまで信じてゐた。今は普通命阿闍梨とて、――目ざめて經を心をすまして讀みける程に、八卷(法花經讀みはて、曉にまどろ

經を讀んで居たのは、佛様の罰を受けらるだらうと思はれる。

まむとする程に、人のけはひしければ、「あれは誰ぞ」と問ひければ、「おのれは五條西の洞院のほとりに候ふ翁に候ふ」と答へければ、「は何事ぞ」と道命いひければ、この御經をこよひ承りぬることの、生々世々忘れがたく候ふ」といひければ、道命「法華經を讀み奉ることは常の事なり、など今宵もいはるゝぞ」といひければ、五條の齋いはく、「清くて讀み參らせ給ふ時は、梵天帝釋をはじめ奉りて聽聞させ給へば、翁などは近づき參りて承るにも及び候はず、今宵は御行水も候はて讀み奉らせ給へば、梵天帝釋も御聽聞候はぬひまにて、翁參りよりて、承り候ひぬる事の忘れがたく候ふなり」と宣ひけり。云々。(宇治拾遺)

道命は諷誦の名人であつた。されば美聲の讀經を下されたのは、特別なお上の思召である。病人とは几帳を隔て、著座する。狭い局の事だから、見舞の女房達で一杯だ。いくら坊さんでも、佛様の事は忘れて、横目を使はずには居られなくなる。

「をかしけれ」の「らうたけ」と、遊樂的に考へられる程、その病氣は大したものではない。大病は論外だし、あまり病みほ、けてしまつては色氣がないので、突發的の趣のある病人を書いたのである。

二百八十五段

心づきなきもの 物へもゆき寺へも詣づる日の雨。使ふ人の、「我をばおぼさず、なにがしこそ只今の時の人」などいふをほの聞きたる。人よりはなほ少しくしと思ふ人の、おしはかりごとうちし、すゞるなる物うらみし、我さかしがる。心あしき人の養ひたる子。さるはそれが罪にもあらねど、かゝる人にしもと覺ゆる故

(口譯) 氣にくはないもの何かへもゆき寺へも參詣する日の雨、それが氣にくはない。召使ふ者が「御主人が私をば思つて下さらない。何某が只今

のマリ〜の人です〜といふのを、チラと聞いたのは、氣にくはない。外の者よりは、やはり少し憎いと思ふ人が、邪推をし、取止めもない物怨みをし、自分一人利口ぶるのは、氣にくはない。根性の悪い乳母の育てた子供、之が氣にくはない。それはその子供の罪でもないけれど、人もあらうに、こんな者に育てられたかと、思ふからであらう。この乳母は「御主人は大勢お子のある中で、このお子様をば、安くお見なされて、お憎みなさるよ」など、荒荒しくいふ。こんな者とも知らないのであらうか、乳兒はこの乳母を求めて泣騒ぐ。それが氣にくはないのであるやう

にやあらむ。數多あるが中に、この君をば思ひおとし給ひてや、にくまれ給ふよなど荒らかにいふ。ちごは思ひも知らぬにやあらむ、もとめて泣き惑ふ。心づきなきなめり。大人になりても、思ひ後見もて騒ぐほどに、なかなかなる事こそおほかめれ。わびしくにくき人に思ふ人の、はしたなくいへど、添ひつきてねむごろがる。いさゝか心ちあしなどいへば、常よりも近く臥して、物くはせいとほしがり、その事となく思ひたるに、まづはれ追従し、とりもちて惑ふ。

(考異) ○物へも 原本物へとあり。活本による。○時の 原本になし。古本による。○我さかしがる 原本我、いこげなるとあり。前出の同文による。

○我をばおぼさず 主人が自分をば愛してくれぬと也。○只今の時の人 只今主人の寵を得て時めく人と也。○おしはかり事 臆測事の義。こゝは邪推なり。○養ひたる子 養育したる子。乳を上げたる若君をいふ。○さるは 心づきなき思はるゝをさす。○それが 養ひたる子をさす。○かゝる人にしもと かゝる人にしもいかで養はるらむとの略。○あまたある中に 御兄弟がなり。以下養親の乳母の詞。○思ひおとし給ひ 御主人の殿はなり。○思ひも知らぬ 乳母の心あしきをなり。○もとめて 乳母をなり。○心づきなきなめり 上に、それがを補ひて聞くべし。○大人になりても その養君がなり。○はしたなくいへど あるかなしにいへどと也。つれなくする様なり。○その事となく思ひたるに その親切を嬉しとも何ともなく思ひたるにと也。○雨。聞きたる。さかしがる。養ひたる子。ねむごろがる。とりもちて惑ふ の下、各、心づきなしを略けり。

評 物の折の雨には、白河帝の雨禁獄も思ひ出される。

白河院の御時、金泥の一切經を書寫され、法勝寺にて御供養と定められ、その日時に及んで、甚雨ありければ延引す。又日時を定められたりければ、甚雨によつて延引す。又日時を定められたりければ、甚雨によつて延引す。第四箇度にたま／＼供養ありける日、空極曇り雨降つて、法會の儀式、最も興醒めたりければ、天氣逆鱗あつて、雨を器物に受れて、獄舎に入れられたりしをこそ、珍しき事に申し、(源平盛衰記)

召使のやつかみの陰口、身の程知らずには、殆ど愛想が盡きる。いけもせぬ奴が邪推したり、利口振つたりも困る。見なさい、上にも「物羨みし、身の上歎き、人のうへいひ」を、憎きものに數へてある。乳母は人情身びいきに成勝だのに、根が下衆だから、その根性惡と來ては、手がつけられない。遂には兄弟中を裂いたり、親子中に水をさしたり、飛んだ一大事を持上げる。縁に觸れて憎がられる養君こそ、い、面の皮だ。

蟲の好かぬ奴に親切にされる程、有難迷惑な者はない。却て「好いたお前の無理がよい」と俗語にもあるではないか。但こ、のは男ではない、朋輩である。

二百八十六段

宮仕人の許にきなどする男の、そこにて物くふこそ、いとわるけれ。くはする人も、いとにくし。思はむ人の、「まづ」など志ありていはむを、忌みたるやうにて、口をふたぎて、顔をもてのくべきにもあらねば、くひをるにこそあらめ。いみじう酔ひなどして、わりなく夜更けて泊りたりとも、更に湯漬だにくはせじ。心もなかりけ

だ。その子供が大人になつても、大事に思ひ世話をし騒ぐうちに、なまなかになくなく事が、多くあるやうだ。詰らなく憎らしい者に思ふ人が、たしなめていふけれど、附纏つて親切がる、これが氣にくはない。少し心持が悪いなどいふと、平生よりもそば近く臥して、物をくはせなどして、氣の毒がり、何でもなく思つてゐるのに、附纏つて追従し、世話を焼いて騒ぐ。それが氣にくはない。

(口譯)

宮仕する女房の許に來などする男が、其處で物を食ふのは、甚だ悪い。食はせる女も甚だ憎い。思つてゐる女が、「まづ召しあがれ」など、志が

りとして來ずば、さてなむ。里にて、北面よりし出したるはいかゞせむ、それだになほぞある。

釋 ○まづなど まづ召上れなどの略。○くひをるに 男がなり。○いみじう云々 男がなり。○心もなかりけり云々 親切心もなしとて男の來ずばと也。○湯漬 水飯を見よ。○さてなむ の下、あるべきを略けり。○北面 茶の間、内所などに當る。二十三段を見よ。○いかいせむ の下、止むを得ぬなるべしを略けり。○なほぞある なほ憎くぞあるの略。

評 煮炊の不自由な宮仕所では、食物を供するに及ばぬ、これは一理屈ある。落窪の姫君は曹司住で、奉公人同様の生活をしてゐたが、其處に少將の君が泊つた朝、

安瀟(乳母子) 御手水粥、いかに参らむと思ひて、御厨子にいきて語らふ。「帯刀の友達なむよ、物いはむとて來りしを、雨にとまりて、まだ歸らぬに、粥くはせむと思ふを、土器少し賜へ、さてはひき干などや残りたる、少し賜へ」といへば、――傍なる瓶子をあけて只取り取るを、「少しは殘し給へ」といへば、「さよ／＼」といひて紙に取分けて炭取に入れて、引隠しもて行きて、云々。(落窪物語)

こんな苦勞をして、やつとお膳立をしたものだ。しかし「口を塞ぎて顔をもてのくべきにも」だの、「湯漬をだにくはせじ」だの、「來ずばさてなむ」だのと、口氣がひどく強硬なのは、何か激する所あつての事らしい。里の邸で、勝手から出したのは可かりさうなものだに、それもいけないといふのは、や、調子に乗つて脱線した氣味がある。これでは三つが一つの三日の餅の外は、女の所では、何も食へない。

二百八十七段

あつて勤めようのを忌嫌つたやうに、口を塞いで、顔を引込ますべきでもないから、據なく男は食ひをるのであらう。ひどく酔ひなどして、無上に夜更けて泊つたとしても、自分は一向湯漬すら食はせまい。それで男が思ひ遣りもないわと怒つて來ないなら、そのまゝで構はない。里の家で、勝手の方から調子出して、食はせたのは、どうせうぞ據ない。それですらやはり憎い。

初瀬に詣でて局に居たるに、あやしき下衆どものさしろさしまぜつ、居並みたるけしきこそないがしろなれ。いみじき心を起して詣でたるに、川の音などの恐ろしきに、樽階をのぼり困じて、いつしか佛の御顔を拜み奉らむと、局にいそぎ入りたるに、白き衣着たる法師、蓑蟲のやうなる者ども集まりて、立ち居額づきなどして、露ばかりも所をおかぬは、押し倒しつべき心こそすれ。いとやむごとなき人の局ばかりこそ、前ばらひあれ、よろしき人は、制しわづらひぬかし。たのもし人の師を呼びていはすれば、法師、そこども少し去れ」などいふ程こそあれ、歩み出でぬれば、おなじやうになりぬ。

(考異) ○白き衣きたる法師 原本になし。○ども集まりて 原本のあやしき衣着たるがいとくきとあり。○などして露ばかりも所をおかぬは 原本たるはとあり。以上古本による。

○局に云々 參籠の爲なり。○うしろさしまぜつ、 着物の後を互に入交りにしてと也。本尊に向ひ、局の方を背にして、雜居したる後姿をいふ。「うしろ」は着物の脊幅のあまりをいふ。○ないがしろなれ 作法なりと也。○いみじき心 殊勝なる心、即ち信心なり。○川の音 山下の初瀬川の水音なり。○佛の 本尊のなり。○蓑蟲のやうなる者 此、は下賤の者の形容。蓑蟲のやうなるを參看せよ。○立ち居云々 局の前にてなり。○所をおかぬ 遠慮せぬをいふ。○前ばらひ 前拂する者をいふ。○よろしき人の 普通の人の局はと也。○たのもし人の師 參籠の世話を頼める法師なり。宿坊の大徳に奉仕する法師なるべし。○いはすれば 局前にる者になり。○歩み出でぬれば 法師がなり。

(口譯) 初瀬の觀音に參詣して、參籠の局に居た時に、怪しい下衆共が、着物の後を入れまどにして、居並んだ様子で、不作法である。殊勝な心を起して參詣したのに、川の水音などが恐ろしい上に、樽階をのぼり惱んで、いつ本尊様の御顔を拜めるだらうかと、氣が氣でなく、局に急いではいつ着た法師や、蓑蟲のやうなる者共が集つて立つたり坐つたり、禮拜したりなどして少しばかりも遠慮をしないから、突倒してやりたい心持がする。非常に貴い方の局ばかりは、局前の人拂がある。けれど普通の人の局は、拂ひかけた事よ。萬事の頼りにしてゐる宿坊

の法師を呼んで、小言をいはせると、法師が「お前途少しのけ」などいふうちこそ退いてゐるが、その法師が立去ると、又元と同じやうになつてしまふ。

(口譯) いひにくいもの、人の便りや貴人の仰言などの多くあるのを順序の通りに、始から終まで、大にいひにくい。その返事がまた申しにくい。立派でさまりの悪いと思ふ人の、物を贈つてくれた返事がいひ悪い。大人になつ

評「初瀬に詣でて」から、「ないがしろなれ」までは總叙で、以下は更に、それを反復詳説したのである。例の樽階を、やつとの事で登つて、局に着くと、局前の内陣は、もう白衣の修行者や汚い下衆で一杯だ。それがうしろの局に、身分ある方が參籠して居ようが居まいが、一向お構なしで、居たり立つたり。ちらくらして、肝腎の本尊様のお顔が拜めやしない。「押し倒しつべき」は亂暴で、姫御前のやうでもないが、下衆共の不遠慮作法には、もう堪忍がならぬといった調子である。附切の前拂が居る貴人の局はい、が、普通の所では、始末にいけない。だから世話焼の坊さんに喧ましくいはせる。その坊さんの影が見えなくなると、又もとく。實に癪に障るて。初瀬詣のスケッチで、堂内の混雑と、信仰に燃立つた焦燥とが、印象強く描かれてある。百三段の初瀬參籠の條の羽翼として、至極面白い。

二百八十八段

いひにくきもの 人の消息、仰言などの多かるをついでのままに、はじめより奥まで、いとひにくし。返事また申しにくし。はづかしき人の、物おこせたるかへりごと。大人になりたる子の 思はずなること聞きつけたる、前にては、いとひにくし。

釋 ○ついでのままに 順序の通りにと也。○奥まで 終までなり。○返事 上の消息仰言などに對しての御返事なり。○思はずなる事 意外なる事件。失錯などなるべし。抄に「好色の道などに荒む意なり」。

た子の、意外な不始末などを聞付けたのを、現在その面前では、甚だいひ悪い。

○前にては、子の前にてはと也。さし向ひてはといふが如し。
評 お口上の取次は、殆ど瀉瓶して傳へるやうに、いかな長口上でも、一言一句も間違てはならぬ。御返事とても同じ事、餘ほど頭のい、者でなければ出来ぬ。かういふ御用は、その癖女房には多い。相手によつて、事柄によつて、話題によつて、いひにくい例を擧げてゐるが、「大人になりたる子」の條は、今日でも變りがない。全く小言を切出す方がきまりが悪い。

二百八十九段

束帯は 四位五位は冬。六位は夏。宿直姿なども。

(考異) ○束帯は 原本になし。宸翰本による。

釋 ○四位五位は冬云々 四位五位のは冬に、六位のは夏にこそふさはしけれの略。○宿直姿 殿上の宿直姿を見よ。○なども の下、同じ事なりを略けり。

評 四位の袍色は黒、五位のは淺緋だから冬向で、六位のは深緑だから、夏向だといふ。尤もな感じである。宿直姿は表袴が指貫とかはるのみで、袍は同じだから、感じは束帯と同じ管である。(四位五位は冬とあるに就いては二一九段の本文及批評を参照)。

二百九十段

品こそ男も女もあらまほしきことなめれ。家の君にてあるにも、誰かはよしあしを定むる。それだに物見知りたる使人ゆきて、おのづからいふべかめり。まして

(口譯) 品格は男も女もありたい事であるやうだ。その家の女主人公として居るにも、

誰かその善惡を、いひ定めるかい。それでさへ物の辨へのある使などが往つて、その様子を見て取つて、自然善惡をいふやうである。まして宮仕などの勤をする人は、善惡をいはれる事は、甚だこの上もない。だから品格はありたい。猫の土におりたやうであつては残念である。

まじらひする人は、いとこよなし。猫の土におりたるやうにて。

釋 ○品 品格。○家の君にてあるにも 家庭の主人公として居るにと也。妻君たるをいふ。もの辭輕く見るべし。○誰かは云々 家にのみ籠り居て、人中に出でねば也。○物見知りたる使人 分別のある餘所からの使者。○おのづからいふめり よしあしを自然いふやうなりと也。○まじらひする人 宮仕する人をいふ。○いとこよなし 善惡をいはること、いとこよなしの略。○猫の土に云々 猫は家の内に居るべきものなるに、土に下りたるは品なしといふ意なるべし。○やうにて の下、あるべしやはを略けり。

評 家の君は、數多の妻妾の中から、特に主人の目がねにかなつて、北の方と居ゑられた方だから、家來の分際では、誰れ一人、その善惡の噂をする者もない。それでさへ、よそから來た使者などの目はしの利いた奴となると、被物のくれ方一つでも、何かと感付いてしまふ。況や宮仕人は、むき出しで人中に居るのだから、淡々しく見えたり、ゆかしげがなかつたり、品格がグツと落ちてしまふ。こんな事情で、成るべく品は保ちたいといふ。「男も女も」とはいつたが、作者の意は、おもに女の上にある。この文、結末の「猫の土に」の比喩が、や、明晰を缺くので、ピンと來ない。

二百九十一段

たくみの物くふこそ、いと怪しけれ。寢殿を建てて、東の對だちたる屋を造るとて、たくみども居並みて物くふを、東面に出て居て見れば、まづもてくるや遅きと、汁

(口譯) 大工の物を食ふのが甚だ怪しい。寢殿を建て、さて東の對

物取りて皆飲みて、土器はついするつ。次にあはせを皆くひつれば、おものは不用なめりと見るほどに、やがてこそうせにしか。一二人居たりし者、皆させしかば、たくみのさがなめりと思ふなり。あいな的事どもや。

(考異) ○ふつ 原本すふつとあり。別本による。○さが 原本さるとあり。鉛本による。○あいな的事どもや 原本あなもたいな的事どもやとあり。堺本による。

釋 ○たくみ 大工をいふ。○土器 汁物の土器なり。○ついする 突据ゑの音便にて、「つい」は接頭語。○あはせ 合せ物ともいふ。今の菜なり。貞丈いふ「あはせは飯の菜の事なり。飯に合はせて食ふ故なり」。○おももの こゝは飯なり。

○やがてこそうせにしか すぐ無くなりしと也。食ひ終へたるをいふ。○さが 性分、性質などの意。○あいな的事 愛嬌なしの事と也。原本のあなもたいな的事は、あな勿體な事の意ならん。

評 汁菜は飯をすゝめる料である、それにまづ汁を飲盡し、次に菜を食盡し、終に飯ばかり食ふのは、餘ほど變な食方で、下衆らしい持前が出てゐる。飯は一杯切の高盛で、今のやうにお代をするのではない。それさへ、一寸箸で搔廻したかと思ふと、なくなつてしまふ。

お膳立をして、一寸複雑な獻立で飯を食ふ。多分主人方からの御馳走だらう。その頃の木工さんは、四足の表門と普通の門を造るに、工賃の外に棟梁が長絹一疋、脇番匠三人が各六丈の手作、職人が信濃布各二端も貰ふ。實入は大分よさうだ。身錢でも御馳走が食へさうだ。



大工(建保職人歌合)

ついた屋を造るといって、大工共が居並んで、物を食ふのを寢殿の東面に出て居て見ると、まづ食物を持つてくるが早い、汁の物を取つて、皆飲んで、その入れ物の土器は突出して置いた。次にお菜を皆食つたら、御飯は入らないのであるやうだと見るうちに忽ちなくなつてしまつた。二人三人居た者が、皆さうしたから、これは大工の性分であるやうだと思ふのである。愛嬌のない事と。

二百九十二段

物語もせよ。昔物語もせよ。さかしらにいらへうちして、こと人と物いひまぎらはす人、いとにくし。

(考異) ○物語も 原本物語をもとあり。抄本による。

釋 ○物語も 當今の物語もなり。○いらへうちして 打ちいらへてといふに同じ。

評 知つたり振をして、人の話の腰を折ることばかり藝にしてゐる厄介者が、昔でもあつたと見える。

二百九十三段

ある所に、何の君とかやいひける人の許に、君達にはあらねども、その心いたくすきたる者にいはれ、心ばせなどある人の、九月ばかりにいきて、在明の月のいみじう照りておもしろきに、名残思ひ出でられむと、言の葉を盡していへるに、今はいぬらむと遠く見送るほどに、えもいはず艶なり。出づるやうに見せて立ち歸り、立部あいたる陰のかたに添ひ立ちて、なほゆきやらぬさまもいひ知らせむと思ふに、「在明の月のありつゝも」とうちいひて、さしのぞきたる、かしこより五寸ばかりをさりて、火ともしたるやうなる月の光催されて、驚かざる、心ちしければ、やをら

(口譯) 今の世の話もせよ、昔話もせよ。自身は話もしないで、人の話に、なまじひに挨拶をして、しかも、他の人と口を利いて話の筋を紛らす人は、甚だ憎い。

(口譯) 或所に何の君とかいつた女の許に、君達ではないけれども、その心立が、大層洒落れた者には、はれ、氣のはたらきなどのある男が、九月時分に往つて、曉に歸るに、在明の月が、大層照つて面白いのに、女に名残を後までも思ひ出されようと、

立ち出てにけりとこそ語りしか。

(考異) ○何の君 原本中の君とあり。○かしこより五寸ばかりをさりて 原本かみのかしらにもより、こす五寸ばかりさがりてとあり。以上原本の一本による。

○名残思ひ出でられむ 自分を出で去ぬるあとの名残を、女に思ひ出て貰はんと也。○今はいぬらむ男がなり。○遠く見送る 女がなり。○出づるやうに見せて 男がなり。○いひ知らせむ 女になり。○在明の月のありつゝも 拾遺集戀三、人麻呂「長月の在明の月のありつゝも君しきまさらばわれ戀めや」の歌なり。意は在明の月の在りといふ如く、何時も在りくして、變りなく君の來給はば、我は戀心に責めらるゝ事はあるまじと也。○かしこより 女のさし覗きた所よりと也。○とこそ語りしか 女の男がなり。この句にて、前文を或人の談話に取成したり。これも一種の文法なり。

評 長月の在明月は、よく情事の背景に使はれる。曉の有様のむづかしい事は、にくきもの、段に、委しい説明がある。此處は立去つたと見せて、小戻して、とても歸れないといつた、ごく甘い所を見せよのたくみだ。女はまた、何時までも名残をしげに佇んで、「在明の月のありつゝも」と、深い戀心を口ずさんでゐる。艶なもので、いよ御兩人といふ所だ。幕切に、月の光を女の顔近くさ、せたものも、風情がある。徒然草に、男の立去つた後、

妻戸をよき程にあけて、月見るけしき也。やがてかけ籠らましければくちをしまし。かやうの事は朝夕の心づひによるべし。

とあるのは、おなじ場面、おなじ趣で、本文の注脚になる。

二百九十四段

(口譯) 女房が禁中に参り又は退出するには、車を借りる時もあるに持主は快く返事をし、貸してくれたのに、牛飼童が、いつもの牛より、下等なやうに、この牛を罵つて、ひどく打走らせるのも「まあいやな」と思はれるよ。車副の男たちなどが小面倒なやうな様子で「どうぞ夜の更けない先に、追立て、歸つてしまはう」といふのは、やはり持主の心が詰らなく推量されて、急の用事であつても、亦借用を申込みうと思はない。業遠の朝臣の車ばかり、夜中曉の差別なく、人が借りて乗るに、少しもそんな事なかつたかと思ふ。よくも男や牛飼などを教へ習

女房の参りまかでするには、車を借る折もあるに、心よういひて貸したるに、牛飼童の例の牛よりもしもざまにうちいひて、いたう走り打つもあなうたてと覺ゆかし。をのこどもなどの、物むつかしげなる氣色にて、いかで夜更けぬさきに、追ひて歸りなむといふは、なほ主の心おしはかられて、とみの事なりと、又いひ觸れむとも覺えず。業遠なりとほの朝臣の車のみや、夜中あかつきわかず人の乗るに、いさゝかさる事なかりけむ、よくこそ教へ習はしけれ。道に逢ひたりける女車の、深き所におとし入れて、得引きあげて、牛飼の腹だちければ、わが從者ぞして打たせさへしければ、まして心のまゝに、いましめ置きたるにこそ。

(考異) ○心よう 原本心よそひしたる顔にうちとあり。○よくこそ 原本よくぞとあり。以上古本による。○習はしけれ 原本習はしたりしかとあり。四本による。○にこそ 原本に見えたりとあり。古本による。

釋 ○心よういひて貸したるに 車の持主がなり。原本のは、心構したる顔付にてといふ意か。なほ本文の方、意たしかなるべし。○例の牛よりも云々 何時も使ふ牛よりも、この牛を下等なるやうにいひてと也。古本には、「例の知りしよりも強くいひて」とあり。これは何時もの知合ひし牛飼よりも、荒々しく牛を吐りての意。○をのこども 借りたる車の車副こまの男なり。○追ひて 牛をなり。○なほ主の心云々 やはり持主の心も、内心快く貸したるにはあるまじと推量せられてと也。○とみの事なりと」とは、ともこの意なり。例多し。○いひ觸れむ 言ひかけむと也。車を貸して給はれと申出づるをいふ。○業遠 高階氏。高階氏系圖によれば、從五位下左衛門佐敏忠の子にて、美濃丹波の守を経て、正四位下春

はせた事。途中で遇つた女車が道の凹所に車を陥れて、引上げ得ないで、牛飼が腹を立てたから、業遠朝臣は、自分の家來をして、牛を打たせて手傳ひさせさせたから、まして牛飼などを、思ひどほり教訓しておいたのであるらしい。

宮亮たり。高階成忠の甥なり。○深き所 窪き所なり。○わが従者して云々 わが家來をして、牛を打たせまでしければと也。女車の當惑を見兼ねて、わが家來をやりて手傳はしむる程に、よく注意の届きたるをいふ。但この句前後の連絡、や、明瞭を缺く。或は訛舛あらん。○心のまゝに云々 思ふがまゝにわが車副牛飼等を教訓して置きたるなりと也。「こそ」の下、あめれを略けり。

昔は可成の身分の人でも、衣服の賃借を盛にしたもので、特別仕立の物は猶更であつた。車に至つては勿論だ。

女房のお里は受領級がおほい。車位持合せてもいゝが、現任の人は主人が赴任してゐるし、前司なら閑散で、その必要がなくなるから、用意がない。それで宮中の參退には、餘所から借して貰ふ。

主用の外の臨時御用、多少の祿はあるにせよ、餘り芳ばしい事はない。牛につらく當るのはすさまじいもの、無遠慮にも早く歸らうなど放言するのは心づきないもの、皆これ満々たる不平の爆發である。その不作法には愛想が盡きる。主人の沽券まで下る。これは清少の持論で、これまで再三反復した事である。即ち、

かのいふ者はとくも覺えず、この居る人こそ、をかしう見聞きする事も失するやうに覺ゆれ。——よき人君達などの供なるこそ、さやうにはあられ。たゞ人などさぞある。(六十一段)

さて業達の家來共の教訓がよく行届いて、紳士的である事を稱歎してゐる。これは業達の身分が所謂君達でない、たゞ人である事によつて、殊に感服の度を強めるのである。但その中宮の御母上(高内侍)の御従兄弟である意識が、何處やらに潜在してゐるのではないかと考へさせられる。

この草子中、車の記事が非常に多い。服飾に次いで、車に興味を感じたものと見える。よく當時の習俗を察ると、これはあながち清少ばかりの事ではない。一般的の好尚であつた。

二百九十五段

すきくしくしてひとり住する人の、夜はいづらにありつらむ、曉に歸りて、まだねぶたげなる氣色にて、硯とり寄せ、墨こまやかに押し磨りて、事なしびに筆にまかせてなどはあらず、心とめて書くまひろげ姿をかしく見ゆ。白ききぬどものうへに、山吹、紅などをぞ着たる。白き單衣のいたくしほみたるを、うちまもりつゝ書きはてて、前なる人にも取らせず、わざと立ちて、小舎人童のつきくしきを、身近く呼び寄せてうちさゝめき取らせていぬる後も久しくながめて、經のさるべき所々など、忍びやかに口ずさびにし居たり。奥のかたに、御手水、粥などしてそ、のかせば、歩み入りて、文机に押しかゝりて文をぞ見る。おもしろかりける所々はうち誦んじたるも、いとをかし。手洗ひて、直衣ばかりうち着て、六の卷をぞそらに讀む。まことにいとたふときほどに、近き所なるべし、ありつる使歸りきて、うちけしきばめば、ふと讀みさして、返事に心うつすこそ罪得らむとをかしけれ。

(考異) ○曉に歸りて の下、原本やがて起きたるとあり。○氣色にて 原本氣色なれどとあり。以上塚本による。○はて、原本たて、とあり。抄本による。○うちまきしめきとらせて 原本うちさゝめきてとあり。古本による。○六の卷 原本ろくとあり。活本による。○歸りきて 原本になし。塚本による。○心うつすこそ罪得らむとをかし 原本心入るゝこそいとほしけれとあり。古本による。

(口譯) 色好で獨身でゐる男が、昨夜は何處に泊つたのだらう、明方に歸つて、まだ眠さうな様子で、硯を取寄せ、墨を丁寧に磨りて、事もなげに、筆に任せて書く事などはしない。氣を付けて書いてゐる、はだかつた姿が面白く見える。白い衣などの上、山吹や紅の着物などを着てゐる。白い單のひどくくたぐたになつたのを、見詰め乍ら、手紙を書いてしまつて、前にゐる女房にも渡さないで、わざと自身で立つて往つて、小舎人童の相應らしい様子なのを、身近く呼寄せて、ひそひそ覗いて、手紙を渡して、その童が往つ

た後も、何時までも打詠めて、經文の然るべき所々など、忍やかに口ずさんてゐた。奥の間の方で、御手水や粥など支度して、おすゝめすると、奥の間へ立入つて、文机に凭れて、書物を見る。面白くある所々は吟じたのも甚だ面白い。手を洗つて、直衣引懸けて、法華經の六の巻を暗誦する。まことに貴いと思ふほどに、使の往つた所は近いのだらう、以前の使が歸つて来て、それと合圖をみると、ふと經文を讀みまして、持つて来た女の返事に心を移すのが、佛の罪を受けようかと思はれて面白い。

○曉に歸りて の下、原本の「やがて起きたる」は寢起きたるとあらでは、その意通せず。○心とめて書く 心とめて後朝の文書くと也。○筆にまかせてなどは 筆に任せて走り書きする事などはと也。○しばみたるを 朝露にそぼちたるなるべし。○前なる人 召使の女房ならん。○取らせて云々 文を取らせてその童の去ぬる後もと也。○奥の方 北面なり。○そ、のかせば 手水粥などの支度して、いざ召し給へと、女房達のすゝむればと也。○あゆみ入りて 奥になり。○直衣ばかり云々 指貫をはかぬ様なり。源氏、帚木に「直衣ばかりを」とある解を引きて、こゝをも、下に衣を着ざる意に解くは誤なり。○六の巻 法華經の六卷目、壽量品なるべし。法華經は元來七卷のものなるを、八講の都台上、八卷としたるが行はれ、卷數と内容とに相違を來せり。○ありつる使 先の小舎人童なり。○けしきばめば 女の返事を持來れることを、氣色にて知らする也。

評 かつらふ所はあまたありながら、まだ思ひ定めた北の方もない。これが當時の好色な若殿様の境涯であつた。山吹は冬の直衣である。紅は袖で、白き衣は單だらう。ごく簡素な服色で、さらりとした調子が浮いて見える。後朝の文を書きながら見入つた、曉露にぬれた着物の襟など、頗る思出の深いものである。しかもそれが祕密の情事である所に、一層の趣が出てくる。何やら經文の片はしを口ずさむ。本など讀んで、氣に入つた句は朗誦する。墨も丁寧に磨る、手紙も細心に落著いて書く。何處までもゆつたりと、こせ／＼しない所が身上だ。手を清めてから、本式に法華經の六卷を宙に讀む、素人離れがして有難い。女の返事が來たので、一寸讀みさして氣を移す所が、やはり面白い。信仰でも餘り行詰つたのは、感心出來にくいとした。そこで恐ろしい、佛罰を蒙りさうな豫想をもちながらも、なほその間に、或興趣を見出して翫賞することを、決して忘れない。平安朝紳士の生活は、すべての方面に對し

て、かうした餘裕をもつことを理想とした。最も熱狂し易い兩性間の葛藤でも、

この君(道雅)故帥の中納言惟仲の女にぞすみ給ひて——女君いかゞ思ひ給ひけむ、みそかに逃げて、今の皇后宮にこそ參りて、大和宣旨とおはし給ふなれ。されば年頃の妻子とやは頼むべかりける。なかく／＼それしもこそあなづりて、をこがましくもてなしけれ。あはれ翁が童への、さやうに侍らましかば、白髪をも剃りて、鼻をもかき落し侍りなまし。(大鏡)
小一條院にある宮内といふ人、男に髪切られたりと聞きて、(實方集)



紳士と佛法

髪を切るか、鼻をそぐ位が關の山で、それもよき人の所業では、全然なかつた。(三十段の批評參看)
綜合して見ると、學問や宗教に興味をもち、諷誦の藝が出來、手書く業に秀で、それ等が朝歸の極めて打解けた情趣の點景となつて、この男の情らしい振舞に價值づける、頗るふつくりした柔味に包まれた氣分が、實にいい。

三十三段の朝歸の男を前篇とすると、これはその後篇になる。一貫して見ると、そこに面白い情味が湧く。多分清少の理想を描いたものたらう。

二百九十六段

清げなるわかき人の、直衣も、袍も、狩衣もいとよくて、きぬがちに袖口あつく見えたるが、馬に乗りていくまゝに、供なるをのこ、たて文を、目をそらにて取りたるこ

(口譯) 綺麗な若い人が、直衣でも袍でも狩衣でも大層立派で、着物

勝に、澤山着込んで、袖口が厚く見えておぼが、馬に乗って行くにつれて、供する男が、立文を仰向いて受取つた様子が面白い。

そをかしけれ。

釋 ○直衣もうへの衣も狩衣も「も」はいづれも、にても意。○きぬがちに 直衣袍狩衣などの下に、着たる衣の多きをいふ。○たて文 若き人の取らする立文をと也。○目をそらにて 目を上にしてと也。仰向きたるをいふ。○とりたる 立文をなり。

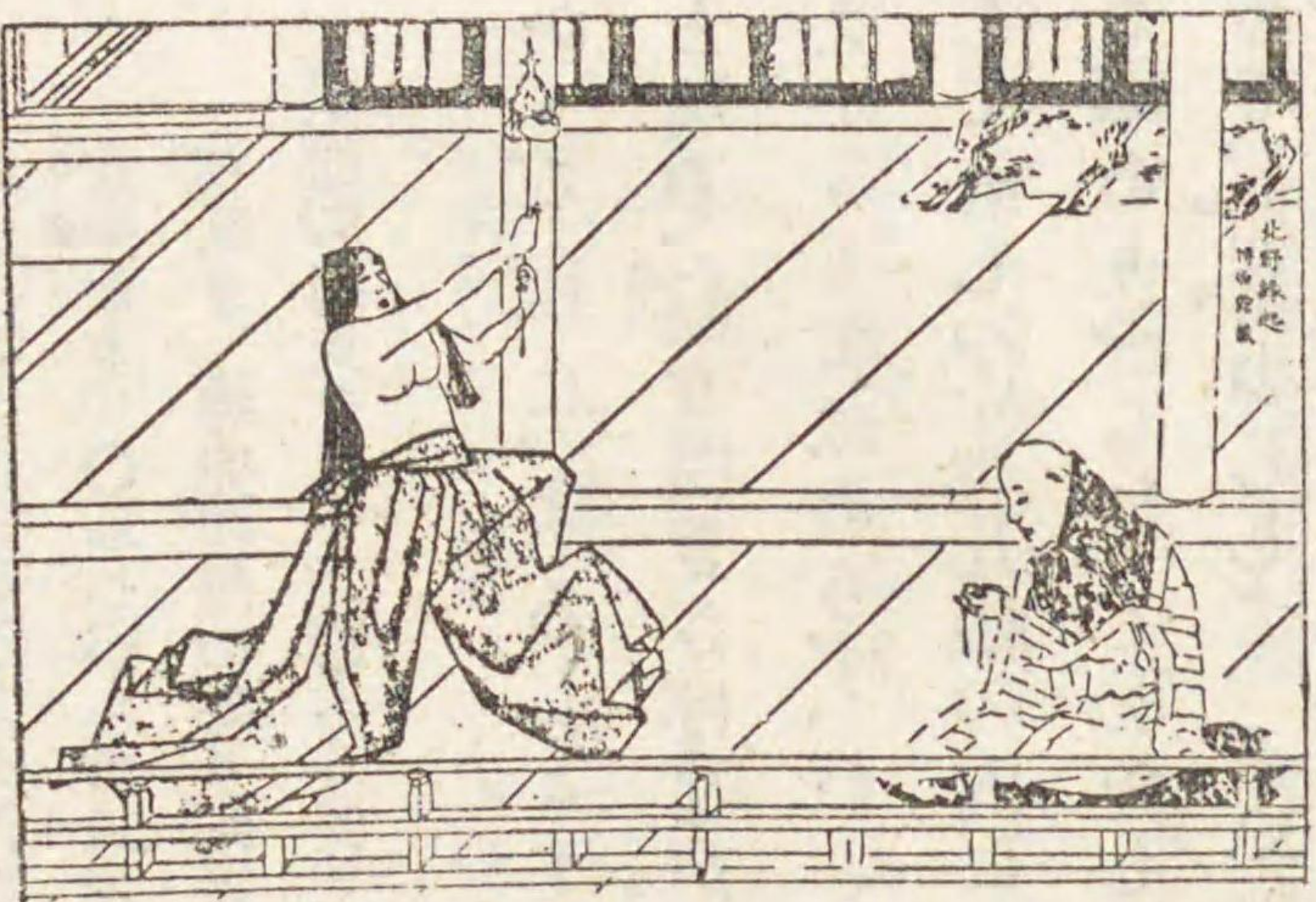
評 馬上から立文を給ふ、それで餘計に袖口が目につく。家來が仰向いて受取る。「馬に乗りていくま、」が、このスケッチの主眼で、そこに主従の活動的態度が、面白く髣髴する。

二百九十七段

(口譯) 松の木立が高く、庭の廣い家の、東南の格子などを上げ渡してあるから、涼しさうに透いて見えるに、母屋に四尺の几帳を立て、前に圓座を置いて、三十餘りほどの僧の、さう僧げでもないのが、薄墨色の衣に、薄物の袈裟などを、大層鮮やかに支度をして、香染の扇を使い、

松の木立ち高う、庭廣き家の、東南の格子どもあげ渡したれば、涼しげに透きて見ゆるに、身屋に四尺の几帳立てて、前に圓座を置きて、三十餘ばかりの僧の、いとにくげならぬが、薄墨のころも、うすもの、袈裟など、いとあざやかにうちさうぞきて香染の扇うちつかひ、千手陀羅尼讀み居たり。物のけにいたうなやむ人にや、うつすべき人として、おほきやかなる童の、髪など麗しき、生絹の單衣、あざやかなる袴長く着なして、ゐざり出でて、横さまに立てる、三尺の几帳の前に居たれば、こなたさまにひねり向きて、いとほそう、にほやかなる獨鉈を取らせて、を、と目うちひさぎて讀む陀羅尼も、いとたふとし。顯證の女房あまた居て、つどひまもらへたり。

久しくもあらでふるひ出てぬれば、もとの心うしなひて、行ふまゝに隨ひ給へる護法も、げにたふとし。せうとの袈したるほそ冠者どもなどの、うしろに居てうちはするもあり。皆たふとがりて集まりたるも、例の心ならば、いかにはづかしと惑はむ。みづからは苦しからぬ事と知りながら、いみじうわび歎きたるさまの心苦しさを、つき人の知人などは、らうたく覺えて、几帳のもと近く居て、衣ひき繕ひなどす。



物 起 縁 野 北

(考異) ○松の 原本前のとあり。古本による。○こなたさまに 原本とさまにとあり。別本による。

釋 ○身屋に四尺の云々 身屋と廂の間との界に立てる也。○にくげならぬが 醜からぬをいふ。○薄墨の衣 鼠色の衣なり。○物のけに云々 病人はなり。「にや」の下、あらむを略けり。○物の怪の事は、五段のてうじてに委し。○うつすべき人 物の

怪をうつすべき人、即ち寄兇なり。○横さまに 僧の横手にと也。○こなたさま 寄兇の居る方。○ひねり向きて 僧がなり。○にほやかなる 美しく光れるをいふ。○取らせて 寄兇になり。○を、僧の發したる聲なり。○うちひさぎ 打塞ぎの轉か。○顯證の女房 簾几帳などの物越ならで、あらはに打出でたる女房をいふ。六段を見よ。○まもらへ 目守りの延言。見詰むること。○ふるひ出でぬれ

千手陀羅尼を誦んでゐる。病人は物の怪にひどく悩む人だらうか、物の怪を移すべき人として、年のいつた童女の髪など見事なのが、生絹の單衣に、鮮やかな袴を長めにはいて居ざり出て、横の方に立つてゐる三尺の几帳の前に居たので、僧は此方にねち向いて、大層細く光澤のある獨鉈を、その童女に持たせて、な、と聲を懸けて、目を塞いで讀む陀羅尼も甚だ尊い。簾外にあらはの女房が大勢居て、集つて見詰めて居た。間もなく童女が身をふるひ出したので、本心を失つて僧の加持するにつれて、験を現しなまる護法神も、まことに尊い。童女の兄の袈を着た細やかな若者

などが、うしろに居て團扇で煽ぐのもある。皆算がつて集つたのも、童女がいつもの本性であるならば、どんなにか羞かしいと當惑するだらう。當人自身は苦しくない事とは知りながら、祈り責められて、甚しくわび歎いてゐる様子の氣の毒さうなのを、物の怪に憐む人の知人などは、かはゆく思はれて、几帳の際近く居て、その童女の取亂した着物を取繕つてやりなどする。

(口譯) かうしてゐるうちに病人は少しといふので、御湯など、北面から取次いで上げる間をも、若い女房達は待遠にして、御湯の盤をも引上げながら、祈禱の場を急いで覗くことよ。そ

の女房達は、單など綺麗に、薄色の裳など萎えかゝつてはゐない。大層綺麗である。申の時に物の怪に大層陳謝をさせなどして赦した。童女は我に反つて「几帳の内に居たと思つてゐた。驚いたことにも、外に出たことよ」と羞かしがつて、髪を振懸けて顔を隠して、そつと這入つてしまはうとする。僧が暫時引とめて、加持を少しして「どうぞすまひ。さつぱりなさいましたか」といつてニヤリとしたのも、きまり悪るさうである。僧は「暫時居るべきですが、例時の勤の刻限にもなりませうから」といつて、お暇乞をして退出するのを、女房が暫くお待ち下さい。法施報當をさし上げ

ば 寄。咒。が。なり。○もとの心 本心。本性。○行ふまゝに云々 僧の調伏の法を行ふに随つて、験を現す護法神も、まことに尊しと也。○せうと これは寄咒になりたる童女の兄なり。憑人(つき)にはあらず。○ほそ冠者 ほそやかなる若者。「ほそ」は身體のまだ十分發達せぬ形容。冠者は元服したるばかりの若者の稱。蓋し初めて冠を着るを元服といへば也。○うしろ 寄咒のなり。○團扇する 團扇にて扇ぐをいふ。名詞をサ行變格にうつしたる畸形語なり。○例の心 平生の心。本心なるをいふ。○惑はむ寄咒の童女がなり。○みづからは云々 當人自身は夢中ゆゑ、何の苦もなき事と知りながらと也。○いみじうわび歎き 寄咒の體に寄りたる物の怪が、調伏されてわび歎くをいふ。○つき人 物の怪の憑きたる人、即ち病人をさす。○らうたく覺えて 寄咒の童女の上をいふ。

かゝる程に、よろしとて、御湯など北面に取り次ぐほどをも、わかき人々は心もとなく、盤も引きさげながらいそぎでぞみるや。單衣など清げに、薄色の裳など萎えかゝりてはあらず、いと清げなり。申の時ばかり、いみじうことわりいせせなどして許しつ。几帳の内にとこそ思ひつれ、あさましうも出てにけるかな。いかなる事ありつらむ」と恥かしがりて、髪を振りかけてすべり入りぬれば、しばしとゞめて、加持少しして、魚いかにぞや、さはやかになり給へりや」とて、うち笑みたるもはづかしげなり。魚しばしさぶらふべきを、時のほどにもなり侍りぬべければ「と、まかり申して出づるを、うしばし。ほうちはうたう參らせむ」などとゞむるを、

いみじう急げば、所につけたる上臈とおぼしき人、簾のもとにゐざり出て、「いと嬉しく立ち寄せ給へりつるしに、いと堪へ難く思ひ給へられつるを、只今おこたるやうに侍れば、かへすぐ悦び聞ゆる。あすも御いとまのひまには物せさせ給へ」などいひつぐ、魚いとしぶねき御物のけに侍るめるを、たゆませ給はざらむなむよく侍るべき。よろしく物せさせ給ふなるをなむよろこび申し侍る」と、詞ずくなにて出づるは、いとたふとときに、佛の現れ給へるところ覺ゆれ。

(考異) ○かゝる程に 原本、程にとあり。原本の一本及び古本による。○心もとなく 原本、心もとなしとあり。古本による。○時ばかり 原本、時にぞとあり。鈴木による。○ぞや 原本になし。抄本による。○聞ゆる 原本、聞えさすとあり。別本による。○いひつぐ 原本、いひつゝとあり。古本による。

○よろしとて 病人がなり。○御湯 中島廣足は藥湯即ち煎藥の事とし、舊説はすべてお湯の事としたり。源氏手習に「日頃は物いさ、か參ることもありつるを、露ばかりの湯をだに參らず」。○北面に北面よりの意。○人々 女房達。○取次ぐほどをも 取次ぎて參らする程をもと也。○盤 御湯の盤なり。○みる 調伏の様をなり。○單衣など云々 盤もちたる女房達の様なり。○ことわりいせせなどして 物の怪に陳謝せしめなどしてと也。物の怪の降伏退散を誓ふをいふ。○几帳の内にと 几帳の内。○しはしといふめ 僧がなり。○時のほど 例時の程なり。例時に勤行あり。こゝは夕方の念佛を修するをいふなるべし。○侍りぬべければ の下、退り侍らむを略けり。○しばし 暫し待ち給への略。○ほうちはうた

ませうなどいって
とめるのを、僧はひ
どく急ぐので、その
家の上藤と思はれ
る女房が、簾際に居
ざつて出て、「病人は
ひどく堪へにく、思
はれましたのを、大
層嬉しくお立寄り下
されました甲斐に、
只今平癒するやうで
ありますれば、返す
返すお禮を申し上げま
す。明日もお暇を見
てお出で下さいませ
せしなど、主人の口上
を取次ぐ。僧は、大層
執念深い物の怪であ
りますやうですを、
御油断なさらぬとい
がよう御座いますせ
う。快方でおありな
されるのを、お悦び
申しますと、詞少な
で立出るのは、甚だ
尊いので、佛が目の
前に現れなされたよ
と思はれる。

う 法施報當か。徳川時代には、法施をハツチといへり。法施は布施、報當は報謝の意。○給へりつるしるしに「只今おこたる云々」へ續く。○「いと堪へがたく云々」「いと嬉しく云々」の上へ廻して心得べし。○いひつぐ 主人の意を取次ぎていふこと。○しふねき 執念の字音を活用したる語。○たゆませ給はざらなむ 御油断なさらぬがと也。○よろしく云々 輕快になられたるをと也。平癒したるをいふにはあらず。

物の怪の調伏には、随分大仕掛のもあつて、上東門院の御産の際などは、

源の藏人には心譽阿闍梨、兵衛の藏人には○律師といふ人、右近の藏人には法住寺の律師。宮の内侍の局には、ちそう阿闍梨を預けたれば、物の怪に引介されて、いとくほしければ、れん覺阿闍梨を召加へてそのしる。阿闍梨の験の薄きにあらず、御物の怪のこはきなりけり。宰相の君の招人に、いかう阿闍梨を添へたるに、夜一夜のしり明して、聲も枯れにけり。御物の怪うつれと召出でたる人々、皆うつらで騒がれけり。
(紫式部日記)

と、數人の寄咒を立て、數人の験者でせめ立てた。それに引換へ、随分素人でも、お經を上手に讀んだ時代だから、手輕に自分でやつた事もあるらしい。

繪に物の怪憑きたる女のみなむき形かきたるうしろに、鬼になりたるものと女を、小法師の縛りたる形をかきて、男は經讀みて物の怪せめたる所をみて、云々。(紫式部集)

この僧の三十餘は、験者としては、や、若過ぎるかのやうだが、物の怪と喧嘩するには、この位の方が強さうで頼もしい。顔の醜くないのも、かねての注文にはまつてゐる。衣裳付はなか／＼濫い。千手陀羅尼は、

若又家内遇、大惡病、百怪競起、鬼神邪魔耗亂其家、惡人橫造口舌、以相謀害、室家、大小内外不知者、當千眼大悲像前設其壇、至心念觀世音菩薩、誦此陀羅尼滿千遍、如上惡事悉皆消滅、云々。

とあつて、あらゆる災厄を拂ふ咒文だから、調伏に讀誦されるのである。やがて寄咒に見立てられた童女が着座する。いよく物の怪調伏の法術が始まる。見物の女房が一杯に詰掛ける。護法の奇特で、幸に術がか、つたと見えて、童女が夢中に慄ひ出す。兄貴の若いのだが、後から團扇であふぐ。時は眞夏である。殿舎は明拂ひで、僧や童女の服装も、生絹や薄物であつた。

かう大勢に取巻かれた中で、物の怪に體を借られて狂ひ廻るのは、いさ、か氣の毒で、童女の脱垂れた着物など引繕つてやる同情者もある。

それ病人の容體がよくなつた、験が見えたとなると、かねて用意の藥湯をさし上げる。ゆかしがりやの若女房等は、藥湯を運んだ盤をぶら下げたま、で、御祈禱の場を覗きにくる。

物の怪に詭言をいはせて、さて験者が術を解くと、童女は始めて我に反つて、きまり悪けに、髪を顔に振掛けて引込むのを、一寸呼止めて加持をして、御氣分はどうですかなどは、いさ、か誇らしげだ。験があつたのだものを。

上藤女房が出で、御禮の挨拶する。僧は法施などに一向振向かないで、さつさと歸つてしまふ。こんな事に慾氣を出したり、長居したり、お喋舌したりしては、有難味が薄くなる。こゝらの骨はお醫者様の廻診と同じ事である。「いと執念き云々」は、験者のきまり文句で、源氏にもある。丁度藪醫者が、もう少して手後れといふのと、同じ心理である。

すべて験者の僧を中心として、その態度が、印象強く、面白く描かれてある。物の怪調伏の場面を、これ程に綿密に書いたのは、全く他に見ない。元來病人と僧侶との關係は、あながち物の怪調伏ばかりの事ではなかつた。昔の僧侶の必須學科の中には、臆病といふのがあつた。即ち看病學で、病家の依頼によつて、その世話をする。聖武天皇の御不例

の折、行基菩薩が御看病申し上げたのなどは、その著しい一例である。薬師を如來と尊崇するおなじ理由から、僧侶の仕事としたものだらう。看護の傍、醫者の仕事をも兼帯したらしく、その病氣が物の怪なら、御手前物の御祈禱で退治つける。それが後には、診察調劑は醫者に任せて、御祈禱専門になつてきたらしい。

一體佛教の調伏は、印度の思想方式であつて、支那を経て傳來したのである。弘法大師以來眞言密教は、殊にこれを専門の仕事とした。そこで、叡山の顯教でも、負けぬ氣を出して、この方をやる事になり、盛に流行した。寄咒を立てることも、印度にある。

二百九十八段

清げなる童の髪ながき、又大きやかなるが髻生ひたれど、思はずに髪うるはしき、又したゝかに、むくつけげなるなど多くて、いとなげにて、こゝかしこに、やむごとなき覺あるこそ、法師もあらまほしき業なめれ。親などいかに嬉しからむとこそおし量らるれ。

釋 ○童 男の童なり。これは小童子。○大きやかなるが 大きやかなる童がと也。これは大童子。○したゝかに云々 頑丈に恐ろしげなる男など多くてと也。これは召使の雑人。○いとなげ 暇無氣なり。○こゝかしこに あちこちの貴人の家にと也。○やむごとなき覺ある 尊く思はれたると也。○法師も 普通の人を含めていへり。
評 僧の所従は侍者からはじめて、大童子、小童子、平法師、雑人の類まで、澤山居た。

(口譯) 綺麗な童の髪の長いもの、又年の往つた童が、髻は生えてゐるけれど、意外に髪の見事なもの、又頑丈に恐ろしさうな男などを多く使つて、暇が無さうで、あちこちに尊い聲響のあるのは、法師もあつた事であるやうだ。その親などは、どんなにか嬉しからうと推量される。

(二乗寺の僧正) その坊は一二町ばかりよりひしめきて、田樂猿樂などひしめき、隨身衛府の男など出入りひしめく。物賣ども入來て、鞍太刀さまの物を賣るを、彼がいふまゝに價を賜ひければ、市を成してぞ集ひける。(宇治拾遺)
評判がよければ、かうした富貴繁昌も得られる。あらまほしき業である。門閥が無くて、仕途の思ふに任せぬものなどは、寧ろ法の道に立身出世を求めたことは、夙に加茂保憲の女も、筆にしてゐる。

二百九十九段

見ぐるしきもの 衣の背縫かたよせて着たる人。又のけくびしたる人。下簾きたなげなる上達部の御車。例ならぬ人の前に、子をゐていできたる。袴着たる童の足駄はきたる。それは今やうのものなり。壺装束したる者の、急ぎて歩みたる。法師陰陽師の紙かうぶりして祓したる。また色黒う瘦せ、にくげなる女のかづらしたる。髻がちに瘦せくくなる男の晝寝したる。何の見るかひに臥したるにかあらむ。夜などはかたちも見えず、又、おしなべてさる事となりたれば、われにくげなりとて、起き居るべきにもあらずかし。つとめてとく起きぬる、めやすし。夏晝寝して起きたる、いとよき人こそ、今少しをかしけれ。えせがたちはつやめき寝はれて、ようせずは、ほゝゆがみもしつべし。かたみに見かはしたらむほどのいけるかひなさよ。色黒き人の生絹の單衣着たる、いと見ぐるしかし。のしひとへも同

(口譯) 見苦しきもの 着物の背縫を片寄せて着てゐる人、又拔衣紋をしてゐる人、下簾の汚げな上達部の御車などが見苦しい。たまに見えた人の前に、子供をつれて出て来たのは、見苦しい。袴はいた童が足駄をはいたのは、見苦しい。それはいま風の事である。壺装束した者が急いで歩いたのは、見苦しい。法師陰陽師が紙冠をして祓をしたのは、見苦しい。又色黒く

じく透きたれど、それはかたはにも見え、臍のとほりたればにやあらむ。

(考異) ○いできたる 原本いきたるとあり。古本による。○男の 原本男とあり。別本による。○起きぬる 原本起きぬるとあり。○生絹の 原本生絹とあり。以上古本による。

瘦せて醜げな女が、入毛をしてゐるのは、見苦しい。髻だらけに瘦せこけてゐる男が晝寝したのは、見苦しい。何の見所があつて晝寝をしたのだらうか。夜などは形も見えない。又一般に夜寝る事となつてゐるから、自分が醜げだとして一人起きてゐるべきでもない。そんなのは、早朝に疾く起きたのが難くない。夏晝寝して起きたのは、大層立派な人は、今少し見よい。詰らない顔付などは、いやに青ざつて、寝腫れがして、悪くすると、頬がゆがみもしてしまふだらう。晝寝した同士が、互に見つしたであらう折の見苦しくて、生きてゐる甲斐なさよ。色の黒い人が、生絹の單

○のけくび 抜衣紋なり。退領の義。○例ならぬ人 たまさかに往きたる人。○子をゐていできたる 古本には「子をおひて出できたる」とあり。○法師陰陽師 ホウシオンヤウジ。法師にて陰陽師の業する者の稱。○紙かうぶり 紙にて製れる冠。紙を三角形に製りて額に當て、後にて結ぶ。前だけの物にて、後も頂もなし。小兒など専ら着たりき。近頃まで亡者の額に附くる三角形の紙は、この遺風なり。(百十二段、及び二百卅七段の挿圖參照)。○男の晝寝したる 原本の男とあるは、上句に連續して、男女同衾したるやうに聞ゆ。かくては、女が主となりて、下文の意明晰を缺くに至るべし。○さる事 夜寝ることをさす。○いとよき人 いと顔よき人。○起きたる の下、はの辭を略けり。○えせがたち は云々 よからぬ寢起の顔は、つる／＼として腫れてと也。○ほ、ゆがみ 頬歪みか。顔付の曲るをいふ。○かたみに云々晝寝したる同志の、互に顔を見合はせたる時の心地は、興ざめて生ける效なく思ふ事よと也。○のしひとへ 旁註、春註ともに「紅の打ちたる衣」とあり。女官傍抄には「張りたる單衣をいふ」とあり。いづれにせよ、色は紅なるべし。故に衣の色に紛れて、黒き肌の見え透かぬなり。○ほぞのとほりたれば云々 生絹の單の見苦しきは、臍の透きとほりたる故ならんと也。これは文脈や、妥當ならねど、強ひて解するのみ。○片寄せて着たる人。のけくびしたる人。上達部の御車。いできたる。足駄はきたる。歩みたる。祓したる。かづらしたる。晝寝したる の下、見苦しを略けり。

とかく服飾に目がつく。背縫の片寄つたのや抜衣紋は、絶對に見苦しいもので、餘は大抵不調和から

を着たのは、甚だ見苦しい。臍が透徹つて見えるからであらうか。のし單も生絹同様に透いてゐるけれど、それはわるくも見えない。

生ずる見苦しさを擧げてゐる。晝裝束は行旅の扮装で、急いで歩く場合もあるが、調子よくそり／＼と歩く、しとやかさには及ばない。上達部は御身分柄、下簾がきたなくては、苦々しい。足駄は一體下品な物で、多くは袴も得はかぬ下衆の所用であつた。それが貴人の所從として、尤も風情を添へる童がはくのは、近頃の流行だけれど面白くない。珍しい客人の前に子供は、心なしの親である。

陰陽師は支那傳來の陰陽道の術者だが、わが邦の神道の骨法を取り、佛者の形式を加味してゐた。そこで法師にまた陰陽師の仕事をする者も出來た。しかしお祓は神前の仕事なので、髪長では具合がわるい。一寸有髪の眞似をして、三角の紙冠を被る。後から見ればくり／＼坊主だ。それで鹿爪らしく、「穢戸の神の御前に畏み／＼」も、いさ、か滑稽である。紫式部も同感と見えて、

彌生の一日川原に出でたるに、傍なる車に、法師の紙かうぶりにて、博士たちを悪みて、云々。(紫式部集) といつてゐる。反對に佛者の側から見ても、いかに身過ぎ世過ぎとはいへ、神様いぢりに虚偽の行爲をして、無間地獄の業を作るにも及ぶまい。されば内記上人(慶滋保胤)は、紙冠を法師の手から奪つて破棄したではないか。

醜男の晝寝の攻撃は、頗る手きびしい。「おれにくけなりとて起きるべきにも」は、甚だ皮肉だ。仕方がない、夜だけは許してくれるから、早起して寝顔を見せるなといふ。夏は晝寝の季節だが、それも不器量者では、資格がない。「ようせすばほ、ゆがみ」は、なか／＼辛辣な口吻だ。共同生活では、互に見たり見られたりで、ついこんな事もいふやうになる。

何でもかでも汚いのはいけない、綺麗なのに限ると、一途に美を要求してゐる。そこで色の黒いのと瘦せたのが、見苦しきの種蒔をする事になる。容色を飾る七尺の髷も、氣持のいい、生絹の單衣も、汚い連中に會つては、お座が醒めてしまふ。

三百段

(口譯) 薄暗くなつて、文字も書かれなくなつた。筆も使ひ切つてこれだけ書いてしまひたい。一體この草子は、目に見え心に思ふ事を、人が見る事はあるものかと思つて、退屈な里住居の間に書集めたのを、生憎人に取つて不都合な過言などしさうな所々もあるのて、よく隠して置いたと思ふのを、意外にも世上に洩れ傳はつてしまつた。中宮の御前に、内大臣殿が奉つた草子を、中宮が「これに何を書かうか。主上には、史記といふ書を御書きなされた」など仰になつたのを、自分が「それを

物ぐらうなりて、文字も書かれずなりたり。筆も使ひはてて、これを書きはてばや。この草紙は、目に見え心におもふ事を、人やは見むとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなく、人のため便なきいひすぐしなどしつべき所々もあれば、ようかくしたりと思ふを、心よりほかにこそもり出でにけれ。宮の御前に、内の大臣の奉り給へりし御草子を、寫これに何を書かまし。うへの御前には、史記といふ文を書かせ給へる」などの給はせしを、讀枕にこそはし侍らめ」と申ししかば、寫さば得よ」とて賜はせたりしを、あやしきを、こじや何やと、盡きせずおほかる紙の數を書きつくさむとせしに、いと物覺えぬことぞおほかるや、大かたこれは、世の中のをかき事、人のめでたしなど思ふべき事、なほえり出でて、歌などをも、木、草、鳥、蟲をもいひ出したらばこそ、世人思ふほどよりはわろし。心見つなり」ともそしられめ。只心ひとつに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば、物に立ちまじり、人なみくくなるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしに、「はづかし」なども、見る人はの給ふなれば、いとめやすくぞあるや。げ

にそれもことわり、人のにくむをも善しといひ、譽むるをも悪しといふは、心のほどこそおし量らるれ。只人に見えけむぞねたきや。

(考異) ○見むとする 原本見むずるとあり。○心より外にこそもり出で 原本涙せきあへずこそなりとあり。以上古本による。○給へりし御草子を 原本奉りけるなとあり。活本による。○なかしき事 原本なかしき事なとあり。古本による。○見つ 原本見えとあり。活本による。○はづかしなど 原本はづかしきなどとあり。旁本による。

頂いて、枕には致しませう」と申上げたので、中宮が「それならば遣らう」とて、下されたのを、怪しい事を、故事や何やと、限もなく澤山ある紙數を、ありたけ書かうとしたので、甚だ譯のわからぬ事が澤山あるよ。大體、これは世の中の面白い事、人のめでたいなど思ひさうな事を、人並にやは選出して、歌なども、木草鳥蟲をいひ出したならば、「思つたよりは悪い。心の程もわかつた」とも譏られよ。けれどこれは、只自分の心一つに、自然思ひ浮んだ事を、戯に書付けたから、他の立派な作物の中に交つて、並一通りの評判をも聞かれよすものかと思つた

○物ぐらうなりて 黄昏になりてと也。○筆も使ひはて、筆も使ひ盡してと也。筆の使用に堪へぬまでなれるをいふ。○これを書きはてばや 強ひてもを、上に補ひて聞くべし。「これを」は次の文をさす。○便なきいひすぐし。不都合なる過言。○しつべき所々 文法上、「しつべき」にては未來になりていかい。必ずしつるといはでは協はぬ格なり。○心よりほかに 心外に、思の外に。○宮の御前に 中宮の御前に。○内の大臣 伊周。○これに云々 宮の御詞なり。○うへの御前 主上。○史記 前漢の司馬遷の著。上古より漢の武帝に至るまでの歴史なり。百卅篇。○枕にこそは 枕草子にこそはと也。枕は枕上、枕許などの意より一轉して、身邊、座右などの意に用ゐらる。草子は冊子の意にて、綴本をいふ。詰り座右に置く綴本の意なり。かゝる手控雜記帳の類を、當時枕草紙といひ慣へる事は、惠心僧都の佛門の口訣を記したる書にも、枕草紙とあり、榮華物語若枝の卷にも「衣の袂重なりて打出したるは、色々の錦を、枕草紙に作りて打置きたらむやうなり」とあり。以上藤井高尚の説による。清少の「枕にこそは——侍らめ」といへるは、座右の控帳にして、見聞や感想を記さんとの意なり。○さば得よ さらば汝のにせよと也。○あやしきを 怪しき事どもをと也。○こじ 故事なり。○物覺えぬ事 正氣にもなき事、タワイモナキ事などの意。○心見つなり 筆者の心の程見えたりと也。輕蔑したる

のに「馬鹿にならな
い」なども、この草
子を見る人は仰しや
るから、甚だ氣安い
事であるよ。然し一
方から考へれば、ほ
んに尤もである。人
の憎むのを善いと
いひ、譽める事をも
わるいといふは、さ
ういふ人の心の趣も
推量される。どの道
只、人にこの草子を見
られたのが残念であ
るよ。

口氣なり。○物に立ちまじり 他。の物即ち物語、歌草子の類に伍して也。○人なみく／＼なるべき耳云々 人並なる評判も聞かる、物かはと也。「耳を聞く」は「目を見る」の類語なり。○はづかしなども 清少を心にくしなどもと也。「はづかし」は人の勝れる點に對して、我が憚らるゝをいふ。○それもことわり の下、なりを略けり。○人のにくむも云々 清少自らわが作物に對して加へたる評語なり。かやうに人とは善惡すら反對に書けるなれば、自分のねぢけたる心のほどは、凡そ推量せらるゝと也。○たゞ人に云々 毀譽褒貶はとにかく、たゞ人に見られたるが残念ぞと也。

評「物暗うなりて云々」は、何たる卒直な筆だらう。夕暮の妻戸際で、あわたし氣に禿筆を呵してゐる清少その人の面目が躍つてゐる。

この文は古人のいつた通り、この草子の跋文であらう。まづ内證の物が意外に公然となつた言譯をいひ、さてこの草子の書かれた來歴に及んだ。

伊周公は主上と中宮とに、一部宛草子を獻上したの見える。主上は御勉強盛りの事で、男文字で史記を筆寫せられたに就いて、中宮は何をかと御思案であつた。もと／＼清少は、

いづち／＼もいき失せなばやと思ふに、只の紙のいと白う清らなる、よき筆、白き色紙、陸奥紙など得れば、かくてしばしありぬべかりとなむ覺え侍る。(二百廿六段)

といふ程、筆紙に深い趣味と必要とを感じてゐるのだから、愆しくなつて、私の枕草子に拜領願ひたいと、頗る臆面のない所を發揮した。お氣に入りの事だから、忽ち御下賜となつた。

さあ里居の暇々に、隨感隨録、書上げた曉、翻つて見ると頗るいかゞはしい。この感じは文筆者の誰も經驗する所である。いひたい三昧、勝手な間違つた事を書散したので、平凡の譏は免れもしようが、到底い、評判のあらう筈なしときめた覺悟を裏切つて、大層好評なのを不思議がつてゐる。然し轉倒の

僻見によつて、自分の根性が見え透くことがつらいと、隠したのが流布された事を、又残念がつてゐる。そして「物覺えぬ事おほかる」、「たはぶれに書付けたれば」など、大いに謙遜の表皮を被つてゐるが、内面にはまた、可なり強い主張がある。即ち自己の個性に立脚して獨特の觀察見解を書いたといふ事である。一部の枕草子は、こゝに出發した筆すさびであることを、牢記しなければならぬ。

三百一段

左中將のいまだ伊勢守と聞えし時、里におはしたりしに、はしの方なりし疊をさし出でしかば、この草子も乗りて出でにけり。惑ひ取り入れしかども、やがてもておはして、いと久しくありてぞかへりにし、それよりありきそめたるなめりとぞ。

(考異) ○この文 原本になし。旁本の一本によりて補ふ。

釋 ○左中將 源經房。○伊勢守と 經房が伊勢權守たりしは、長徳元年十二月より、同二年十二月までの間に、同三年一月には備中守となれり。さて同四年十月に至り、左近衛權中將となる。○里にわが里にと也。○のりて 疊の上に乗りてと也。○惑ひ取り入れしかども 周章で、取込みしかどもと也。この下に、間に合はずしてを補ひて聞くべし。○やがてもておはして 經房がなり。○ありきそめたる この草子が傳りそめたると也。

評 長徳一二年の頃に、經房が持出したのは、その第一稿だらう。以後長保二年までは勿論、寛弘の中頃までも、書繼いだらしい形迹が多分あるから、實は第二稿第三稿といふやうに、人に借り出されたその都度／＼、多少づつ變つたものが、世に流布されたのではあるまいか。今日現存の各異本は、相違の點

(口譯)
左中將がまだ伊勢守
といはれた頃、私の
里に御出でなされた
時に、端の方にあつ
た疊をさし出したの
で、この草子も乗つ
て、一緒に出てしま
つた。あわて、取込
まうとしたけれど、
伊勢守はすぐ持つて
御出でなされて、大
層長いこと經つてか
ら、返つて來た。それ
からこの草子は、世
上に傳り始めたやう
だと思ふ。

があまりに繁多で、全く亂麻のやうな感がある。一本に纏めては、整理の手が殆んど著けにくい。かういふ性質のもので、然も多年に亙つた關係上、章段の前後、内容の重複、文章文字の不妥當などが、非常に多くなつたらしい。なまじ整理などしない方が、作者の不羈な性質の眞面目が何はれたのではあるまいか。

この文は、跋文のまた附記ともいふべきで、前段の「心より外にもり出でにけれ」を詳説したものと見られるが、實は前後顛倒で、これは専ら第一稿に限つての附記と思はれる。大抵の本にないのは、この所以だらう。

枕草子評釋 終

索引

棟	三〇	あやしき	一八三	あらわに	一五九	いきづち	七六
葵	三〇五	あやしき弓	二九四	あり明	二〇七	いかで語り傳ふばかり	一七九
葵かつら	八六八	あやしき物	六四二	在明の月のありつゝ	二〇六	いかにしての歌	八三
あへなきまで	八〇四	あやしき者	四〇九	ありありて	八三	いかにしての歌	一〇三
安倍野	八〇四	あやしき物にして	二二八	ありがたき	三三三	五十日百日	七〇七
あべの原	七	あやにく	三九八	ありきそめたる	一〇七	いかり	七六
あま風	八三六	あやにくだちて	七三	ありつる文(まはる)	三九	いかりの緒くひつき	四四
甘栗の使	一四〇	あやのもん	三〇六	蟻通の明神	九三	いかりの緒くひつき	四四
あまた来りて	四八二	あやふ草	三〇六	ありどころ	三九	いさすたま	七九
あまづら	三三三	あやふし火の事	六〇三	ありぬべき所	七三	いぎたなし	一四〇
尼なるかたは	四二	あやめの蔵人	四四	有馬の湯	五八	生田の森	五八〇
尼にそぎたる	七四	あやもなきこまつ	六六	ある事あらがふ	三三	いくたの社	九三
あまの川	三〇〇	あゆる	六	あるじ	一三	いさ	三九
あまびこの橋	三〇一	あらがひ(また)	四五	あるに隨ひて	二七	いささかのひまなく	三七
あまびぎしき	五二	あらがひ事	六六	あるやう(まとも)	二八	いざ給へ	五〇
阿彌陀の大呪	八七	あらがはす	四六	あれと	二八	いざめり	六八
あみだの峰	六	あしうてよ	五九	あを	五九	いさめの里	三三
あめ牛	二六	嵐	八六	青色姿	四〇	いさ人のにくしと	六九
雨のあし	一三	嵐山	八六	青色に白襲	四〇	いし	七三
雨のうちにはへ	五四	あらず	一〇六	青色のあを	五九	石山	八三
あめき	三三	あらたに生ふるとみ	三六	青色の淵	八〇	伊勢の海	八〇
雨ならぬ名の	八七	あらぬ人	三三	青色は赤き云々	一〇四	伊勢守と	一〇七
あめの陵	八	あらばたけ	七二	白馬	九〇	いせの物語(あやし)	一〇七
綾織物(あしも着給はぬ)	四〇	あられ地	一〇三		八	いそぎたる七夕	七五

いたくななきそと	一〇三	いつしかしたり顔	二〇六	いな換へじといふ御	四九	今や歌舞の(あに園り)	七三
出桂	三	五重は	四三	いなび野	八四	いみじうする人	九六
いたづらなる屋	一〇三	いつまで草	三〇六	いな淵	八〇	いみじからむ物の上	九六
いたどり	三〇	いづみ川	二九	稲荷	七九	いみじかるべき事	九
板屋	六四	出雲蓮の臺	七九	犬島	五	いみじき人かな	三六
いたりかしこ	九〇	いづら	四四	犬防	五	いみじきよるこび申	三六
市	六	いづれともなき中の帷	一九	犬防にすだれを	六〇	いみじくかへたる	二九
覆盆子	二五	いで	三三	犬防の中	五九	いみじく聞かぬ	二九
五幡山	三	出でさせ給ひし夜	六六	いれ今聞かむ	五九	いみじくかへたる	二九
一切経供養	九	いで所あり	一	いれいれ	四二	いみじく見えて云々	二九
一乗の法	五九	いとあへなく近う	六二	いれさがなく	三三	いみじくなむ宣ふ	三六
一條	八二	いと白う	九	岩瀬の森	五二	いみじげなる手	三六
一條殿	五〇八	いとすき給へり	九六	石田の森	五二	いみじと思ひて	三三
一の車	九七	いととう住まぬ増	四四	いはた山	三	思の日とて	三三
一の所に	四〇	いとなげ	一〇	岩つつじ	三三	妹背山	三三
一の棚に	七三	いとほしく名もなし	四六	いはで思ふぞ	七〇	彌高の峯	三三
一の人	四六	いとほし	四	いはばいばなむ	九〇	いよいよ見まく	一〇八
一の舞	六六	いとほしげなる	三三	磐余の池	三三	伊豫籬	一〇七
一の宮	四七	いとみつ	四八	いひおとし	三三	伊豫守兼資	一〇七
一品の宮	九三	いと物々しう云々	六三	いひくくめて	四六	いらへうちして	一〇七
市女笠	七五	いと蓬茂り	六七	いひくくたし	四六	いらへたれば	一〇七
いつくしう	八五	いとわろき人	三七	いひ知らぬ民のすみか	三七	いりすみ	七九
いづこなりし天下り人	四〇	いとわろき名の	三三	いひそこなひつるも	三三	入りたため御せうと	七五
いつし	二五	いな換へじとおぼい	四六	のなば	一〇九		

事始まりて	六三	この世には拂ひ難げ	八六	こま犬しくまふ	六三	御靈會の馬をさ	四九	宰相の君	五三
こと花	三三	この世	三〇	こま野	四三	帷仲	四四	さいそ	一五
詞に	四五	このをのこ	四四	こま野の物語	四一	これ放たせ給へ	八三	さいだつ者	五六
こと人	二六	近衛府	六九	こまほこ	四七	これは忘れたる事は七五	七五	さいて	一三
こと人ども	六六	近衛の御門	六二	古萬葉集	三九	これをだにの歌	六五	さいなみ	三
こと笛ふき	四二	御坊たち	四九	高麗唐土の樂	四四	小六條	五九	さいはて	六七
こと笛二つ	一五六	こはがり	四九	金鼓	六五	衣の關	五九	さいはむ人	三九
こともの	二九〇	こはき物の	一三	坤元録の御屏風	一〇四	小若君	六三	さいまくる	二九
こと物	三三	こはごぼしく	五九	權大納言	九八	五位の藏人	九八	齋院	一三
子どもわらははべ	一四〇	こはごぼしく	六二	權中將	六九	聲明王のれぶりた	一〇一	齋院	四三
ことやう	四四	こはたの森	一七	權中將	一〇二			齋院	八九
ことよき人	五五	護法	一七	權中納言	一六			齋院	七三
ことわり	一五	こは物やあり	八九	權中納言	九八			齋院	八〇
ことわりいはせ	一〇七	小槍垣	七五	こも	三〇			齋院	七三
ことわり	三三	こひぬまの池	三五	こも	七六	さあらぬ所	一〇六	象眼	九八
ことなだの廊	五九	こひの森	五二	木守	四三	左右の大將	九八	草子	五
小二條	六九	小兵衛	四二	後夜	六三	左右のゆだけたるは	一〇四	障子	元
この君	六六	小兵衛	四三	小弓	八〇	左右の衛門の佐云々	一〇四	さうじの日の行	一三
この君と稱すといふ詩	六六	小殿に参りて(重々)	一三	こよなき名残の朝い	三二	さいし	四九	さうじ物	三
この客いまや云々	七九	こふ殿に参りて(重々)	一三	こよなくやつれて	五八	銀子	九八	さうぞき	二
このくれ山	七	胡粉	七六	こよなの長居	一三	宰相	一〇	さうぞくしたるすず	一六
この中の主君	六二	こほほとこほめき	一〇八	こよひよしともあし	四四	宰相中將	五九	さうちうが家の入	一八
この後の御有様	六二	こぼれ出で	一〇八	こりすまの浦	八五	宰相中將	九八	さうなく	一〇
この世近くも	二六	こほめく	一三	こりすまの渡	八	宰相の君	九八	さうなしの主	一〇

さうの琴	三五三	さくのいとしろき	二五五	左中將	三五・六九・一〇七	雑色	一七〇	狭山の池	三五
さうの笛	三五三	櫻の汗衫	五九	五月雨は昔なき	五〇	雑色	四〇	更級山	七
さうぶ	四四	櫻の唐衣	八	五月五日	六	さぶらひに	五〇	更におはせむに	一〇三
さうぶのいづら	四四	櫻の直衣	三	五月に	三六	さぶらひのをさ	四二	さらむ人	一〇九
菖蒲の輿	八九	櫻井	六二	五月に雨の聲まれば	二六	さぶらふべき者	六九	さり氣もなく	一七
菖蒲のさしぐし	三三	左近のつかさ	四二	五月の御さうじ	五〇	さへて	四六	さりの壺	七四
菖蒲蓬の薫り	三六	笹のおひたるが	六二	五月のせち	四四	佐保殿	八六	さるがふ言	五〇
想夫憐	八八	ささめき入れば	四三	さと	一五	さまあしけれど	四五	猿澤の池	三四
さうび	三五	さし油する	五五	さとびごち	八三	さまでなくと	四三	さる者ありと	三六
さえのをのこ	六六	さしいて	一五	里なる時	六〇	侍	二四	さるべき隈	六八
さおほめかむ	六六	さし入れたりとも	一五	里人	九	侍召して	四四	さるまじう	一六
さか	一〇六	棧敷	八二	さななり	一五	参議	一四	されかばしたる	一三
柳	二五	刺櫛	九	早苗とりしか	九三	三四月の紅梅のきぬ	一三	騒がし	四四
さかしき	九七	刺櫛すらせ	九	實方	一八	三尺の几帳	九八	左衛門の尉	三五
さかしらに	九七	指貫	六	實方の中將	四四	三千の客云々	二七	左衛門の大夫	三九
さかしらにの歌	一〇〇	指貫の腰	一五	佐野の舟橋	六	三條の宮	六〇	左衛門の陣	六四
盃などのあれば	九八	さしまじらばせ	一〇三	さのみ開きけむとや	三〇	三條の御前	八九	さな鹿の	九
さかな	五五	さしまじり心	一〇三	さば(番)	九三	三の御前	六八		
嵯峨野	八四	さしもかためずとも	一五	さば得よ	一〇五	三味堂	四一		
さかりば	七四	さしもあらざるも	一五	さばきてたるも	二九	三位の中將	一八		
さきおふ	二九	流石に人の上をば	六九	澤田川	二九	三位の中將	五〇		
さきども	三二	左大辨	六九	さはれ	四五	三位の中將	九八		
左京	七一	さだ過ぎ	六三	左兵衛督の	五九	三位二位のうへの衣	九八		
左京の君	七一	定めなしや	六三	雑仕	五九	さやはけにくく	九八		
左京の君	七一		六三		五九				

しうと	三七	侍従の君	八二	楊	二五	しば	三〇	しもと	七一
志賀	六三	侍従宰相	六九	楊にたてたる	二五	朱賀臣がめを	七五	しもとだちたる物	二九
志賀の浦	六四	侍従殿	五〇	しつらひ	四七	しばし人のおはします	五七	下なるをも呼びのぼせ	二七
試樂	六五	しじかみたる	二八	してかけ	九七	しばす	二四	下にありながら上に	六四
しすがの渡	八一	ししこま犬	四七	しどけなく	二〇	しばすのつこもり	二〇	下女	二六
史記	一〇五	史生	七五	しとくに	一〇七	しばぶき	五五	承香殿の前の程に	六八
色紙	九	四尺の屏風	四〇	しとくに	四七	しはぶ	二五	上官	六四
しきの神	一〇	織盛光の御修法	一〇	しとねさし出づる袖口	四一	しはぶ	二五	床子	五三
しきの御さうし	八二	しぜん	六六	しとねさし出づる袖口	四一	集など	三三	定澄	六九
職の御曹司	二九	しだいにしるき	二二	部もまわらぬ	六六	十二年の山ごもり	三六	上臈	六九
式部	三二	したうち懸け	四三	品	四三	しふねき	一〇八	釋迦	八九
式部丞	四七	下襲	五五	しなおくれたる	八五	集は	三〇	笏	六〇
式部丞忠隆	四七	下襲のしり	六七	品おとりて	二六	鹽籠の浦	八三	積善寺	五五
式部丞なにがし	五三	下襲のしりはさみて	二五	しなひ	二六	沙の満つての歌	三三	積善寺供養の日	五二
式部大夫	六六	した心	二八	しなめき	一〇	しばみたる	一〇二	釋尊	四二
式部のおもと	二四	したたかに云々	一〇	史の大夫	七六	進士	六六	壽命經	五〇
式部のおもと	二四	したたかに云々	一〇	信太の森	五〇	新中納言	六六	白檜	二九
式部のぞう	二四	したたかに云々	一〇	忍びたる時鳥	七	新中納言	六六	白川の關	五九
式部のぞうのさく	二四	したたかに云々	一〇	しのびて	二	寢殿造	四九	知らじ	五九
淑景舎	四八	したたり顔	一七	しのびの森	四	しんどう	四九	しらじらし	二九
淑景舎	四八	したたり顔	一七	しのびたる所	四	しも	四九	白山の觀音	四七
侍従	五〇	楊ども	五〇	しのぶ草	三三	下仕	五	しりう言	四七
	五〇	楊ども	五〇	時のほどせ	三三	しもつけの花	五	鞆	四七

しりくち	九三	しるくなりゆく山きは	二	修業者	六三	鈴蟲	二五	須磨の關	五八
しりに立ち	二〇	しるみたる物	六二	誦經の物	五九	硯のある紙	五九	すまひ	五八
しるしあらむと	六三	四位五位は冬云々	一〇	すぐしたる人	五三	すするなる	五七	相撲	六三
しるしあるきこえ	三	四位五位若やかに	一八	すぐすくしう	五三	すす薄になりたる	一〇三	墨つか硯	四一
しるすぢ	七〇	四位少將	九〇	すぐせ(天かた云々)	五三	すすご	二	住吉	八二
知る人	九三	詩をすし	三三	すぐよかなる方は	一五	すすさわらかに	一五	すみれ	三三
しれじれと	六七	しをん	六九	すけただ	一八	裾のつま少し重り	三三	すんざ	三六
しれ者	五			佐理	一八	すそのはらへ	一八	すんざども(女房の)	一〇
しるう	七四			すけまさのうまの頭	四六	筋かひても	八三	すんじ給ひ	三三
しるうきよげなる	二五			すけまさの馬の頭の	四六	すちなき世	四三	すんじ給ひ	三三
白がされ	二五			むすめの少將の君	四六	すちなし	四三	すんじ給ひ	三三
白がまれの汗衫	二五			すこしあかき蘇枋の	四六	砂子ならず	四三	摺りたる裳	一六
しるがれの毛抜	三三			織物のうちぎ	四六	すのと	四三	摺りたる裳	一六
しるき綾二藍引きか	四三			すこし春ある	四六	すばえ	四三	摺りもどるかし	一六
されて	四三			朱砂	四六	すばる	四三	受領	一〇
しるきあな	四三			すさまじ	四六	すばら	四三	驗河舞	一〇
白き組	四三			朱雀院	四六	蘇枋がされ	四三	する事やある	一〇
白き色紙	九			珠數	四六	蘇枋の御袴	四三	するの木	一〇
白きすすし	一〇			鈴鹿の關	四六	炭櫃	三	水干	一〇
白き袴も	一〇			すすけたる	四六	すべり出で	一〇	水干袴	一〇
白き札つきて	四三			雀のこがひ	四六	すべり出て	一〇	すぬさうのすす	一〇
白き簪	四三			すすし—生絹	四六	すべり出て	一〇	すぬさうのすす	一〇
しろき水	一〇			すすし—涼	四六	すまし	四六	隨身	一〇
白きもの	一〇			すすばな	四六	住まぬ増	四六	隨身の長の狩衣	一〇
しろくて着よ	四二				四六		四六	隨求經	一〇

水飯	八八〇	せかぬ	八八〇	榎羅尼	八八〇	そばへたる	二〇〇
水龍	四八〇	説經師	一七三	千燈の御志	五九七	そへごと	四〇〇
末の松山	四八〇	せく	五〇七	千日のさうじ	五〇一	そむきさま	四八八
末はいかに	四八〇	瀬田の橋	三〇三	せんぞく料	五〇五	染殿の式部卿の宮	四八八
		せち	三〇六	せめて	五〇七	染殿の宮	四八八
		せちにいひおとし	五〇五	せめておそろし	五〇四	尊勝陀羅尼	四八八
		せちに物思ひ	五〇一	せめまどはせば	五〇一	尊勝王の御修法	四八八
		節分	一三三			そやの御導師	四八八
清範	一〇二	節會さるべき折	四九二	そぞるに	五〇一	そよそよと	一〇五
清僧都の	九三	節會の御陪膳の采女	四九二	袖うちあはせ	五〇一	そよると	一〇五
清涼殿	八五	雪月花の時	七六	袖をひかへて	五〇一	虚言するなり	一〇五
清涼殿にて	一五	せばがり	一六	袖をふたぎて	五〇一	空寒み云々	一〇五
清涼殿のそり橋	四九	せみ聲	一七	そとの濱	五〇一	そらだき物	一〇五
せうく司	四九	宣耀殿	九七	そのある人	五〇一	そら耳	一〇五
消息	四	宣耀殿の女御	九七	その御おとりと	五〇一	そりくつがへりて	一〇五
せうそこ入	一四	前驅したる人	六四	その巻數とこひて	五〇一	それがあなたの夜	一〇五
蕭會稽の古廟	一四	詮子	六四	その年の一つ國	五〇一	それぞれぞ	一〇五
少將といひける人	六三	詮子	六三	そのはじめいひそめ	五〇一	それそれといふに	一〇五
少將にや云々	一〇三	選子内親王	四三	その二十日餘り	五〇一	それは居させ給ふまじ	一〇五
少將の井	六二	前裁	一五	園原	七	それを勿來の關	五九
せうと	二	前司(いへは)	一〇	その人の候ふ	七		
せうと	一〇六	宣旨	四〇	その程に見つけ	七		
せうとこそ聞け	一〇六	千手	四〇	その折さし出たる	七		
少納言の命婦	六九	千手經	六七	そばの木	七		

た

第一の國得たる	三三〇	太平樂	八八〇	椀繩	一〇二	たどたどしき	一四
大饗	四〇	大辨	二九	たくみ	一〇二	棚厨子	八七
大饗の所のあゆみ	七三	道心おほかり <small>(たふとま)</small>	一七	たくみ鳥	二四	棚機つめに宿からむ	三〇〇
大饗の日の史生	七三	道心	二五	竹のうしろより	六九	棚機のわたる橋	五〇
大行道	六三	道心すむる	八二	竹のませ	六八	たなびきたる	二
大床子	四四	堂童子	五九	竹も近く紅梅も	二七	田にたつ	九二
大進	三	たうべ	四六	手輿	八六	谷の洞	七六
大將	一八	道命阿闍梨	一四	太宰府	八三	たのめ	九五
大將の御さきおひ	一〇三	高き屋	三三	たすきかけにゆひた	三三	たのめし	九五
たる	六	高砂	一五	ただあり <small>(いみじく見)</small>	二〇	たのめし人の師	一〇三
大納言殿	六	たかせ	三〇	只今の時の人	二〇	たのめし	一〇三
大納言殿	一〇一	高瀬の淀	五三	ただう紙	二〇	たはれ島	八三
大納言殿	三三	たかつき	四	ただうちかつらひ	三三	たはしはら	一〇四
大納言殿	五〇	高坏に参りたるおほ	八三	ただ御直衣に重れ	九六	たびしはら	一〇四
大納言殿	六六	との油	一五	忠君	九六	たびたびありく	七九
大納言殿	八五	高遠の大貳	八三	ただ言	九三	たびたび傾きて	四八
大貳	八三	交野の少將	八二	ただこえの關	五九	平惟仲	四八
對の程 <small>(西東)</small>	一〇五	交野の少將云々	八二	たださまに	四三	たふ	四八
臺盤	三三	たか原	七	ただすぎに	九六	たべざらむ	四〇
臺盤所	五九	高ひさまづき	二四	ただすまふ	一五	たべその數珠しばし	三三
臺盤所の人	四三	隆光	五九	忠隆	三	たはめかし	二八
大般若	五二	薪ころの歌	一〇六	ただ名のる名	一七	玉さか山	七
大夫	六四	瀧口	五	たたなはりて	二〇	玉つくりの湯	五〇
大夫の君	八二	たき物	一六	ただならず	三三	玉のうてな	三三

玉の井	六八	中納言	四八	千年のこころする	一〇三	衝立障子	八七〇	月も日もの歌	八九
玉淵	八〇	中納言に	四八	ちねきの井	七二	ついで	一四	作物所	五七
玉星川	二九	中納言殿	五〇	ちひる	八五	築土のと	四三	繕ひそへたる髪	九四
玉藻はな刈りそ	三五	中納言の君	五三	千尋	一〇〇	ついでのままに	一〇三	つくり人さへ	一〇三
端午の節	六	中の盤	八五	陣	一〇	ついで	二四	つくり佛のもく	四九
彈正	一〇五	千枝に別れて	三三	陣へ	二五	つかさえぬ	二九	つごもり(はすの)	二四
彈正にて	一〇五	近うかへたる香	八六	陣につき侍らむ	五三	つかさ得はじめたる	六九	つごもり方	四八
たんじやく	一〇五	近くやり寄する	七七	陣の御火桶	五二	つかさまされと	六九	つごもり頃	二七
袂をまもり	一〇五	ちかの鹽籠	九四	陣屋のぬれば	八〇	つかさまされと	四七〇	厨子	七九
たゆまる	一三〇	警へ君の歌	一〇六	陣をすまさせ	三	つかさ待ちいで	六五	つちにゐるものなど	七六
たゆみぬる	一三〇	周頼の少將	五五	除目	六二	司召	六五	土御門	五九
たゆめずぐす	九六	持經者	四四	除目の中の夜	六	使	八五	つづらをり	七六
陀羅尼	九七	契り聞えし	三九	真觀殿	五五	使は	六五	つづらをり	七六
盃の手もなき	五九	ちくわう繪かきまひる	八五	ちやうざ	四	つかひ人	二九	つしましげならず	一〇四
垂氷	一〇五	地下	三	帳臺の夜	四二	月秋と期して	六五	つみまじ	一四
誰てふ物ぐるひか	六六	ちこ	一三	聽聞すなど	一七	月頃ある	三三	つみみもなく	四六
		地獄の御屏風	三三	重陽の節	五	つきつぎ縁たづねて	三三	つみむ事	四六
		地藏菩薩	九二			つきつぎし	三三	つとめて	三
		地藏	八〇			月次の御屏風	一〇五	常に文おこする人	一〇二
		千里の濱(チヤト)	八四			つきはな	七	経房の少將	三三
		地摺の裳	七五			つき人	七	つば市	七六
		地摺袴	八四			月まつ女	一〇六	つばな	三三
		知足院	二四						
		ちちよちちよ	二五						

ち

つ

壺(御前)	一五七	つられたる	二	手向山	七	春宮亮	九〇	時からにま	五六
つぼさうぞく	一八二	貫之が馬云々	九三	殿上	五五	春宮大夫	九八	時奏する	一〇八
壺坂	八五	弦うち	一〇八	殿上人	一〇	登華殿	五〇	時づかさ	七
つぼすみれ	三〇	つるばみのかさ	七五	殿上などに明暮云々	六五	東西をさせず	三三	時のかはる	二七
壺胡籬	二九	つれなくて	四九	殿上のとのぬ姿	二五	東三條	八	時の枝さす	一〇八
局	一九			殿上の名對面	六三	藤三位	六三	齋のさば	九三
局などする程	五九			殿上のまじらひ	一〇六	藤侍從	五二	時の人	九六
局の簾うち被き	二七			殿上人の笑ふとて	七三	燈臺	四〇	ときのみこそ	七四
妻戸	一五			殿上許さるる小舎人	六六	藤大納言	一四	常磐木	二六
妻取の里	三三	定本のまゝ	一〇三	殿上童	七四	藤大納言	六五	常磐の森	五二
爪はじき	四六	調樂	三五	天にはり弓	七四	頭中將	三五	時めかしき	三三
罪失ふかた	八七	てうけ	七六	天人おるばかり	三七	頭中將	七九	時めく	三
罪さ(後に恨みられて)	七五	銚子	八五	手ゆるし	六二	頭中將こそ	四八	續經	八四
罪はおそろしけれど	三五	手水まぬり	五	出居の少將	六五	頭つき給はぬ程	五七	どきやうし	二七〇
罪は得方	一七	てうする	三	手を打ちて	四九	頭の辨	五	木賊といふ物	三〇
罪深けれど	六三	調度	三	手を摺りて	四二	頭の辨	二九	得選	九六
つめどなほの歌	三九	調度	一四〇		四一	頭の辨	六三	徳見る	九六
つややかな板	一〇七	てうばみ	九六		三	頭の辨	六三	獨結	七四
つゆばかり	一三	調伏	三		三	頭の辨	六三	とこそ語りしか	一〇六
露は別の涙	五九	手つがひ	五三		三	とう院	八二	鳥籠山	七
露より先なる	二二	てづからは聲もしる	二六		三	とう取られたる	四六	所さりたる物忌	六〇
露をあはれと	二〇	手長足長	八五		三	とかくもいはず	三三	所せき日の御装束	五〇
つらき人	一〇二	手ならひ	八六		三	時かはさず	四八	所せく	三
つら杖	八九	手のかぎり	八六		三	ときから	五三	ところせく久しくや	四六

所につけて	一五	殿のうへ	九六	友まどはすらむ	二五	内外など許され	五九	中は隠したりけむ	四三
所のおとな	七〇	殿げら	一〇四	頼阿	九〇	内侍	一〇三	長櫃	四九
所をおかね	四四	主殿助	五九	都門を	三八	内侍	九二	轅	二五
とさうぞきたちて	一〇三	主殿寮	五五	豊浦の島	八三	内侍のすけ	一〇三	ながめの里	三三
年うちすぐし	六九	主殿司	三三	とより見るは	三三	内侍のすけ	一〇四	ながめたる	四八
俊賢の宰相	五〇	とのもり司などの	四六	寅の時	九六	内膳	二二	長ヤリに云々	四九
刀自	五八	とのもりの官人	三三	とらへられ	五五	内大匠殿	四二	中よしなど	二七
としきみ	六七	主殿司の人	四四	とりおろし	八五	ないりその淵	五〇	長柄の橋	三二
とじきみ	九	宿直姿	一〇四	とりこ	三三	ながえぬ	八七	ながりけり	三二
年たち返る	一〇五	とのお所にて	三三	とり取り	三三	ながあきら	二四	ながの里	三三
年などのよろしき程	二四	とのお物	三三	とり取り	三三	ながあきら	二四	なきあげたる	一四
年経ればの歌	一三	飛火野	八三	鳥のあとなどの	七〇	ながあきら	二四	泣きてわかれむ顔	九〇
どち	三	とぶらひ	五	鳥の聲	三三・八七	ながあきら	二四	ながの花	九一
とどろきの瀧	二四	遠きありきする人	三三	とりはやし	六七	ながあきら	二四	なき人のくひ物に敷く	二四
とどろきの橋	二九	遠く物思ひやられ	一〇五	とり申	五〇	ながあきら	二四	鳴く聲雲居まで	二四
とに立てる人	三〇	とほたあふみの	二七	とりもてるもの	四〇	ながあきら	二四	長押	八八
舎人	三三	とほたあふみの介	四〇	取忘れたるたび	一〇三	ながあきら	二四	長押のしも	三六
舎人すまひ	一〇	とほちの里	三三	ながあきら	七〇	ながあきら	二四	ながの詞	九一
殿	九五	とみ	五	ながあきら	七〇	ながあきら	二四	ながかりつる	九一
殿	二〇	富小路の右大臣	九六	ながあきら	七〇	ながあきら	二四	ながかりつる	九一
殿	四七	とみの尾	九六	ながあきら	七〇	ながあきら	二四	ながかりつる	九一
殿	五〇	ともあきらの大君	八〇	ながあきら	七〇	ながあきら	二四	ながかりつる	九一
殿	八五	と文字を失ひて	一〇二	ながあきら	七〇	ながあきら	二四	ながかりつる	九一
殿	八四	ともなるをのこ	三三	ながあきら	七〇	ながあきら	二四	ながかりつる	九一

梨原	六〇	何やはなしなども	三九	なまれたし	六六	名をさうにてもたる	一〇三	人長	三九
梨子繪	八四	何しに人と	五五	なまふせがしげ	七〇	名を取りたるにか	三〇	如意輪	九〇
名ぞうたてげなる	三三	何のいせける	三〇	なまめかしきもの	四三			女官	一〇
名高の浦	八三	難波津もなにも	九	なまめきけさうじて	一八			女官などのやうに云々	五〇
那智の瀧	二七	難波わたり	七〇	なみなる	九三			女御	九
夏とほしたる綿衣	八七	七日の若菜	三九	なん家のなにかし	一〇六			女御	九
なづな	三〇	なのめにだにあらす	三六	なんてふ事に	七九			女御	九
夏の几帳	四三	名のり	二六	なめき(まこと)	一四			女御	九
夏の帽額	四三	なのりその川	二九	なめく歌ふ	一四			女御	九
夏蟲	二五	名のりて(まご)	二六	なめく歌ふ	一四			女御	九
夏蟲の色	一〇〇	名のりよしあし	二六	なめく歌ふ	一四			女御	九
薺	三〇	繩薺	七九	なめく歌ふ	一四			女御	九
なでふ	四	直き木をなむ	一五	なよろか	八			女御	九
などてかさ人氣なき	三三	なほこそあれ	七九	ならひて	一四〇			女御	九
など宣ひしに	一〇二	なほこそ聞け	一〇九	ならしは	三〇			女御	九
名取川	二九	なほこの宮の人には	一〇七	なり	二六			女御	九
ななくりの湯	五八	直衣	二	業遠	一〇九			女御	九
七曲	九六	直衣のうしろ	三三	成信	九六			女御	九
七曲にの歌	九七	直衣ぬぎたれ	四〇	業平	一〇〇			女御	九
なにか	四八	直衣ばかり着て	一〇三	業平が母の宮	一〇四			女御	九
なにがし	五三	なほ主の心おし量ら	一〇九	生昌	三三			女御	九
なにがし一聲の秋	三三	なべての草木の心	三三	濟政の君	三三			女御	九
何がしさぶらふ	三六	なまいたはり	三六	なりやす	六五			女御	九
何がし琴なども	三六	なまけしからぬえ	一〇六	なればかて罪なき	二九			女御	九

布屏風	七六	念じて	二六一	飲みてたつ	六七	萩原	七七	はちすの花びら	一八四
縫殿	三七	念す	四三	乗りこぼれ	一五	はくきぬ	六四	恥ぢなどする人	二二
ぬひ物	三三	念佛の回向	九七	のりたか	二六	齒ぐるめ	一六	八講	一七
塗籠	五〇	ねりあはせぐり	一六	乗りて出て	二九	はこ鳥	二五	はづかしなども宜ふ	一〇五
ぬれぎぬ	八七	ねり色	七	則理	九四	はざめ	八六	はづかに	一〇
濡れまつはれ	六〇			のり弓	四七	はじ蘇枋	二五	八月	一五
				のりみつ	三六	はした者	二八	はづしたる	四七
				野分	六六	はしたなき	三三	はづしたる	四七
						はしたなく	四	初瀬	三三
						橋の板	六	はての御盤	八
						半じとみ	三二	抜頭	八七
						はし舟	一〇四	花か紅か	二〇九
						はじめつ方は	一八	鼻たる	四〇三
						はじめて参らむと申	一〇	はなちたて	七〇
						さする人のむすめ	一〇	花の中より實の	二七
						はしりくらべ	四三	花の心開けたりや	六四
						はしり火	九三	花の衣に	六四
						はしり井	六二	はなひて詠文する人	一四
						長谷寺	六	はなひる	八九
						鱧板	七六	はなふちの社	九三
						はたおり	二五	花もかへり	八九
						はたかくれ	二九	花やかにいふ	三五
						はたばりたる	六三	花や蝶やといそぐ	八九
						はちかはし	三三	埴土	八七
						蓮の花	九三		

ね

寝おびれて
福宜
寝くたれの朝顔
寝くたれ髪のお歌
子九つ丑八つ
猫の土に云々
根ごめ
ねすなき
鼠の尾のやうにて
ねすもちの木
れたう見えぬる
れたげなる心げへ
れたげにもてなし
れたし

野口
のけくび
のしひとへ
のぞきの淵
後瀬の山
後に恨みられて云々
のちのあした
のちのこと
のどかに澄める
ののしる
宣方
のぶたか
信經
のふの袈裟
のぶること
のぼりおり

陪膳
半靴
はうぐわん
博士
博士のざえある
博士の申文
齒岡の具
はかなからむ
はかなだち
はかなき
葉がへせぬためし
袴の腰

は

萩原
はくきぬ
齒ぐるめ
はこ鳥
はざめ
はじ蘇枋
はした者
はしたなき
はしたなく
橋の板
半じとみ
はし舟
はじめつ方は
はじめて参らむと申
さする人のむすめ
はしりくらべ
はしり火
はしり井
長谷寺
鱧板
はたおり
はたかくれ
はたばりたる
はちかはし
蓮の花

はちすの花びら
恥ぢなどする人
八講
はづかしなども宜ふ
はづかに
八月
はづしたる
初瀬
はての御盤
抜頭
花か紅か
鼻たる
はなちたて
花の中より實の
花の心開けたりや
花の衣に
はなひて詠文する人
はなひる
はなふちの社
花もかへり
花やかにいふ
花や蝶やといそぐ
埴土

羽根のうち云々	三三	ほりかれの井	七〇	髪籠	四三	人げなう	七四	人の事なし顔	七七
はれの霜	二四	張りたる	一〇	日頃のたえ間	七三	人ごと	九	人の所	九三
憚なしとは	二七	張むしる	六四	ひざうにをかしき事	七四	ひとすぢ	六七	人の爲に耻かしき事	四六
はばかりの關	五九	春風は空に云々	九三	廂	三	ひとし碁	六三	人の名	四四
杵山	七	はるかなる世界	八九	底さして	四四	人給	八一	人の名に	二五
灰かへりたる	七五	春の網代	一一	廂の御簾	一八	人づて	三六	人のにくむをも云々	一〇六
はひぶし	五〇	はるかなるもの	五二	ひさげ	八三	人づまの里	七二	人のむすめの聲	八三
葉二つ	四〇	春は曙	二	久しく寝起き	三六	人とあまたぬて	三三	人はなほこそ聞け	一〇九
はまぢ	三〇	葉をだに	二九	膝ふみて	八四	ひとつ橋	三二	人ばへ	七六
濱名の橋	三二			ひじり(その事)	一六	ひとつ橋	三二	ひとへ	七六
はまゆふ	三〇			ひたき	二四	日遠きいそぎ	三〇	単衣	一〇一
盤	一〇七			火焼屋	六七	ひとへ袖	一〇二	人人しう	二五
番の采女	五九			日たけ	三六	人と物いふこと	七三	人人の出であひ	七九
はんざふ	五九			常陸の介	四八	人なみなみなる	三六	人ま	五五
半臂の緒	五二			額つき	三	人なみなみなるべき	三六	人丸	三三
齒もなき女	二六			左の大殿	七一	人にも語りつがせ	一〇四	人丸が詠みたる歌	二九
葉守の神	二四			ひぢかき雨	七二	人におちらるるうへ	二五	人見の岡	九〇
はやく落ちにけり	五五			ひぢかき雨	七二	人にも語りつがせ	二五	人めかすべき	三三
はやち	六六			ひぢをりたる	八五	人によみて取らせ	三三	人もあはなむ	五〇
早緒とつけて	一〇四			未の時	五五	人のいひ古し	三三	人よりもけに	一〇四
腹ぎたなく	九六			ひてつくるま	一〇三	人の門より渡る	一六	ひとり	四五
腹高く	二五			一つ	四五	人の顔見しらぬ物見	三九	ひとりのわらは	四五
はらの池	三三			一日しにも	三六	ひとの國	三九	ひとわり遊びて	三三
はらへいひのしる	二六			一よろひ	九六		二二	人わるき	五八

人をば知らじ	二〇三	平ぬき	四八	深履	五九	不斷經	七六	又なきものにかしづ	一〇六
ひねりはじむる	五二	平野	一〇九	吹上の濱	八三	不斷の御讀經	四九	又のかれたる	一〇五
日のおまし	八七	比真の山	五	吹きなしたり	九九	藤	八七	又のつとめて	一〇三
日の装束	三六	平緒	四七	吹きなし	八〇	藤の花に隠され	一〇〇	また齒黒め	七六
琵琶	三三	ひれ	四四	ふくさ	一〇〇	淵瀨のへい	八五	又廂	三二
琵琶の聲はやんで	三三	晝は形わるし	四四	ふくだみ	二〇八	藤壺のへい	三三	又笑ふも亦怪しき事	七五
ひはだ屋	四三	晝ほゆる犬	二二	ふくだめて	二四	淵瀨定めなく	二九	待かれ山	七
ひはの山	三	ひるむしろ	三三	ふくつけき	八〇	佛供のおろし(なまそ)	四九	松	六九
ひひな遊の調度	一三	ひる	六九	普賢	八四〇	佛眼眞言	三三	松の尾	一〇九
ひんがしの二間	五〇	ひるごり	二〇	普賢十願	八三	筆を使ひはて	三三	松がうら島	八三
びんなき	三九	ひるきもちひ	四〇	ふさう雲	七六	不動尊	八三	松が枝	八二
ひめまうちぎみ	七三	ひろめき	一三	ふし出で	七五	ふところ紙	一五〇	松の葉色	一〇〇
姫宮	四	ひろめきたちて	二五	伏見の里	八六	船岡	九〇	松	六九
姫宮	八九	ひわりご	四三	伏見の里	三三	ふびん	三三	松	六九
屏風の繪	五三	火桶	三	ふすべられたる	七〇	文にも	二四	松	六九
兵衛の藏人	七九	ひを蟲	二五	風俗	九六	文書かむ	二四	松	六九
兵衛の佐	八八	ふ	二	二藍	二四	文ことば	二四	松	六九
兵衛の佐ぞう	二四	ふえう	三六	二貫	四二	文の事	一〇一	松	六九
兵衛府	一八	風香調	八四	ふたふたと	八六	七月七日	六	松	六九
びらう毛	一六	深き所	一〇八	二間なる所	五〇	踏みこほめかし	八四	松	六九
檳榔毛の車	五					踏みちらして	一六	松	六九

別當	六三	法興院	五九	ほどほどに	二五	またで	三三	又なきものにかしづ	一〇六
へだてぬて	五八	細うるはしく	三九	ほとほり	七二	まがなひ	五九	又のかれたる	一〇五
べちに居し家の君達	四一	ほそうしたてたる	六六	ほとめきたる	二五	まがまがし	一六	又の日	一〇三
へにつけて	七四	ほそ冠者	一〇六	法師陰陽師	九二	まがまがしき事いふ	六六	また齒黒め	七六
辨	五	細太刀	四七	法師子	七九	まがり入り	三	又廂	三二
辨(よまつかさ)	二六	細谷川	二九	法服ひとくだり	九二	まがりぬるもよし	一六	又笑ふも亦怪しき事	七五
辨少納言	六四	細殿(わたりの)	二六	法皇の御覽し	二七	まがり申したる	一五	待かれ山	七
辨の内侍	二九	細殿の一の口	七九	法輪	八五	まかれ	五	松	六九
辨のおもと	四六	細長	六九	朴に	二九	巻染	二四	松	六九
變化のもの(なはいと)	八九	細塗骨	一九	ほほゆがみ	一〇	枕がみ	二九	松	六九
扁をぞつぐ	三六	ほぞのとほり	一〇三	盆	一〇五	枕にこそは	一〇五	松	六九
ぼ		細櫃	二	盆を奉る	一〇五	まことならぬは(まして)	七九	松	六九
ぼうたん	六九	ほそやかなる	一七	煩惱苦惱	三三	まことの石灰	三六	松	六九
ぼうちばうたう	一〇七	菩提といふ寺	一八	堀江の橋	三三	方弘	二五	松	六九
ぼうちばうたう	一〇七	佛などかけ奉り	四九	ほろびて	八〇	ましておろかならぬ事	五〇	松	六九
ぼうと(龜)	一一五	佛のおろしたべ	四九	ま	八〇	ましてこの頃は	九二	松	六九
ぼうほうと	一〇〇	佛の御弟子	四九	ま	八〇	まじらぬ業	五九	松	六九
ぼが目	一七	程すぎ	八三	孟嘗君	六九	まじらひたてらす	二五	松	六九
法華經	八三	時鳥なく音たづねに	五三	孟嘗君のにや	六九	まじらひする人	一〇五	松	六九
ほこ星	七六	時鳥のかげにかくる	二六	まうて	五	益田の池	二五	松	六九
ほころび勝	四三	時鳥の名のりしたる	二〇	まがきの島	八三	ませ	一五	松	六九
ほころび結ひ	四三	時鳥よ云々の歌	二七	まかせて	八三	ませにしにさぶらふ	八九	松	六九
		ほとほと	三五	まかせて	八三	またからず	七六	松	六九

前毎に云々	六七	鞠もをかし	八五	み草ぬ	七五	御厨子所	二六
前を渡るに	二〇三	まろこすげ	三〇七	み草	七五	みづ島	八三
まほに近くは	六四	申文	一八	みぐしあげ	五九	御綱張りて	九三
まま	六五	申しなほす	六七	御車ごめに	九三	御綱の助	八五
まみ	八七	申感ひし	六三	御けしきは	八二	水なしの池	二四
まんなどくしき	六			御匣殿	二七	みつなにとかや	七五
まめごと	六六			御匣殿	二〇五	みつはしの渡	八
まめに侍ひ	七			みくりといふ歌	三五	みつばよつばの殿造	二六
まめやかに	三七			みくりのすだれ	五五	みづぶき	七六
まめやかに降る	三三			みくりの社	九三	みづら	八〇
まめ人	三三			見苦しければ	六三	水を物に入る透影	七六
まめやかに	三三			御志ありつらむ人	六三	みてぐら	三三
まもらへ	一七			御心おちぬ	九五	みどきやう	三九
まもらるゝ	九四			御輿	三	御讀經あぶら	四四
まゆに籠り	三〇			神輿宿	二〇六	三とせ四とせの程	四三
まゆゆく	四三			御琴もちたる	六八	みとのごもり	一〇〇
檀	三三			御琴もたりし	九四	みなせ川	二九
ま弓	五三			みこもりの神	二四	南表	五五
まる	五			みささぎ	一〇六	南のぬん	四七
まらうど	二			みささぎ	五	峯にわかある	八二
まらがしふる	四二			見さめ	八	己の時	七九
まらうどのいきたる	二九			身じくり	二〇三	美濃のお山	七
にも	二〇八			身じろぎくつろぎ	四九	身のほどに	七
まらうど居	二〇八				一六	蓑蟲	二五
まる屋	一〇七						

蓑蟲のやうなる	六四	宮の御子逢とて	五五	昔覚えて	七五	むら濃の組	三九
蓑蟲のやうなる	一〇七	宮の大夫	六三	椋	八七	紫だちたる	二
御はかし	三三	宮の中將	一〇五	むげに絶えはてて	三三	紫革して	七五
見侍りぬべし	九八	宮の内のはしの事	一〇七	無期	八八	紫野	二六
見侍れ	五五	宮のほとりの祭	七六	蟲くひ	二四七	むらさき野	八三
三重がさねの扇	四三	宮のへのん	七〇	むじん	四三	紫のまだらづきたる	一七〇
御へつひ	四六	宮のめの祭文	九四	蓮張の車のおそひ	七九	村雨	三九
三保が崎	一〇七	宮はじめの作法	四四	結びたるうへに云々	一〇三		
みまぐさの歌	一〇五	宮腹	六五	結文(結びたるも)	一一		
美麻那成行	六四	命婦	五一	なつかしげ	三三		
みみと川	二九	命婦のめのと	四八	なつかしければ	三四		
みみな草	三三	明星	九〇	正月	七		
耳なし山	七	都鳥	二四	むとく	三六・三三		
耳も聞かぬ	一六	御息所	四八	六所	九九	面目	三七
耳をとなへて	二四	御社の方	八五	むな車	二五	めぐりに置きて	一〇六
見ゆ	三二	御湯	一〇七	胸	二七	めだち見たてられて	六六
見も入れて過ぐす	三六	彌勒	八四	胸少し潰れて	一〇七	目近からぬ所	八
みもひもさむし	六二	見るべき事	三二	胸つぶる	三〇	めでたき	四九
宮	三三	見らぬの關	五〇	むれたか	九五	めでたき事など云々	六三
宮城野	八三	三輪の山	七	胸のいみじうはしる	一〇六	めで惑ふ	一〇三
宮つかさ	四四	身をかへたらむ人	六四	無名	四六	目もあやに	一〇三
宮仕	一〇三			無紋	一〇五	めのと(もこ)	二六
宮仕所	二八			むもんの御衣	四九	めやすく	八六
宮の五節出ださせ	四六			むら濃	三四	目をだに見合はせて	二六〇

もとの心	二〇六	物ぐるほし	四七	物まぬる	一〇	やませ	九三
もとの心の本性	二二	物しげ	五四	物見知り思ひ知りた	二〇四	山たちばな	四三
求子	八八	物しり世の中もどき	九九	物物しう清げに	五〇	山近きの歌	一〇三
もとめてもの歌	一八四	物ぞこなひに	三三	物もうて	一〇	山とよむの歌	四三
元結	七〇	物つく	一〇七	紋	一〇三	山鳥は友をこひて云々	二〇四
もとゆひのむら渡	四六	物調せさせばや	五九	文集	八六	山梨の木	二二六
もとよりのよすが	一〇四	もてかへる	八八	文殊	八四〇	山の端いと近く	三三
物合	九八	物に立ちまじり	一〇五	文章博士	七〇	山の井	六二
物いとよくするあたり	五〇	物のあはれ	六三	文選	八六	山の井大納言	五五
物いはぬち	三九	物のあはれ知らせ顔	四三	格子	四二	山吹	八七
物いひやり	六四	なるもの	四三	身屋は鬼ありとて	四二	山吹の花びら	七〇
物忌	九	物の色	四七	もろこしに云々	八四	楊梅	七〇
物忌つけ	三九	物の具	九七	もろ聲	一四	やまぬ	三〇
物忌附けたる	一六	物のけ	三三	もろよせの演	八四	やまぬ	三〇
物忌などくすしうす	一〇三	物の底なるやうに	三三	やうき	七六	やむことなき物	三九
物忌のやうにて	四九	物の中	六〇	楊貴姫云々	二九	やむことなき	一六
物うがりて	三六	物の音	五五	夜行	二五	やや	一六
物怨じ	三三	物の蓋	四二	やかた	一四〇	やや	一六
物おしつけ	三〇	物の例	四二	やかたなき車	二五	三月三日	三〇
物覚えぬ事	二五	物のあやう	五七	やがて	二五	遺戸	三〇
物語	八五	物のなりの扇	二二	やがて	二五	やたら(そら)	一七
物語する人のち	二五	物ばかりにて	三三				
物きくに	二九	物深くとはきが	三三				
物ぐらうなりて	一五	物へもゆく	四九				

ゆ

湯	五八	弓鳴し	二六	横たはれ	六三	よはひのぶる	二二
ゆかし	三〇	ゆゆし	五九	横ばしりの關	五九	よばひ星をだに	九二
ゆきあひの橋	三〇	ゆゆしき者	九一	横笛	八〇	夜ぶかくいづる人	二五
雪なみの山に満てり	七五	ゆらら	二〇	與謝の海	八〇	よべ	四
行成	五	ゆるぎありきたる	二〇	よさり	四九	よみにもよむかし	一〇六
雪間の若菜	八	ゆるぎの森	二五	義懐の中納言	一九	詠みへされて	六三
ゆげひのすけ	二五	ゆるらかに	八九	よしなき者ららぬ	二六	より來らむ人	三〇
頼貞の佐	八三	ゆみだちありく	六九	よしなよしの關	五九	頼定	一〇五
ゆだけの方	四八		六九	吉野川	三〇	よりまし(もたせ)	二七
油單	五五		六九	よしよし	八二	よるのおとどに	二七
鴻濱	一〇七		六九	よすが(舟の)	二七	よるのおとどに	二七
ゆづり葉	二四		六九	よそにみる	三三	よるはた	三〇
ゆづるはの峰	六		六九	よそひして(みじ)	一五	よるはたれと寐む	四〇
ゆの葉の如く	三三		六九	よそめより外に	三五	よるこび	三三
夕顔	三三		六九	四足に	三三	よるこび申	三三
ゆふかみ	一七〇		六九	四つは尼車	九三	よるしう	三三
夕さり	四三		六九	よどの	一〇五	よるしからむにてだに	四〇
ゆふだすき	八五		六九	淀のわたり	五三	よるしからむや	九七
夕づつ	九二		六九	よに	二八	よるしく云々	一〇八
夕日の里	三〇		六九	世にある程	三三	夜居の僧	六八
			六九	世になく	二〇	夜をこめての歌	六八
			六九	世のおぼえ(入ひな)	二〇	世をなめめに	四三
			六九	世の中など騒がしき	七〇	節折の藏人	三三

ら

ら	三九	らいさうと	五七	らうたがりて	二四〇	三月三日	三〇
らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	三月三日	三〇
らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	三月三日	三〇
らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	三月三日	三〇
らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	三月三日	三〇
らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	三月三日	三〇
らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	三月三日	三〇
らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	三月三日	三〇
らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	三月三日	三〇
らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	らうたがりて	二四〇	三月三日	三〇

れ

冷泉院 六
 例ならぬ所 六〇五
 例ならぬ人 二〇九二
 例の牛よりも 二〇九二
 例の君 九九九
 例の心 二〇八六
 例の廂 二〇三三
 れうのうへの袴 九三六

わ

六位まで 三三三
 露臺 六九六
 黄鐘調 八六六
 わが心にも覺ゆ 四四一
 わが詞にもてつけ 二〇三三
 わがさる折も 八二二
 わがしる人 二四一
 わが名もらすな 三三
 わかの浦 八五五
 若宮 八八九
 わが身に芹つみ 二八
 わきあけ 三五
 わきて立ならず 七五九
 わけておはし 四九
 わざと尊しとも 六三
 忘れずの山 七三
 忘れにし人 九六
 忘れめや 一〇六
 わたくしには 四〇五

る

われは知りたりや 四八三
 我より先にと 九三三
 我をばおぼさず 二〇六九
 わろき家の物とも 二四三

る

院の別當 六六
 ゐも定らす 一三
 廻向 九八
 廻向しげし待ちて 九八
 ゐじ 五三
 ゐしの目くらき 七五
 圓融院 九
 圓融院の云々 六三
 ゐめたぎ 五五
 衛府 四一
 衛府などの 二〇六
 餌袋 六四
 ゐんじ 一三
 衛門府 九
 右衛門の尉 一〇五
 ゐ笑ふ 八四

ろ

るうのなき 七六
 祿 二二
 六観音 三九
 六の巻を 二〇三
 六位の藏人 二〇六
 六位の藏人云々 六四
 六位のとのお姿 四六

緒 四七
 小忌 四七
 小忌の君達 四七
 小忌の女房 四七
 をかし 二
 をかし物 二
 をかし折枝 二
 をかしげなる 二
 をがはの橋 三〇一
 小倉山 七
 をこ 一四
 をこりたる聲 六三
 をさめ 一〇三
 をさをさし 八六
 をしき 一四
 教へやうなる 一四
 小鹽山 七
 男しう 一四
 男などさへ 一五
 男山の峯のみち葉 四一
 男女の中 七九
 をのこ 一六
 をのこども 一六